



教育実習の手引 改訂版

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 北海道教育大学, 函館校教育実習委員会 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00009004

北海道教育大学教育学部函館校

教育実習の手引

教育実習委員会

目 次

<第1部>教育実習の意義と心構え

はじめに	3
1. 教育実習の全体	6
2. 学校教育教員養成課程の教育実習	8
3. 評価方法について	12
4. 実習の一般的心得と諸注意	21

<第2部>幼稚園実習

I. 教育実習 I

1. 教育実習の目的	
2. 教育実習の概要	
3. 教育実習の日程	
4. ビデオの利用方法	
5. 幼児の理解	
6. 保育者の役割	
7. 環境構成の重要性	
8. 保育指導案の書き方(A)	
〃 (B)	
9. 部分保育について(A)	
〃 (B)	
10. 保育実習録の目的と書き方	
11. 教育実習 II に向けて	

II. 教育実習 II

1. 附属幼稚園の概要	
2. 附属幼稚園の教育課程	
3. 教育実習 II の概要	
4. 教育実習 II の日程	
5. 教育実習を行うにあたっての注意点	
6. 年齢別の子どもの特徴	
7. 幼稚園生活の一日の流れ	
8. 幼稚園行事について	
9. 保育評価	
10. 保育室の環境整備(整美)と設備	
11. 子どもの安全・保健	
12. 課題実習に向けて	

13. 教材研究と環境構成	
14. 保育指導案について(例)	
15. 保育指導案の実践例(3歳児)	
16. ティーム・ティーチング	

III. 教育実習 III

1. 目的	
2. 日程	
3. 各幼稚園の概要	

3-1. 函館市立函館幼稚園	
3-2. 函館市立日吉幼稚園	
3-3. 函館市立松風幼稚園	
3-4. 函館市立万年橋幼稚園	

IV. 教育実習 IV

1. 目的	
2. 日程	
3. 教育実習 IV における視点	

<第3部>小学校・中学校・高等学校実習

I. 授業づくり

1. 授業観察の方法論	
1-1. 授業のしくみを考えるには	
1-2. 授業を見て記録をしてみよう	
1-3. 授業記録からその仕組みを読み取ろう	
2. 学習指導の計画	
2-1. 学習指導案作成の目的	
2-2. 教材研究の意義と観点	
2-3. 学習指導案の例	
2-4. 学習指導案作成の手順	
2-5. 学習過程(指導過程)の各段階の特徴	
3. 授業実施の工夫と授業技術の基本	
3-1. 授業実施の工夫	
3-2. 授業技術の基本	
3-3. メディアを効果的に活用するには	

4. 各教科の授業の「骨組み」をつくるには 国語、算数(数学)、社会、理科、音楽 図工(美術)、体育、家庭、技術、英語 生活科	
5. 各教科の授業案例	
1. 小学校編	
2. 中学校編	
3. 高等学校編	

II. 道徳、総合的な学習の時間、
特別活動について …… 224

1. 道徳の時間の指導	
1-1. 道徳とは	
1-2. 小学校におけるねらい 及び授業計画と指導案	
1-3. 中学校におけるねらい 及び指導計画と指導案	
2. 総合的な学習の時間の指導	
2-1. 総合的な学習について	
2-2. 附属小学校における 総合的な学習の時間	
2-3. 附属中学校における 総合的な学習の時間	
3. 特別活動	
3-1. 小学校における特別活動とは	
3-2. 中学校における特別活動とは	

III. 生徒指導 …… 243

1. 生徒指導の意義	
2. 生徒理解の方法	
3. 教育実習生として 生徒指導上注意すべき内容	

IV. 学校における経営 …… 247

1. 学校のしくみ	
2. 学校経営	

V. 実習記録の記入及び活用の仕方 …… 252

<第4部>養護学校実習

1. 教育実習ⅣC	257
2. 障害児教育実習の日程	259
3. 障害のある子どもの理解	260
4. 附属養護学校の教育	265
5. 実習の心得	270
6. 指導案の書き方	273
7. 学習指導案の具体的例	276

<第5部>養護実習

1. 意義と目的	281
2. 実習内容	281
3. 実習心得	282
4. 実習方法	282
5. 実習計画例	283
6. 学級活動における 保健・安全に関する指導案	284
7. 終日実習計画(案)	285
8. 養護実習成績評価票	286

<諸届け見本例> …… 287

第 1 部

教育実習の意義と心構え

第1部 教育実習の意義と心構え

はじめに	3
1. 教育実習の全体	6
2. 学校教員養成課程の教育実習	8
3. 評価方法について	12
4. 実習の一般的心得と諸注意	21

はじめに

～教師教育における教育実習の意義とその役割～

学校教師は大人社会を代表する教育の専門職である

現代の社会生活の中で、教職者は子ども（幼児・児童・生徒）と向かい合う教師自身の働きかけが、子どもの成長発達を促進することをその職業的な糧としています。子どもたちの健やかな育ちに職業遂行上の至上の喜びを感じ取ることは、大人全体の喜びではありますが、学校の教師は社会を代表して子どもと向かい合う職業です。

しかも、教職は、人間の成長・発達理解を踏まえた高度な専門職として知識や技術が求められる職業です。教育という営みが人間理解を不可欠とする限り、教職者は、人間の望ましいあり方を吟味し、その理想の実現を目指す専門的な働きかけをすることが基本的な使命です。そしてその理想へ向かうアプローチの方法には、言葉の正しい意味での合理性が求められます。若い世代を賢く、たくましく、他者とともに生きる力を育てることを専門的に引き受ける職業が教職者であるとするなら、教職を志す人々には、明確で体系化された知識や技術の修得がどうしても必要となります。

学校教育は、目的意識的・組織的な教育を行う場です。このような学校教育を実践するために現場の教師は、日々次のような問いを問い続けています。例えば教科として編成されている文化的な価値のある教材をどのような形で子どもたちが学べば教育目標が達成できるのか、子どもたちが意欲的に学習へ向かうためにはどのような方法を採用したらよいのか、そもそも人間がある能力や技術を獲得する過程とはどのようなものであるのか、子どもたちは今、この学習素材に意味や価値を感じているのか、授業の中で取り組んだ学習内容や学習方法は子どもたちの今の生活の視野を格段に広げることができるのか、授業を含めて学校での生活過程はどのような意味をもっているのか、そもそも望ましい人間とはどのような存在であるのか、どのような存在でありうるのか、どのような存在であるべきか。このような終点のない問いを問い続け、教育的な確信を持って教師は子どもと向かい合っているのです。

学校教育に携わる教師に深い人間理解が求められている以上、学校教育は容易に科学の対象になりにくい性格を持っています。しかしそのような困難さの中にあってもなお、「それは何だろう、今どうあるのか」（事実認識）、「それはどうあるべきなのだろう」（当為認識）、「どのようにしたらそうなるのだろうか」（方法認識）、この3つの問いの交差の上に、目的意識的な教育実践が成立することを理解しておくことが大切です。教育実習においてもこのような3つの視点を実際の子ども、実際の教材に即して学び取ることが求められます。

いまから50年以上も前に、学校の教師は高等教育レベルの養成を必要とすることが制度的に確立しましたが、その意味も、人間理解、人間が築き上げてきた学問・科学・技術の理解、学習者である子ども理解、今ある子どもの有り様から望ましい子どもの有り様を措定し、子どもへの働きかけを科学的に追究することを必要としたからです。そして何よりも重要な事柄は、教職活動の基礎の部分においては、教職者相互に学びあえるための伝達可能な方法の確立でありました。そのような課題は現在の教職者にも求められていると同時に、これから教職を目指す学生諸君にも獲得してほしいものです。

生きる力を育てる学び

21世紀の教育は、自ら主体的に問題を見つけ、その解決の方法を主体的に探求する学習を学校教育の

基本と位置づけています。一言で言えば子どもたちに生きる力を育むことが求められています。教科の基礎知識の獲得を重視してきたこれまでの学校から、子どもたちに学びへの関心・意欲や態度を育て、それを中核に教科の基礎・基本を学習することで、学習の内面化、主体化を育てる学校への転換が強く求められています。子どもたちは、教科や総合的な活動などの学習時間でそのような学力を自らのものとしていきます。教科などでの基礎的な知識や技能が真に意味をもつのは、その学びの成果が子ども自身の意欲に基づいて生活の視野や方法を格段に広げるからです。あることを知らないために生活が閉ざされてしまう。しかしそのことを理解し、我が物とした暁には、獲得した能力や技術は子ども自身の思いや願いを実現する手だてとなります。このようにして学校で培われる学びは子どもを文化的な存在へと高めます。

他方、学校教育のねらいのもう一つの柱には、子どもたちの社会的な育ちという意図的な働きかけがあります。基本的な生活習慣や学習習慣を育てたり、みんなと仲良くする力を育てたり、あるいは自分や自分たちはどう生きるのかを子ども自身の問いとして成立させるような働きかけがあります。これは教科の学習の中でも育てられるとともに、道徳や特別活動、総合的な学習などの具体的な活動場面で実現することが期待されています。このような望ましい社会的な行為や行動への自己変容は、教科の学習、学校生活面での学習のいずれにおいても、「学ぶとは変わることである」ということにその共通の根を持っています。願いや希望が育たないところには、学習への欲求は生まれません。

教育実習指導教官から事実にして学ぶこと

このような学校教育を推進するためには、教師自身が教職生活の過程でこのような学習・研究体験を十分に積んでいることが必要となります。児童生徒に向かい合う教師にこそ、主体的な問題解決への態度が求められるものであることは言うまでもありません。これは、とりもなおさず、教育実習生に教職への学習ステップとしてこのような問題解決へ向かう意欲的な姿勢や態度の獲得を求めることとなります。教職を目指す教育学部の教育実習は、このような視点から広い意味での教師の職務を実際の学校現場に即して学ぶものであるとともに、実習指導教官の指導のもとで児童生徒理解に即した教科や道徳などの学校活動の基礎の部分を学習するものです。学生諸君の意欲に根ざした主体的な実習を期待したいものです。

教職員・子どもたちとの出会い

教育実習では学校を構成する多くの人との出会いがあります。学校は、教員や事務職員、給食職員などの、学校を教育、健康、衛生、安全、給食、環境などの視点から専門的に支える人たちと、多様な個性を持っている学習者である児童・生徒からなる集合体であるとともに、独自の校風や文化に支えられた有機的な組織でもあります。実習生諸君は、そのような教育力の蓄積された実習校で、多くの教師や職員、児童生徒に迎えられて、実習を行うのです。実習校では、人としての振る舞いや礼儀とはもとより、将来教師を目指しているというその志を自分の具体的な行動を通して表現してください。

教育実習体験者は語る

多くの教育実習生が実習後に、充実した日々がそこにはあったと語っています。確かに、座学になりがちな大学での学習から抜け出して子どもたちとの実際の触れあうことは、教職を志願している自分の選択が誤りではないことの確認をさせてくれます。そしてまた多くの実習生が語るのです。実習へ行く

前にもっと多くのことを学習しておけば良かった、と。このような実習生の体験談は、普段の大学での学習姿勢や態度を問うものともなります。教育実習生には大学での理論的な学習と実習校での実証的な学習との双方向の学習過程を通して、教職への志向性を高めていただきたいし、そのためには自分の研究課題を常に自覚し、学生同士の学習の交流や指導教官の指導の下で自己研鑽を積むこと以外に方法はありません。

尽きぬ議論の一つに、子ども好きの人が教師になるべきか、子どもに好かれる人が教師になるべきか、という議論があります。これは二者択一を求める性格のものではなく、両立させるべく、努力する以外にないのではないのでしょうか。

教育実習は職業選択の基盤である

教育実習は、まさに自分にとっての生涯の職業選択のリトマス紙でもあり、児童・生徒、そして皆さんを指導される先生との出会いの機会を提供するものです。個の視点とともに集団の視点を共有し統合する絶好の機会でもあります。自他を最善に生かす教育実習であることを期待しています。

この手引きを有効に使うために

この手引きは、教育実習Ⅰ～Ⅳ全体に亘る共通のテキストとして編集されました。まずは、これを手にする学生諸君が読んで理解できる内容であること、将来の教育実習イメージが浮かびあがるものであること、将来教職に就いた後にも、利活用できるものであることを私たちは心がけました。大学及び附属学校園で、指導を受ける時点で配布される、それまでの指導過程で蓄積してきた各種学習資料を必要な範囲で取捨選択し、体系化するように心がけました。自分の知らない専門用語があれば、事前に図書館で調べておいてください。

1. 教育実習の全体

はじめにで述べた考えに基づき各校種別の教育実習が行われる。基本的には教育実習Ⅰから教育実習Ⅱ……という積み上げ式になっている。教育実習の単位数や教員免許との対応については学生便覧を参考にすること。各課程別の教育実習を表にすると次ページのようになる。実習校、対象学生、受講学年、実習時期・期間等についてこの表で確認し、自分の授業受講設計に役立てて欲しい。なお、説明会の日程、詳しい教育実習の日程、受講の手続きなどについてはその都度学生ホールの教育実習用の掲示板や説明会で伝えられる。

教育実習実施計画

〈学校教育教員養成課程〉

実習名	実習校	対象学生	学年	予定人数(約)	実習時期・期間等							
					前期	夏休み(週)						
						1	2	3	4	5	6	
教育実習Ⅰ	A	附属小学校	教/心、障、A	2	93名	○						
	B	附属中学校	B、総4課程	2	120名	○						
	D	附属幼稚園	幼	2	7名	○						
教育実習Ⅱ	A	附属小学校	教/心、障、A	2	47名		①	①	①			
				2	46名					②	②	②
	B	附属中学校	B	2	40名		○	○	○			
D	附属幼稚園	幼	2	7名				○	○	○		
教育実習Ⅲ	A	協力小学校	教/心、A	3	81名		○	○	○	○		
			障	3	12名		○	○	○			
	B	協力中学校	B	3	40名		○	○	○	○		
D	協力幼稚園	幼	3	7名		○	○	○				
教育実習Ⅳ	A	亀田小学校	B	4	47名						○	○
			幼	3								
	B	附属中学校 桐花中学校	教/心、A	4	41名						○	○
				4	40名						○	○
	C	附属養護学校	障	3	12名	○					○	○
教/心			4	若干名	○	①	①					
D	附属幼稚園	教/心	4	若干名	○			②	②			
副免中・高教育実習Ⅰ	附属中学校	教/心、幼		4	6名						○	○
	桐花中学校			4	4名						○	○
副免中・高教育実習Ⅱ	附属養護学校	障		4	12名	○	○	○				
副免障害児教育実習	附属養護学校	教/心		40名		○	①	①				
	七飯養護学校 函館養護学校	A、B 幼			○			②	②			
副免幼稚園教育実習	附属幼稚園	教/心、AB障	4	12名		○	○					

注：副免教育実習については、実習期間及び実習受入校等の関係で受講できない場合がある。

〈総合4課程〉

実習名	実習校	対象学生	学年	人数	実習時期・期間等						
事前指導	大学	各課程・コース	3	未定	○						
高等学校教育実習	母校(高等学校)	各課程・コース	4	未定	2又は4週間(実習校の指定する時期)						
中学校教育実習	母校(中学校)	各課程・コース	4	未定	2又は4週間(実習校の指定する時期)						

2. 学校教育教員養成課程の教育実習

(1) 教育実習の全体構造図

学校教育教員養成課程発足以後に開始される教育実習の全体的な構造を表で示せば、表1のような仕組みとなります。その基本目標は、以下の通りです。

「学習者の主体的な問題の自覚とその解決への意欲が重視される今後の学校教育の方向を踏まえ、函館校の教育実習においては、幼児・児童・生徒理解を基礎とした保育・教育の実践に必要な専門的な知識と方法を修得し、それにより教職への意欲と志向性を高め、教職への研究課題を深めることを目的とする。」

函館校の教育実習全体の基本目標を分節化して説明しておきます。これは、これからの学校教育の望ましいあり方を、私たちがどのように考えたのかを説明することで明らかになります。

私たちは、学校で児童・生徒という立場で学習する子どもたちの学校生活への意欲や学びの励みが、今後ますますその子ども自身の主体的な活動（問題の自覚と発見、解決のための探求的な活動）が重視され、その活動を支援することが学校では特に重要な視点となると考えています。

その上に立って、子どもの活動を支援する学校教育には、何よりも子ども自身の願いや思いを十分に見取ることが学習支援者として教師には求められます。このような日常的な子どもを見取るとは容易なことではありませんが、教育実習生は学級や教科の専門的な担当者としての教師の動きをつぶさに観察し、教師と子どもから事実を通して学ぶことができます。

本来、教師にとって子どもに働きかける教育の営みは、「子どもは何を、どのような方法で学びたがっているか、学ぶことができるか」という問いと、「子どもに何を、どのような方法で学んでほしいか、学ぶことができるか」という問いの交差の上に成り立つものです。その際教師は、極めて意図的な選択行為を行っています。学習の目標をどのような内容で、どのような方法で辿っていけば到達するか。教師はそのための構想を事前に練り、予想される子どもたちの活動の展開を想定して、積極的な働きかけを組み立てます。教育活動計画とか授業計画・指導案と呼ばれるものは、そのためにある事前の教師の教育的な意図を示しておくものです。

児童生徒理解を踏まえた教育実践を進めるため、学校現場にはこれまで蓄積されてきた教師の働きかけの体系的な知識や方法があります。そのような知識や方法は一般性を有するものであるとともに、子どもの有り様に応じて具体的な形をとります。教育実習生は、何よりも「児童・生徒理解」を踏まえることの意味を、具体的事実の中からも汲み取っていただきたい。教育実践を進めている現場の教師の働きかけの事実から実践に必要な基礎的な知識や方法を学ぶのが、教育実習の基本的な内容となります。

表1：学生の主体的課題解決活動を基盤とした教育実習計画

	教育実習Ⅰ	教育実習Ⅱ	教育実習Ⅲ	教育実習Ⅳ	備考
履修学年/期間	2年(4-7月)	2年(8、9月：3週間)	3年(8、9月：3-4週間)	4年(8、9月：2週間)	
実習場所/実習校	A 大学・附属小学校 B 大学・附属中学校	附属小学校 附属中学校	協力小学校 協力中学校	桐花中学校・附属中学校 亀田小学校	
ねらい	学習者の主体的な問題の自覚とその解決への意欲が重視される今後の学校教育の方向を踏まえ、函館校教育実習においては、幼児・児童・生徒理解を基盤とした保育・教育の実践に必要な専門的な知識と方法を修得し、それにより教職への意欲と志向性を高め、教職への研究課題を深めることを目的とする。 ・教育実習への意識形成、および大学教育と教育実習との連携(教材研究を中心とした授業準備の手法)を図る	・附属学校において、1学級(教科)複数名の小集団で、基礎的な教授的力量(学習者理解に基づき教材研究を中心とした授業準備)を学ぶとともに、教育実践に関する課題を見つける	・教職科目等の理論的な学習と併行し、公立の協力校において、授業立案・実施・評価の活動を通して、教育実践の課題を把握する ・それにより、教職への学びを高める	・異なる義務教育段階の学校において、授業(教科・道徳)の部分参加及び、生徒指導、特別活動等への参加を通して、教育実践の課題を把握する。 ・大学カリキュラム全般における理論と実践を統合し、将来の教職への課題を見つけ、さらに実践研究を発展させる	
内容・領域	児童・生徒理解 授業づくり				
形態	1学級(教科)複数名の小集団	1学級(教科)複数名の小集団	1学級(教科)1名	1学級(教科)複数名の小集団	児童・生徒への指導
方法・活動	・教育実習委員会による指導の下、実習生の主体性及び小集団による課題解決活動 ・自らの教育活動を通じた児童・生徒の観察と理解の基礎を得る ・授業を中心とした教育活動の過程及び教育メソッドの活用等 ・教育活動の観察・記録の方法を学習する	・実習校での指導の下、実習生の主体性に基づき自己学習及び小集団による課題解決活動 ・自らの教育活動を通じた児童・生徒の観察と理解の基礎を得る ・教材研究、指導案作成等の授業準備を重点的に行う。とくに、発問と応答という授業を実施するための基礎的な技術に焦点をあてる ・教育活動及び児童・生徒理解のための観察・記録による児童・生徒理解のための観察方法を知る	・実習校での指導の下、実習生の主体性に基づき課題解決活動 ・活動の内省することにより対象化し、さらには新たな課題を見つける ・教育活動を通じた児童・生徒の観察を行い、学習者としての発達や特性について理解を深める ・学習者の実態を考慮して指導案を作成する。さらに、授業を実施するための方法・技術に着目して授業を行い、及びその評価によって自らの課題を明らかにする ・教師と学習者の授業運営に関する約束事の形成にも着目する ・個人の課題授業の計画・実施を通して、授業への問題意識を深めていく	・実習校での指導の下、実習生の主体性及び小集団による課題解決活動 ・自らの教育活動を通じた児童・生徒の観察・参加を通して、児童・生徒理解を広げ、深める ・発達段階の異なる学校での教育活動の観察・参加を通して、児童・生徒理解を深める ・学習者の実態・発達等を考慮して授業を立案・実施・評価し、自らの課題を明らかにする ・特別活動等の教育活動に参加し、ひろく学校教育全般に關わる目撃の課題を把握する ・個別・グループの課題授業の計画・実施を通して、授業への問題意識を深めていく	

教育実習のプログラム（活動・課題授業等）

	教育実習Ⅰ	教育実習Ⅱ	教育実習Ⅲ	教育実習Ⅳ	備考
活動の焦点	<ul style="list-style-type: none"> 教育実習Ⅱへの参加の意識形成 授業準備（計画の立案・実施）の過程の理解 	<ul style="list-style-type: none"> 主要な学習活動を明確にした学習指導過程を構成する 教科書の該当ページから目標、指導内容、方法を分析する 主要な動きかけに対して予想される学習活動について、事前にシミュレーションを行う、さらに対応行動を考案する 	<ul style="list-style-type: none"> 学習者の理解に基づき授業づくり（学習指導過程の構成）と実施 学習者の理解を基盤として学習活動を選択し、適切な対応行動を選択する 	<ul style="list-style-type: none"> 学習者の理解に基づき学習づくり（学習指導過程の構成）と実施 学習者の理解を基盤として学習活動を選択し、適切な対応行動を選択する 特別活動等の教育活動に参加 	
プログラム	<ul style="list-style-type: none"> ①授業の構造と把握 ②観察の方法とそれに基づく学習者理解の方法 ③教材研究、教材教具・メディアの作成・準備の方法（個人作業の基づくグループでの検討） ④学習指導案作成・検討（個人作業に基づくグループでの検討） ⑤教育実習参加への意識形成 	<ul style="list-style-type: none"> ①授業観察→教材研究（教育実習Ⅰと関連）→学習指導案作成→授業の実施 ②示範授業（観察・授業研究会）→課題準備授業 ③課題授業実施→授業研究会→課題の評価・確認 	<ul style="list-style-type: none"> ①授業観察・学習者の理解→教材研究→学習指導案作成→授業の実施 ②授業に基づき個人課題の把握・課題授業準備 ③課題授業実施→授業の検討→課題の評価・確認 	<ul style="list-style-type: none"> ①授業観察・学習者の理解→教材研究→学習指導案作成→授業の実施 ②授業に基づき個人課題の把握・課題授業準備 ③課題授業実施→授業の検討→課題の評価・確認 	
児童・生徒への指導	授業観察を通じて、児童・生徒の言動に対する指導観察・整理する	指導教官のもとで実習する授業・学校の中で、児童・生徒の全般に対して指導・援助を試みる	指導教官のもとで行う実習全般において、児童・生徒の生活に対して指導・援助を行う	実習中に行う授業の一つを個人課題授業とする。さらに、グループ構成の個人課題授業の準備し、授業終了後、検討および反省を行う	
課題授業					
個人	個人課題授業	個人課題授業	個人課題授業	個人課題授業	
グループ	グループ課題授業	グループ課題授業	グループ課題授業	グループ課題授業	
事前指導	教育実習Ⅰ	教育実習Ⅱ	教育実習Ⅲ	教育実習Ⅳ	
事後指導	<ul style="list-style-type: none"> 教育実習中の個人課題およびグループ課題を把握し直し、教職関連科目（教科教育を含む）における学習との関連を意識化する 	<ul style="list-style-type: none"> 教育実習中の個人課題およびグループ課題を把握し直し、教職関連科目（教科教育を含む）における学習との関連を意識化する 	<ul style="list-style-type: none"> 教育実習中の個人課題を把握し直し、教職関連科目（教科教育を含む）における学習との関連を意識化する 	<ul style="list-style-type: none"> これまでの教育実習中の課題を整理することを通して、教職への指向性を確かめるとともに、今後の目らの教育実践研究の課題を把握する 	
教職関連科目との関係	小学○○	←……………小学校○○○の教育法……………→	……………○○○科教育法……………→	←……………総合演習 教育実践研究（中学校）……………→	

(2) 各教育実習の目標

基本目標を積み上げていくために、教育実習をⅠ～Ⅳの4つの階梯を設定しています。教育実習Ⅰ～Ⅳの基本的な展開は、次の様な構造になっています。

①教育実習Ⅰでは、大学で観察法を学び、観察課題を明らかにしてその課題を実習校で確かめてみます。

②教育実習Ⅱでは、実習生は附属校で各教室（中学校においてはさらに教科）に複数名配属され、実習指導教官の指導の下で、児童生徒とのふれあい体験を経験しながら、授業を構成する基礎力の形成を目指します。その際重要なことは、実習生の個別的な課題に応えるとともに、配属教室あるいは配属教科の実習生グループごとに取り組む課題を決め、グループで課題遂行のための検討作業を行い、それを授業実践で試し、相互の反省を経て、新たに課題を明確にすることとなります。

③教育実習Ⅲでは、函館市内及び近郊4町の公立協力校で、教育実習Ⅱでの経験を広げてみることとなります。協力校では1クラス（教科）1名となりますので、実習指導教官の指導の下でよりさらに主体的な取り組みが必要となります。児童生徒とのふれあいの経験をさらに広げ、授業を構成する力、授業を展開する力、その授業を振り返り改善するための的確な視点を把握する力の形成を目指します。

④教育実習Ⅳでは、この実習がⅡ・Ⅲとは異なる種類での実習校である（例えば小学校実習→中学校実習、中学校実習→小学校実習）ことから、それまでの実習とは異なる発達段階にある児童生徒を十分に理解し、また大学での最後の教育実習であることから、担任教師による授業実施に協力する形での授業に参加し、授業以外での学級担任として教師の仕事、学級での指導やその他の学校行事などの参加を通して、新任教師として最低限必要な資質の形成を目指します。

もとより、皆さんは、教育学部の教科教育法科目を含む教職専門科目や教科の専門科目を学年進行で順を追って学んでいくわけですが、大学では基本的に基礎科目から発展・応用科目へと学年の進行と併せて科目を配列しています。大学での教育実習に関わる事前の学習で実習課題を学生自らが持ち、それを携えて学習課題を具体的に解いてみる、さらに教育実習で感じた自分の問題意識を理論的に解明するために大学でのその後の自分の研究課題を位置づけることを期待しています。

3. 評価方法について

実習科目の主な評価基準は規定の日数、実習していること、評価項目において合格点を取っていることである。全体の合格点は5以上である。これは他の授業と同じである。規定の実習日数については4. 教育実習の一般的心得と諸注意 (P. 18) をよく読んで欲しい。評価項目については教育実習ⅡとⅢの成績評価表に目を通して欲しい。出席状況、勤務態度、提出物等に問題がなく無事に教育実習を終了した場合を基礎点の50点とした。従って無断欠席があった、諸注意等が守れなかった、提出物が大幅に遅れたなどの場合は基礎点がなくなるケースや減点されるケースもありえる。この基礎点に評価項目の各点が加点される。25項目すべてについて優れていると判断されたときは50点が加点される。この基礎点と加点の合計を基に総合所見等から判断し、10点法により評価点がつく。

評価項目は、1. 実習に対する姿勢、態度、2. 児童生徒との積極的な関わり（幼稚園では十分な子ども理解）、3. 授業（保育）への対応、4. 実習録の内容からなっている。これらの項目はいずれも教育実習中に実習生が心がけて、努力すべき内容である。従って、実習期間中に自分の実習を見直すために幾度か自己評価を試み、実習をよりよい内容にして欲しい。各項目がさらに具体的にどのような意味を持つかについてはこの手引きのなかで関連する箇所をよく読むこと。

平成 年度 教育実習成績評価票（幼稚園）

北海道教育大学函館校

実習園名		園長氏名		指導教諭氏名	
学生番号	実習生氏名	課程	専攻・コース	配属学級	組

評 価 項 目	評 価 点 (加点)
	優・・・・良・・・・普通 (2点) (1点) (0点)
1. 実習に対する姿勢・態度 ・服装・態度が実習にふさわしいものであった。 ・自発的に仕事を見つけるなど積極的な実習態度であった。 ・グループ内の役割を自覚し、責任ある行動ができた。 ・保育準備や計画作成等に積極的に参加していた。 ・保育や保育後の反省会・検討会に役割を自覚し、積極的に参加していた。	<input type="checkbox"/> ・・・・ <input type="checkbox"/> ・・・・ <input type="checkbox"/>
2. 十分な子ども理解 ・遊びをとおして、子どもと積極的にふれあうことができた。 ・子どもとのかかわりから、個々の子どもの特徴をとらえることができた。 ・保育の中で、積極的に子ども理解に努めた。 ・年齢別のグループの中で相互に情報を交換し、子ども理解を深めていた。 ・日常生活において、個々に応じた適切な指導・助言を行った。	<input type="checkbox"/> ・・・・ <input type="checkbox"/> ・・・・ <input type="checkbox"/>
3. 保育への対応 ・指導案では指導目標を吟味し、保育形態に創意工夫をこらしていた。 ・遊びの素材の選択が的確であり、十分な準備を行っていた。 ・指導目標にあわせた適切な環境構成を行っていた。 ・活動の展開では、一人一人の子どもに対し個に応じた援助をすることができた。 ・ことばがけでは、内容、語いの難易、音声の高さ、話し方が適切であった。 ・適切な評価方法を用いて評価を行い、それに基づいた保育の改善に努めた。 ・内の環境整備に努め、環境衛生への配慮も十分であった。	<input type="checkbox"/> ・・・・ <input type="checkbox"/> ・・・・ <input type="checkbox"/>
4. 実習録の内容 ・観察・授業記録等のデータに基づき、論点が明確な記述になっている。 ・文章としての段落が明確であり、見出し等がある見やすい記述になっている。 ・多様な場面における子どもの実態が、特徴をとらえて記録されている。 ・保育準備における教材の工夫や検討のプロセスが記録されている。 ・保育時の子どもの様子と指導との関連が分かりやすくまとめられている。 ・保育後の検討・反省の内容が記述されている。 ・指導教官や友人から得た知見がまとめられている。 ・発見や事実に対して、単なる感想ではない的確な自分の意見が記述されている。	<input type="checkbox"/> ・・・・ <input type="checkbox"/> ・・・・ <input type="checkbox"/>

教育実習期間				出席すべき日数	出席した日数	欠席日数(病欠)	欠席日数(その他)	遅刻	早退	備考
白	平成	年	月	日	日	日	日	回	回	
()									
至	平成	年	月	日						
()									
総合所見								加点合計		
								基礎点		
								合計点		
								総合評価(10点法)		

※ 評価は、加点方式で行います。該当する□を○で囲むか、 を付してください。
 ※ 出席状況、勤務態度、提出物等に問題がなく無事に教育実習を終了した場合は基礎点(50点)とします。
 問題が顕著な場合は、基礎点を減点し、その事由について総合所見欄に記載してください。

平成 年度 教育実習成績評価票（小学校）

北海道教育大学函館校

実習校名		校長氏名	印	指導教諭氏名	印
学生番号	実習生氏名	課程	専攻・コース	配属学級	組

評 価 項 目	評 価 点 (加 点)		
	優 (2点)	良 (1点)	普通 (0点)
1. 実習に対する姿勢・態度 ・服装・態度が実習にふさわしいものであった。 ・時間を有効に使うことができた。 ・グループ内の役割を自覚し、責任ある行動ができた。 ・授業準備や計画作成等に積極的に参加していた。 ・授業や授業後の反省会・検討会に役割を自覚し、積極的に参加していた。	□	□	□
2. 児童との積極的なかわり ・休み時間を利用して児童と積極的にふれあうことができた。 ・指導教官の指導のもと、朝・帰りの会の運営ができた。 ・指導教官の指導のもと、給食指導ができた。 ・指導教官の指導のもと、清掃指導ができた。 ・児童とのかわりから、個々の児童の特徴をとらえることができた。 ・教科指導の中で、積極的に児童理解につとめた。	□	□	□
3. 授業への対応 ・授業に応じた教材や学習課題が決め出せた。 ・決め出した教材や学習課題を盛り込み学習の流れを作成できた。 ・授業場面での児童の言動が予想できた。 ・学習課題に応じて必要な教材教具を作成し、活用できた。 ・授業の流れに応じて教材提示ができた。 ・授業の流れに応じて、適切な発問や応答ができた。	□	□	□
4. 実習録の内容 ・観察・授業記録等のデータに基づき、論点が明確な記述になっている。 ・文章としての段落が明確であり、見出し等がある見やすい記述になっている。 ・多様な場面における子どもの実態が、特徴をとらえて記録されている。 ・授業準備における教材の工夫や検討のプロセスが記録されている。 ・授業時の児童の様子と指導との関連が分かりやすくまとめられている。 ・授業後の検討・反省の内容が記述されている。 ・指導教官や友人から得た知見がまとめられている。 ・発見や事実に対して、単なる感想ではない的確な自分の意見が記述されている。	□	□	□

教 育 実 習 期 間			出席すべき日数	出席した日数	欠席日数(病欠)	欠席日数(その他)	遅 刻	早 退	備 考
自	平成	年 月 日	日	日	日	日	回	回	
至	平成	年 月 日	日	日	日	日			
総 合 所 見							加 点 合 計		
							基 礎 点		
							合 計 点		
							総 合 評 価 (10点法)		

- ※ 評価は、加点方式で行います。該当する□を○で囲むか、 を付してください。
- ※ 出席状況、勤務態度、提出物等に問題がなく無事に教育実習を終了した場合を基礎点（50点）とします。問題が顕著な場合は、基礎点を減点し、その事由について総合所見欄に記載してください。

平成 年度 教育実習成績評価票（中学校）

北海道教育大学函館校

実習校名		校長氏名		指導教諭氏名	
学生番号	実習生氏名	課程	専攻・コース	配属学級	組

評 価 項 目	評 価 点 (加点)		
	優 (2点)	良 (1点)	普通 (0点)
1. 実習に対する姿勢・態度 ・服装・態度が実習にふさわしいものであった。 ・時間を有効に使うことができた。 ・グループ内の役割を自覚し、責任ある行動ができた。 ・授業準備や計画作成等に積極的に参加していた。 ・授業や授業後の反省会・検討会に役割を自覚し、積極的に参加していた。	□	□	□
2. 生徒との積極的なかわり ・休み時間を利用して生徒と積極的にふれあうことができた。 ・指導教官の指導のもと、朝・帰りの会の運営ができた。 ・指導教官の指導のもと、給食指導ができた。 ・指導教官の指導のもと、清掃指導ができた。 ・生徒とのかかわりから、個々の生徒の特徴をとらえることができた。 ・教科指導の中で、積極的に児童理解につとめた。	□	□	□
3. 授業への対応 ・授業に応じた教材や学習課題を設定できた。 ・準備した教材や学習課題を盛り込み学習の流れ（指導案）を作成できた。 ・授業における生徒の言動を予想し、指導案づくりができた。 ・学習課題に応じて必要な教材教具を作成し、活用できた。 ・授業の流れに応じて教材提示ができた。 ・授業の流れに応じて、適切な発問や応答ができた。	□	□	□
4. 実習録の内容 ・観察・授業記録等のデータに基づき、論点が明確な記述になっている。 ・見出し等や段落があり見やすい記述になっている。 ・多様な場面における子どもの実態が、特徴をとらえて記録されている。 ・授業準備における教材の工夫や検討のプロセスが記録されている。 ・授業時の生徒の様子と指導との関連が分かりやすくまとめられている。 ・授業後の検討・反省の内容が記述されている。 ・指導教官や友人から得た知見がまとめられている。 ・発見や事実に対して、単なる感想ではない的確な自分の意見が記述されている。	□	□	□

教育実習期間				出席すべき日数	出席した日数	欠席日数 (病欠)	欠席日数 (その他)	遅刻	早退	備 考
自	平成	年	月	日	日	日	日	回	回	
()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	
至	平成	年	月	日	日	日	日	回	回	
()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	
総合 所見								加点合計		
								基礎点		
								合計点		
								総合評価 (10点法)		

※ 評価は、加点方式で行います。該当する□を○で囲むか、 を付してください。
 ※ 出席状況、勤務態度、提出物等に問題がなく無事に教育実習を終了した場合を基礎点(50点)とします。
 問題が顕著な場合は、基礎点を減点し、その事由について総合所見欄に記載してください。

平成 年度 教育実習成績評価票（高等学校）

北海道教育大学函館校

実習校名		校長氏名		印	指導教諭氏名		印
学生番号	実習生氏名		課程 専攻・コース		配属学級	年	組

評 価 項 目	評 価 点 (加 点)
	優・・・良・・・普通 (3点) (2点) (1点)
1. 実習に対する姿勢・態度 ・服装・態度が実習にふさわしいものであった。 ・時間を有効に使うことができた。 ・教育実習生として責任ある行動ができた。 ・休み時間を利用して生徒と積極的にふれあうことができた。 ・クラブ活動やホームルームに教員としての観点をもちつつ、積極的に参加していた。 ・生徒とのかかわりから、個々の生徒の特徴をとらえることができた。 ・教科指導の中で、積極的に生徒理解につとめた。	<input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/>
2. 授業への対応 ・授業に応じた教材や適切な学習課題を設定できた。 ・準備した教材や学習課題を盛り込み学習の流れ（指導案）を作成できた。 ・授業における生徒の言動を予想し、指導案づくりができた。 ・学習課題に応じて必要な教材教具を作成し、活用できた。 ・授業の流れに応じて教材提示ができた。 ・授業の流れに応じて、適切な発問や応答ができた。	<input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/>
4. 実習録の内容 ・観察・授業記録等のデータに基づき、論点が明確な記述になっている。 ・見出し等や段落があり見やすい記述になっている。 ・多様な場面における生徒の実態が、特徴をとらえて記録されている。 ・授業準備における教材の工夫や検討のプロセスが記録されている。 ・授業時の生徒の様子と指導との関連が分かりやすくまとめられている。 ・授業後の検討・反省の内容が記述されている。 ・発見や事実に対して、単なる感想ではない的確な自分の意見が記述されている。	<input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/> ・・・ <input type="checkbox"/>

教育実習期間				出席すべき日数	出席した日数	欠席日数(病欠)	欠席日数(その他)	遅刻	早退	備考
自	平成	年	月 日	日	日	日	日	回	回	
(至	平成	年	月 日							
(
総合所見								加点合計		
								基礎点		
								合計点		
								総合評価(10点法)		

※ 評価は、加点方式で行います。該当する□を○で囲むか、 を付してください。
 ※ 出席状況、勤務態度、提出物等に問題がなく無事に教育実習を終了した場合を基礎点(40点)とします。
 問題が顕著な場合は、基礎点を減点し、その事由について総合所見欄に記載してください。

平成 年度 教育実習成績評価票（養護学校）

北海道教育大学函館校

実習校名		校長氏名		指導教諭氏名	
学生番号	実習生氏名	課程 専攻・コース	配属 学級	年組	

評 価 項 目	評 価 点 (加 点)		
	優 (2点)	良 (1点)	普通 (0点)
1. 実習に対する姿勢・態度 ・服装・態度が実習にふさわしいものであった。 ・時間を有効に使うことができた。 ・授業準備や計画作成等に積極的に参加していた。 ・教師としての自覚をもち、責任ある行動ができた。 ・授業や授業後の反省会・検討会に役割を自覚し、積極的に参加していた。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2. 児童生徒の理解及び積極的なかわり ・児童生徒の個性（障害を含む）を的確に把握できた。 ・児童生徒の個性（障害を含む）を配慮したかわりができた。 ・児童生徒の行動を多面的にとらえることができた。 ・日常生活の指導において、個々に応じた適切な指導（支援）を行った。 ・授業時間以外の時間、積極的に児童生徒とのかかわりがもてた。 ・児童生徒の健康と安全管理に配慮することができた。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3. 授業への対応 ・指導目標の把握ができ、授業に創意工夫がみられた。 ・個々の障害に応じた指導（支援）ができた。 ・学習意欲を引き出す授業が行えた。 ・学習課題に応じて必要な教材教具を作成し、活用できた。 ・授業の流れに応じて教材提示ができた。 ・児童生徒の実態に応じた教示が行えた。 ・チームティーチングの役割が理解でき、組織的に協力しあって授業を進めることができた。 ・適切な授業評価に基づいて授業改善に努めた。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4. 実習録の内容 ・観察・授業記録等のデータに基づき、論点が明確な記述になっている。 ・多様な場面における児童生徒の実態が、特徴をとらえて記録されている。 ・授業準備における教材の工夫や検討のプロセスが記録されている。 ・授業時の児童生徒の様子と指導（支援）との関連が分かりやすくまとめられている。 ・授業後の検討・反省の内容が記述されている。 ・発見や事実に対して、単なる感想ではない的確な自分の意見が記述されている。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

教育実習期間				出席すべき日数	出席した日数	欠席日数 (病欠)	欠席日数 (その他)	遅刻	早退	備 考
自	平成	年	月 日							
至	平成	年	月 日	日	日	日	日	回	回	
総合 所見										加点合計
										基礎点
										合計点
										総合評価 (10点法)

※ 評価は、加点方式で行います。該当する□を○で囲むか、 を付してください。
 ※ 出席状況、勤務態度、提出物等に問題がなく無事に教育実習を終了した場合を基礎点（50点）とします。
 問題が顕著な場合は、基礎点を減点し、その事由について総合所見欄に記載してください。

平成 年度 教育実習成績評価票 (ⅡB)

北海道教育大学教育学部函館校

実習校名		校長氏名		印	指導教諭氏名		印
学生番号	実習生氏名	課程	専攻・コース		配属学級	年	組

評 価 項 目	評 価 点 (加点)		
	優 (2点)	良 (1点)	普通 (0点)
1. 実習に対する姿勢・態度 ・服装・態度が実習にふさわしいものであった。 ・時間を有効に使うことができた。 ・グループ内の役割を自覚し、責任ある行動ができた。 ・授業準備や計画作成等に積極的に参加していた。 ・授業や授業後の反省会・検討会に役割を自覚し、積極的に参加していた。 ・実習に関する各種提出物等についての確に記述し、期限を守って提出していた。	□	□	□
2. 生徒との積極的なかわり ・休み時間を利用して生徒と積極的にふれあうことができた。 ・指導教官の指導のもと、朝・帰りの会の運営ができた。 ・指導教官の指導のもと、給食指導ができた。 ・指導教官の指導のもと、清掃指導ができた。 ・生徒とのかかわりから、個々の生徒の特徴をとらえることができた。 ・教科指導の中で、積極的に生徒理解につとめた。	□	□	□
3. 授業への対応 ・授業に応じた教材や適切な学習課題を設定できた。 ・準備した教材や学習課題を盛り込み学習の流れ(指導案)を作成できた。 ・授業における生徒の言動を予想し、指導案づくりができた。 ・学習課題に応じて必要な教材教具を作成し、活用できた。 ・授業の流れに応じて教材提示ができた。 ・授業の流れに応じて、適切な発問や応答ができた。 ・授業の中に、指導教官等の事前指導が活かされた。	□	□	□
4. 実習録の内容 ・観察・授業記録等のデータに基づき、論点が明確な記述になっている。 ・見出しや項目立て、表など表現に工夫がみられ、読みやすい記述になっている。 ・多様な場面における生徒の実態が、特徴をとらえて記録されている。 ・授業時の生徒の様子と指導との関連が分かりやすくまとめられている。 ・指導教官や友人から得た授業後の検討・反省等の内容が記述されている。 ・発見や事実に対して、単なる感想ではない的確な自分の意見が記述されている。	□	□	□

教育実習期間				出席すべき日数	出席した日数	欠席日数(病欠)	欠席日数(その他)	遅刻	早退	備考
自	平成	年	月 日	日	日		日	回	回	
至	平成	年	月 日							
総合 所見	加点合計									
	基礎点									
	合計点									
	総合評価(10点法)									

※ 評価は、加点方式で行います。該当する□を○で囲むか、 を付してください。
 ※ 出席状況、勤務態度、提出物等に問題がなく無事に教育実習を終了した場合を基礎点(50点)とします。
 問題が顕著な場合は、基礎点を減点し、その事由について総合所見欄に記載してください。

平成 年度 教育実習成績評価票 (ⅣA)

北海道教育大学函館校

実習校名	小学校	校長氏名	印	指導教諭氏名	印
学生番号	実習生氏名	課程	専攻・コース	配属学級	年組

評 価 項 目	評 価 点 (加 点)			備 考
	優 (2点)	良 (1点)	普通 (0点)	
1. 実習に対する姿勢・態度 ・服装・態度が実習にふさわしいものであった。 ・時間を有効に使うことができた。 ・グループ内の役割を自覚し、責任ある行動ができた。 ・授業準備や計画作成等に積極的に参加していた。 ・授業や授業後の反省会・検討会に役割を自覚し、積極的に参加していた。	□	□	□	
2. 児童との積極的なかわり ・休み時間を利用して児童と積極的にふれあうことができた。 ・指導教諭の指導のもと、朝・帰りの会の運営ができた。 ・指導教諭の指導のもと、給食指導ができた。 ・指導教諭の指導のもと、清掃指導ができた。 ・学級・授業観察等から、積極的に児童の特徴をとらえようとしていた。	□	□	□	
3. 授業への対応 ・一人一人の児童を愛情を溢れる視点で眺め、意欲的に授業観察に取り組んでいた。 ・教科等グループでの役割を自覚し、積極的に授業づくりに取り組んでいた。 ・よく教材研究や問題研究をし、児童の動きを予想して指導案をつくることができた。 ・課題授業の反省で、児童や実習生に視点をおき建設的な意見を述べていた。	□	□	□	
4. 実習録の内容 ・必要な記入内容を適切に記述し、期日内に担当教諭に提出していた。 ・誤字や脱字等がなく、観察内容等をていねいに記述していた。 ・学級観察の記録は、活動内容や児童を理解する視点から適切にまとめられていた。 ・授業観察の記録は、指導内容と児童の様子とを関連づけて適切にまとめられていた。 ・授業準備における教材の工夫や検討のプロセスが記録されている。 ・授業後の反省の記録は、指導を受けた内容等が具体的に簡潔にまとめられていた。 ・発見や事実に対して、単なる感想ではない的確な自分の意見が記述されている。 ・全体指導等、実習中に内容の記録が適切にまとめられている。	□	□	□	
5. その他 ・校内の約束を守り、控え室の整備、整理、整頓等に進んで取り組んでいた。 ・教師の仕事や役割を自覚し、実習をとおして意欲的に学び取ろうとしていた。 ・実習全体をとおして、将来の教職実現への強い熱意や意思が感じられていた。	□	□	□	

教育実習期間	出席すべき日数	出席した日数	欠席日数 (病欠)	欠席日数 (その他)	遅刻	早退	備 考	
自 平成 年 月 日	日	日	日	日	回	回		
至 平成 年 月 日								
総合 所 見							加点合計	
							基礎点	
							合計点	
							総合評価 (10点法)	

※ 評価は、加点方式で行います。該当する□を○で囲むか、 を付してください。
 ※ 出席状況、勤務態度、提出物等に問題がなく無事に教育実習を終了した場合を基礎点 (50点) とします。
 問題が顕著な場合は、基礎点を減点し、その事由について総合所見欄に記載してください。

平成 年度 教育実習成績評価票 (NB)

北海道教育大学函館校

実習校名	中学校	校長氏名	印	指導教諭氏名	印
学生番号	実習生氏名		課程 専攻・コース	配属学級	組

評 価 項 目	評 価 点 (加 点)
	5 ・ ・ 4 ・ ・ 3 ・ ・ 2 ・ ・ 1
1 実習に対する姿勢・態度 ① 服装・言葉遣い・態度等が実習にふさわしいものであった。 ② 実習に意欲的に取り組み、生徒の前に立つにふさわしい言動等がとられていた。 ③ 授業準備や授業計画作成等の活動に積極的に参加していた。 ④ 授業観察や授業後の反省等に役割を自覚し、積極的に参加していた。	<input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/>
2 生徒との積極的なかわり ⑤ 教育実習生としての立場をわきまえ、どの生徒にも公平に接していた。 ⑥ 担当教師の指導のもと、朝・掃りの会、給食や清掃活動等に適切にかかわっていた。 ⑦ 学級・授業観察等から、積極的に生徒の特徴をとらえようとしていた。	<input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/>
3 授業への対応 ⑧ 一人一人の生徒を愛情を溢れる視点で眺め、意欲的に授業観察に取り組んでいた。 ⑨ 教科等グループでの役割を自覚し、積極的に授業づくりに取り組んでいた。 ⑩ よく教材や課題を研究し、生徒の動きを予想して指導案をつくることができた。 ⑪ 公開授業の反省に、生徒や実習生に視点を置き建設的な意見を述べていた。	<input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/>
4 実習録の内容 ⑫ 必要な記入内容を適切に記述し、期日内に担当教師に提出していた。 ⑬ 誤字や脱字等がなく、観察内容等をていねいに記述していた。 ⑭ 学級観察の記録は、活動内容や生徒を理解する視点から適切にまとめられていた。 ⑮ 授業観察の記録は、指導内容と生徒の様子とを関連づけて適切にまとめられていた。 ⑯ 授業後の反省の記録は、指導を受けた内容等が具体的に簡潔にまとめられていた。 ⑰ 全体指導等、実習中に内容の記録が適切にまとめられていた。	<input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/>
5 その他 ⑱ 校内の約束を守り、控え室の整備、整理、整頓等に進んで取り組んでいた。 ⑲ 教師の仕事や役割を自覚し、実習をとおして意欲的に学び取ろうとしていた。 ⑳ 実習全体をとおして、将来の教職実現への強い熱意や意思が感じられていた。	<input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/> ・ <input type="checkbox"/>

教 育 実 習 期 間				出席すべき日数	出席した日数	欠席日数 (病欠)	欠席日数 (その他)	遅 刻	早 退	備 考
自	平成	年	月 日	日	日	日	日	回	回	
至	平成	年	月 日							
総 合 所 見									合 計 点	点
									総合評価 [10段階]	点

※ 上記20項目の得点を合計し、出席状況等の条件などを含め総合的に判断して10段階で評価します。

4. 実習の一般的心得と諸注意

はじめに

教育実習は教員になるためには必ず取得しなければならない科目である。学生にとっては必要な単位であるが、実習を引き受けてくれる協力学校にとっては実習生の受け入れは義務でも何でもありません。実習生は実習が各受け入れ校の協力なくしては成り立たないことをまず自覚し、教員になりたいという強い意志と心構えを持って実習の準備を進めた上で、実習を行って欲しい。

実習生の立場について

実習生はあくまでも学生として教育現場において体験的に研鑽を積むという立場にある。従って実習においては各学校の実習担当教諭の指導のもとで活動することになる。一方、園児や児童生徒は実習生をとときに教生先生と呼び、教師として接してくる。指導を受ける立場と指導するという立場にある実習生の役割をしっかりと認識して実習することが重要である。

各学校の教育活動は2、3年から6年という長い期間に渡り、1時間1時間の積み重ねによって成り立っている。このような活動のなか、実習生は2週間から4週間という限られた期間に学校の実態を体験的に勉強させていただくわけである。実習生の活動によって普段の教育のペースが乱されたり、遅れたりし、それをもとに戻すために先生方は多くのご苦勞をなされます。従って、十分な準備と心構えと感謝の気持ちをもって実習すること。次に過去にこういうことがあった。じっくりと考えて欲しい。

先生方は子どもたちと時にはかなり緊張した関係のなかで授業や生活指導にあたっていることもある。このようなときに実習生が安易に生徒の側にたって活動したことにより、その学校の授業や生活の規範が大きく崩れてしまったということがあった。実習生のなかには十分な判断ができると考えているかもしれない。しかし、状況を十分に認識せずに判断を下したことに対する責任を実習終了後まで果たすことはできないのである。従って、疑問と感じた点が出たときや判断に迷ったときは指導の先生方に相談した上で行動すること。実習生は長い教育期間のうちのわずかな期間しか、それも実習生という立場の範囲内でしか生徒と接することができないのである。しかし、こういったからといって消極的な態度では実習の効果は望めないのも、実習生としてできることを見極めた上で積極的に実習を取り組んで欲しい。

教育実習生の実習中の実習校での一般的心得並びに諸注意事項については次のとおりである。なお、各実習校の実習の心得等をよく理解して実習に臨むこと。

1) 全般的心得

- ① 実習中の一挙手一投足は、すべての幼児、児童生徒の心情行動に影響するところが大きく、勤務態度（実習態度）、言葉使い、礼儀作法、服装などに特別の注意を払うこと。
- ② 実習生は各実習校の教育方針に従い、授業（保育）、研究、経営、指導など、すべての面にわたって、教師にふさわしい行動をとること。
- ③ 実習生は児童生徒たちと生活を共にし、児童生徒理解の上に立って教育活動に当たること。
- ④ 実習生はいかなる理由があっても幼児、児童生徒に体罰を加えてはならない。
- ⑤ 幼児、児童生徒自身やその家族のこと、学校の運営に関することなどを見聞しても、教育研究上の良心からそれを漏らさないこと。

- ⑥ 実習生は実習校教諭の指導の下に教育活動を行うこと。不確かな点、疑問・不明な点については、独断で処理しないで必ず指導教諭や実習主任教諭の指示を仰ぐこと。
- ⑦ 実習校の教職員に対しては、敬意と礼節のある態度で接すること。
- ⑧ 実習生は、すべての幼児、児童生徒に対して、思いやりのある態度で接し、不公平な態度をとらないように注意すること。
- ⑨ 授業を行わない時間、休憩時間や放課後などは児童生徒と触れ合うようにすること。授業外での関わりも人間関係の形成においてきわめて重要である。ただし、教員の立場に立って実習していることを忘れないこと。
- ⑩ 実習上、不具合が生じた場合は教育実習委員会へ申し出ること。

2) 授業についての心得

- ① 実地授業を行う場合は、必ず「学習指導案」を作成し、事前に指導教諭に提出して、指導助言を受けてから実施すること。
- ② 授業（保育）を行わない時間は、つとめて授業参観し研修することが望ましい。
- ③ 実習生は、配属学級において実習することを原則とするが、他学級で授業を参観する場合は、必ずその授業の担当者に許可を得ること。なお、参観後は指導者への謝辞を述べること。
- ④ 授業を参観していただいた教諭からは批評や指導助言を受けること。
- ⑤ 学校の備品（教具、器具、図書等）を使用する場合は、必ず指導教諭または担任教諭の許可を受けること。使用後は確実に返却すること。
- ⑥ 教科指導、研究会には全員出席すること。

3) 実習上の心得

- ① 実習生の実習時間は、実習校の教諭の勤務時間に準ずるが、早めに登校し、学級を見回ったり、実習生控え室を清掃するぐらいの余裕が欲しい。
- ② 下校は、指導教諭の許可を得てから行うこと。下校時間になったからといって無断で下校してはいけない。また、居残る場合も指導教諭に届け出ること。
- ③ 実習時間中は許可なく外出しないこと。
- ④ 指導中、児童生徒に事故が起こった場合は、適切な応急処置を行うとともに、速やかに指導教諭等に連絡し、指示を受けること。
- ⑤ 喫煙は学校内では控える方が望ましいが、喫煙する場合は指示された場所でのみ行うこと。教室・廊下では、休み時間、放課後といえども厳禁である。
- ⑥ 上履きと下履きの区別をつけること。校舎内でのサンダルやスリッパは使用しない。また、サンダル等での通勤をしないこと。
- ⑦ 実習生控え室は常に清掃を徹底し、整理整頓に心がけること。
- ⑧ 提出物（教育実習記録、学習指導案、児童生徒の作品等）の期限を厳守すること。
- ⑨ 実習校での携帯電話の使用は厳禁とする。大学への連絡等、公的要件で連絡する場合は実習校の電話を借用すること。実習期間中、児童生徒へ電話番号を教えることや電話・携帯電話による連絡も禁止する。

4) 欠席、遅刻、早退について

- ① 欠席は親族（3親等以内）の不幸、本人の病気・事故（診断書等で証明可能なもの）と教員採用試験など教育実習委員会が認めた理由以外は認めない。無断欠席をした場合は成績評価は不可とする。
- ② 欠席する場合は欠席届（手引きの巻末参照）を作成し、必ず事前に提出すること。
 - ・教育実習Ⅰを欠席する場合は教務係に欠席届を提出すること。
 - ・教育実習Ⅰ以外の教育実習を欠席する場合については、欠席届を2部作成し、1部を実習校に、他の1部を教務係へ提出すること。教務係への提出はファックスでも良い。（fax0138-44-4380）
- ③ 急な事情によりやむなく欠席する場合については、課程・専攻・コース・学生番号・氏名・欠席する理由及び期間を必ず連絡（代理人も可）するとともに、3日以内に②の要項で欠席届を作成し、提出すること。
 - ・教育実習Ⅰを欠席する場合は、速やかに教務係へ電話（0138-44-4219）へ連絡すること。
 - ・実習Ⅰ以外の実習を欠席する場合については、速やかに実習校及び教務係へ連絡すること。
- ④ 欠席回数については各実習の実施日数の正当な理由のみ20%まで認める。なお、正当な理由による欠席と判断された場合については、大学または実習校において補講を行う。
- ⑤ 理由なく遅刻しないこと。やむを得ない理由があつて遅刻するときは電話で実習校に連絡すること。教育実習Ⅰについては教務係へ連絡すること。早退の場合はその理由を指導教諭に申し出て、許可を得てから行うこと。

5) その他の留意事項

- ① 課題授業・課題保育における上・下級生の授業参観は原則として認めない。但し、実習校の許可があればよい。決して無断で参観しないこと。
- ② つとめて公的な交通機関を利用すること。但し、自動車等の利用は教育実習委員会が認め、なおかつ実習校の校長が認めた場合のみ許可している。その場合でも絶対に事故を起こさないように、細心の注意を払って運転すること。
- ③ 実習期間中のアルバイトは中止し、教育実習に専念すること。教材研究、実習録の整理、成績物の評価等の内容が山積みしているので、アルバイトをしている余裕はない。
学内クラブ活動についても、上記に準ずる。
- ④ 名札は「教育実習Ⅰ」で使用したものを必ずつけること。
- ⑤ 教材作成等に必要経費は実習生の個人負担とすること。
- ⑥ 実習生は、児童生徒の家庭訪問をしてはならないこと。
- ⑦ 特別の許可なく、幼児・児童生徒を自己の宿舎(寮、アパート、下宿、自宅)に招いたり、校外、映画、遠足、演奏会などに連れ出さないこと。
- ⑧ 教育実習の内容をホームページへ掲載しないこと。
- ⑨ 実習終了後は、実習校の校（園）長、教頭、実習主任教諭、学級担任教諭、教科担任教諭などお世話になった先生方に感謝の気持ちを込めて、自分の言葉で礼状を出すことが礼儀である。また、配属学級の子どもたちにも、折にふれて手紙を書いたり、学校（園）行事の折りには訪問し、交流を深めたり再会を喜ぶ気持ちが欲しいものである。その際、身なり、服装に十分留意すること。

第 2 部

幼 稚 園 実 習

第2部 幼稚園実習

I. 教育実習 I	
1. 教育実習の目的	27
2. 教育実習の概要	28
3. 教育実習の日程	32
4. ビデオの利用方法	33
5. 幼児の理解	34
6. 保育者の役割	35
7. 環境構成の重要性	36
8. 保育指導案の書き方	37
9. 部分保育について	39
10. 保育実習録の目的と書き方	41
11. 教育実習 II に向けて	42
II. 教育実習 II	
1. 附属幼稚園の概要	43
2. 附属幼稚園の教育課程	44
3. 教育実習 II の概要	45
4. 教育実習 II の日程	46
5. 教育実習を行うにあたっての注意点	47
6. 年齢別の子どもの特徴	49
7. 幼稚園生活の一日の流れ	50
8. 幼稚園行事について	51
9. 保育評価	52
10. 保育室の環境整備（整美）と設備	54
11. 子どもの安全・保健	55
12. 課題実習に向けて	56
13. 教材研究と環境構成	57
14. 保育指導案について（例）	58
15. 保育指導案の実践例	59
16. ティーム・ティーチング	66
III. 教育実習 III	
1. 目的	67
2. 日程	67
3. 各幼稚園の概要	67
3-1 函館市立函館幼稚園	68
3-2 函館市立日吉幼稚園	80
3-3 函館市立松風幼稚園	82
3-4 函館市立万年橋幼稚園	84
IV. 教育実習 IV	
1. 目的	90
2. 日程	90
3. 教育実習 IV における視点	90

I. 教育実習 I

1. 教育実習の目的

幼稚園では幼児の主体的な活動を特に大切にしており、そこで行われる保育とは、幼児がよりよい方向に向かって発達していくことを「援助」することである。このような考え方に立つ保育では、一方向の教師主導型の指導ではなく、子どもと心をかよわせ、子どもの興味、関心、要求などをくみとりながら、相互作用としての「援助」が大切になってくる。幼稚園教育実習の目的は、このような「保育」を身をもって実践・体験することである。

教育実習の目的は、次の通りである。

- 1) 教育（保育）実践能力を高めること。
- 2) 実習生の主体的課題解決活動を重視すること。
- 3) 指導者としての意識をもち、全体を見ながら観察し遊ぶことを常に心がけること。
- 4) 教育実習と大学の講義を有機的に結びつけ、理論と実践の融合を目指すこと。

● 教育実習の心構え

これから実習を行おうとする皆さんにとって、実習に寄せる期待と不安は大きいものであろう。特に、養成課程で幼児教育の勉強を始めたばかりの皆さんにとって不安のほうが大きいかもしい。まず、教育実習全体の心構えを話しておこう。

実習そのものに対する心構えは、ある程度個人の姿勢として本人にまかされるものである。それは、実習がまず実習生自身のためのものであることによる。

しかしながら、考えてみると、実習というのは、いろいろな人の協力なしには成り立つことができない。実習という行動は、まったく個人的なものであっても、それは実習の許可を得た幼稚園があり、指導にあたる保育者がいて、そして子ども達がいることを前提にしている。特に、子ども達にとっては、そこが生活の場であり、そこで幼児期の体験を蓄積していることをしっかり頭の中に入れておこう。つまり、幼稚園という場は、子ども達にとっても、保育者にとっても真剣勝負の場である。これから考えれば、実習生の行動も真剣勝負でなければならない。また、子ども達にとっても、親にとっても、実習生は実習生でありながら「先生」と呼ばれる立場にある。したがって、実習生は「先生」と呼ばれることに相応する心構えと行動をするように注意すべきである。

2. 教育実習の概要

新しい教育実習の特徴は二つある。一つは、実習で実際の現場のことを学びながら、大学で理論を平行して学ぶことである。二つ目は、4回にわたる実習の積み重ねである。このような特徴をもつ教育実習の概要について述べる。

1) 教育実習Ⅰ（事前指導）

まず、2年生の前期に、附属幼稚園で教育実習の事前指導を体験する。配属されるクラスは、夏休みの教育実習Ⅱのときと同じクラスである。事前指導の時に、しっかりと一人ひとりの子どもの名前と顔と行動の特徴をつかんでおこう。

2) 教育実習Ⅱ（基本実習）

次に、2年生の夏休みの4週間にわたる附属幼稚園の実習である。ここで、保育の基本をしっかりと学ぼう。次につながる自分の課題をしっかりと見つけよう。課題を持って、大学に戻ろう。そして、それを問題意識にして、大学の講義を受けよう。

3) 教育実習Ⅲ（応用実習）

3番目の実習は、3年生の夏休みに3週間にわたって公立幼稚園で行われる。これは応用実習である。今まで蓄積したものを基にして、思いっきり自分の実力を発揮しよう。

4) 教育実習Ⅳ

4番目の実習は異校種での教育実習である。幼稚園を主とする皆さんの場合は、小学校で教育実習Ⅳを行う。期間は、3年生の夏休み。すなわち、教育実習Ⅲの実習を終えた後、小学校で2週間の実習を行う。幼稚園の実習で身につけたものを、小学校で試して見よう。幼稚園と小学校の教育制度や子ども達の違いを認識することが目的である。

実習生の主体的課題解決活動を基盤とした教育実習計画（幼稚園）

	教育実習Ⅰ (事前指導)	教育実習Ⅱ (基本実習)	教育実習Ⅲ (応用実習)	教育実習Ⅳ（発展学習） (小学校の計画に準じる)
履修学年/期間	2年（4～7月）	2年（3週～6週）：4週間	3年（1週～3週）：3週間	3年（5週～6週）：2週間
実習場所/実習校	大学・附属幼稚園	附属幼稚園	協力幼稚園	亀田小学校
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> 学習者の主体的な問題の自覚とその解決への意欲が重視される今後の学校教育の方向を踏まえ、函館校教育実習においては、幼児・児童・生徒理解を基盤とした保育・教育の実践に必要な専門的な知識と方法を修得し、それにより教職への意欲と志向性を高め、教職への研究課題を深めることを目的とする。 教育実習への意識形態および大学教育と教育実習との連携（幼児理解を中心とした保育方法を図る） 幼児教育への意欲形成 	<ul style="list-style-type: none"> 附属幼稚園において、1クラス複数名の小集団で、基礎的な保育のための力量（幼児理解に基づき環境構成）を学ぶとともに、保育実践に関する課題を見つける 	<ul style="list-style-type: none"> 幼児教育等の理論的な学習と併行し、公立の協力園において、保育立案・実施・評価の活動を通して、個々の教育実践の課題を把握する。それにより教職への学びを高める 	<ul style="list-style-type: none"> 小学校の計画に準じるが、幼稚園での実習を踏まえ、幼少の関連の問題意識を持つことが重要
内容・領域	<ul style="list-style-type: none"> 子供理解 保育づくり 	保育による指導・援助		
形態	1クラス数名の小集団	1クラス数名の小集団	1クラス1名	
方法・活動	<ul style="list-style-type: none"> 教育実習委員会による指導の下、実習生の主体性及び小集団による課題解決活動 子ども理解のための観察方法を学ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> 実習園での指導の下、実習生の主体性及び小集団による課題解決活動 自らの教育活動を内省し、対象化する 	<ul style="list-style-type: none"> 実習園での指導の下、実習生の主体生に基づく課題解決活動 活動の内省することにより対象化し、さらに新たな課題を見つける 	
		子どもの主体的な活動を尊重した保育実践		
	<ul style="list-style-type: none"> 保育を中心とした教育活動を行うための準備の過程及び教育メディアの活用等の 	<ul style="list-style-type: none"> 幼児理解・環境構成・指導案作成等の保育基準を重点的に行う。T.T.I.による基礎的な保育技術の 	<ul style="list-style-type: none"> 幼児の実態と環境を考慮して指導案を作成する。自分の課題とする保育スキルに着目して保育 	

	方法論に焦点をあてる ・保育及び子ども理解のための観察・記録の方法を習得する	習得に焦点をあてる ・保育活動及び幼児理解のための観察・記録の方法 ・個別・グループの課題保育の計画・実施を通して、保育への問題意識を深めていく	を実施し、評価を行う ・保育者と子どもとの約束事の形成にも着目する ・個人の課題保育の計画・実施を通して、保育への問題意識を深めていく	
課題の焦点	<ul style="list-style-type: none"> 教育実習Ⅱへの参加の意識形成 保育基準（計画の立案・実施）の過程の理解 部分保育の実践 	<ul style="list-style-type: none"> 主要な保育活動を明確にした保育指導過程を構成する 幼児の遊びと環境構成の関連を分析する 環境構成や指導・援助に対する幼児の行動予測と対処 	<ul style="list-style-type: none"> 幼児理解に基づく保育づくり（環境構成と援助）と実施 幼児理解を基盤として、幼児の遊び行動を予測し、適切な援助行動を選択 	
プログラム	<ol style="list-style-type: none"> 保育の構造の把握 観察方法とそれに基づく幼児理解の方法 幼児の遊びと環境構成の研究、メディアの利用方法 保育指導案の作成・検討（個人作業に基づくグループでの検討） 実習参加への意識形成 	<ol style="list-style-type: none"> 保育観察→幼児理解→保育指導案作成→保育の実施 示範保育（観察・保育研究会）→課題保育の準備 課題保育の実施→保育研究会→課題の評価・確認 	<ol style="list-style-type: none"> 保育観察→幼児理解→保育指導案作成→保育の実施 示範保育（観察・保育研究会）→課題保育の準備 課題保育の実施→保育研究会→課題の評価・確認 	
課題保育		<ul style="list-style-type: none"> 実習中に行う保育の一つを個人で行う課題保育とし、園内で保育研究会をもち、検討をする 	<ul style="list-style-type: none"> 実習中に行う保育の一つを個人で行う課題保育とし、園内で保育研究会をもち、検討をする 	
事前指導		教育実習Ⅰ	教育実習Ⅲ参加への意識形成	
事後指導		<ul style="list-style-type: none"> 教育実習中の個人課題及びグループ課題を把握し直し、幼児教育関連科目の学習と関連を意識化する 	<ul style="list-style-type: none"> 教育実習中の個人課題を把握し直し、幼児教育関連科目の学習との関連を意識化する 	
幼児教育関連科目との関係	幼児心理学、幼児教育学、表現Ⅰ（歌唱）	幼児の歌唱指導、表現Ⅱ（リズムム）、保育方法論	領域教育総論	幼稚園の管理・運営、保育実践演習

3. 教育実習の日程

教育実習の日程は以下の通りである。

1) 教育実習Ⅰ（事前指導）

- (1) 全体のオリエンテーション（大学：実習委員会）
- (2) 幼稚園のオリエンテーション（大学：実習委員会）
概要の説明、クラス分け、ビデオの使用法
- (3) 大学での基本的講義（大学：実習委員会）
保育を見る目の養い方(1) 幼児の理解
- (4) 附属幼稚園の保育への参加（附属幼稚園）
●課題1：子どもの名前をおぼえよう
- (5) 附属幼稚園の保育への参加（附属幼稚園）
●課題2：1人の子どもを選び、その子どもの遊びを追跡しながら観察しよう
- (6) 大学での基本的講義（大学：実習委員会）
保育を見る目の養い方(2) 先生と幼児の関わり
- (7) 附属幼稚園の保育への参加（附属幼稚園）
●課題3：先生は子どもとどのように関わっているか観察しよう
- (8) 大学での基本的講義（大学：実習委員会）
環境構成
- (9) 附属幼稚園の保育への参加（附属幼稚園）
●課題4：保育方法を観察しよう
- (10) 基本的講義（附属幼稚園）
指導案の書き方
- (11) 附属幼稚園の保育への参加（附属幼稚園）
●課題5：示範保育を観察し手て、指導案を再現してみよう
- (12) 基本的講義（附属幼稚園）
部分保育のやり方
- (13) 附属幼稚園での実践（附属幼稚園）
●課題6：部分保育を実践してみよう
- (14) 大学での基本的講義（大学：実習委員会）
部分保育の反省会、課題のまとめ、教育実習Ⅱに向けて

2) 教育実習Ⅱ（基本実習）

- (1) 事前指導 直前の事前指導と連絡教官との打ち合わせ
- (2) 教育実習Ⅱ 附属幼稚園 4週間
- (3) 事後指導

4. ビデオの利用方法

「人の振り見て、我が振り直せ」ということわざがある。自分が実習生としてどのような動きをしているか分からない。ビデオを利用することによって、自分がどんな動きをしているか確認することができる。他の実習生と協力して、お互いに撮してみよう。

ビデオを撮す時の心構えは、俳優の心構えと似ている。また、これは実習生が保育に臨む時の心構えにも通じるものがある。

「俳優には常に二つの心が大切である。一つは、与えられた役の人物の人生を生き、その人物の目で状況を生きていく心と、もう一つは、舞台の上の自分自身、すなわち、その人物を冷やかに観客の目で眺めている心である。」

ビデオを撮影する時の注意点をまとめておく。

- 1) 始めて撮影する時は、どのように操作をすればよいか、前もって手引き書やマニュアルを調べおこう。一度、練習してみることも大切である。
- 2) ビデオ機材のチェックをしておこう。特に、バッテリーが十分に充電されているかどうか気をつけること。
- 3) 何について撮るのか
被写体、テーマ、内容を明確にしておく。保育者を撮るのか、子どもの遊びを撮るのか、実習生を撮るのかによっても異なる。
- 4) 位置、動き、方向、視線の配慮
カメラや被写体について、位置関係、動き、方向を常にチェックし、不自然さを排除するようにする。子どもが遊んでいる時、思いがけないすばやい動きをすることがあるので、注意しよう。人物の視線の方向は十分にあけるのが鉄則だが、口を中心に持ってくるように撮影するのがよい。
- 5) ビデオを借りる時の注意
ビデオの機材は附属幼稚園等に用意してある。ビデオを借りる時には、前もって必ず幼稚園の先生に申し出ること。その際、ビデオテープは幼稚園のものを利用できるか、それとも自分で用意するのか確認しておこう。

5. 幼児の理解

教育実習と幼児の理解について説明する。また、そのための課題（2回分）について説明する。

幼稚園の教育実習は、幼児の理解に始まり、幼児理解に終わると言うほど基本的で重要なものである。また、それは、教育実習の目標の一つである「保育を見る目を養う」ことの基本にもつながっている。そのためには、自分の眼でしっかりととらえ、理解することが何よりも大切である。

2年生の諸君は、保育の対象である幼児の心の動きや発達の状態について、教育実習と平行して大学の講義で学ぶことになる。しかし、今まで実際に子ども達と話したり遊んだりしながら、長時間生活をともにした経験を持っている人は少ないだろう。したがって、実習期間中（事前指導の時も）はできるだけ多く子どもと接し、ありのままの子どもの行動や考え方を自分の肌で触れながら子どもを理解することが必要である。

来週から、附属幼稚園で実際に子ども達と触れあいながら教育実習Ⅰを行うが、幼児理解にかかわる課題を設定した。それについて説明する。

[課題1]: 子どもの名前をおぼえよう

目的: 幼児理解の第一歩として、クラスの子どもの名前をおぼえよう。

方法: 子ども達の遊びを観察しながら、胸についている名札で名前を確認しよう。

レポート: A4のレポート用紙を準備する。一人ひとりの子どもの名前を書き、その子どもの特徴で気がついたことをまとめておく。

[課題2]: 1人の子どもの遊びを追跡

目的: 1人の子どもの遊びを追跡しながら、その子どもの遊びの特徴を把握する

方法: 1人の子どもの遊びを選び、1時間、その子どもを追跡しながら、どんな遊びを誰とどのように遊んでいるかを観察する。

レポート: 1時間の追跡結果をまとめてレポートすること。その際、観察しながら自分で考えたことをまとめておくこと。

**** 注意 ****

- 1) 集合時間は厳守
- 2) 持ち物: 筆記用具、上履きと下履き（運動靴）、子どもと遊べる服装（スラックスにトレーナーもしくはポロシャツ。）
- 3) レポートは、指定の期日までに教務係へ提出すること（時間厳守）

6. 保育者の役割

幼稚園の保育者の役割を小学校の先生と比較しながら考えてみよう。

小学校の先生の役割は、学習指導と生徒指導と言われている。小学校はいろいろな教科を学ぶところだから、小学校の先生の役割は第1に、子ども達に勉強を教えることであることには誰にも異存はないだろう。勉強以外にも子ども達のいろいろな日常生活について指導をする必要がある。それが生徒指導である。

それでは、幼稚園の保育者の役割は何だろうか。小さい子ども達にとって、「遊びが仕事」と言われている。一日中、無我夢中で遊んでいる子ども達の姿は神々しく見えることさえある。仲間達と一緒に遊ぶ子ども達の間には、教え・教えられるという関係はない。あるのは「共に遊ぶ」関係だけである。保育者も同じである。まず、子ども達と同じ目線に立って「共に遊ぶ」関係を作ろう。子どもと「共に遊ぶ」ことによって、子どもの心の動きや行動が理解できる。この時に、保育者として注意すべきことがある。指導者としての意識をもち、全体を見ながら観察し遊ぶことである。

次に、幼稚園の保育者の役割として考えるべきことは、遊びにおいては、子どもの主体性や自発性を重んじることである。しかし、その時、子どもの主体性を重んじるあまり、「子どもをただ遊ばせている」だけでは教育は成り立たないことに注意しよう。子どもが夢中で遊んでいる時は、じっと見守ることも必要である。もし、子どもの遊びが停滞したり、こうすればもう一步上に発達できると判断したら、指導・援助を行う。このような判断ができる「保育を見る目」を持つことは実習生にはなかなか難しいが、ベテランの保育者のまねをすることから始めてみよう。

保育者は子どもが精神的に安定するための心のよりどころである。幼稚園は、子どもにとって親から離れ、初めて集団生活を営む場である。幼稚園で安定し、落ち着いた心を持つことによって主体的な活動をすることができる。この安定感をもたらす信頼のきずなは、保育者が子どものありのままを受け入れて、一人ひとりに心をくたくことによって始めて生まれる。子どもと共に遊びながら、子ども達の喜びや悲しみに共感してみよう。

[課題3] : 保育者は子どもとどのようにかかわっているか観察しよう

目的 : 保育者が子どもとどのようにかかわっているか観察しよう。

方法 : 自分のクラスの先生が、子ども達とどのようにかかわっているかを見るために、保育者と子ども達の間でかわされた「言葉」とその状況を記録しよう。その際、保育者の動き、ふるまい、表情などにも注意しよう。

レポート : レポートでは、「時間」、「保育者のことば」、「子どものことば」、「状況」を分けて、できるだけ詳しく記述すること。考察として、何が起きていたのかのまとめと、あなた自身が考えたことを書きなさい。

7. 環境構成の重要性

「環境を通して行う教育」は、幼稚園における基本的な保育方法である。

子ども一人ひとりの潜在的な可能性は、子どもが保育者と共にする生活の中で開かれ、環境との相互作用を通じて具現化される。したがって、環境を通して行う保育は、遊具や用具・素材だけを配置して、あとは子どもの動くままに任せるといったものとは全く異なる。子どもが自分から興味をもって、遊具や用具、素材に対してふさわしいかわりができるように、遊具や用具、素材の種類、数量や配置を考える必要がある。そこに、保育者の教育的意図が含まれているといえよう。

したがって、「環境構成」は幼稚園の保育者が行う重要な役割の一つである。子どもの発達段階と発達状況、幼稚園の目標を考えあわせて、その時、子ども達にとって最適な遊びのための「環境構成」をする。いわば、「環境構成」は保育者が子ども達に働きかける一つの大きな手段と言ってよいだろう。「保育は環境を通して行うこと」が幼稚園での保育方法であることを意識して、ベテランの保育者がどのように「環境を通して」保育を行っているか注意して観察してほしい。

たとえば、木工の素材とかなづちを用意する。しかし、それらが置いてあるだけでは、子どもは興味を示さないだろう。保育者が打ってみるというモデルを示すことにより、かなづちを手にするようになる。はじめはうまく打てないかもしれない。上手に打っている友達や保育者の動きを真似しながら、いろいろ試行錯誤を繰り返すうちに自分の手で用具の使い方を習得し、自らの世界を広げていくことの充実感を味わっていくだろう。

[課題4] : 保育方法を観察しよう

目的 : 幼稚園の保育方法である「環境構成」を理解する。

方法 : その日、子どものために保育者が準備した遊具や用具、素材などにどんなものがあるか調べよう。子ども達がそれらをどのように活用しながら遊んでいるかについて観察する。

レポート : その環境構成の中で、子ども達がどのように遊びを発展させたかを述べること。それについてのあなたの考えを述べること。

8. 保育指導案の書き方 (A)

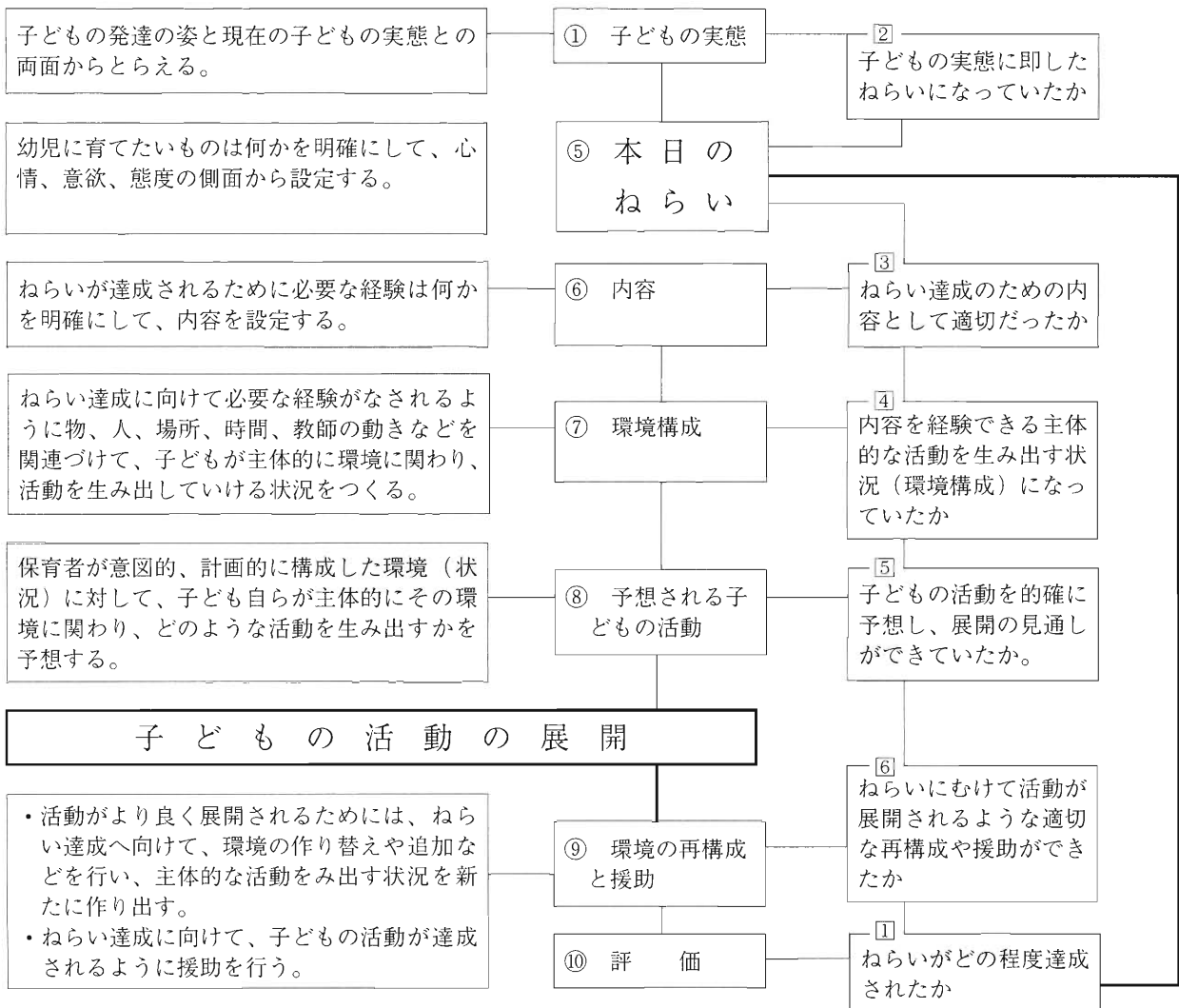
(1) 保育指導案の形式と項目

指導案の書き方には、決まった形式はないが、以下の項目によって整理されるのが一般的である。

①子どもの姿	②月 日 ③対象児 ④指導者	年 月 日 (曜日) 組 男児 名 女児 名 ○ ○ ○ ○
⑤ねらい	⑥内容	
⑦環境構成	⑧予想される活動	⑨保育者の援助や再構成の見直し
⑩評価の観点		

これらの項目の他に「題材名」や「今までの活動の経緯」「教材（教材観）について」等、保育者の保育の意図や保育観を詳しく書く場合もある。幼稚園教育の保育指導案も他校種の学習指導案と基本的には同じである。

・保育指導案の手順と内容



保育指導案の書き方（B）（示範保育を観察して指導案を書く）

<u>保 育 指 導 案</u>		
・日時 平成〇〇年〇月〇日〇曜日 ・学級 〇〇組 男 女 ・指導者 〇〇 〇〇		
<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの実態 今までの保育観察や示範保育によってとらえた子どもの実態を書く。 ・保育のねらい 心情・意欲・態度の側面から、多分、このようなことをねらって保育を行ったのだろうと推測されることを書く。 ・保育内容 ねらいを達成させるために、経験をさせたい内容としたことを推測して書く。 		
環 境 構 成	子 ども の 活 動	保 育 者 の 援 助 及 び 再 構 成
<p>環境構成の主な要素となる以下の点について、どのような状況がつくられているかをとらえて書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どこで（例えば遊戯室、保育室、戸外とだけでなく、保育室の窓際の一角など細かにとらえていったほうがよい） ・どの時間帯、どれくらいの時間（例えば登園から1時間程の時間帯、動的な遊びを40分した後の30分など） ・何を使って（例えば道具、素材、遊具、用具などの個数や形態などにも注目する） ・どのような人的環境（子どもや教師）が活動を促す要因になっているかをとらえる ・自然環境の生かし方（気象状況、樹木の様子、自然光・音等） ・社会環境の生かし方（例えば音楽、ビデオ、絵画等） ・どのような雰囲気をつくっているかなどに注目する。 	<p>環境に刺激をうけて、子ども自らが主体的な活動を生み出した様子を、次の状況からとらえて書表す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仲間との関わりや会話、言葉などをとらえる。 ・心が動いたと推測されることを表情から拾う。 ・振舞いの様子が主体的な活動であるかどうかとらえる ・具体的な活動として、身体をどのように使って動きだしたかをとらえる。 ・空間の使い方（子どもの動く範囲、場所、動線）と動きの様子をとらえる。 ・集中程度や興味関心の様子をとらえる。 ・保育者から刺激をうけて、動き出した事柄や活動の特徴。 ・集団の雰囲気から受けた刺激で動き出したことがとらえられたこと等を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの活動を促したり経験の質を深めたりするために行っている教師の援助の内容をかく。 ・子どもの活動を活性化させるためにおこなったと思われる環境の再構成（最初の環境の作り替え、追加等）の様子をとらえてかく。 ・保育者がどのような場面でどのような言動をしたか。それはどのような意味があると思われたのかを書く。

課題5：計画、実践、評価を関連させながら保育を観察しよう。示範保育の観察記録を元に上記の手引きにそって指導案を作成してみよう。

9. 部分保育について（A）

(1) 一日の保育と部分保育

一日の保育の一部を保育者の立場で責任をもって行うことを部分保育実習という。

観察実習において、幼稚園の一日がどのように展開するか、またそこでの様々な個性をもつ子どもの行動、保育者の動きについて把握した後に実施され、教育実習の段階の一つとしての位置付けをもつ。

部分保育には、一日の流れのある一定の時間、またはある場面を限定して保育活動を行う場合がある。

一日の保育のねらいや内容を十分に把握し、部分保育においてそれらが具体的に子どもの活動として展開できるように保育指導を行っていかなければならない。すなわち、部分保育はその部分だけを切り離して行うことはできない。

部分保育はティーム・ティーチングの一つの形態にとらえ、その日の保育を行う他のスタッフとの連携が密に図られることが大切である。

部分実習としては、昼食前の挨拶のように幼児が学級としてまとまっている状態（一斉活動）の時に、実習生が話をし、子どもがそれに従って行動する場合や、好きな遊びの中（自発活動）で、ある限られた場面や時間を担当して行う場合がある。

出欠調べの調査のような5分程度から、その日の中心となる活動の指導のように、かなりまとまった時間を担当して行う部分保育などがある。

(2) 部分保育の位置付けと内容例

教育実習生が従来、部分保育として取り組む活動の中には次の例が多くみられる。

- ・ 一日の一定時間を区切って行う保育活動
「絵本の読み聞かせ」「降園前の歌」「おやつ」「お弁当」指導など。
- ・ 多様な活動場面の一部（場面・時間）を担当して行う保育活動
「戸外で遊ぶ」などの保育が展開されている場合に「砂場遊び」や「縄跳び遊び」など。

一定の時間を区切って行う部分保育（一斉活動）	好きな遊びの場面でを行う部分保育（自発活動）
1. 登園し、身の回りの始末を行う。 2. 好きな遊びを行う。 3. おやつを食べる 部分保育 4. 学級でまとまって活動する。 リズム遊びをする 部分保育 5. 降園の準備をする。 絵本の読み聞かせを行う 部分保育	○戸外で遊ぶ自発活動 ①砂場で遊ぶ ②グラウンドで縄跳びをして遊ぶ ③固定遊具で遊ぶ ・①～③の好きな遊びの場面において、いずれかの活動を責任を以って援助していく方法 ・また、実習が進むに従って①～③の全体の動きを把握しながら、自発活動の時間を限定して部分的に責任を持って保育を行う方法がある。

課題：部分保育をしたい内容を一日の保育の中からマークし、具体的な保育計画を立てよう。

部分保育について（B）

(1) 保育の流れと部分保育「絵本の読み聞かせ」

一日の全体的な流れの位置付けをとらえる。絵本の読み聞かせは静的な活動をしてのとらえが一般的である。次のような例が多い。

- ・お帰り前のひとときに絵本を読み聞かせる。
- ・ある活動を引き起こす場合のきっかけを与えるために絵本を読み聞かせる。
- ・動的活動の継続によって心身の休息が必要な場合などに行う。

(2) 「絵本の読み聞かせ」の準備 —— (前日準備)

- ・どのような場面で行うか、時間や場所を確認する。
- ・その日の保育のねらいや内容を把握する。
- ・適切な絵本の選択をする。(発達年齢に合わせた内容、色彩、絵の大きさ、時間等)
- ・絵本の読み聞かせの練習をする。
- ・読み聞かせの演出を考え、準備する。(ピアノによる伴奏や雰囲気づくりの物)

(3) 保育中の「絵本の読み聞かせ」の実際

環 境 構 成	予想される幼児の活動	保育者の援助及び環境の再構成
<ul style="list-style-type: none"> ・絵本の読み聞かせを楽しみに待つ状況づくり (音楽をかけたり、ピアノを弾いたり、絵本を見える場所に置く) ・雰囲気を作り、読み始める。(声の高低、抑場、速度) ・読み聞かせの終了を知らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・絵本が見える場所にそれぞれ掛けたり、座ったりする。 ・自分の場所から絵本が見えるか見えないかを確認、その様子を訴える。 ・次第に関心を強め、集中して聞き入る。(または、関心を示さず興味も次第に薄れ、悪戯したり、動き回ったりする) ・満足したり、又は開放されたほっとした様子を示す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・あまり、広がり過ぎないように本が見える角度に留意する。椅子の並べ方や座り方について指示したり、よりよい方法を促す。 ・絵本の位置の高低や子ども達の頭や肩などで遮られている状況をとらえ、絵本の提示の仕方を工夫する。 ・声の高低、抑場、速度などに変化を付け、興味を引くようにする。 ・次回への期待、意欲づけを行う。

(4) 保育終了後の評価

- ・絵本の読み聞かせの場面における表情の変化や発声の状況、読み終えた段階での反応から、絵本への興味関心を推測する。
- ・実際の子どもの活動(聞いている状況)を生み出した要因を考察し、「絵本の読み聞かせ」の次の保育の参考となる事項をまとめる。

課題7：絵本を選び読み聞かせの計画をたて、実践してみよう。

10. 保育実習録の目的と書き方

一日の保育が終わったら、必ず保育実習録を書くことが大切である。一日にあったことを思い返し、明日につないで生かすための記録材料が保育実習録である。

実習録を書く意味はどこにあるのだろうか。それは、一つには、一日の実習内容の整理をするという点にある。自分は今日何を見たのだろうか。子ども達はいったい何をして生活していたのだろうか。そして、幼稚園の先生はどのようなことをしていたのだろうか。こうしたことについて、整理をすることが大切なポイントとなる。

次には、その整理した内容について、何が分からなかったのか、何が自分の課題となったのかを明らかにすることが重要なことである。一日の整理をすることによって、子ども達の生活の流れが明確になり、その中の問題点が見えてくる。実習録を書くうえで大切なことは、今まで知らなかったこと、気づかなかったことを、新たに知るということである。そして、実習終了後も自分の課題とすべきことを知るということである。

● 実習録の具体的な書き方について

実習録に書く内容は、1) 子どもの生活の流れと内容、2) それに対応しての保育者の活動、3) 実習生の活動、そして、それらに対する考察、疑問、質問、課題である。

● 実習録に書くときの留意点

- 1) まず最初に、実習録を書く前に、書くべき内容のポイントを明らかにし、その順番を書き出してみる。そうしないと、ただダラダラと書き綴るだけになってしまう。
- 2) 読む側が読みやすいように、簡潔かつ明瞭に書くということである。たとえば、質問したい内容については、「質問」と前もって分かるように書いてから、その詳細について記すとよい。
その際、誤字や脱字に注意することは言うまでもない。
- 3) 書くべき内容を日によって絞って書いてみることも大切である。毎日、全体を追うのではなく、一人の子どもについて書いてみるとか、保育者の「ことばかけ」について書いてみるとか、いろいろと工夫してみるとよい。
- 4) 実習生自身の「おどろきの体験」や「感動した体験」は、ぜひ書き留めておいてほしい。

11. 教育実習Ⅱに向けて

教育実習Ⅰの反省とまとめをしながら、教育実習Ⅱに向けて何を準備したらよいか考えてみよう。この時期は、教育実習体験をまとめ、次につなげる時期としてとても大切である。

まず、教育実習で自分がまとめた実習録、観察記録やレポートをもう一度見直してほしい。そこに、あなたの教育実習中での歩みが表れているはずである。教育実習Ⅰは教育実習Ⅱのための準備として位置づけられているのだが、一番大切なのは、この実習という活動体験を通して君達自身が何を感じ、何を考え、何を自覚したかということではないだろうか。それらをきちんと自分で書いてまとめておくことが大切である。

1) 部分保育の反省

部分保育で、初めて子ども達の前に立って行った保育はどうだったろうか。まず、自分の部分保育の感想はできるだけ書きとどめておくことよ。特に、自分の感情、意見をありのままに書いておくことである。いろいろな疑問や問いも浮かんでいるにちがいない。それらもきちんと書いておこう。

2) 課題のまとめ

教育実習Ⅰの中で、6つの課題があった。どの課題も教育実習Ⅰのそれぞれの段階でのポイントを示しているの、もう一度、それらのレポートを見直してほしい。

3) 自分自身の課題を見つけること。

部分保育やその他の実習中に生じた新たな間について具体的に記し、現在の自分なりの考察を試みておくことは、自主的に取り組んでおいてほしいものの一つである。

教育実習Ⅱが始まるまでに、約1ヶ月ある。その間、自分の課題を少しでも解決するために、図書館で本を読んだり、先生方に質問してほしい。

最後に、教育実習を乗りきるためには、健康であることが必要である。規則正しい生活を心がけてください。

II. 教育実習II

1. 附属幼稚園の概要

(1) 本園の性格と任務

- ・国立大学教育学部に附属する学校園として、学校教育法（幼稚園教育要領）に基づいて幼稚園教育を行うと共に、幼児教育の理論と実践に関する研究を大学との連携によって進め、幼稚園教育の充実を図る。
- ・教員養成を目的とする本学の附属学校園として、学生の教育実習を行い、現場教師と共に現在と将来の教員としての資質能力の向上に努める。
- ・教育の実際について公開保育や研究実践の発表を行い、他の幼稚園の教育研究に寄与するなど、多くの使命を持っている。

(2) 本園の教育目標

- ・健康で調和的な発達を図る。
- ・喜んで集団生活に参加する態度を養う。
- ・協同、自主及び自立性を養う。
- ・社会や自然に興味や関心を持たせる。
- ・情操、想像性を豊かにする。

(3) 保育指導の重点

「元気に明るく遊ぶ子」を子ども像として、ひとりひとりが自発的にのびのびと自分の持味を生かして遊ぶことを十分に保障した保育活動を中心に据えている。さらに発達年齢にそくした必要な経験（学習）ができることに十分配慮し、以下のことを重点に保育指導の充実を図っている。

- ・心身ともにたくましく、はつらつと活動し、健康な心身の基礎をつくる。
- ・自分のことは自分でしようとする習慣を身につけ、生活的自立能力の基礎をつくる。
- ・友達と積極的にかかわり、集団の生活を楽しみ、社会性・人間関係の基礎をつくる。
- ・物事に関心を持ち、探求心をもって遊び、知的学習の基盤をつくる。
- ・様々なことに心を動かし、豊かな心を育む情操の基盤をつくる。

(4) 学級と教職員

学 級	定 員	学級数
3歳児	20	1
4歳児	35	1
5歳児	35	1

職 名	人 数	備 考	そ の 他
園 長	1	大学教授と担任	<ul style="list-style-type: none"> ・保育及び養護担当の非常勤講師 事務補、用務担当者が勤務。 ・事務係長は中学校と兼任で配置。
副園長	1	専任	
教 諭	3	専任	

(5) 沿革の概要

- 昭和45年4月1日 国立学校設置施行令一部改正により、北海道教育大学に附属幼稚園を設立する。
- 9月15日 附属学校園（現在地）に新園舎落成移転 亀田市赤川通町229（旧地名）
- 48年4月1日 3年保育を開始する（3歳児：15名、4、5歳児：各35名 3学級編成）
- 51年4月1日 施行令の一部改正により3歳児学級定員20名とする。
- 8月23日 北海道教育大学教育学部幼稚園教員養成課程の教育実習を開始する。
- 49年4月1日 園名が北海道教育大学教育学部附属函館幼稚園に改称される。
- 平成2年2月10日 幼稚園創立20周年記念式典及び祝賀会を挙げる。
- 9年4月1日 「幼稚園における教育実習の効率化を進めるための研究」(教育改善推進費)を行う。

2. 附属幼稚園の教育課程

(1) 教育課程の意義

附属幼稚園は学校教育法に基づいた学校であり、幼児を対象とした教育機関である。

従って幼稚園教育の目的、目標を有効に達成するために計画的、意図的にそれぞれの時期に必要な教育内容を明らかにし、計画性のある指導を行わなければならない。

教育課程は入園から修了までの教育期間の全体にわたって、本園の教育の目的、目標に向けて、達成への道筋を示し、幼児の充実した生活が展開できるための全体的な計画として欠かせないものである。

(2) 教育課程編成の基本方針

教育課程はそれぞれの園が編成するものであるが、だからといって好き勝手に編成してよいというものではない。

附属幼稚園では次のような基本方針で編成している。

- ① 学校教育法に関わる法令及び幼稚園教育要領を基底とする。
- ② 本園の教育目標、方針に基づき本園の特徴を十分に生かす。
- ③ 地域社会及び幼児の発達状況や生活背景などを把握し、幼児の視点にたって教育計画をたてる。
- ④ 幼稚園の全体にゆとりと充実がみられるようにする。
- ⑤ 教育課程は本園の教育の土台であり普遍性を求めるものであるが、時代の変化や幼児の実態を踏まえながら、年間指導計画と共に常に評価、補足修正を加えるものとして編成を行う。
- ⑥ 附属学校園（研究実践校及び教育実習園）として、研究テーマにそった保育指導が有効に図られるよう弾力的な工夫や、教育実習が有効に図れる教育課程の編成を行う。

(3) 教育課程の具体的な内容（教育課程の冊子は別途配布）

① ねらいと内容の組織

幼稚園教育要領に示されている「ねらい」や「内容」をそのまま、本園の教育課程における具体的な指導のねらいや内容とすることはできない。

幼児の発達の各時期に展開される生活に応じて、適切に具体化したねらいや内容を設定する必要がある。

附属幼稚園では、各領域毎にねらい及び内容を設定すると共に、年齢に沿って発達のみちすじ（発達過程）と時期を区切り、段階的に子どもの発達の姿をとらえながら、ねらいや内容が総合的な指導によって図られるように計画している。発達のみちすじを以下のように設定している。

- a. 園生活に親しみ安定していく時期
- b. 自分で遊びを広げていく時期
- c. とともに生活する楽しさを知っていく時期
- d. 己の力を十分に発揮して生活に取り組む時期
- e. 園生活を展開し深めていく時期

② 保育時間と保育週数

幼稚園教育要領では、毎学年の教育週数は39週を下限とすることや、一日の教育時間数が4時間を標準とすることが示されている。本園では教育週数41週～42週を確保している。

また、一日の教育時間数は、在園時間の違いや登園時間に柔軟性を持たせるなど、幼児の心身の発達の程度や季節、時期などに配慮しながらも、年間平均4時間を下回らないよう保育時間を設定している。

3. 教育実習Ⅱの概要

(1) 幼稚園教育実習のねらい

学習者の主体的な問題の自覚とその解決への意欲が重視される今後の学校教育の方向をふまえ、幼児理解を基盤とした保育活動の実践に必要な専門的な知識と方法を習得し、それにより・教職への意欲と志向性を高め、教職への研究課題を深めることを目的とする。

附属幼稚園において、1クラス複数名の小集団で、基礎的な保育の為の力量（幼児理解に基づく環境構成）を学ぶとともに、保育実践に関する課題を見つける。

(2) 方法・活動

- ① 実習園での指導の下、実習生の主体性や課題に基づく自己学習及び小集団による課題解決活動
- ② 自らの教育活動を内省し、対象化する。
- ③ 活動提案型の保育実践
- ④ 幼児理解、環境構成、指導案作成等の保育準備を重点的に行う。部分保育実習を積み上げ、実際に子どもと接しながら、自分自身で得た情報を、環境構成や指導・援助に対する子どもの行動予測と対処に生かしていくようにする。
- ⑤ T. T. による基礎的な保育技術の習得に焦点をあてる。
- ⑥ 保育活動及び幼児理解の為の観察・記録の方法を工夫する。
- ⑦ 個別・グループの課題保育の計画・実施を通して、保育への問題意識を深めていく。

(3) プログラム

- ① 保育観察→幼児理解→保育指導案作成→保育の実施
配属クラス担当教官の日々の保育を、ポイントをしばって観察しながら、幼児理解を実践し、保育指導案（部分保育等の簡単なもの）を作成し、保育実践を実施する。
- ② 示範保育（観察・保育研究会）→課題保育の準備
示範保育を観察しながら、自分自身でも観察指導案を作成し、保育研究会では、実際に示範保育を実践した保育者が作成した指導案と照らしあわせながら、疑問点等を明確にする。
- ③ 課題保育実施→保育研究会→課題の評価・確認
項目が整理されている保育指導案を作成し、課題保育（実習中に行う保育の一つ）を実践後、保育研究会を設定し、保育研究会参加者で研究協議を行い、そこで話し合われた内容からも課題についての評価・確認を明確にする。

4. 教育実習Ⅱの日程

実習過程	週	日 目	教 育 実 習 内 容	備 考
導 入 期	第 1 週	1日目	<ul style="list-style-type: none"> ・ 保育補助開始 ・ 示範保育参観（観察指導案作成） ・ 行事保育参加 ・ 部分保育開始（部分保育指導案作成） 	着任式 誕生会 宿泊保育
		2日目		
		3日目		
		4日目		
		5日目		
		6日目		
基 本 実 習 期	第 2 週	7日目	<ul style="list-style-type: none"> ・ 部分保育 ・ 全日保育開始（全日保育指導案作成） ・ 学級事務（クラスたより、月末統計） ・ 安全点検 	プール活動
		8日目		
		9日目		
		10日目		
		11日目		
		12日目		
応 用 実 習 期	第 3 週	13日目	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学級事務（集金業務補助） ・ 行事（誕生会）運営、参加 	誕生会
		14日目		
		15日目		
		16日目		
		17日目		
		18日目		
実 習 期	第 4 週	19日目	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもの作品整理 ・ 担当とのT・T ・ 幼児理解の充実 ・ 全日保育（単数） 	運動会 退任式
		20日目		
		21日目		
		22日目		
		23日目		
		24日目		

※課題保育の実施は、各自の計画による

◎ 一日の流れと勤務時間

- ① 出勤 ————— 8 : 15
- ② 保育準備（環境整備、見回り、保育環境構成の準備等）
- ③ 朝の打ち合わせ参加 8 : 30
- ④ 教育実習参加（観察実習・部分実習・課題保育実習）
- ⑤ 保育室の清掃と翌日の保育準備
- ⑥ 保育研究（a）全実習生一斉 14 : 15
- ⑦ 保育研究（b）各クラス毎 15 : 00
- ⑧ 一日の記録整理～実習室で実習録を整理
- ⑨ 退勤（実習録 提出）————— 17 : 00（※土曜日12 : 30）

5. 教育実習を行うにあたっての注意点

(1) 全般的心得

- ① 幼稚園実習においては、保育者自身も重要な環境構成の要素となるので、すべての子どもの心情行動に影響するところが大きく、勤務態度、表情、言葉づかい、礼儀作法、生活習慣、服装等に細心の注意を払うこと。
特に服装については、華美にならない清楚なもので、活動しやすいものを着用すること。
又、通勤には、サンダル、げた等を使用しないこと。
- ② 実習生は、実習園の指導教官の下に教育活動を行うこと。不確かな点、疑問、不明な点については、独断で処理しないで、必ず、指導教官や実習主任教官の指示を仰ぐこと。
- ③ 実習園の教職員に対しては、敬意と礼節ある態度で接すること。
- ④ 実習生は、全ての子どもに対して、思いやりのある態度で接し、不公平な態度をとらないように注意すること。
- ⑤ 子どもへの直接的な保育活動だけでなく、幼稚園の教育実践の為に必要とされる業務にも積極的に参加するように努めること。
- ⑥ 実習生は、指示待ちではなく、自ら仕事を見つけ出し、意欲的に行動するように努めること。

(2) 保育についての心得

実習態勢に向けての教官との共通理解と連携について

- ① 実習生は、自分らしさを発揮して、個性や持ち味を大切にして実習に努めること。
- ② 自分の持つ保育観を打ち出すと共に、指導教官の保育観に学びながら、自分の保育観を豊かにするように努めること。尚、保育を参観していただいた教官からは、批評や指導助言を受けること。
- ③ 実習にあたっては、関心を持ち、主体的に取り組み、自分の未熟さを積極的に補っていくように努めること。
- ④ 実習生にあっても園児に対しては、保育者としての適切な対応を心がけ、保育現場の厳しさを共に体験するように努めること。
- ⑤ 保育実践場面における対応の相違については、十分に納得するように話し合い、発達段階に応じた対応の仕方を理解するように努めること。

(3) 実習上の心得

- ① 実習生の実習時間は、実習園の教官の勤務時間に準ずるが、若干早目に登園し、配属クラス内を見回るぐらいの余裕がほしい。出勤後は、すぐに出勤簿に捺印すること。
- ② 実習期間中に知り得た子ども及び幼稚園についての情報は他言しないこと。（公務員の守秘義務）
- ③ 幼稚園の備品（視聴覚機器、図書、用紙類）は、担任教官か園務分掌担当教官の許可を受けてから使用すること。返済にあたっては、期日を守り、必ず教官に返済すること。
- ④ 病気、その他やむを得ない事情で欠席する場合には、欠席届を2部作成し、1部は、大学教務係（教育実習委員長宛）、1部は、本園実習主任教官に提出すること。提出は、事前にするものとし、急な事情が生じた場合には、電話等により速やかに大学教務係、本園実習主任教官に連絡

すること。（診断書の提出は、長期の欠席、通院、事故のみとする。）

- ⑤ 実習期間中に無断で遅刻、早退、欠席はしないこと。やむを得ない事情で遅刻する時は、電話で連絡すること。早退の場合は、その理由を指導教官に申し出て許可を得て行うこと。
- ⑥ 実習時間中は、許可なく外出しないこと。自分のもち場を離れる場合にも、必ず教官に申し出ること。
- ⑦ 実習生控室の清掃、整理整頓を心がけ、できる限りゴミ等を出さないこと。又、ゴミを捨てる際には、燃やせるゴミと燃やせないゴミに分別すること。
- ⑧ 提出物（実習録、指導案）は、期限内に必ず提出すること。
- ⑨ 自動車、バイクの使用は、全面的に禁止する。
自転車は、以下の事項を厳守のうえで認める。
 - ・自転車に子どもを絶対に乗せないこと。
 - ・自転車は、所定の場所に置くこと。
 - ・校園敷地内は、必ず自転車から降りて押して歩くこと。
- ⑩ 実習にあたって準備・持参するもの
 - ・教育実習ノート（A4版）・印鑑（出席簿）・上靴と外靴（運動可能なもの）・水着（プール活動時に使用）・活動しやすい服装・お弁当、お茶飲み用コップ（子どもたちと一緒に弁当を食べるので、朝のうちから準備しておくこと。）・その他保育活動に必要なもの

6. 年齢別の子どもの特徴

【3歳児】

入園当初は、集団生活の経験が少ないため、集団に対して不安感をもち、親からなかなか離れられない幼児もいる。徐々に園での生活の流れがわかってくると、保育者に寄り添いながら友達と一緒に遊んだり、活動に取り組んだりするようになる。また、家庭生活で慣れ親しんできた遊具や素材に安心感をもってかかわりながら、次第に新しい遊具や教材に関心をもち扱い方を覚えて使うようになる。

園生活が落ち着いてくると同時に、友達とかかわり始める中で、お互いに自分の思いを通そうとして、物の取り合いや順番が理解できず、いざこざが起こるようになる。いざこざを繰り返しながら、それらに対する教師の指導により、集団としての基本的なルールがあることに気付き守ろうとするようになる。クラス全体で歌ったり、運動したり等直接的に体験する事を好んで行うようになる。

後半ころには、教師のまわりで安心感をもって遊び、積極的に気の合った友達と遊ぶ姿が見られるようになる。また、クラスの友達を意識して一緒にかかわったり、気かけたりできるようになる。このころになると、自分でできないところは先生や友達に手伝ってもらいながら、自分のことは自分でしようとする意欲をもつようになる。

【4歳児】

3年保育児の場合、進級したことを自信をもって生活し始める。集団生活のルールがまだ見についていない新入園児（2年保育児）とかかわる場がある場合、いろいろなことを教えてあげたいという思いと同時に、どのようにかかわったらよいのかわからず戸惑ってしまうことがある。

2年保育児は、入園当初は、3歳児と同様に、集団生活の経験が少ない幼児は集団に対して不安感をもち親からなかなか離れられないこともある。ただ3歳児と異なって園生活に慣れるのに時間がかからず、幼児によっては、積極的に新しい教材に興味、関心を示し、それらを使って積極的に表現することを楽しんだり、友達と一緒に遊んだり、活動に取り組んだりするようになる。

後半ころには、気の合った3～4人の友達とかかわって遊ぶ姿が多くなり、徐々にお互いの意見を出し合いながら遊ぶようになり、時には意見のくいちがいでいざこざが起こることもあるが、遊びの中で役割を分担しながら遊ぶ姿が見られるようになる。生活の中での基本的なルールについては、自分で気付いて行動したり、お互いに注意し合ったりしながら理解して行動するようになる。このころには、見通しをもって活動に取り組むことができるようになり、教師の援助を受けながら必要な準備なども自分たちで考えたり、用意したりする。また、幼児の身近な人や環境（乗り物、建物、文字や記号など）に関心をもつようになる。

【5歳児】

年長としての自覚をもって年少児、年中児とかかわり始め、自主的に困っている様子を見て声をかけたり手伝って上げたりするようになる。また、クラス全体で目標に向かって取り組むことができるようになり、生活や活動の中で役割の必要性を意識し、みんなで協力して取り組もうとするようになる。遊びの中で試行錯誤を繰り返しながら工夫して遊ぶようになる。生活の中で何か問題が生じた時、どうすればいいのか教師と一緒に考え自分の意見を伝えたり友達の意見を聞きながら自分たちで解決しようとするようになってくる。幼児の身近な人や環境（乗り物、建物、文字や記号など）に関心をもってかかわり、積極的に遊びに取り入れたりするようになる。

後半には、長期的な見通しをもって活動の計画を立て取り組むことができるようになり、自分たちで必要な物を考えて準備して取り組むようになる。

7. 幼稚園生活の一日の流れ

区分	時間帯	活動分類	生活（遊び）の活動と内容
A	8:50 9:20	一日の始まり	個々に保護者と一緒に登園し、幼稚園の先生に引き渡してもらう。 挨拶、身の回り、所持品の始末を行う。（年齢、個人差に合わせて保育者の援助を受ける）
B ↑ ↓ C	10:30	自発的行動 ～個・小集団による	Aの活動が終了次第、その日のねらいが達成されるための内容が経験できるように作られた状況（環境構成）に、子どもひとりひとりが主体的に関わって興味・関心に基づいて自発的に遊ぶ。
	11:30	一斉的活動 ～クラスや園全体	Bの活動の一部や、発展的活動及びその日のねらいを達成させるための内容をクラスや園全体で経験しながら遊ぶ。
D	12:30	昼食	年齢に応じて昼食の準備、片付けを自分たちで行い、家庭から持参した弁当による昼食を一斉に行う。クラスを単位とするが他クラス又は園全体で昼食を行う場合もある。
E	13:20	自発的活動 及び一斉活動	BやCにおける遊びや今迄の遊びを繰り返し継続、または発展させて自発的に個、小集団で遊ぶ、（クラスが一斉にまとまって遊ぶ場合もあり、明日の活動につながる遊びとなる場合もある） 年長クラスは飼育物の世話を当番で行う。
F	14:00	一日の終わり ～一斉活動	一日の終わりの一時を絵本（紙芝居・素話）を読んでもらったり、一緒に歌ったりする。 今日のことや明日のことを話したり、話してもらったりする。 降園準備のための身支度や所持品の始末、部屋の片付けなどを行う 出迎えの保護者と一緒に降園する。

- それぞれの活動の合間に片付けや手洗い、身の回りの始末などの生活的活動が行われる。
- 幼児の心身の負担を考慮し、一日の流れは静的活動、動的活動が交互に行われるように配慮する。
- 発達段階に応じて活動の時間帯は若干異なり、時間帯は凡そのめどである。

		午前保育	午後保育
3歳児	登園	→11:20	→13:20
4歳児		→11:30	→13:45
5歳児	8:50～9:20	→11:45	→14:00

8. 幼稚園行事について

(1) 年間の主な行事と保育活動

一 学 期	4 月	5 月	6 月	7 月	
	始業式 入園式 (PTA総会) 家庭訪問 身体測定 全体父母会	園医の諸検査 年長組父母会 園外保育 親子弁当会 いも植え	開学記念日 避難訓練 交通安全教室 親子遠足 (ファミリーまつり)	園外保育 七夕まつり 交通安全教室 保育懇談会 終業式	
二 学 期	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
	始業式 いも掘り 教育実習開始 終業式 プール 宿泊保育	運動会 遠足 身体測定 教育実習終了 プール 避難訓練	園外保育 交通安全教室 大根ぬき 遠足 教育研究大会 全体父母会	個人懇談 遊戯会 避難訓練 入園選考	(もちつき大会) クリスマス会 交通安全教室 附属小学校訪問 終業式 遊戯会
三 学 期	1月	2月	3 月	毎日行事	每学期行事
	始業式 園外保育 身体測定 避難訓練	避難訓練 豆まき 1日入園	保育参観と懇談 お別れ会 修了式 始業式 入園連絡会	誕生会	保育参観、参加 父母会 身体測定 避難訓練

()はPTA活動行事及び共催行事

(2) 行事の指導

① 幼稚園教育における行事の指導

行事の指導に当たっては、幼稚園生活の自然の流れの中で生活や潤いを与え、幼児が主体的に楽しく活動できるようにすること。なお、それぞれの行事についてはその教育的価値を十分検討し、適切なものを精選し、幼児の負担にならないようにすること。

② 幼児にとっての意味

幼児は、行事に参加し、それを楽しみ、いつもの幼稚園生活とは異なる体験をすることによって、活動意欲を高めたり、幼児同士の交流を広げたり、深めたりするとともに、幼児自身が思わぬ発見をしたり、新たな生活を広げたりするものである。

③ 行事の指導の留意点

行事の選択は、長期の指導計画を念頭に置いて、幼児の生活に即して必要な体験が得られるようにするとともに、行事が終わった後の幼稚園生活も考慮すること。

指導に当たっては、幼児が行事に期待感をもち、主体的に取り組んで、喜びや感動さらには達成感を味わうことができるように配慮すること。

行事を過度に取り入れることは、幼児の負担になるばかりでなく、ときには幼稚園生活の楽しさが失われることにも配慮し、幼児の発達の過程や生活の流れから見て適切なものに精選すること。

9. 保 育 評 価

(1) 幼児理解と評価

幼児を理解するとは

目の前にいる一人一人の子どもと直接に触れ合いながら、子どもの言動や表情から、その子どもの良さや可能性、発達する姿、心の動き等を受け止め、理解しようと努力することを指している。安易に分かったと思っただけ、この子はこうだと決めつけてしまうのではなく、子どもと生活を共にしながら、「…らしい」、「…ではないかしら」など、表面に表れた行動から内面を推し量ってみることや、内面に沿っていかうとする姿勢が大切である。

- ・子どもの生活する姿から、その子どもの心の世界を推測してみる。
- ・推測したことをもとにかかわってみる。

(かかわりを通して子どもの反応から新しいことが推測される。)

幼稚園生活の中で子どもの行動や心の動きが生み出される背景には、教師のかかわり方が大きな意味をもっているため、教師のかかわり方との関係で、子どもの心の動きを理解しようとするのが保育を見直し改善を図る為に必要なことである。

(2) 幼児理解の評価と具体的な方法

◎触れ合いを通して

子どもと保育者の相互理解を深めるために、保育者は以下のことに留意して、子どもと触れ合うようにする。

- ① 心に届くような具体的な表現（触れ合い）を心がける。

例・肌の触れ合い（スキンシップ）

- ・温かい視線を送る（目で合図を送る、視線を合わせて話す、笑顔で応じる）

- ② 気持ちを受け止める

保育は、子どもと保育者の信頼関係を基にして、子どもが直面する自分自身の発達の課題を自分の力で乗り越えようとするのを援助する営みといえることができる。

保育者は、ともすると大人と話すように、表面に表れた事柄だけに目を向けて励ましたり、やり方を指示したり、理由を問いただしたりしがちであるが、言葉や行動の底にある子どもの気持ちを受け止めて理解しようとするのが大切である。

- ③ 触れ合いを楽しむ

保育の中で子どもと触れ合いながら、ありのままの姿を受け止めていくという、ごく日常的な保育者の行為が大切である。

- ④ つかず離れず

保育者が密着しすぎると枠がはめられて、子どもが自主性を発揮しにくくなることもあるという事等をとりながら、つかず離れずの姿勢を子ども同士のかかわりに学びながら子どもを理解していくことも大切である。

子ども自身の足取りを受け止めながら、一歩下がって温かく見守るという姿勢が、援助の手立てを考える為に必要なことである。

(3) 記録の工夫

- 子どもを理解し、評価する手掛かりの一つとして、子どもの生活する姿を記録に残すことが必要になる。(記録の視点や方法に一定の形式はないので、自分らしい記録の方法を工夫する。)

例 個人記録の例

1/27 一斉的な活動時には、意図的に誘いかけても、なかなか活動に入ろうとはせず、友達の様子をじーっと見ていることが多いA子が、鬼の出でくる絵本をしっかりと見ていた。クラスの子どもたちの活動が一段落した頃を見計らって、一緒に作って見ようと誘いかけると、すぐに、クレヨンとハサミを持ってきた。鬼の片目を一緒に描くと、自分でもう片方の目、口と描きはじめ、つのに銀色のテープを貼る等意欲的に製作活動に取り組みはじめた。

1/24 この頃、家では反抗的な態度をとることが多く、聞こえていても聞こえないふりをして叱られることが多いので、幼稚園での様子が気になります。(連絡ノートより)

・幼稚園指導要録(指導の記録)の記入例

「指導の重点等」の欄には、学年の指導の重点(幼稚園の教育課程に基づく)と個人の指導の重点(1年間の指導の過程において、特に重視してきた点)を記入する。

表1

《転入の際に送付されたA子の指導要録の写しの「指導の記録」の抜粋》

氏名	性 別	平成 年度 平				指導の重点等
		昭和・平成 年 月 日 生	平成	年度	平成	
ねらい (発達を捉える視点)		発達の状況 (平成 年度 平成 年度 平成 年度)				学年 ○園生活に慣れ、自分の好きな遊びをみつけて、伸び伸びと遊ぶ。 個人 ○教師との触れ合いを深め、安心して遊びを楽しむ。
心身の健康	○明るく伸び伸びと行動し充実感を味わう 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける					
かかわり	○幼稚園生活を楽しみ、自分の方で行動することの充実感を味わう 進んで身近な人とかわわり、愛情や信頼をもつ 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける	○				
身近な環境	○身近な環境に楽しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ 身近な環境に自分がかかわり、それを生活に取り入れ大切にしようとする。 身近な事象を題材に考えたり感じたりする中で、様々な性質や数量などに対する感性を豊かにする					
言葉の獲得	○自分の気持ちや言葉を表現し、伝え合う喜びを味わう 人の言葉や声などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話そうとする 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、言葉や物象などに楽しみ、想像力を豊かにする	○				
感性と表現	○いろいろなものの美しさをなどに対する豊かな感性をもつ 感じたことや考えたことを様々な方法で表現しようとする 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ					
出欠の状況	教育日数				備考	
	出席日数					

注 転入当初は平成 年度当初と比較して新しい感情が見られたため平成 年度を記入すること。

10. 保育室の環境整備（整美）と設備

(1) 保育室の教育的意味と役割

保育室は、幼児たちが常に多くの時間を過ごす生活の場としての役割とともに、自発的な活動としての遊び（学習）の場としての役割を持っている。したがってさまざまな教育的機能が発揮できるように常に環境整美されなくてはならない。

(2) 保育室づくりのねらい

① 幼児の生活の場としてふさわしいものにする。

例1) 個人及び共同用ロッカー、遊具や材料・用具・清掃用具などの置き方を工夫し、整える。

例2) お誕生表を作成し、一人ひとりの名前があることやクラスの様子分かるように掲示する。

② 遊びの場としてふさわしいものにする。(各コーナーの活用)

例1) テーブル、椅子、お皿、茶碗、なべ、箸、人形、電話などを用意して、ままごとコーナーを作る。

例2) 教育課程を考慮しながら、絵本コーナー、積み木コーナー、絵の具コーナー、工作コーナーなどを作る。

③ 学級担任が奨めて活動させる場としてふさわしいものにする。

(学級担任が適切な環境構成をして、学級全体で共通体験させる場とする。)

例1) 読み聞かせのための童話や絵本・紙芝居、ピアノや簡易楽器、表現材料・用具などを整える。

④ 心情を豊かにする環境を作る。

例1) 美しい花や絵を整える。

例2) 展示物や掲示物の置き方や貼り方を工夫する。

⑤ 保健衛生上、安全上の配慮をする。

例1) 通風をよくし採光を適度にし、一定の室温を維持するように配慮する。

例2) 冬期ストーブの扱い方、使い方によっては危険を伴うものの扱い方に配慮する

(3) 保育室づくりの主な配慮点

- ・ 幼児向きにすること。…遊具・材料・用具が手に取ることができたり、目の高さに置かれている。
- ・ 幼児の生活の発展や季節の変化に応じて常に新鮮であること。
- ・ 広く使えるように工夫すること。…常に不必要なものを片づける。

(4) 保育室の設備

- ・ 手洗い場、トイレ、暖房等の設備があり、子どもたちの生活活動及び行動が健康的、自立的に行われるようになっている。

11. 子どもの安全・保健

子どもの安全と保健に関しては、子ども自身が身につけることが望ましい安全や保健指導の側面と、幼稚園経営者及び保育実践者が行う管理の側面がある。

(1) 安全・保健に関する生活指導

① 安全に関する指導内容

幼稚園教育の教育内容「健康」領域では「健康な心と身体を育て、自ら健康で安全な生活をつくりだす力を養う」観点から、ねらいや内容がまとめられており、幼児一人一人に安全と保健衛生に関わる体験を通して、安全及び保健衛生的に身を処せる自己管理能力の育成を図ることが求められる。

安全・保健に関する内容については、単に自分の身を安全に処する力をつけるということだけに留まらず、ルールを守ることが社会性を育て、注意力、集中力を高めることにも波及し、幼児の諸発達を促す土台づくりとなる内容が盛り込まれている。

これらの指導は、一般的に生活的活動や遊びの中で、指導されることによって、生活習慣として形成されるようになる。

例えば刃物を使う場合には、持ち運びや手渡しの場合には刃先を相手側に向けないことや、それらを持って移動する時には走らない、使用する時には使用場所の足元、手元の整理整頓の大切さなど、これらを体験的・具体的に学ぶことができる場面設定を作りながら指導していくことが望ましい。

また、遊んだ後の片付けなどは、安全に関する視点から、しっかり指導することが大切である。

② 保健に関する指導内容

保健に関わる指導は一般的に身体計測、内科、眼科、耳鼻科、歯科検診等と関連させながら、体験的に行われるが、これらの内容は単に幼稚園の行事としてかたずけるのではなく、自分の身体への関心と保健、衛生に対する意識づけの手段として、積極的に取り組ませることが大切である。

また、日常的な生活指導では、歯みがきの習慣化、手（足・身体）洗い、衣服の汚れ点検手ふき、上靴の洗濯、保育室の片付けと遊具の簡単な手入れなどがある。

(2) 環境管理の側面からの安全、保健

幼稚園教育を行う際には、子ども達が安全かつ健康で生活ができる状況に維持することが管理者及び保育実践者の責務である。

特に、保育環境の安全維持管理では施設設備や遊具等の安全確認を常に行うことが必要である。また、保健、衛生維持管理においては、採光、温湿度、通風、照明、騒音、震動などへの配慮が十分なされていないとてはならない。

(3) 安全・保健指導及び環境管理具体的例

- ① 交通安全体験～市役所市民課職員（交通指導のおねえさん）の派遣申請による実地指導
- ② 避難訓練（地震・火災）～消防署職員への派遣申請による実地訓練指導と講話、啓発ビデオ視聴
- ③ 月一回の安全点検日の実施～定期的な安全点検を行うことによって、園児の安全指導の徹底と園全体の安全管理を図る。（以下のa～cの視点から危険個所の早期発見と迅速な処理を行う。
 - a. 子どもの目線にたって、物、空間をとらえる。
 - b. こどもの手触りの感覚や集団での動きを考慮する。
 - c. 発達段階に合わせた巧緻性や運動機能など身体的動きの未熟さを考慮する。

12. 課題実習に向けて

(1) 課題実習までの事前準備

課題実習を実習期間中のいつ実施するかについては、附属幼稚園の園全体の教育計画や配属クラスの保育計画を十分考慮した上で実施することが望ましい。

課題実習の時期については従来より、長期間の中で課題実習の計画化が図られるようになる。

実習1の段階において、実習の課題実習への見通しと意欲を十分に高めておくことで、課題実習が成果あるものとなる。

課題実習の時期を決定、保育内容の計画化、実践化への見通しは以下のように進めるとよい。

- ① どのようなことがらを実習課題として取り組むか（課題の明確化）
- ② いつごろ課題実習を行うか。（時期の決定）
- ③ 課題実習期間における附属幼稚園の教育課程及び年間指導計画書を確認する。
- ④ 幼児の実態や、実習Ⅰ以降のこれまでの発達記録及び活動記録を整理し、幼児理解を深める。
- ⑤ 実習Ⅰ以降の子どもとの人間関係なども含め、課題実習迄の子どもとの関わりの程度を予測する。
- ⑥ ティーム・ティーチングの場合にはそのメンバーの人間関係を深めたり、子どもの情報交換を積極的に行っておく。

(2) 実習課題の計画化（例）

- ① 実習課題～（例）環境構成の重要性
- ② 設定理由～なぜ、こうした課題を設定するに至ったのかを、これまでの実習経験や幼児教育理論の実践化の視点から考えてみる。
- ③ 課題解決の方法と内容（どのような内容や方法で課題を解決するかの見通しを立てる）
 - ・環境構成の内容や方法を事前に文献、実践集をもとに凡そ調べておく。
 - ・その重要性を保育実践において具体的に確かめていく。
 - ・子どもの様子をビデオカメラにおさめ、環境構成の効果を事後に考察する。
 - ・環境構成が重要であることの理由を他の視点から考えてみる。等が考えられる。

(3) 保育活動の計画化に向けて

- ① 子どもの実態と合わせながら、ねらいや内容を見直す。
- ② 領域の総合化を図りながらねらいや内容が達成されるような幼児の経験や活動を検討する。

幼稚園教育は5つの領域がばらばらに指導されるのではなく、互いに有機的に関連しあいながら、総合的な指導によって幼稚園教育の目標や保育のねらいが達成されるように計画化が図られなければならない。
- ③ 経験内容や活動が有効に図られる保育手段（教材選定や環境構成）を検討する。

例えば「友達と関わって戸外で身体一杯使って遊ぶ楽しさを味わう」という保育のねらいが達成される内容が経験できる活動は多様に考えられる。それらを様々な視点にたって子どもの実態とすり合わせながら選定していく。この場合は、友達と関われる視点から活動を考えたり、戸外遊びはどこでどの遊具を使ってできるか、身体一杯使うとはどの程度の運動量を考えたらいいか、楽しさを味わうというのは、子どもにとってどのような気持ち（心情）なのか、また5領域の視点からも教材や環境構成を想定してみる。

13. 教材研究と環境構成

以下のようにねらいと内容が設定されると、次に保育活動によって、ねらいや内容が十分に達成されるために、どのような教材（学習材）をどのような方法で子ども達に出合わせ、関わらせるかといった教材研究や環境構成の検討が必要である。

- **ねらい**：友達と関わって戸外で身体一杯使って遊ぶ充実感を味わう（年長組 時期は9月始め）
- **内容**：
 - ・いろいろな遊具を使って運動的な遊びをする。
 - ・友達と一緒に運動的な遊びで感じる喜怒哀楽を表現する。
 - ・自然の変化や自然の状況を戸外遊びで感じる。

教材研究や環境構成のために保育者の事前の準備についての例を以下のように示す。

(1) 教材研究

内容を達成させるには、どのような具体的な経験をさせればいいのか、そのためには、どのような教材とどのような関わり方をさせればいいのかを子どものレイネスと関連させながら、事前に保育者は十分に検討し、適切な教材を選定しなければならない。

教材研究にあたっては以下のことがらについて、事前に考えたり、調べたり（子どもの実態や文献）し、最も適切な教材を選定することを心がけることが保育者の責務である。

- ① いろいろな遊具の中で、適切なものは何か。
- ② 興味・関心の点からどのような運動が適切であるか。
- ③ 運動技能や運動機能の発達実態に合わせて、どのような運動ができる遊具を選定すればよいか。
- ④ 友達と一緒に運動遊びをすること、又、運動遊びそのものによって、得られる心情的経験はどのようなものであるか。

例えば：

- ・友達と競う楽しさ、悔しさ、一緒に運動する心地好さ、充実感

- ・運動機能や技能向上の喜び（達成感・有能感・意欲）、悔しさ

- ⑤ 喜怒哀楽や様々な感情の表現（出）を友達づくりに役立たせるにはどのような場面設定と感情交流がうまれる状況をつくれればよいか。
- ⑥ 自然の変化を何によって、どのようにとらえさせたらいいか。

例えば：時間経過による風、太陽の位置、日光の強さなどの変化を生理的感覚でとらえさせること等、五感を十分に使って感覚刺激を得られるようにするにはどのような運動的活動が適切であるか。

- ⑦ 運動遊びによって生じる生理的変化や精神的変化を意識させるのは、遊びの静・動のバランスをどのようにおこなえばよいか。など、様々に事前に研究することは尽きない。

(2) 環境構成

子どもが構成された環境に刺激を受け、保育者が意図した活動を生み出し、必要な経験を積み重ねていくためには、子どもにとってどのような状況となっていれば良いだろうか。その環境構成の条件について、一部であるが例えば以下などが考えられる。

- ① 積極的に遊具（運動用具）に関わり始めるような視聴覚的刺激を仕組む（音を出したり、挑戦意欲がわく小道具の準備）
- ② 運動遊具に関わっているうちに、自分の欲求がみたさせるような状況をつくる。（課題クリアシートなどの活用）
- ③ 個や小グループによる競走場面の設定（感情表現の場の状況をつくる）
- ④ 木陰、日陰（トンネル）での休息場面や芝生遊びの誘導など、環境から刺激を受ける状況をつくる。

14. 保育指導案について（例）

子どもの姿 (略)	月 日 対象児 指導者	年 月 日 (曜日) 雪組 男児 名：女児 名 附属 花子
ねらい 友達と関わって戸外で身体一杯使って遊ぶ充実感を味わう。	内容 ・いろいろな遊具を使って運動的な遊びをする。 ・友達と一緒に運動的な遊びを感じる喜怒哀楽を表現する。 ・自然の変化や自然の状況を戸外遊びで感じる。	
環 境 構 成	予想される子どもの活動	保育者の援助や再構成の見通し
<ul style="list-style-type: none"> ・朝の登園児にグラウンドに遊具を配置したり、保育者の遊ぶ姿や身体運動を喚起させる音楽を流す。 ・チャレンジシートやシールを見える場所に置き、グラウンドへの移動をティーム・ティーチングのメンバーが促す。 ・チャレンジさせたい固定遊具、移動遊具がよく分かるように印をつけておく。 (小集団で取り組める程度の巧技台やスクーター、縄跳びの個数をグラウンドに配置する、又チャレンジレベルをアップできるように補助遊具を準備する) ・保育者が仲間となってグループを作り、いろいろな遊具にチャレンジし、嬉しさや悔しさを仲間伝える。 ・以下略 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者やグラウンドに準備された遊具に関心を示し、急いで保育室に行き、グラウンドへ出て来ようとする。 ・保育室にあるチャレンジシートをもって、仲間と誘いあつてグラウンドに移動する。 ・早速、チャレンジして遊び、シートにシールを貼って楽しむ。 ・友達と話合つて、チャレンジレベルをアップする環境に作りかえて再挑戦して遊ぶ。 ・保育者と一緒に遊具に挑戦し、互いに競いあつたり、慰めあつたり自分の気持ちを相手に伝えあいながら遊ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ティーム・ティーチングのスタッフの一人がグラウンドで声を掛け戸外に出るように関心を向ける。 ・保育室にいる保育者が戸外への遊びへの意欲づけのためにチャレンジシートに関心を向けさせる。 ・興味のある遊具から始めさせ、不得意な運動遊具への挑戦をできるように仲間を作ってあげるようにする。 ・それぞれの挑戦レベルにあう遊具の追加による環境の再構成を行う。 ・運動による心身の充実感や様々な喜怒哀楽の思いを受け止め、他の人へ伝えたり、思いを共有できる雰囲気をつくる。
評価の観点（実習課題の視点にたった評価内容を重視する） ・物、空間、時間、自然や社会・人的環境、雰囲気などによって作り出された環境に刺激を受け、遊び（活動）がどのように生まれ、継続・発展していったかをとらえ、その要因を考察する。		

15. 保育指導案の実践例（3歳児）

日時 平成11年9月10日（金）

8時50分～10時10分

組名 はな組 3歳児 22名

（男児11名女児11名）

指導者 T. T. 2名（実習生）

1. 幼児の実態

夏休み明けから行ったジャガイモ掘り、トマトの収穫をはじめとして最近は大根の栽培に関心を持ち、大根の芽の成長に喜びや感動を味わっている。また収穫したきゅうりをうさぎにあげるなどうさぎとの触れ合いも大切にしている。

そこで本日は、身近にいるうさぎを題材としてうさぎと触れ合いながら、うさぎをイメージし表現して遊べるようにしたい。

2. 本日のねらい

○身近な動物に触れて、自分なりにイメージしたものを表現して遊ぶ楽しさを味わう。

3. 内容

○身近なうさぎや鶏にえさをとってきてあげたり触れたりする。

○自分の好きな色を塗ってうさぎのかぶりものを作る。

○うさぎになって友達と一緒にごっこ遊びをする。

4. 展開（保育者＝メイン保育者B＝サブ）

時刻	環境の構成	予想される幼児の活動	保育者の援助
8:50	<ul style="list-style-type: none"> ・テラスにマルチパネルを積み重ねておく。 ・保育室にじゅうたんを敷き、衝立でしきりを付ける。 ・L字トンネルを置く。 ・家の中にままごとの道具、粘土をおく。 ・テーブルやイスを並べ、製作道具や素材を置く（ホッチキス、耳の型など）。 ・うさぎの耳をかぶった保育者A。 うさぎの耳に色を塗る保育者B。 	<ul style="list-style-type: none"> ・登園する。 ・所持品の整理をする。 ・出席札を白にする。 ・テラスに出てマルチパネルで家を作る。 ・保育室の家でままごと遊びをする。 ・うさぎの耳のかぶりものに興味を持つ。 ・保育者が何を作っているのか興味を持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・朝の挨拶を交わしながら、一人一人の健康状態や様子を把握する（B教師は、玄関、A教師は（保育室））。 ・登園してくる幼児に家を作るように誘いかける。 保育者Bと一緒に作るように促す。 ・「一緒に作ってみようか。」

	<ul style="list-style-type: none"> ・うさぎの耳ができあがった幼児のための人参の型を用意する。 ・すでにできあがった人参や、人参の写真のコピー、本物の人参を用意しておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人参の型の色を塗る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「どんなうさぎさんがいいかな。」「うさぎさんてどんな色だったかな。」などと言って幼児のうさぎへのイメージを引き出すような言葉かけをする。
9 : 40	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者Aが「うさぎになったから、この家をうさぎさんの家にしよう。」と呼びかける。 ・保育室とテラスの家でうさぎの家の目印になるよううさぎの絵を貼る。 ・人参をままごとの皿に置く。 ・幼児が遊んでいるうちにテーブルを片づける。 ・うさぎのえさを用意する。 ・保育室、テラスの家を中庭に移動する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・できあがった幼児から、かぶりながらテラス保育室で遊ぶ。 ・テラス、保育室の家で人参を食べるふりや跳ぶふりをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な色を使う幼児を一人一人受け止めながら、他の幼児の作品をみんなに見せて言葉かけをしていく。 ・できあがった幼児の耳の型を台紙の帯にホッチキスで留めてかぶれるようにする。 ・保育者も一緒にかぶりできあがった幼児とうさぎになりきって遊ぶ。 ・製作をしないで遊ぶ幼児には、みんなでうさぎになって楽しく遊ぶと言うことが伝わるように言葉かけをしていく。
9 : 55	<ul style="list-style-type: none"> ・靴を履き替え、中庭にでる。 ・うさぎ小屋まで行きクローバーやタンポポなどを取ってうさぎにえさをあげる。 ・うさぎを観察する。 ・うさぎ小屋を出る。 ・おおかみさんごっこをイメージして、逃げたり中庭に隠れたりする。 ・おおかみさんごっこをする。 ・何度か繰り返して行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・靴を履き替え、中庭にでる。 ・うさぎ小屋まで行きクローバーやタンポポなどを取ってうさぎにえさをあげる。 ・うさぎを観察する。 ・うさぎ小屋を出る。 ・おおかみさんごっこをイメージして、逃げたり中庭に隠れたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で人参の絵を描いて切って作ろうとする幼児がいたらやれるように援助する。 ・「うさぎさんのごちそうを取りながら行こう。」と言葉かけをする。 ・うさぎのえさの食べ方や歩き方を幼児に問いかけながら、うさぎへの興味を持たせる。 ・まだうさぎ小屋にいる幼児にも保育者がおおかみになって言葉かけをする。
10 : 10	<ul style="list-style-type: none"> ・片づけを呼びかける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・片づける。 	

保育指導案の実践例（4歳児）

日時 平成11年9月14日（水）

9時20分～13時45分

組名 つき組 4歳児 35名

（男児10名女児25名）

指導者 1名（実習生）

1. 幼児の実態

3年保育児19名（男児5名、女児14名）2年保育児15名（男児5名、女児11名）の計35名の混合クラスである。子どもたちは、友達と関わりながら好きな遊びに熱中したり、ルールを守ってみんなで仲良く遊ぶことができる。

男児女児ともに体を動かすことが好きで、リズム運動やしっぽとりゲームなどに興味を持って活動している。またピアノやカセットテープに合わせて体を動かすことが好きで、音に対する感性が豊かである。

また最近では、グラウンドや園庭にいるとトンボやちょうちょうを追いかけて虫採りをしたり、畑の大根に水をやる際には、はな組の畑の大根にも水をやる優しさが見られる。何人かの子どもたちは、保育室にある自然に関するポケット図鑑を持って「探検だ」と言って、ありやわらじ虫を観察する姿も見られた。

2. 本日のねらい

○身近な自然と触れ合う中で、発見を楽しんだり、昆虫や植物などに興味・関心を持つ。

○自分で作ったもので、遊ぶ喜びを味わう。

3. 内容

○「やすらぎの森」へ行き、虫や葉、木の実を採ったり、見たりして遊ぶ。

○自分で作った宝物入れに、虫や葉を入れたり、手作りの網で虫を捕って遊ぶ。

4. 展開

時刻	環境の構成	予想される幼児の活動	保育者の援助
8:50	<ul style="list-style-type: none"> 虫の鳴き声のテープを流しておく。 テレビのところに、地図を貼っておく。 テーブルの上に、宝物入れ、自然に関する本虫よけスプレーを置いておく。 本を開いて置いておく。 いつも虫とりをしている 	<ul style="list-style-type: none"> 登園する。 所持品の整理をする。 出席札を白に変える。 虫よけスプレーをかけてもらう。 昨日作った宝物入れを首から下げる。 貼ってある地図に気づき見る。 園庭や畑にいる虫や、咲いている花について話す。 	<ul style="list-style-type: none"> 朝の挨拶を交わしながら、一人一人の健康状態や様子を把握する。 探検に行く準備をするように声かけをする。 虫よけスプレーをかける。

	<p>る園庭や畑を指し、この本に載っている」虫や植物がいるか問いかける。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本を見て、虫や植物など身近なものに興味を示す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが本を見て実際にみたことがある虫や植物が本の中にも載っているという発見を楽しんだり、虫や植物に興味を沸くように働きかける。
9 : 15	<ul style="list-style-type: none"> ・ポケット図鑑を持っていくように言葉かけをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本を片づける。 ・排泄・手洗いをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ポケット図鑑は全員分はないので、交代で持つと良いことに気づかせる。
9 : 20	<ul style="list-style-type: none"> ・全員が見やすいように地図をテレビからはがし手に持つ。 ・やすらぎの森にはどんな虫や植物がいるのか問いかける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地図の前に集まる。 ・地図を見る。 ・知っている虫や植物を話す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今日はどんな虫や植物がいるのか興味をわくように言葉かけをする。
9 : 30	<ul style="list-style-type: none"> ・やすらぎの森に探検に行くように言葉かけをする。 ・保育者が網を持つ。 ・背が低い子を前に、高い子を後ろに並べる。 ・2人ずつペアになって行き帰り行くことを知らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・外へ移動する。 ・赤白帽子をかぶる。 ・整列する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・脱いだ靴がきちんと並べられているかを確認する。 ・人数を確認する。 ・かかとを踏んでいる子を注意する。 ・全員そろったら、みんなで活動する楽しさが感じられるように働きかける。
9 : 40		<ul style="list-style-type: none"> ・やすらぎの森に移動する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・道を横断する際、一度止まって左右を見て素早く渡るようにする。
9 : 50	<ul style="list-style-type: none"> ・木陰にシートを敷いて寝ころべるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校のグラウンドに着く。 ・道を発見する。 ・やすらぎの森で自由に遊ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・草がたくさん生えていると、見えないことに気づかせる。

10 : 10	<p>(木漏れ日の美しさに気づかせる)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・虫を採りに行った子に網を渡す。 ・笛を吹く。 ・行き道と別の道を通って帰ることを伝える。 ・網を集める。 ・抜け道は狭くて少し危険なので一列ずつ通るようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・落ち葉を踏む音を楽しむ。 ・虫や花を採って遊ぶ。 ・集合する。 ・幼稚園に帰る。 ・プールの階段を上ったところで、ペアになり手をつないで歩いて帰る。 ・幼稚園に着く。 ・大根の芽に目を向ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・虫や花を採った子に、声をかける。 ・人数確認をする。 ・秘密の抜け道があることを知らせ、探検気分を盛り上げる。
10 : 20		<ul style="list-style-type: none"> ・保育室に戻る。 	
10 : 35	<ul style="list-style-type: none"> ・宝物入れをテーブルの上にのせてみんなで見ることができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・やすらぎの森で見つけたものを見せ合う。 ・探検に行った感想を友達同士で言い合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・探検のことを聞いてみる。
10 : 50	<ul style="list-style-type: none"> ・宝物入れを棚の上へ移動する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自由遊びをする。 	
11 : 15		<ul style="list-style-type: none"> ・後片付けをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・後片づけをスムーズに行えるように声をかけて、一緒に行う。
11 : 25		<ul style="list-style-type: none"> ・お弁当の準備をする。 	
11 : 40		<ul style="list-style-type: none"> ・「いただきます」 	
13 : 10	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなが宝物入れを見やすいように、テーブルの上に置いておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自由遊びをする。 ・後片付けをする。 ・降園の準備をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・見つけられるように声をかけながら全体の様子を見る。
13 : 20		<ul style="list-style-type: none"> ・まとめの会をする。 (宝物入れを持って、楽しかったことについて話をする。) 	<ul style="list-style-type: none"> ・忘れ物がないかを注意する。(出席板を赤色に変える。所持品の確認。)
13 : 40			
13 : 45		<ul style="list-style-type: none"> ・玄関に移動し降園。 	

保育指導案の実践例（5歳児）

日時 平成11年9月8日（水）

8時50分～11時10分

組名 ゆき組 5歳児 33名

（男児18名女児15名）

指導者 1名（実習生）

1. 幼児の実態

3年保育児18名（男児10名、女児8名）、2年保育児15名（男児8名、女児7名）の計33名の組編成である。何事にも素直な感情を表現し明朗・活発な組である。

幼稚園での初めてののお泊まり会で経験した買い物、カレーライス作り、花火などの経験画を描いたことで、友達と一緒に協力しあって活動することに喜びを感じ、ひとりで何でもできるようになったという自信もついて、とてもたくましくなってきた。

遊びにおいては、1学期から夏休みを経て継続している長縄・短縄跳びも、ほとんどの子どもが多くの回数をこなせるようになっている。晴天時にはグラウンドで、子どもたちの手で作ったはちまきやバトンを使ったりレー・巧技台やタイヤ、太鼓橋、鉄棒などを使った障害物競走で思いっきり体を動かしている。またプール活動においては浮き輪やヘルパーなしでも深いところで探検ごっこをしたり、水中じゃんけんをしたりして水遊びに慣れ親しんできている。

2. 本日のねらい

- 十分に体を動かして活動することの充実感を味わう。
- 友達と相談しながら協力して遊びや仕事を進める充実感を味わう。

3. 内容

- 友達とどんな法被を作るのか話し合いながら、自分のオリジナルのものを作る。
- オリジナルのはちまきと法被を身につけて、友達と一緒に音を鳴らしたり踊ったりして遊ぶ。

4. 展開

時刻	環境の構成	予想される幼児の活動	保育者の援助
8:50	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者は、ねじりはちまきを頭に巻き、本物の法被を着る。そしてビニール袋で作った法被にマジックでお祭りらしいイラストを全面に描く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・登園する。 ・所持品の整理をする。 ・出席札を白に変える。 ・前日に完成させたはちまきを頭に巻く。 ・ビニール袋の袖や襟の部分を切っかぶってみる。 	<p>朝の挨拶をかわしながら、一人一人の健康状態や様子を把握する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「今日はお祭りごっこをして遊ぶぞ。」と声をかけ、子どもたちが自然にはちまきを巻き、法被作りに取りかかるよう誘いかけていく。そし

<p>10 : 00</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・お祭りの時にぶら下げ るちょうちんを子ども たちの見えるところに 飾っておく。 	<p>それにマジックで好きな イラストを描き、友達と 見せ合いっこをしながら オリジナルの法被を作 る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・はちまきと法被の両方を 身につける。 ・ちょうちんを見てこれは 何だろう。」と興味を持 ち、法被を完成させた子 どもはちょうちん作りを する。 	<p>て、友達の描くイラ ストも見ながら、自 分だけの特別な法被 ができるよう工夫す るように促す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・両方を完成させた子 どもにはちょうちん 作りをすくように促 し進度の遅い子ども には好きなものを何 でも描くように言葉 かけをする。
<p>10 : 20</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・お祭り会場が遊戯室で あることを知らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ちょうちんをお祭り会 場に飾ろう。」と言って 遊戯室へ移動し始める。 	
<p>10 : 45</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・会場内に音楽を響き渡 らせる。 ・音を鳴らして遊べる遊 具を子どもの見える場 所に置いておく。 ・「5 6 7 8」の曲をか けて保育者の前に集ま るように呼びかける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ちょうちんを飾ったり、 音に合わせて踊ったり太 鼓をたたいたりする。 ・保育者の方を向いて集まっ たら、保育者の踊りを最 初のうちは見ている。自 分も踊りたくなってまねっ こをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ちょうちん出入り 口や窓のところにつ り下げる援助をする。 ・「先生の踊りをよく 見てまねっこをして ごらん。」と言葉か けをする。
<p>11 : 10</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・太鼓を中央に運び、リ ズムに合わせて鳴らす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自然に太鼓のまわりに集 まり、輪を作って踊り出 す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・太鼓を囲んでみんな で踊ってみようと 言葉かけをする。太鼓 や隣の友達との間隔 を十分とるように配 慮する。

16. ティーム・ティーチング

(1) ティーム・ティーチングとは何か

一つの指導計画にそって、二人またはそれ以上の保育者が役割を分担して保育を行う形態をティーム・ティーチングという。

単にクラスに、または子どもの遊び集団に複数の保育者が配置され、子どもを見合っていくということではないが、広くはこうした場合もティーム・ティーチングに含める場合も見受けられる。

ティーム・ティーチングは「複数保育者、同一の指導計画、役割分担、連携協力」などがキーワードであり必要条件である。

(2) ティーム・ティーチングの必要性と有効性

幼稚園教育は幼児の自発的な活動を中心に一日が展開される。こうした活動は常に個人またはグループの活動が並行した形でおこなわれ、活動もそれぞれの興味関心に基づいて多様に展開される。

また、幼児は諸発達の面においては未熟であると共に個人差も大きい。

こうした活動の背景において個人差に対応し、発達の特性に応じたきめ細かな保育のために複数保育者の配置は必要であり、以下の点において有効である。

- ・個人差に応じた援助ができ、個々の発達特性を大切にされた保育ができる。
- ・個またはグループの課題解決への援助がきめ細かにできる。
- ・保育者のそれぞれの視点に基づいた幼児理解による個人情報が多様に得られる。
- ・保育者の適正、能力、個性を生かした多様な保育が展開できる。

(3) ティーム・ティーチングが有効である保育の内容と方法

常にティーム・ティーチングの体制がとられればもっとも効果的であるが、特に次のような保育の場合に効果的である。

- ① 安全確保が必要な場合（園外保育など、初めての経験の場所における子どもの安全確保が図られる）
- ② 個別の援助が必要な場合（個人差や興味関心の違いに対応した遊びの充実が図られる）
- ③ 体験的活動が多様に広がる場合（冬季間の外遊び等において経験すべき内容の充実が図られる）
- ④ 学習（遊び）の空間が広がる場合（プールでの水遊びなど、子どもの活動場所の広がりに対応した個別援助と安全確保ができる）
- ⑤ 活動内容が多様に展開される場合（製作活動において、素材や製作方法など多様な活動に対応できる）

(4) ティーム・ティーチングの成功の秘訣

- ① もっとも重要なことは、ティーム・メンバーの円滑な人間関係である。保育者は子どもにとっては環境構成の一要素であり、そのスタッフの醸し出す暖かな協力的な雰囲気は、子どもの精神的側面に与える重要な環境要素となる。他の保育者とうまく取り組むことができない場合にはかえってティーム・ティーチングが子どもに悪い影響を与えることも十分にありえる。
- ② 指導計画の共通理解を十分に図り、指導にあたっては、本日の保育のねらいや内容を十分に把握しあっていることが大切である。できるだけ計画立案の段階からスタッフが共同で行い、教材づくりや環境構成などを共に行いながら準備を進めることによって、ひとりひとりの子どもの多様な動きを予測することができ、適切な援助も可能となる。
- ③ 保育中の役割分担を明確にしながらも、その場にあった臨機応変の動きができるようにする。

Ⅲ. 教育実習Ⅲ

1. 目的

教育実習Ⅲは、3年生の夏休みに3週間にわたって公立幼稚園で行われる。これは応用実習である。昨年行った基本実習の教育実習Ⅱをふまえたものである。教育実習Ⅱを行い、さまざまな反省点があるはずである。そこから、自分の課題も明確になっているであろう。そのような今までに蓄積したものをもとにして、思いっきり自分の実力を発揮しよう。

2. 日程

- (1) 事前指導 教育実習説明会（全体へのオリエンテーション）
月に1回幼稚園の観察を行なう。
- (2) 直前指導 教育実習ⅢとⅣの説明
- (3) 教育実習Ⅲ 公立幼稚園3週間
- (4) 事後学習

3. 各幼稚園の概要

次のページ以下の通りである。

3-1 函館市立函館幼稚園

1. 幼稚園の特徴と教育計画

- (1) 教育目標 元気な子 考える子 仲よくする子
- (2) 重点教育目標 たくましく、いきいきと生活する子
- (3) 特色ある教育 ○3歳児保育の在り方に視点を当てた教育課程研究開発
○家庭や地域に開かれた幼稚園運営
- ・「子育て教室」の開設 ・未就園児の親子登園
 - ・老人介護支援サービス「あさひ」との交流
 - ・父母と先生の会、父の会、母の会合同講演会の開催
 - ・小学生との交流
- (4) 指導の重点
- 幼児一人一人のよさや可能性を生かし、個に応じた総合的な指導に努める。
 - 幼児の行動や理解と予想に基づき、計画的に環境の構成に努める。
 - 幼児の発想や主体性を大切にされた指導に努める。
 - 心身の健康を培う活動を積極的に取り入れるとともに、生活の中で道徳性を身に付ける指導を充実する。
 - 家庭・地域の人々が参加しやすい環境づくりと交流の工夫に努める。
 - 基本的な生活習慣や安全教育の継続的・計画的な指導に努める。
- (5) 保育の方針（8・9月の指導計画）

年齢	生活する姿	◎ねらいと○内容	環境の構成・教師の援助
3歳児	<p>○夏休み明けで、登園に戸惑いを見せる姿も見られるが、徐々に園生活のペースを取り戻していく。</p> <p>○1学期に気に入っていた遊びをする子が多く、2人くらいの仲の良い友達と一緒に遊ぶことを喜ぶようになる。</p> <p>○体を動かして遊ぶことを好むようになり、戸外へ出て好きな遊びをするようになる。</p> <p>○みんなと一緒に行動できるようになる。</p>	<p>◎先生や友達と触れ合って一緒に遊ぶ楽しさを知る。</p> <p>◎戸外で体を使って、好きな遊びを楽しむ。</p> <p>・先生や友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。</p> <p>・みんなと一緒にする遊びや、集まりの時の約束がわかってくる。</p> <p>・生活に必要なことを自分なりにやってみようとする。</p>	<p>○幼稚園生活のリズムが取り戻せるような、安定できる場を作るようにする。</p> <p>○好きな遊びが満足できるように、遊ぶ時間を十分とるようにする。</p> <p>○年長児の遊びに入れてもらい、一緒に遊びながら、新たな意欲や興味・関心をもっていけるような新鮮な活動を考慮するようにする。</p> <p>○友達と一緒に絵本を見たり、童話を聞いたり、歌うなど、クラスで楽しむ時間を持つようにし、みんなで一緒にする活動の楽しさを知らせていくようにする。</p>

4 歳 児	<p>○一緒に遊ぶ仲間が次第に固定し、仲間で活動を好むようになる。</p> <p>○友達と一緒に遊びを楽しむ中で、自分を出しながら友達とかかわりをもって遊べるようになる。</p> <p>○戸外で元気に体を動かして遊んだり、季節の移り変わりや自然の変化に気付いて、驚いたり喜んだりする。</p>	<p>◎友達との遊びを楽しんだり、自分のやりたい遊びにじっくりと取り組む。</p> <p>◎戸外で体を十分に動かし、その心地よさを味わう。</p> <p>・自分のしたい遊びを見つけて遊んだり、友達と一緒にいろいろな遊びを楽しむ。</p> <p>・戸外で体を動かして遊ぶ。</p> <p>・身近な自然にひたって遊びながら、季節の変化に気付く。</p>	<p>○園生活のリズムを取り戻し安定して遊べるような場の構成をしていく。</p> <p>○いろいろな素材に触れたり、運動的な遊びに取り組みながら、友達と一緒にかかわりを楽しみながら、仲間意識を深めていくようにする。</p> <p>○身近な自然に触れたり、遊びに取り入れれたりしながら、戸外遊びを楽しめるようにする。</p>
5 歳 児	<p>○一人一人が自己主張をしながらも、友達の行動や言い分などを認め合う姿が見られてくる。友達関係が広がり、活動によってメンバーが変化したりする。</p> <p>○友達と共通の目的意識をもち、活動に取り組む、競争するなど友達と工夫しながら遊びを進めるようになる。</p> <p>○体を動かすことを楽しみ、自分なりに目的をもち頑張ろうとする。</p>	<p>◎目的に向かい、友達とかかわって思いや考えを出し、遊ぶ楽しさを味わう。</p> <p>◎戸外で体を思い切り動かし、運動する楽しさ、心地よさを味わう。</p> <p>・友達と一緒にイメージをふくらませ、遊びを広げる。</p> <p>・思い切り体を動かして遊ぶ心地よさを味わう。</p> <p>・いろいろな人と触れ合いながら、一緒に活動することを楽しむ。</p> <p>・身近な自然を遊びや生活に取り入れ、季節感を味わいながら遊ぶ。</p>	<p>○体を使い、思い切り遊び、解放感が味わえるように時間を十分にとる。</p> <p>○友達同志でイメージを出し合い、遊びを楽しく進めていくように目的を共通化していく。</p> <p>○一人一人の活動への取り組み方を受け止め、好奇心や探究心が満足できるような環境を用意する。</p>

2. 教育実習を行なうにあたっての注意点

- ・温かい雰囲気子どもと接する。
- ・子どもを好きになる。
- ・学生気分、学生言葉に気をつけること。

終 末 保 育 指 導 案

日 時 平成12年 9 月19日（火）

8 時50分～10時30分

園 児 きく組 5 歳児

男児13名 女児11名 計24名

指 導 者 実習生

1. 最近の幼児の姿、指導にあたって

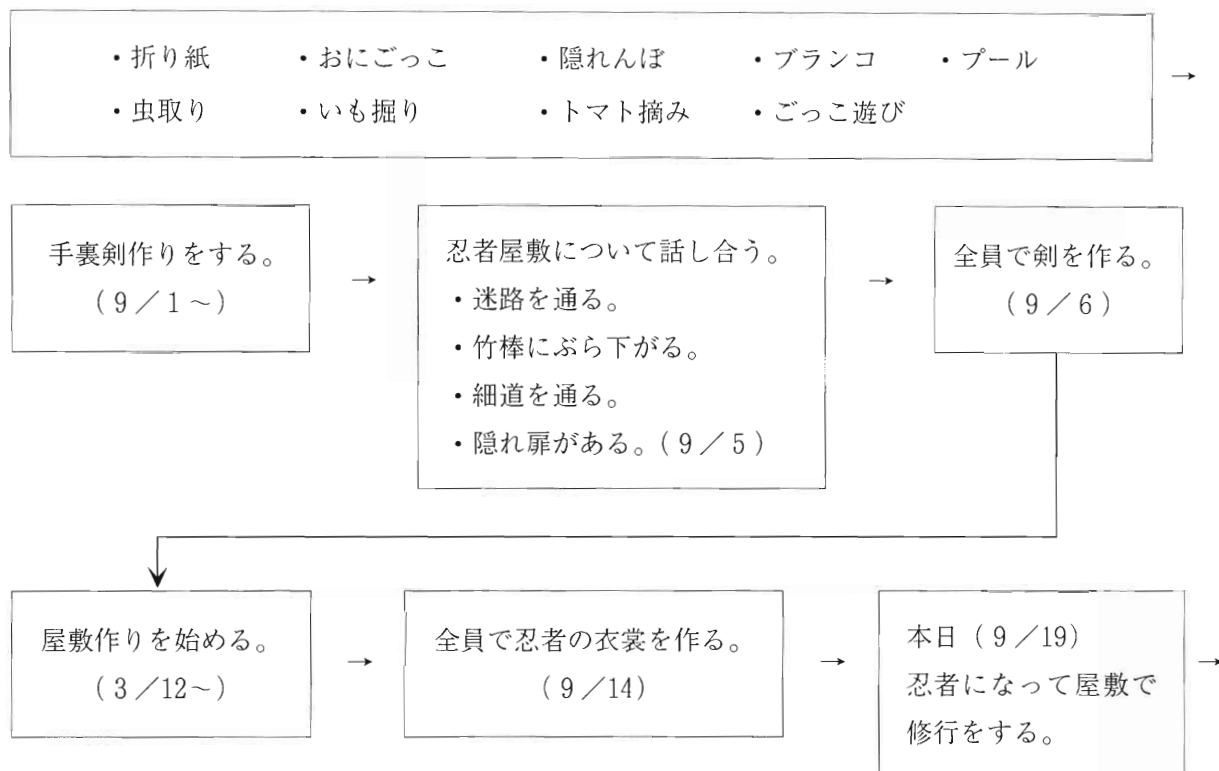
- ・クラスの雰囲気は、明るく活発で、とても賑やかである。

体を動かすことが大好きな子どもが多いため、天気の良い日は園庭でブランコ、おにごっこ、隠れんぼなどをする姿が見られる。

また、プールで泳ぐことを楽しみにしている子どもも見られる。

- ・室内で遊ぶことの好きな子どもは、折り紙に興味を示し、飛行機をよく飛ばすように工夫したり、折り紙の街を作って遊んでいる。
- ・ハムスターや金魚・コオロギの世話を積極的にするなど、生き物に興味を持っている子が多い、さらに、園庭で蝶々を捕まえたり、虫を見つけて触ったり、図鑑で調べたりなどの姿も見られる。また、園庭でイモを掘ったり、トマトを摘んだり、梨を拾ったりと自然とかわる姿も見られる。
- ・友達と一緒に遊ぶ楽しさがわかって、友達と意思を出し合い、よく「ごっこ遊び」などを行っているのを目にする。ポケモンごっこ、ドレミごっこ、などといったマンガのキャラクターになってのごっこ遊びや、キャンプから自分達の経験を生かしてのごっこ遊びなど、必要な物を作って遊びを進めている。
- ・折り紙で、「手裏剣」を作ることに関心を示し、剣を作り始める子もいた。
徐々に忍者ごっこへと思いが広がり、屋敷や迷路を作りたいという思いが膨らんできている。運動会で「よさこいソーラン」や「リレー」を経験し、クラスとしてのまとまりが見えてきており、みんなで「忍者ごっこ」についての話を出し合う姿が見られる。
- ・本日は、忍者になり、忍者屋敷で体を動かしたり、様々な仕掛けに取り組みながら、満足感をもつて欲しいと考える。また、友達と意思を出し合いながら遊び、楽しさを味わって欲しいと考える。

2. 活動の経過



3. 本日のねらい

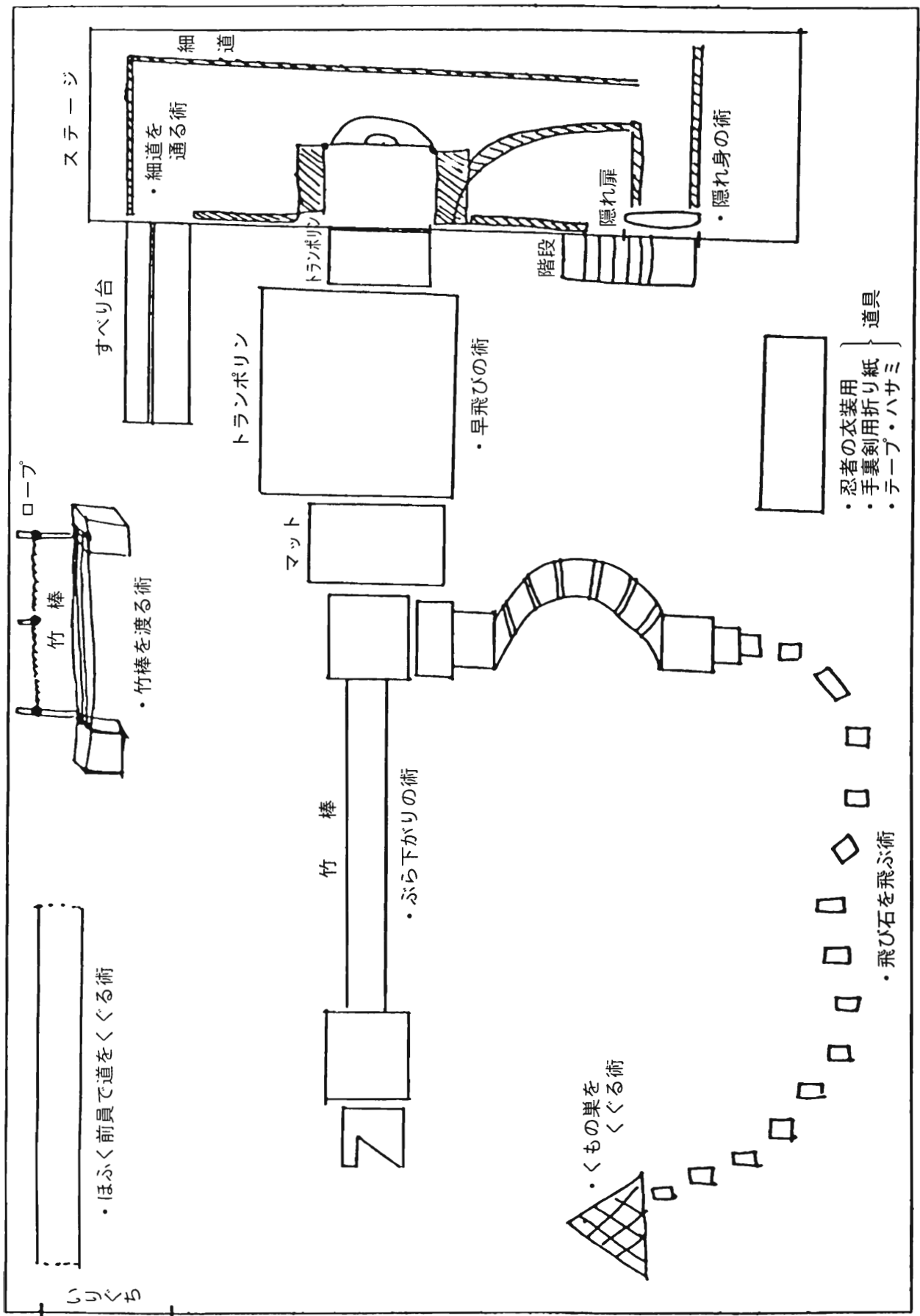
- ・考えや思いを伝え合って、友達と一緒に忍者になって遊ぶ。
- ・挑戦する気持ちを持って、忍者ごっこに取り組む。

4. 展 開

時 刻	○幼児の活動 ●環境（準備）	☆ 指 導 ・ 援 助
8 : 50	○登園時の活動をする。 (うがい、所持品の始末、シールを貼る。)	☆登園してくる子どもと挨拶を交わし、 心・体の状態を把握する。
9 : 00	○忍者の修行の準備をする。 ・衣裳を身につける。 ・手裏剣を持つ。 ・剣を持つ。 ○用意が出来たら、それぞれ忍者屋敷へ 向かう。	☆登園時間に差があるため、ある程度の 子ども達を先に、忍者屋敷へ連れてい く。 ☆何度か遊戯室と保育室を行き来して、 子どもの様子を把握する。

時 刻	○幼児の活動 ●環境（準備）	☆ 指 導 ・ 援 助
10 : 00	<p>○修行を開始する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 早飛びの術 ・ ぶら下がりの術 ・ 飛び石を飛ぶ術 ・ 隠れ身の術 ・ 細道を通る術 ・ ほふく前進で道をくぐる術 ・ 竹棒を渡る術 ・ 蜘蛛の巣をくぐる術 <p>●それぞれが目標をもって取り組めるように、チェックシートを置いておく。</p> <p>●足りない所を作り足していけるように、道具を用意しておく。</p> <p>○お互いに頑張った事を報告しあう。</p> <p>○忍法なぞなぞ探しの術を始める。</p> <p>○なぞなぞの紙を見つけたら、保育室へ戻り、汗を拭き、休む。</p>	<p>☆みんなで決めた約束事を守っているか確認する。</p> <p>☆トランポリンに同時に二人乗らないように指導する。</p> <p>☆竹棒から腕と足を離さず、しっかりつかむように指導する。</p> <p>☆一緒に遊ぶ中で遊び方を知らせたり、危険な動きをしている子には安全に遊べるように知らせる。</p> <p>☆子どもの遊びの様子・要求などを把握し、必要に応じて子どもと一緒に環境を構成し直していったり新しい遊びのアイデアを提案する。</p> <p>☆感想を聞き、子どもの頑張りを誉めてあげて、これからの遊びにつながっていくようにする。</p> <p>☆子どもを二班に分けて、片方の班を隠れ道で待たせ、もう一方の班になぞなぞの紙を隠させる。 その逆も行わせる。</p> <p>☆探す際に、自分の隠した紙を拾わないように教える。</p> <p>☆なぞなぞの紙を見つけられない子の為に、余分に隠しておく。</p>

5. 環境図



終末保育指導案

日 時 平成12年 9月21日 (木)

8時50分～10時30分

園 児 うめ組 4歳児

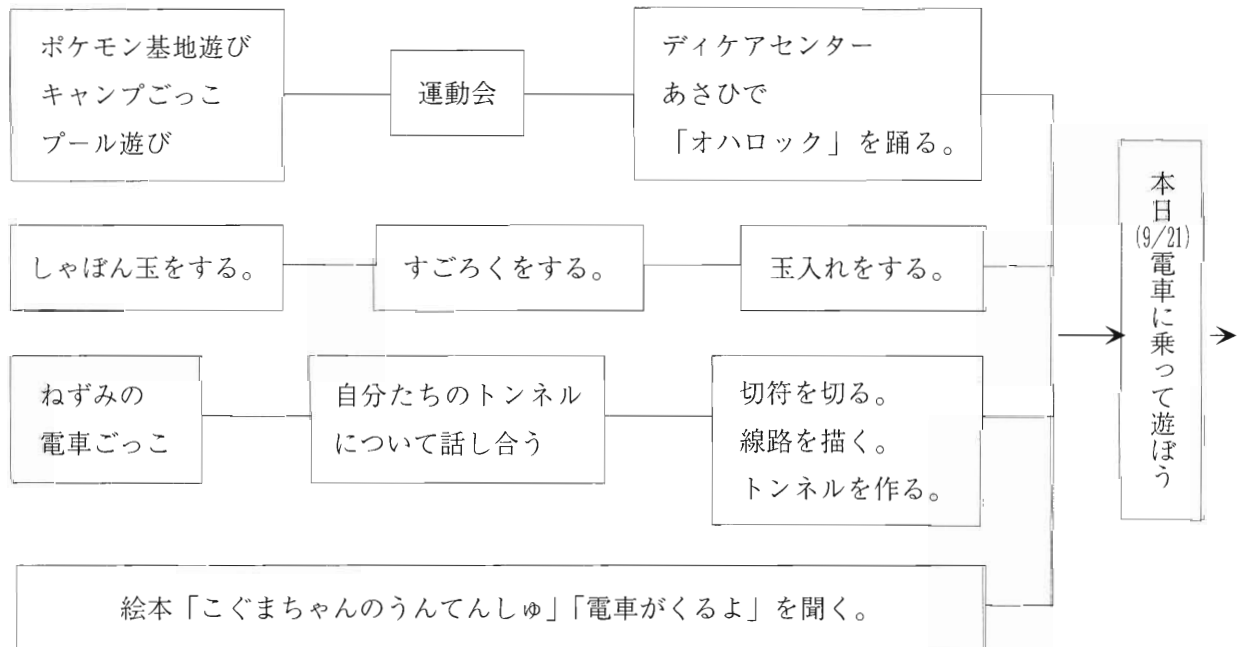
男児12名 女児4名 計16名

指 導 者 実習生

1. 最近の幼児の姿、指導にあたって

- プールで水をかけ合い、水に触れて楽しんだり、男児を中心にウルトラマンごっこ、ポケモン基地、三輪車など体を動かす遊びを楽しんだり、5歳児の活動に加わったりして元気に遊ぶ様子が見られる。また、ままごとやキャンプごっこなど遊びに必要なものを自分たちなりに作って楽しむ様子も見られている。気の合う友達が固定化してきており、その友達同士で遊びの約束事を作っている。また、教師が遊びに新たな刺激を加えると喜んでかかわり遊びを楽しむことが多い。
- ゆり組のねずみの電車ごっこから、三輪車に乗ることを楽しんでいる。しかし、自分の思いが強く友達へ関心が向いていないため、電車ごっことして同じ雰囲気味わせると、自分たちのトンネル作りのアイデアを出し合う姿が見られる。
- 本日は電車の停留所いくつかの遊び場を作り、それぞれの遊びを楽しませたいと考える。また、同じ雰囲気味わせることで友達のしている遊びに関心を持ち、友達とかかわりながら遊ぶ喜びを経験してもらいたいと考える。

2. 活動の経過



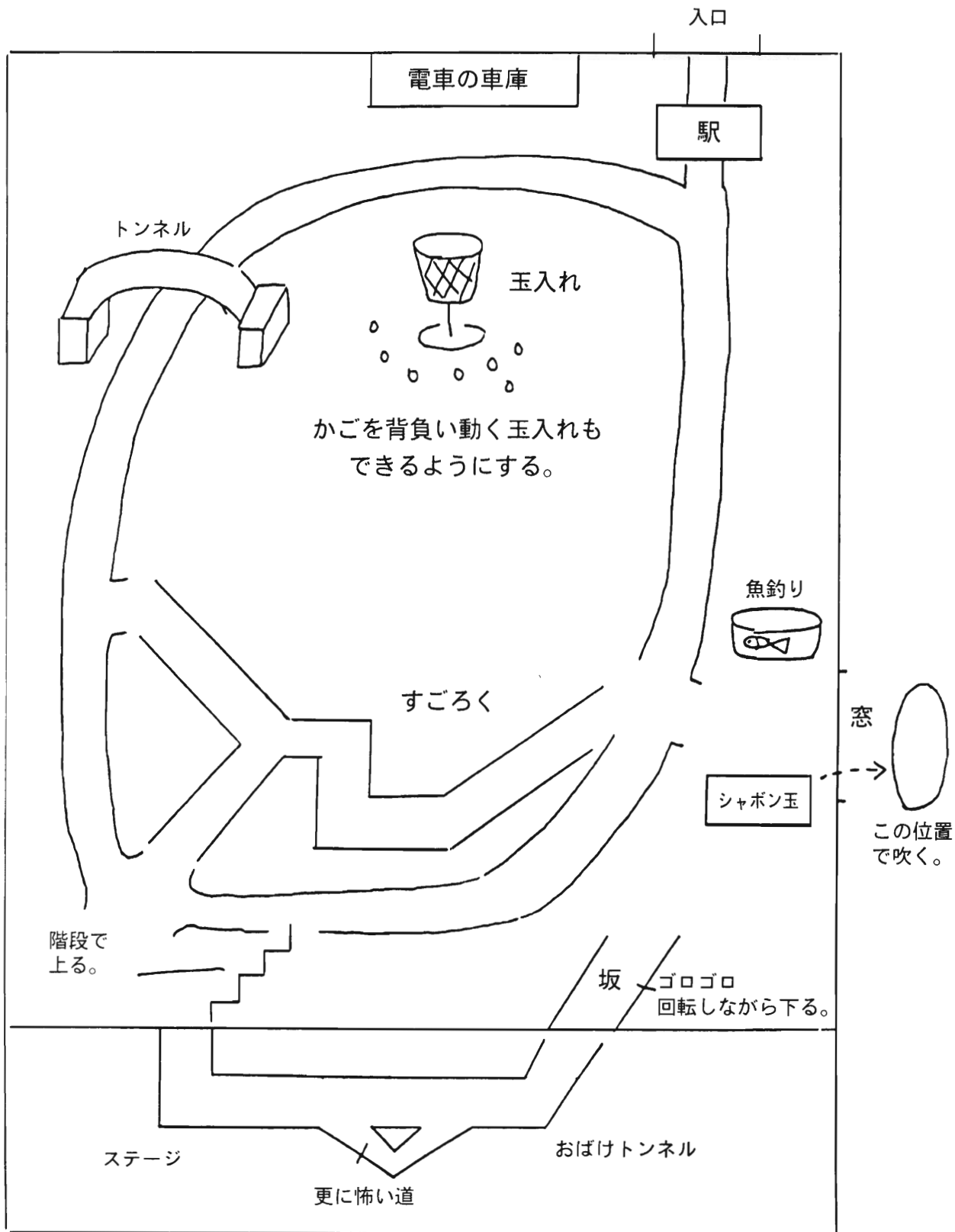
3. 本時のねらい

◦友達とかかわりながら遊ぶ喜ぶを味わう。

4. 展 開

時 刻	○幼児の活動 ●環境（準備）	☆ 教師の指導・援助
8 : 50	<ul style="list-style-type: none"> ○登園する ○電車に乗る準備をする。 <ul style="list-style-type: none"> ・切符に絵を描く。 ・切符にひもをつける。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆登園してきた子1人1人と挨拶を交わし心身の状態を把握する。 ☆切符の裏に好きな絵を描かせ電車ごっこへの期待をもたせる。 ☆電車ごっこに期待がもてるようにおぼけトンネルが完成したことやどんな遊びがあるかを話す。
9 : 30	<ul style="list-style-type: none"> ○うめ駅に集まる。 ○先生の話聞く。 ○切符を首に下げる。 ○電車に乗る。 <ul style="list-style-type: none"> ・お客さんになる。 ・運転手になる。 ・シャボン玉をする。 ・スタンプを押す。 ・玉入れをする。 ・魚釣りをする。 ・すごろくをする。 ・坂を下る。 ・おぼけトンネルに行く。 ●トンネルは分かれ道を作り怖さに差をつける。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆切符を首に下げるなどし手を自由に使い遊べるように配慮する。 ☆液がなくなり始めたら、友達と分け合い使うように声を掛ける。 ☆釣った魚は焼いたりして遊べるように近くに網を用意する。 ☆坂は体を横にして手足をまっすぐ伸ばして転がるようにする。周りにマットを置いて安全面の配慮をすると共に一緒に転がるなどしながら遊び方を知らせる。 ☆友達と遊べない子には一緒に電車に乗ったりして友達とかかわれるようにする。 ☆隅に隠れ遊びに参加しない子には名前を呼んだりし、自ら遊びに加わるまでその状況を温かく見守る。 ☆子どもの遊びの様子を見て、遊びを変えていく。 ☆皆んなで後片付けできるように声を掛ける。
10 : 15	<ul style="list-style-type: none"> ○後片付けをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆楽しかったことを話し合い、明日への活動につなげる。
10 : 30	<ul style="list-style-type: none"> ○トンネルの前に集まる。 	

5. 環境図



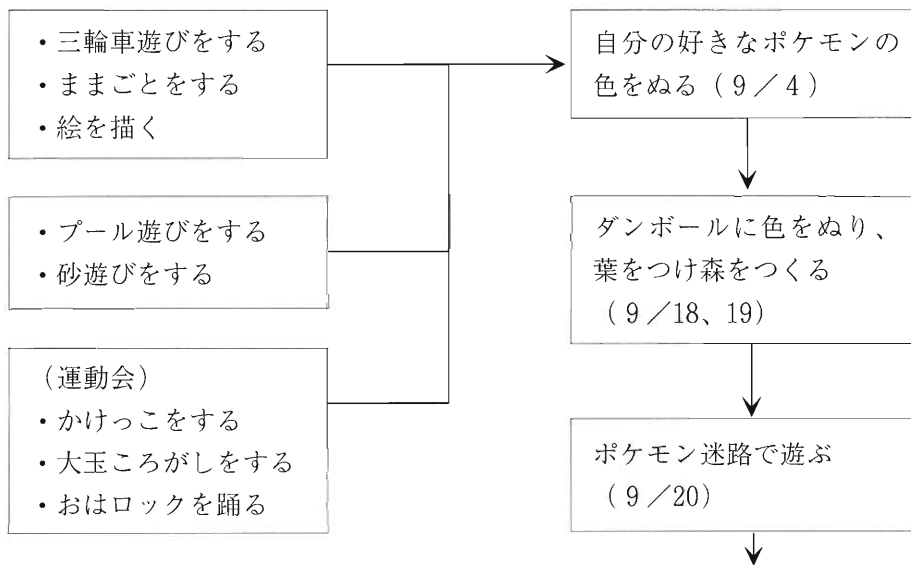
終末保育指導案

日 時 平成12年9月20日（水）
8時50分～10時30分
園 児 ゆり組 3歳児
男児6名 女児8名 計14名
指 導 者 教育実習生

1. 最近の幼児の姿、指導にあたって

- クラスの雰囲気は明るく、元気があり、自分から好きな遊びを見つけ、遊んでいる。
三輪車遊びを好む子が多く、スピードを出して遊ぶ、友達とつなげて遊ぶなど、一つの遊びをいろいろ楽しんでいる。
- 気の合う友達と、砂遊びやかくれんぼなどをして遊ぶ姿がよく見られ、一緒に遊ぶことを楽しむ。
- 天気の良い日は、プール遊びや砂遊び、固定遊具などで、積極的に戸外に出て、遊ぶ姿がよく見られる。
- 室内では、絵を描く、折り紙を折る、切る、粘土で遊ぶなど、手先や指の力を使う遊びを楽しんでいる姿が見られる。
- 保育室にある迷路で、友達と一緒に遊ぶ姿が見られ、壁に挟まれた道を歩くことを楽しんでいる。
- 運動会を経験し、体を動かしたり、ルールのある遊びを大勢の友達と楽しんだりした。
また、この時踊った「おはロック」も遊びの一つとして楽しんでいる。
- 本日は、自分たちで色をぬったポケモンや森などの環境にかかわりながら、いろいろな道を進み、ポケモン迷路で遊ぶことを楽しんで欲しいと考える。

2. 活動の経路



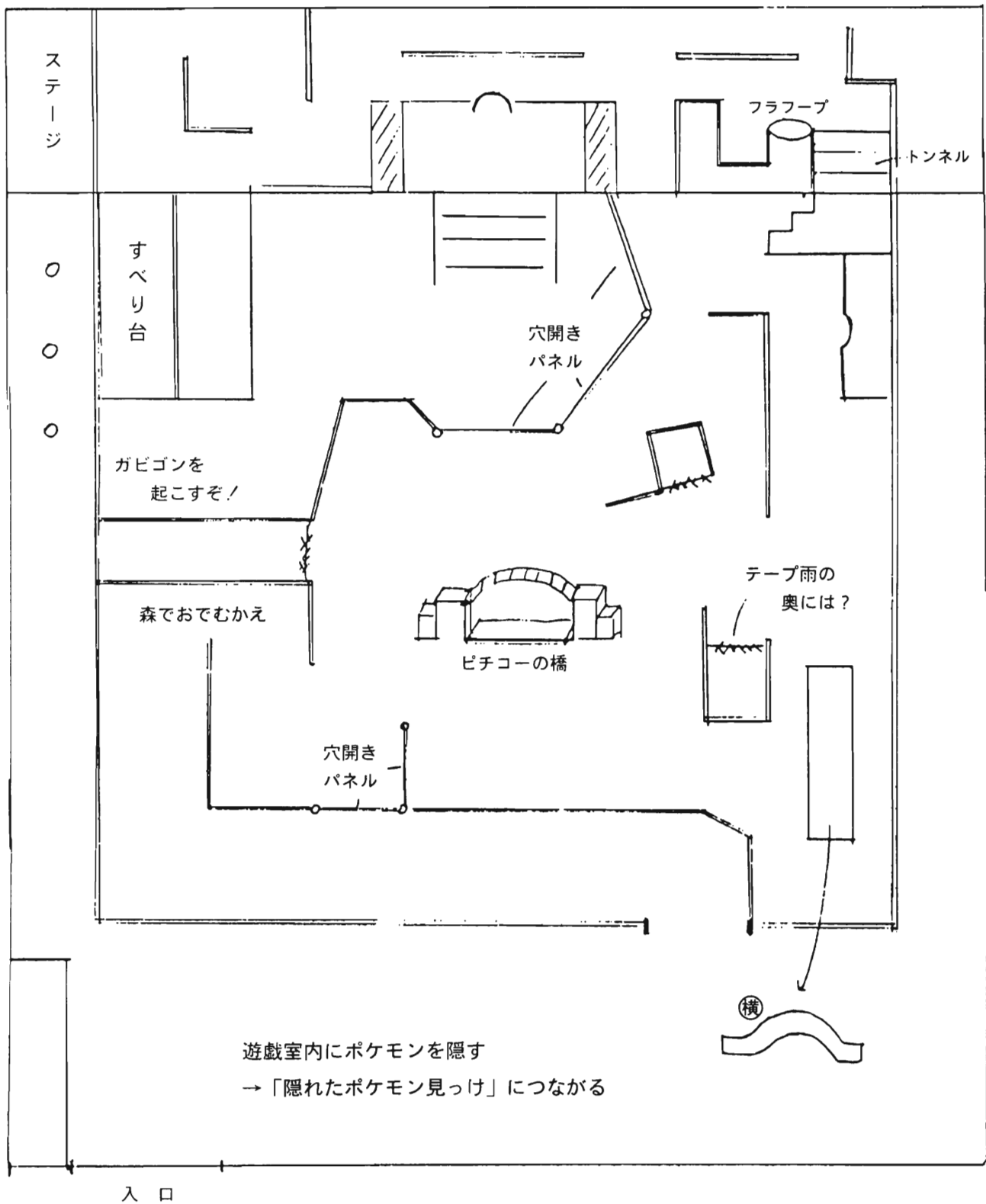
3. 本日のねらい

ポケモン迷路で、体を動かして遊ぶ。

4. 展 開

時 刻	○幼児の活動 ●環境（準備）	☆ 指 導 ・ 援 助
8 : 50	○登園 手洗い、うがいを カバンを片づける。	☆登園して来た子一人一人とあいさつを 交わし、子どもの様子を把握する。
9 : 20	○保育室に集まる。 ○ピカチュウから来た手紙を読んでもら う。	☆ピカチュウから手紙がきて、みんなで 遊びに行こうと話をする。
9 : 30	○遊戯室へ行き、迷路で遊ぶ。 ・森でおでむかえ ・テープ雨の奥には？ ・カビゴンを起こすぞ！ ・ピチューンの橋 ・隠れたポケモン見つけ ●子どもたちが興味をもって遊べるよう、 迷路の作り方を工夫する。 ●迷路を直すために必要な道具を用意す る。	☆子どもと一緒に迷路に入り、迷路の面 白さを気づかせる。 ☆子どもに橋を渡ったり、くぐったり、 手の力を使って遊ぶことを促す。 ☆迷路内を回って、いろんなポケモンに 出会うことに気付くよう援助する。 ☆行き止まりに出会ったり、隠れたポケ モンを探すため、体を小さくしたりす るなど、迷路を楽しめるようにする。
10 : 30	○保育室へ戻る。	☆子どもの様子を見、感想を聞きながら、 保育室へ戻るように促し、これからの 遊びにつながっていくようにする。

5. 環境図



3-2 函館市立日吉幼稚園

1. 幼稚園の特徴と教育計画

- (1) 教育目標 元気に遊ぶ子 友達となかよく遊ぶ子 考え工夫し遊ぶ子
- (2) 重点教育目標 心を輝かせ、生き生きと生活する子
- (3) 特色ある教育 ○子育て支援活動
- ・未就園児親子登園日の充実（年間7～8回）
 - ・子育て学習会の開催
 - ・子育て情報の発進
- 地域との交流活動
- ・北日吉小学校・北中学校・北高校との交流活動
 - ・ロイヤルヒルズ日吉との交流活動（老健施設）
- (4) 指導の重点 ○一人一人の子供が生きる喜びを実感することができる教育活動の展開に努める。
- 子供が豊かな発想や活動を生み出し、自分らしさを発揮していく指導の工夫をする。
- 温かい心をはぐくむことを目指し、友達や地域の人々、自然環境とかかわる活動を進める。
- 生活に必要な基礎、基本に力を身につけていく指導の工夫をする。
- (5) 教育計画
- ① 一日の勤務
- 朝会（職員と一緒に打ち合せ）→観察・指導（幼児と一緒に過ごす）→清掃（翌日の保育活動を予想して教材・教具の準備）→講義（園長及び実習担当、担任の指導を受ける）
- ※昼食は幼児と共にとり、昼食指導を行なう。
- ② 8月・9月の指導計画
- 行 運動会・運動的な表現を中心として、家族と一緒に運動会を進めていきます。
- 事 誕生会・その月の誕生日の成長を保護者と共にお祝いします。
- ③ 教育課程

	4 歳 児	5 歳 児
発達 の 過 程	○友達とのかかわりを楽しんだり、運動的な遊びへの興味が高まっていく時期	○体を十分に動かして遊ぶことに興味をもち、友達と遊びを広げていく時期
ね ら い	◎友達とのかかわりを楽しんだり、自分のやりたい遊びにじっくりと取り組む。 ◎戸外で体を十分に動かし、心地よさを味わう。 ◎季節の移り変りに興味や関心をもち自然にかかわって遊ぶことを楽しむ。	◎目的に向かい、友達とかかわって思いや考えを出し、遊ぶ楽しさを味わう。 ◎戸外で体を思い切り動かし、運動する楽しさ、心地よさを味わう。 ◎自然物を遊びに取り入れ、様々な方法で表現し、感性を豊かにする。

内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のしたい遊びを見つけ遊んだり友達と一緒にいろいろな遊びを楽しむ ・友達とのかかわりをもちながら遊ぶ ・戸外で体を動かして遊ぶ ・身近な自然にひたって遊びながら、季節の変化に気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と一緒にイメージをふくらませ、遊びを広げる。 ・思い切り体を動かして遊ぶ心地よさを味わう。 ・身近な自然を遊びや生活に取り入れ、季節感を味わいながら遊ぶ。
--------	--	--

2. 教育実習を行うにあたっての注意点

(1) 学生として教育実習に入るが、幼児にとっては教師として映るので、教官、幼児、保護者に対する対応に十分留意することが大切である。

○言葉遣いは、学生言葉（友人と話すような）にならないように注意する。

・学生同士であっても同様である。

○服装は、その日の活動にふさわしい清潔なものとする。

・ジャージばかりにならないように、活動に合わせて工夫をする。

・華美にならないようにする。

・靴は、かかとを踏まずきちんと履き、外靴との区別をつける。

○教官及び職員に対しては、敬意ある真摯な態度で接する。

・笑顔を添えて、自分の心を表現していく。

○自分の健康に配慮を怠らないこと。

○実習中に知り得た幼児及び園の情報は、他言しないこと。

○体罰はいかなる場合でも絶対にしてはならない。

(2) 指導にあたって

○実習前に配属される幼児について、発達の見通しを理解するように努め、自分なりに教材の準備を進めておく。

○自分の持味や特技を生かす工夫をする。

○特定の幼児とのみ接してはならない。

○実習記録は、将来教職についた時に、参考となるような内容に努める。

・文字は丁寧に、決められた枠内に書く。

・観察から考察や感想を引き出していく記述をする。

・滞ることのないようにし、毎日提出する。

○保育活動は、担任の指導計画の下で展開されます。指導教官の保育の進め方を学びながら自分の保育観を見いだしていくこと。

○計画に合わせて教材の準備を間に合わせること。

○実習期間が短期間であることから事前の実習を十分踏まえて、保育の指導をする。

3-3 函館市立松風幼稚園

1. 幼稚園の特徴と教育計画

- (1) 教育目標 かんがえる子 やさしい子 なかよくする子 げんきな子
- (2) 重点教育目標 おもいやりのある子
- (3) 特色ある教育 ○隣接する中部小学校と交流給食会
 ○低学年・障害児学級との交流
 ○花壇、苗植え等地域の人との交流
- (4) 指導の重点 ○幼児一人一人のよさや持ち味を生かした指導の充実に努め、幼児期にふさわしい生活の展開を図る。
 ○幼児が主体的にかかわり、心を動かす体験ができる環境・援助に努め、豊かな心情や思考力の芽生えを培う。
 ○幼児理解をもとに、一人一人が自分らしさを発揮し、思いや願いが実現できる環境づくりを工夫し、援助に努める。
 ○基本的な生活習慣の定着を図る。
 ○安全指導を充実する。

(5) 実践の内容と方法

全 体	3 歳 児	<p>○園の雰囲気わかり、好きな遊具や場で安心して生活できるようにする。</p> <p>・一人一人の興味や関心を探り、安心して過ごせるようにしていく。</p> <p>○基本的な生活習慣の定着</p> <p>・「自分のことは自分でしよう」とする意欲や態度の育成に努める。</p>
<p>○交流を通じた豊かな心情の育成</p> <p>・異年齢児、友達同士、隣接小学校の児童、地域の人々との交流を進め、心のふれあいを大切に、好ましい人間関係の育成に努める。</p> <p>○健康・安全指導の徹底</p> <p>・多様な場面を想定した避難訓練、交通安全指導の実施を行う。</p> <p>・戸外での活動や園外保育の充実に努める。</p>	4 歳 児	<p>○幼児一人一人のよさや持ち味を生かした指導の充実</p> <p>・幼児一人一人の発達の見通しを持ち、その時期にふさわしい環境づくりを工夫し、生活の流れに応じた環境の再構成に努める。</p> <p>・幼児が自分から活動を展開し、思いや願いが実現できるように一人一人の体験や発想を大切に環境づくりに努める。</p>
<p>○地域・家庭との連携</p> <p>・園、家庭、地域の連携を深め、それぞれの役割について理解を図る。</p>	5 歳 児	<p>○豊かな心情や思考力の芽生えを培う指導の充実</p> <p>・自然とかかわり、ふれ合いを深める活動を進め、豊かな心情や思考力の芽生えを培うための環境づくりの工夫や援助に努める。</p> <p>・幼児一人一人のよさや可能性を多面的にとらえ、一人一人の実態に応じた援助の工夫に努める。</p>

2. 実習を行うにあたっての注意点

- ◎ 心構えについて
 - ・ 幼児の前では実習生も教師であることを忘れない。
 - ・ 実習生は指導を受ける立場であるという意識をもつ。
 - ・ 勤務者としての規律と礼儀を守る。
 - ・ 効果的な実習が行えるよう積極的に行動する。

- ◎ 言葉づかいについて
 - ・ 教師としてふさわしい言葉をつかう。
 - ・ 子どもにわかりやすい言葉で明瞭にゆっくり話す。
 - ・ 実習生相互での呼び捨てや愛称は慎む。

- ◎ 服装について
 - ・ 動きやすく、清潔なもので、その日の活動にあったものにする。
 - ・ 左胸に氏名を書いた名札を必ずつける。

- ◎ 事前準備について
 - ・ 様々な素材の特徴、用途について調べる。
 - ・ 子どもが楽しめる歌、手遊び、お話や紙芝居、ペープサート、簡単なゲームなどの準備する。
 - ・ ピアノの練習をする。(お弁当のうた、お帰りのうた、季節や行事のうた)
 - ・ 園の教育方針を知り、学校で学んだ保育の理論、技術を実習ですぐに実現できるようにする。

- ◎ 実習態度について
 - ・ 子どもを好きになり温かい態度で接する。
 - ・ 子どもの名前や興味、関心を早く知る。

- ◎ 園児・保護者について
 - ・ 園児、保護者に文書を送ったり、家庭を訪問したり、物品を与えたりしないこと。
 - ・ 保護者から連絡を受けた場合は、その場に職員を呼ぶこと。

- ◎ 教材、教具、図書、施設等について
 - ・ 園の教具、図書等を利用する時は、必ず指導教官の許可を受ける。
 - ・ 控室は、常に整理整頓する。

- ◎ その他
 - ・ 貴重品はなるべく持参しないようにする。
 - ・ 教育実習期間終了時には借用した物を返却し、控室、教材室等を清潔に、整理整頓する。
 - ・ 保育中は携帯電話を使用しない。

3-4 函館市立万年橋幼稚園

1. 幼稚園の特徴と教育計画

- (1) 教育目標 やさしい子 かんがえる子 げんきな子
- (2) 重点教育目標 喜んで遊び、いきいきと生活する子
- (3) 特色ある教育
- ・隣接する万年橋小学校との交流活動
 - ・幼児期にふさわしい「心の教育」を大切にした教育活動
 - ・家庭や地域との連携を重視した教育活動
- (4) 指導の重点
- 幼児一人一人のよさや可能性を生かした指導の充実に努め、幼児期にふさわしい生活の展開を図る。
 - 幼児が主体的にかかわり、自分の思いや願いを発揮し、多様な経験ができる環境づくり・援助の工夫に努める。
 - 幼児理解をもとに「心のふれあい」や「友達とのかかわり」を大切にし、道徳性を育む指導・援助に努める。
 - 健康・安全などの基本的な生活習慣の形成・定着に努める。
 - 万年橋小学校との連携を深めることにより、異年齢との交流のよさを生かし「心のふれあい」を大切にした指導・援助に努める。
- (5) 指導計画……（8・9月）

	4 歳 児	5 歳 児
発達 の 過程	友達とのかかわりを楽しんだり、運動的な遊びへの興味が高まっていく時期	体を十分に動かして遊ぶことに興味をもち、友達と遊びを広げていく時期
環境 ・ 援助 の 配慮 点	<ul style="list-style-type: none"> ○園生活のリズムを取り戻し、安定して遊べるような場を準備する。 ・一人一人の思いを受け止め、生かしながら、遊びが進められるようにする。 ○戸外で運動的な遊びに取り組みながら友達と一緒にかかわりを楽しみ、仲間意識を深めていくようにする。 ・自分から進んで遊びに入ったり、誘ったりし、かかわりを広げていく。 ○身近な自然に触れ、遊びに取り入れれたりしながら遊びを楽しむ。 ・水・砂遊びができるように準備し、教師も共に遊びながら、共感する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○体を使い、思い切り遊び、解放感が味わえるように時間や場を十分に取る。 ・運動的な遊びに進んで取り組めるように場や用具を整え、自分たちで自由に遊べるようにする。 ・体を動かす楽しさや友達と競い合う面白さを味わい、意欲を高めていく。 ○友達同士でイメージを出し合い、共通の目的をもち遊びを進めていく。 ・友達の動きを知らせたり、自分たちで話し合ったり考えて遊べるようにする。 ○一人一人の活動の取り組みを受け止め、好奇心や探究心を満足させていく。

2. 教育実習を行うにあたっての注意点

全般的な心得として

- ① 幼稚園生活では、教師（教育実習生）が幼児に与える影響が大きい＝重要な環境であることを認識することが大切です。勤務態度・礼儀・生活習慣・言葉使い・服装などに細心の注意が必要です。服装は、幼児と一緒に活動できる、清潔で活動に合った服装とします。また、勤務であることを意識し、実習生同士の言葉も適切なものとするのが大切です。
- ② 実習生にとって大切な教育実習であると同様に幼児にとっても、その日その日が大切な時期・経験となります。幼児を好きになり、思いやりと誠意ある態度で接してください。実習生の思いは、心の純粋な幼児に必ず伝わります。名前や興味・関心を早く知り、自分の持ち味を生かし、意欲をもって有意義な実習にしてください。
- ③ 実習は指導教官の指導の下に教育活動が行われます。何事も独断で処理せず、指導を受けましょう。特に保護者からの連絡等は細心の注意が必要です。必ず指示を仰ぎましょう。
- ④ 幼児への直接的な保育活動だけでなく、幼稚園の教育全般に必要な業務も積極的に取り組みましょう。実習園の職員には、勤務者として敬意と節度ある態度で接しましょう。

保育について

- ① 園の教育方針を理解し、指導教官の保育観に学びながら、大学で学習したことや自分の特技を生かし、すぐ実践できるように努めましょう。指導・助言は素直に受け入れることが大切です。計画性を持ち、早めに指導を仰ぐことでよりよい実習が可能になります。
- ② 配属されるクラス・年齢・時期などを考慮し、幼児の興味や活動について情報を探り、準備することも有効です。（どんな遊びが好きか、どんなテレビを見ているか等）
- ③ すぐに実践できるように、幼児が好きな歌、ピアノ練習、手遊び、ゲームなどの準備をしましょう。教材に使う素材の特徴や性質、用途なども知っておくと役立ちます。

その他

- ・貴重品は、できるだけ持参しない。
- ・提出物は、期日を守る。特に実習記録は、教員になった時、参考となるように、観点を持ち、内容を工夫すること。（読みやすい、ていねいな字）
- ・控室、教材室など使用した場所は、常に整理整頓を忘れずにすること。

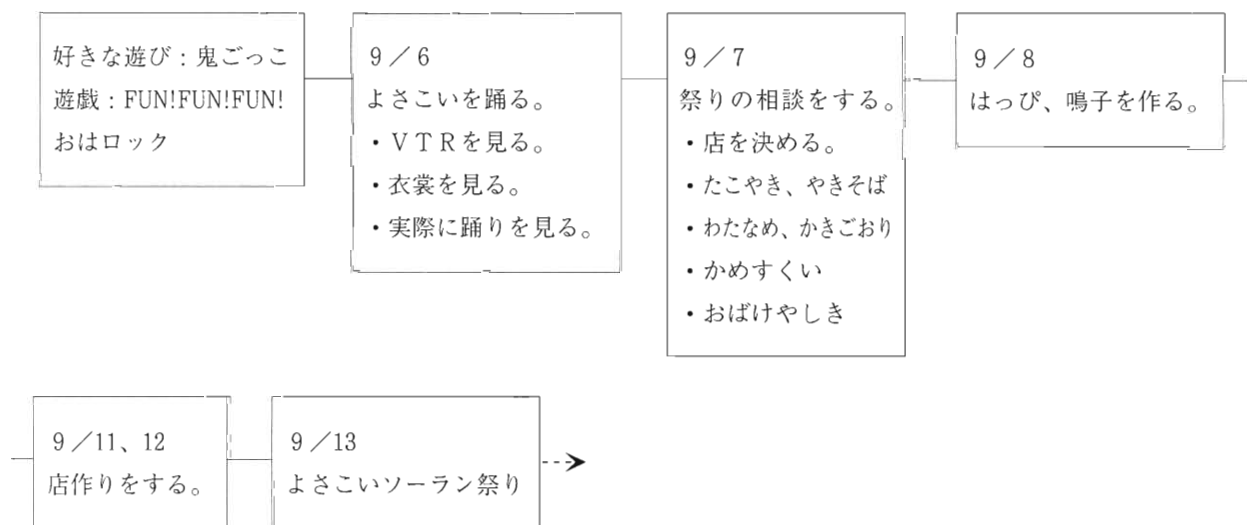
終末保育指導案

実習園 函館市立万年橋幼稚園
学生番号 幼稚園教員養成課程
日 時 平成12年9月13日（水）
午前9時40分～午前10時40分
園 児 5歳児 ひまわり組
男児8名 女児20名 計28名

1. 幼児の姿、指導にあたって

- ひまわり組の子どもたちは、活発で、体を動かすことが好きである。最近の遊びでは、1本を動かして、集団で遊ぶことが多い。特に鬼ごっこは大好きで、初めは好きな友だちと始めるが、しだいに仲間が増え、最後にはひまわり組のほとんどが、鬼ごっこに参加し、遊んでいる様子が見られる。一方では、保育室で自分の遊びを楽しんでいる子どもの姿も見られる。
- 運動会では、みんな真剣に競技に取り組み、特に遊戯では、全身を使って楽しそうに踊っている姿が見られた。運動会後も、曲がかかると踊りだしたり、また、「踊りたい。」という声が子どもから挙がったりしており、子どもたちの中で、とても楽しかった思い出となっている様子がうかがえる。
- そこで、全身を使って楽しく踊る、よさこいソーランを取り入れた、『よさこいソーラン祭り』をすることにした。祭りの出店について話し合い、グループごとに準備を進めてきた。踊りの練習も、みんなで一緒に楽しみながら行ってきた。本日は、みんなで協力し、準備してきた祭りを開催し、店の入やお客さんの役割を交代しながら楽しく遊んでほしいと思う。また、元気一杯よさこいソーランを踊り、『よさこい』の楽しさを感じてほしいと思う。

2. 活動の経過



3. 本日のねらい。

- 友だちと共通の目的をもち、祭りを楽しむ。
- よさこいを元気一杯踊る。

4. 展 開

時間	○ 予想される幼児の活動	☆ 教師の援助 ● 環境
8:50 ~9:15	<ul style="list-style-type: none"> ○ 登園する。 ○ 早く来た子どもから、はっぴを着る。 	<ul style="list-style-type: none"> ● はっぴ、鳴子を用意する。 ☆ 祭りの話をしながら準備をし、祭りへの期待をふくらませる。
9:40	<ul style="list-style-type: none"> ○ 店の準備を始める。 ○ 保育室に集まり、グループごとに座り、先生の話しを聞く。 ○ 祭りへ行く。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆ 一緒に楽しみながら準備をする。 ☆ いよいよ待ちに待った祭だという話をし、楽しんで遊ぶことができるような雰囲気をつくる。
9:50	<p>① 神社</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 賽銭箱に願い事しながら、お金を入れる。 ☆ 一緒に願い事しながら楽しむ。 <p>② かめすくい屋</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ どうすればうまく釣ることができるか、友だちと考える。 ☆ 一緒に遊びながら、うまく釣る方法を考える。 <p>③ わたあめ・かきごおり屋</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 楽しみながらシロップをかけたり、わたあめを作ったりする。 ☆ 一緒に作ったり、お客として買いに行ったりし、一緒に楽しむ。 	<p>④ 広場</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 椅子に座ってやすんだり、買ったものを食べたりする。 ☆ 子どもと一緒に楽しく食べる。 <p>⑤ おばけ屋敷</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 驚かすことを楽しんだり、お客さんはスリルを味わったりする。 ☆ 一緒に遊んだり、驚かしたりして楽しむ。 <p>⑥ たこ焼き・焼きそば屋</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 楽しみながらたこ焼きを焼いたり、焼きそばをいためたりする。 ☆ 店の人、お客さんがそれぞれ楽しめるようにする。
10:20	<ul style="list-style-type: none"> ○ 広場を片付け、鳴子を準備する。 ○ よさこいを踊る。 ○ 先生の話聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆ 片付け、準備がスムーズにいくよう、声をかける。 ☆ 一緒に楽しく踊る。 ☆ 楽しかった祭りの話をし、一緒に充実感を味わう。

5. 評 価

- 友だちとかかわりながら遊ぶことができたか。
- 全身を使って踊っていたか。

終末保育指導案

実習校	函館市立万年橋幼稚園
課程	幼稚園教員養成課程
日時	平成12年9月20日（水） 午前9時40分～午前10時40分
園児	4歳児 ちゅうりっぷ組 男児10名 女児16名 計26名
指導者	教育実習生

1. 幼児の姿、指導にあたって

◦ クラスの様子・実態

夏休みが明けて1か月が経ち、園生活のリズムを取り戻し、みんな元気に登園してきている。歌を歌ったり、手遊びなどの表現遊びについての反応がよく、自分をアピールする姿も見られる。友達関係については、女児の方で意見のくい違いで衝突したり、自分の気持ちを上手に相手に伝えられないためにけんかやトラブルになることもある。そこで教師が仲立ちとなることで、友達との上手なかかわり合いに気付くことができるようになってきている。男児の方でもブロックをめぐってのトラブルが見られたが、いつもみんな楽しく遊んでいる。。

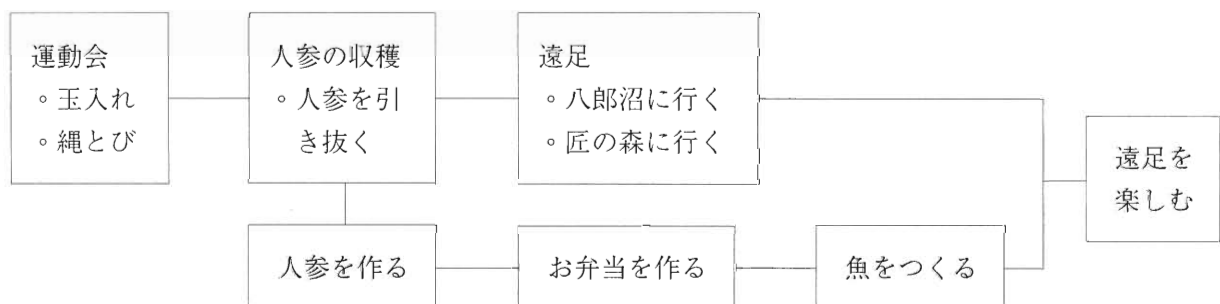
◦ 現在の興味・関心

運動会が終わってから、縄とびやうんていにチャレンジする姿が見られるようになってきた。また、5～6人の気の合う友達とグループを作り、ごっこ遊びをしたり、ひまわり組の影響を受けて、曲に合わせて楽しく踊ることに興味をもったりもしている。

◦ 教師の願い、本日の保育にあたって

楽しかった運動会や人参抜き、遠足へ行った経験などを遊びの中に生かし、好きな遊びを見つけて欲しい。また、体を動かして遊ぶ楽しさや、人参・魚・昆虫などをとる楽しみを味わってもらいたい。

2. 活動の経過



3. 本日のねらい。

- 友達とかかわり合って遊ぶ。
- 体を動かして遊ぶ楽しさを味わう。

4. 展 開

時 間	○ 幼 児 の 活 動	☆ 教 師 の 援 助 ● 環 境
8 : 50	<p>○登園する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・早く来た子から遠足へ持っていくお弁当をしまう。 ・トイレへ行く。 	<p>☆一人一人と挨拶し、本日の遊びに入っていけるような声かけをする。</p> <p>●みんなの作ったお弁当をすぐ渡せるように準備しておく。</p>
9 : 40	<p>○先生の話聞く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・切符をもらい、出発する準備をする。 <p>○「バスごっこ」を歌いながら出発する。</p> <p>○森の中を一周する。</p> <p>○好きな遊びをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人参畑で人参を抜く。 ・しゃぼん玉をつくる。 ・魚つりをする。 ・昆虫採集をする。 ・くまにごはんをあげる。 ・休憩したり、お弁当を食べる。 <p>・体を動かして遊ぶ。</p>	<p>☆遠足の話をして準備をし、遠足への期待を膨らませていく。</p> <p>●くまのペープサート、地図を用意しておく。</p> <p>☆「バスごっこ」を歌いながら出発することで期待を高めていく。</p> <p>☆くまを用いて案内する。</p> <p>☆一緒に遊びながら、いろいろな遊びに気付けるようにする。</p> <p>☆なかなか遊びに入っていけない子には、声かけをしたり、一緒に遊んだりしながら遊びに入っていくようにする。</p> <p>☆魚や昆虫などがとれたことを一緒に喜ぶ</p> <p>☆●くまに食べさせるごはんを用意する。 ぶつけるのではなく、食べさせようとする気持ちをもてるよう声をかけをする。</p>
10 : 20	<p>○お弁当を食べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達と一緒に楽しく食べる。 <p>○帰る準備をする。</p> <p>○森を一周してくまにさよならをして帰る。</p> <p>○先生の話聞く。</p>	<p>☆自分で作ったお弁当を喜びながら、友達と楽しく食べられる雰囲気をつくる。</p> <p>☆バスが出発することを教え、最後に森を一周し、くまにさようならをして、保育室に戻る。</p> <p>☆楽しかった遠足の話をして、一緒に喜びや充実感を味わう。</p>

5. 評 価

- 自分の好きな遊びを見つけ、楽しむことができたか。

Ⅳ. 教育実習Ⅳ

1. 目的

教育実習Ⅳは異校種での教育実習である。幼稚園を主とする皆さんの場合は、小学校で教育実習Ⅳを行う。期間は、3年生の夏休み。すなわち、教育実習Ⅱの実習を終えた後、小学校で2週間の実習を行う。幼稚園の実習で身につけたものを、小学校で試して見よう。幼稚園と小学校の教育制度や子ども達の違いと共通性を認識することが目的である。

2. 日程

- (1) 事前指導 教育実習ⅢとⅣの説明
- (2) 教育実習ⅣA
- (3) 事後指導

3. 教育実習Ⅳにおける視点

教育実習Ⅳでは、幼小の関連についての問題意識をふまえて、小学校における授業や特別活動に参加し、小学校教育に対する理解を深める。その際の視点として、次のようなものがあげられる。

- 1) 校種の異なる実習校で、児童・生徒の生活全般に対して、指導・援助を試みる。
- 2) 異なる義務教育段階の学校において、授業（教科・道徳）の部分参加、及び、生徒指導、特別活動等への参加を通して、教育実践の課題を把握する。
- 3) 発達段階の異なる学校での教育活動の観察・参加を通して、児童・生徒理解を広げ、深める。
- 4) 特別活動等の教育活動に参加し、ひろく学校教育全般に関わる自らの課題を把握する。個別・グループの課題授業の計画・実施を通して、授業への問題意識を深める。

● 教育実習Ⅳの視点としては、次のようなものがあげられる。

- 1) 子どもの発達の違いに着目
- 2) 子どもの発達にともなう保育方法の変化に着目

第 3 部

小学校・中学校・高等学校実習

第3部 小学校・中学校・高等学校実習

I 授業づくり

1. 授業観察の方法論	94
1-1. 授業のしくみを考えるには	94
1-2. 授業を見て記録をしてみよう	95
1-3. 授業記録からその仕組みを読み取ろう	109
2. 学習指導の計画	114
2-1. 学習指導案作成の目的	114
2-2. 教材研究の意義と観点	114
2-3. 学習指導案の例	116
2-4. 学習指導案作成の手順	117
2-5. 学習過程(指導過程)の各段階の特徴	118
3. 授業実施の工夫と授業技術の基本	119
3-1. 授業実施の工夫	119
3-2. 授業技術の基本	124
3-3. メディアを効果的に活用するには	127
4. 各教科の授業の「骨組み」をつくるには	129
国語、算数(数学)、社会、理科、音楽、図工(美術)、 体育、家庭、技術、英語	
5. 各教科の授業案作り	170
1. 小学校編	171
2. 中学校編	191
3. 高等学校編	211

Ⅱ 道徳、総合的な学習の時間、特別活動について

1. 道徳の時間の指導	224
1-1. 道徳とは	224
1-2. 小学校におけるねらい及び授業計画と指導案	224
1-3. 中学校におけるねらい及び指導計画と指導案	227
2. 総合的な学習の時間の指導	232
2-1. 総合的な学習について	232
2-2. 附属小学校における総合的な学習の時間	232
2-3. 附属中学校における総合的な学習の時間	234
3. 特別活動	237
3-1. 小学校における特別活動とは	237
3-2. 中学校における特別活動とは	240

Ⅲ 生徒指導

1. 生徒指導の意義	243
2. 生徒理解の方法	244
3. 教育実習生として生徒指導上注意すべき内容	246

Ⅳ 学校における経営

1. 学校のしくみ	247
2. 学校経営	250

Ⅴ 実習記録の記入及び活用の仕方

252

1. 授業観察の方法論

1-1. 授業のしくみを考えるには

学校教育では、日々すぐれた教師の教育実践がなされており、その実践に基づき授業研究が進められている。また、すぐれた教育実践は、授業研究という基礎の上で行われているといえる。その授業研究は、「①授業改善、②教師の授業力量の形成、③授業についての学問的研究（授業原理の発見と授業理論・モデルの構成）」を目的に行われる（吉崎静夫、1991、高田清、1996）。この授業研究は、実践としての授業を観察し、記録し、それを対象化することからはじまるが、その対象である授業は、非常に複雑なシステムであり、それを観察して記録することは難しい。

授業記録をつくる目的として八田昭平は、「①授業の客観的対象化、②実践としての授業の即時的対象化、③授業の可能性の発見・追求」をあげている。また、「一つの授業は、まさに1回きり、二度と繰り返しができない。しかし、それでは授業は研究の対象とならないから、何とかしてそれを再生してみたい。その授業に参加しなかった第三者にも、伝達する方法はないものか。こうした願いをこめて、授業の記録についてさまざまな工夫がなされてきたのである。」と授業記録をつくる意味を水越敏行は指摘している。いずれも授業を科学の対象として、科学的な授業研究、教育実践の実証的研究の出発点とするために、子ども・教師の行動を知覚しその意味・意図を探るための資料として授業記録を位置づけていることがわかる。これは授業観察し話し合うときに、印象や批判的な検討から脱皮し、客観的なデータに基づき、根拠あるものにしていくことにつながる。

複雑なシステムである授業を観察し記録の視点として、「①教師の発問・指示、②児童・生徒の反応・応答、③教師の対応行動、④授業運営（授業を進める上での教師と子どもの約束事等を含めた）、⑤教材解釈（教師がその授業を立案・実施するために教材をどのように分析・解釈し、働きかけをつくり、教授・学習過程を構成していったのか）」（井上光洋）の5つがあげられる。

実践とは、客観的対象に能動的に働きかけて、それを目的的、意識的に変化させ、創造していく人間固有の活動である。また、指導とは、人が人に働きかけて、相手の目的的活動を導き出し、組織する機能のことであり、教育を行っていく実践の方法の一つである。そこで、教育実践記録について、高田清（1996）は、「実践は、客観的対象的過程と意識的内面的過程の統一的過程であるから、その記録には、実践者としての教師が具体的にどのような働きかけをしたかという客観的対象的過程の記録と、実践過程での教師の意識的内面的過程の記録が書かれる必要がある」と述べ、さらに、「客観的対象的過程と意識的内面的過程を結びつけ、統一的に記録する作業を通してはじめて、授業の構造が見える実践記録ができあがる」としている。

教師の意識的内面的過程の記録の作成については、実践した教師自身が客観的対象的過程の記録に意識的内面的過程を書き加えるというのが基本である。しかし、それを行うことは、自らの実践を対象化できる教師の実践経験や力量が不可欠であり、全ての教師ができるものではない。そこで、分析者や教師集団が実践者にインタビューを行うことによりその作業を進めることが必要である。また、実際には、実践を行った教師にインタビューを行うことが不可能なことが多い。この場合は、授業記録から、その実践者の意識的内面的過程を推測することが必要である。

（「3. 授業記録からその仕組みを読み取ろう」において、「授業記録の資料化（遷移過程と構造を表現する「授業の構造図」と「教授方略図」）の方法」として「客観的対象的過程」と「意識的内面的過程」の作業について解説している。）

1-2. 授業を見て記録をしてみよう

(1) 授業の観察とその方法

授業は非常に複雑なシステムであり、それを観察し記録することは難しい。その複雑な授業を捉えるモデルを多くの研究者が提案している。そのモデルの一つとして、小金井正巳らは授業を教師と学習者の相互作用として捉え、図1のような、教師の働きかけから始まり、子どもの反応・応答、そしてそれに対する教師の対応行動（即ち教師と学習者の相互作用）によって成り立つと考えるモデルを提案している。授業は、「教師の行動（言語、非言語作動）」と「学習者の行動（言語、非言語行動）」のコミュニケーション過程として捉えられ、観察可能な教師と学習者の行動には、図2に示すようなものがある。教師には、教授の具体策としての説明、発問、指示等の言語的行動と併せて板書、OHP等の教育メディアの操作・提示をはじめ、意図的沈黙等の非言語的行動も含めた多様な行動がある。また、これらの教師の働きかけに対する学習者の反応・応答があり、さらには、学習者の反応・応答に対する教師の対応行動という教師と学習者の相互作用が観察できる。

人間や動物の行動を自然な状況や実験的な状況のもとで、観察、記録、分析し、行動の質的・量的特徴や行動等の法則性を解明する方法を観察法という。前者の行動をその自然生起のままに観察しようとする観察法（自然的観察法）と条件を統制して行動を人為的に起こさせたり、組織的に変化させたりして行う方法（実験的観察法）と、この両者の区別は、観察条件ないし、実験的条件の差であるといえる。教育実践活動を行う学校教育における観察法としては、その主たる活動である授業では、授業者としての教師と学習者としての子どもの相互作用を捉えることを目的とするのであるから、自然的観察法を採ることが多い。

(2) 観察の対象と方法

観察の対象としては、表1に示す4つに分類できる。また、観察法をまとめると表2のようになる。

図1 発問課程の意思決定モデル

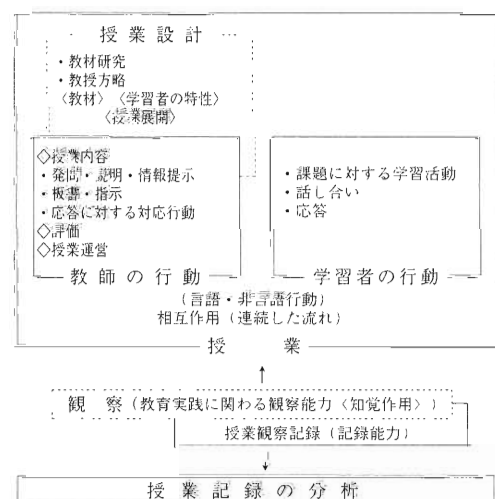
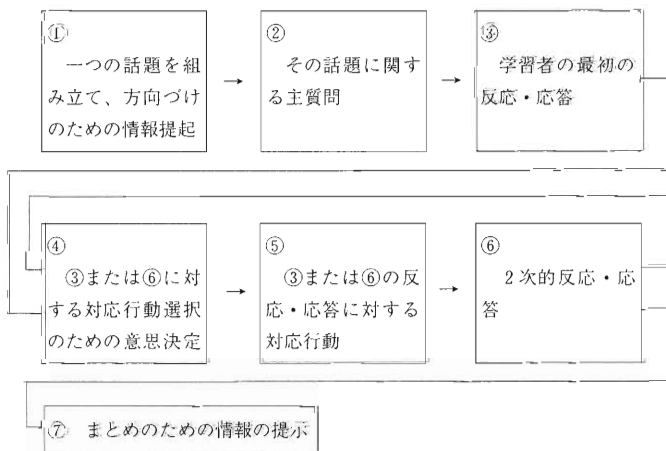


図2 授業の観察モデル

表 1. 観察の対象

- a. 行動記述：行動の記述記録
- b. 行動測定：姿勢、発語、相互作用のパターン、移動距離などの客観的で観察可能な側面の頻度記録
- c. 行動評定：声の大きさ、注意の程度、活動への集中度等の行動の程度の評定
- d. 印象設定：行動から受ける印象の評定

(中澤潤：1997)

表 2. 観察の方法

① 自然的観察法

ア) 直接的観察法 (direct observation)

a) 日常的観察 (direct observation)

- 日誌的記録 (diary recording) 被観察者が日常的な行動の流れの中で示す新しいエピソードを、そのつど観察する。
- 行動描写法 (specimen records)
- / 逸話記録法 (anecdotal recording)
- 参加観察法 (participant observation)

b) 組織的観察 (systematic observation)

- 場面見本法 (situation sampling method) 日常生活の中から対象としている行動が反復し
 / 事象見本法 / 行動見本法 (event sampling method) て表れそうな代表的場面を選び、その場で行
 method) われる行動のすべてを、組織的に観察する。
- 位相観察法 (phase observation method) 人の行動には、始まり、中間、終わりというよ
 うな区分があり、この区分を位相 (phase) と
 いう。大きな位相単位の中にさらに小さな位相
 がある。それには構造があり、一つの行動を構
 成している。人の行動の意味を、小さな位相の
 構造等により解明する方法
- 時間見本法 (time sampling method) 研究・観察の目的に応じて、適当な時間を設け、
 その時間内に生起する行動のすべて、あるいは
 特定の行動の流れを観察する。
- * 行動日録法 (behavior inventories)
- * 評定尺度法 (rating scale method)

イ) 間接的観察法 (indirect observation)

② 実験的観察法

(3) 学校における教育活動において活用されている観察の方法

学校における教育活動における観察法の具体的な活用について記す。

① 行動描写法／逸話記録法

行動の全てをその順序に従って記録し、あとで研究目的に沿って分析する方法で、逸話記録法ともいう。この方法による記録では、行動を直接描写するので、重要な行動の記録の欠落がなく、行動の流れが把握しやすく、種々の視点からの分析が可能な資料が得られるという特徴がある。この方法による授業記録に基づいた授業分析研究の草分けである重松鷹泰氏は、「授業の記録はそれを読んだ場合に、まさにその授業を見ているかのように、状況を描き出していることがまず必要である。……教師や子どもたちの動きがそのまま記述されており、それを手がかりに各種の解釈が成立するくらい詳しいものでなければならない。」点を記録の条件の筆頭に挙げている。

観察記録にあたっては、具体的、直接的な記録をとることが必要であり、まとめ的な記録をしないようにすることが必要である。さらに、記録者の判断や解釈、あるいは説明については、事実としての記録と区別して記録しなければならない。この方法による授業記録は、「授業記録原簿」あるいは「記述された授業記録 (written protocol)」と名づけられている。

ラジオの熟達したアナウンサーの実況中継放送は、被観察者の行動とその場の状況を言語により的確かつ即時に視聴者に伝えているが、これはこの方法の一例と考えられる。ここでは、観察対象者の言語行動より非言語行動を言語に表し、伝えるということが重点となる。

この方法による記録をきちんととることができれば、教師として一人前といわれるほど、教育実践における授業観察記録はこの方法に基づくことが多い。しかしこの方法では、知覚作用が重要な役割を果たしており、観察者の教育実践に関わる観察能力とその記録能力とによって個人差が大きく、さらに授業には連続した流れがあり、そのすべてを記録することは難しく、また記録に気を取られたり、追われたりしていると観察が疎かになってしまうことになり新任教師や教育実習生には難しい。

この方法には、“さがして、よく見ること” “重要でないと思われることも記録する”ということを除いて共通なきまりはないが、教師の発問や児童の応答というような言語行動をそのまま記録するとともに、板書、教材提示、教師のふるまい、学習者の活動の様子といった非言語行動も記録しておくことが後に授業記録を読み取り、分析する時に役立つ。

具体的な記録を図3に示す。記録の際、学習者を、C₈、C₉、……というような一連番号で表すこともあるが、発言した学習者名がわかるときは記述しておくこと、後の分析において教師と学習者の相互作用がより明確となる。

この記録を作成する方法として、授業を直接観察しながら行うとともに、さらにその授業を収録したビデオテープ（または、オーディオテープ）を再生しながら記録を補足することにより、より正確な記録を作ることができる。

逸話記録法は、日誌法や場面選択法、行動見本法にも活用できる。

② 参加観察法

「調査者（観察者）自身が、調査（観察）対象になっている集団の生活に参加し、その一員としての役割を演じながら、そこに生起する事象を多角的に、長期にわたり観察する方法」（三隅二不二・阿部：1974）を参加観察法という。社会人類学、民族学などにおけるフィールドワークのように、観察者が調査対象となっている被観察者の集団に所属し日常生活の中に入り込み、そ

図3. 行動描写法による授業観察例

授 業 記 録

北海道教育大学附属函館小学校 第 / 学年 又組 教科 算 数 授業者 ~~XXXXXXXXXX~~
 1991年 9月 26日 (木) 3 校時 単元 どちらがおあい 記録者

時間	教師の行動	学習者の行動	備考(教材・板書等)
T.88	それでね	C.98 くうべうごたいがい?	板書 くうべうごたいがい
T.89	そうくうべうごたいがいして さうたいの。	C.99 ぼーい。	
T.90	それで先生、外にいろいろ 用意しました。 こううカップとがね、いろいろ ね、こうやって切ったのと うん、こううふうに移運 うのとがね、いろいろ用意した のね、で……1人1個持て 下さい。そこにありますから、1 人1個選んで持て下さい。	C.100 え。。 C.101 はい。	用意したもの ペットボトルの切ったもの (まわりは、ちややく(おぼ るが、ビールテフで 処理) 形はいろいろかえて いる。 なび 牛乳パック 形はいろいろかえている。 プリンカップなび 小物 いちごパックのような 透明なテス
T.91	それで、誰か相手の人を見 つけて、その人と、どちらが多い か比べてみて下さい。 そうしたら、いろいろ比べ なさい。いけなはいね、こうや って…カップではかたり しなさい。いけなはいね。		ちり なびつけていく 小黒板に はって、外に おいておく デ・ヤ・フォーフE おいておく。
T.92	うん、そうやって、勝負たら 黒板にその外の黒板 に、こうう名前を表書い ているから…勝ったうれつが いて下さい。勝ったう。	C.102 負けた人はどうするの?	ペットボトルの 上の物かとビール 瓶をテフで切 ったの、水が入れ られる。
T.93	負けた人も、比で終わら う、違う人とやってみて下さ い。ヒムヒム ヒムヒム違う人とや って、 先まめてーって入るー いうまでね、何回でもや って下さい。		
T.94	そして勝った、負けただけ けていく。	C.103 負けたらバツ? C.104 負けたらバツ?	
T.95	ん?		

(北海道教育大学附属函館小学校における教育実習生の授業より)

の一員としての役割を演じながら、そこに生起する事象を多角的に、長期にわたり観察する方法をいう。3～4週間配属学校の学級に教育実習生として所属し、児童・生徒とともに授業をはじめとして休み時間、清掃、給食等の学校生活をともにしながら、教師としての仕事・役割を学んだり、学習者としての児童・生徒の特性について学んだりして、「教育実習日誌」という記録を作成するという活動の教育実習もこの方法の一例といえる。

この参加観察法は、外から距離をおいて見ていたのではわかりにくい事象に入り込み、その行為、意味を内部にいる者、あるいは行為者の視点から理解することができるという特徴をもっている。児童・生徒の特徴・特性を知ろうとするときには、その児童・生徒が固有に持つ特徴・特性を単独で捉えることもできようが、その児童・生徒が所属する集団（学級）の中で捉えることも必要である。つまり、「人+状況」で捉えることができる。さらに、この方法では、その集団に長い間所属しては知覚できない暗黙の規範（その集団の構成者に共有される物事の捉え方）、すなわち「あたりまえ」と見なされる世界を成り立たせている原理・方法を捉えることもできる。佐藤郁哉は、この方法による調査・観察は、「現地の文化を文字のテキストに翻訳してうつしとる『文化の翻訳者』の仕事」であるといっている。

学校生活において子どもは、授業中の学習場面における表情と休み時間の遊び等における表情とは大きく異なり、いわゆる子どもの本音は後者の時間に表れるものである。教育実践では児童・生徒と一緒に活動を行うとともに観察するこの方法は、児童・生徒理解にかかせない重要な手法の一つである。

この方法を行うにあたって、まず観察対象である児童・生徒に受け入れてもらえることが第1の条件である。なぜなら、観察者が観察対象である集団に入り込むことにより多少の緊張が起ころうであろうが、その集団内における人間関係や個人の行動に影響を及ぼすことは、情報の収集活動の成否に係わるとともに、得られた結果がその集団の情報として適切なものであるとはいいがたいものとなる可能性が大きい。そのようなことから、小・中学校の児童・生徒を対象とした観察については、休み時間の遊びの仲間になることや清掃活動を一緒に行う等の活動から始める必要がある。また、遊びやゲーム及び清掃活動等における子どもの行動やルールの適用の様子など遊びの中における子どもの人間関係等も観察することができ、そこから子どもの心理や発達特性を考察することができる。さらに、観察対象者とともに同じ活動を体験することから、活動における心理状態をシミュレーションしていることにもなり、観察結果の考察とともに児童・生徒の心理面での理解に及ぶことも可能である。日常生活をともにするとき小さい子どもたちの活動においては、観察者の予期しない事柄が起ころることもあり、児童・生徒の理解をさらに深めることができるのもこの観察法の特徴の一つとしてあげられる。この方法では、「現場で見聞きしたことは、それをまとめた文章の形にすることによって、はじめて考えたり分析したりすることができる対象になるのです」「その観察や体験の記録をフィールドノートに書きとめなければなりません。また、写真やビデオに撮って記録しておく作業も大切です。」（佐藤郁哉）と記述化した記録の不可欠な要素であることを示している。さらに、観察した事実・事柄を1件ずつカードに記入し、それをKJ法などで分類・整理することによりフィールド調査のまとめができる。

③ 行動目録法

あらかじめ観察したい行動や起こりそうな行動を予想して表にしておき、該当する行動が起きたらチェックする方法で、具体的には、図4に示すように、○やV印をつけたりし、それを数量

図4. 行動目録法による授業観察例

行動観察チェック表 授業名(6年社会)授業者()抽出児()

授業の流れ		行動のようす												観察のメモ
形態	意図	1.発言	2.発言	3.私語	4.私語	5.注目	6.注目	7.笑	8.笑	9.笑	10.笑	11.笑	12.その他	
	キーワード等	教師の手	友人	友人	友人	友人	友人	友人	友人	友人	友人	友人	友人	
1	↑	・どんなことがあつた				✓								自分の学習ノートを見る
2		ましたか	✓	✓										「もしものものが…」
3		・上にたつものはだて					✓							中野さんの意見に拍手する
4		すか					✓	✓						
5							✓							三水さんの意見に拍手する
6							✓							
7							✓							
8		・町人はどういふ?										✓		手紙を「ほえや」しよる
9												✓		上野の子の方を見る
10		・(飯尾くんの発言)											✓	
11		・どういふ感じは?											✓	下野向「ほえや」している
12		・仮書 絵をよる			✓		✓							仮書と絵を調べるようにする
13		・なにをいっている絵でしょう?	✓				✓							絵にも注目
14		・ふくせうの面が					✓							
15		・持っているものから	✓										✓	あこに手をあげ「ほえや」する
16		(飯尾さん)発言											✓	
17													✓	目線がこちらに向く(おちい)
18		・板書「村人」百性換					✓							
19		・これを何というでしょう?					✓							
20		・次の絵を黒板にはる					✓							絵にも注目
21		・この絵について質問は?					✓							
22							✓							
23		・どんなことかわかりますか					✓							
24							✓							黒板を見ているがなんにもく
25													✓	向いているようす
26		・プリントをよる					✓							ファイルを開く
27														プリントを見る
28		・絵読をする					✓							
29							✓							顔色に気をつけて他人で
30							✓							いる
31		・グループで相談し……です											✓	小西くんの意見を聞く
32		カードの利点は……部分をき												なまをノートに書く
33		らしてください。												
34			✓											
35														自分の意見を出す(2枚目のカード)
36														作業終了(2枚目「村人」)
37														白紙にならしている
38														自分の意見をセーブしている
39														書いたカードを白紙にはる
40		・前を向いて下を												
41														
42		・話しを説明をする												
43														
44														
45		・まとめおきますよ												
46		・お話ししているのは……												
47		・話しあつて……ですよ												
48		・あつたらうかな												
49		(飯尾さん)発言												

(東京学芸大学附属大泉小学校における授業より)

的に処理し、統計的見地も加味して、結果を解釈する方法である。データからは、行動の現れる頻度や程度を知ることができるが、本来、量的な分析・考察よりは、質的分析・考察を行うことに目的があり、その項目・カテゴリーの構成も分析の目的に合致するように選ぶ必要がある。

この方法の特徴は、はじめにカテゴリーが設定されており、それに基づいて行うことから観察に集中することができ、またその記録にあまり時間を要しないことが長所の一つである。しかし、カテゴリーが設定されているので、決められた特定のことがらのみを観察し記入することになり、児童の行動、場面のすべてをこの観察記録から読み取ることは難しい。さらに、教師や学習者の行動を観察し、即座にそれをカテゴリーに同定することができるようにするには、事前にその意味を十分吟味し理解しておくことが必要である。

項目の作成にあたっては、場面の推測から項目の設定をはじめめる。その際、項目数を少なくすること、項目に重複がないこと、項目の同定において推測しなくてもよいことが項目を設定し構成することが必須条件である。そこで、同じような研究目的で、既につくられてある項目を参考にするとよい。

図5に実際の観察記録例を示す。これは、学級内から教授学習過程の分析のために選んだ児童・生徒の授業中における行動を観察するためのものである。観察は、「学習者の学習への意欲的・積極的行動（挙手、発言等）」「意欲面（独り言、確かめ等）」「意欲的でない行動（よそ見、いたずら等）」の3つの視点から分析しようとするものである。観察メモ欄（備考欄、自由記述）を設けて、項目の同定に関わる具体的記録を記述しておくのも後の分析の際に役立つ。

また、授業分析カテゴリーに基づく記録法もある。日本で、多く用いられているカテゴリーとしては、教師と学習者の言語行動に基づく相互作用に焦点をあて時系列データとして記録し分析できるフランダース（FIAC: Franders' interaction analysis category）や、OSIA（Observational System for Instructional Analysis）等のカテゴリーを基盤としたものがある。（表3にOSIAの教授・学習行動のカテゴリーを示す）図6にOSIAのカテゴリーによる観察記録用紙を示す。授業からFIACやOSIAのカテゴリーによって得られたデータは、パーソナルコンピュータを用いて即時に処理する方法がとられている。

④ 評定尺度法

観察目的に応じて行動、態度等について観点を定め、望ましき、価値の程度の差を表す3～7段階の短文を列記して、個々の学習者のそれが該当する段階を判定する方法である。

図7は、1時間の指導過程をいくつかの分節に分け、その分節ごとに抽出児の様子を見ていこうとするものである。その分節における、児童の具体的な行動の記述と評価の観点のチェックを行い、評定を（-2、-1、0、1、2）の5段階で示す方法である。授業の教授学習過程における、子どもの活動の評価であり、それは児童・生徒を通して教師の教授行動の評価にもつながるものである。この観察方法は、観点が決められているので視点を狭めてしまうこともあるが、図7のように教師や児童の行動を記述する欄を設けることにより、評定のポイントや評定に表れないことを記録として残す方法もある。

表3. OSIAの教授・学習行動のカテゴリー

	教師の 行動記号	行動	児童・生徒の 行動記号
授業内容 に関する もの	T 1	授業内容に関する説明	S 1
	T 2	授業内容に関する要請に対する応答	S 2
	T 3	授業内容に関する情報の提示	S 3
	T 4	授業内容に関する要請	S 4
評価に関 するもの	T 5	修正フィードバック	S 5
	T 6	確認	S 6
	T 7	受容	S 7
	T 8	肯定的個人判断	S 8
	T 9	否定的個人判断	S 9
授業運営 に関する もの	T10	授業運営に関する説明	S10
	T11	授業運営に関する要請に対する応答	S11
	T12	授業運営に関する情報の提示	S12
	T13	授業運営に関する応答の要請	S13
沈黙活動	T14	沈黙によるかくされた活動	S14
	T15	沈黙による明白な活動	S15
その他	X	授業としての機能をもたない行動	X
	Y	相互作用の分離記号	Y

図6. OSIAのカテゴリーによる観察記録用紙

OSIAの授業分析カテゴリーによる分析

対象の授業

1. 日 時 年 月 日 () 第 校時
 2. 学校名、学年・組 学校 第 学年 組
 3. 授業者 (教育実習生・教諭) 4 教科・題材 (単元名)

作成者

コード	1	2	3	4	5	6	7
説明	T 1						
要請への応答	T 2						
情報提起	T 3						
応答の要請	T 4 a						
	T 4 b						
	T 4 d						
評価	T 5						
	T 6						
	T 7						
	T 8						
	T 9						
授業運営	T10-13						
沈黙	T14-15						
分離記号	X, Y						
沈黙	S14-15						
授業運営	S10-13						
評価	S 9-5						
応答の要請	S 4						
情報提起	S 3						
要請への応答	S 2 d						
	S 2 c						
	S 2 b						
	S 2 a						
説明	S 1						

-メモ-

.....

図7. 評定尺度法による授業観察例

— 第1学年「おもしろい話」 —

指導課程 (教師の発言)	観 点							評 定 尺 度 -2 -1 0 1 2	行動記述欄 (不適応行動を中心にした 観点項目の詳細メモ及びその他)	
	興味・関心	意欲	理解度	発表・挙手	集中度	作業態度	技術態度			雰囲気
1. おもしろかった筋や場面や表現をあげさせる。 とってもおもしろかったこと。 このあとどうなるかがおもしろい。	•	•	•	•	•					かたくなっている。机の上、筆箱だけ姿勢は悪いが見ている。 口の中に手を入れている。 手をあげそうであげない。 手をあげたが、さされない。 ねずみが穴をあけた(座ったまま発言) イスをかたがた
2. 学習のめあてをつかませる。 いもでつくったんだなかないところがこのつぎどうしたかなほとにたべられたなんかたりないね作ったとき親ゆび太郎はどう思いましたか。もうお船はつくらない。もうもうお船は。		いも まめ			•					口の中に手を入れている。 挙手した。 挙手。 絵を出しても反応しない。 挙 こんどは船をこしらえた(つぶやいている) 挙 はなをほじくっている。 いいです。と声をだす。 「おうまよおうま……」大きな声で読む。 いいです。 下をむいているが 挙
3. おやゆびたろうになって乗り物を考えさせる。 自分でお話にないものをつくろう。 これを作ろうという どうしても困った人	•	•								挙 挙 ニンジンを取りだす。 先生から声をかけられたが作るものがきまっていない。 「先生さして」のびあがって指名をもとめる。 ニンジンならロケット まだあるよ。 いたずら 注意される。 さっき ゆったんじゃなくてもいいと質問
4. 会話表現を考えさせ用紙に書かせる。 (のりものをつくりましょう。)	•				•	•				•車のようなものをつくっている。 •後の女の子と話している。 •棒がささらないので先生にたすけをもとめる。 •また、助けてもらいに行く。 •紙をもらおうとすぐ記入
5. 書いたものを発表する。 (40人のことばを聞けるかな。 おはなしつくったらどんな気持ち。)				•						•いっしょうけんめい話している。 •おはなしづくりはおもしろい。
6. 5の続きを書き続けさせる。	•				•	•				

(東京学芸大学附属大泉小学校における授業より)

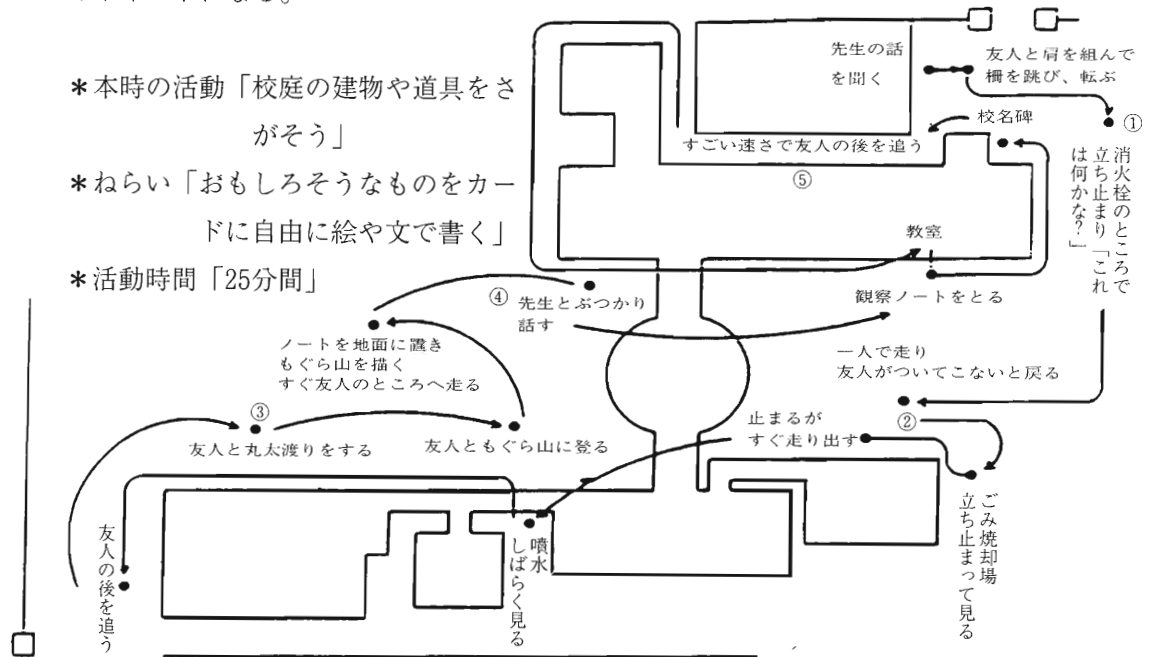
⑤ 図 示 法

観察の目的に即して、生じた行動を図に示して記録する方法である。教室の席に座っての授業で教師の質問に対するそれぞれの児童・生徒の反応・応答を観察したり、学習課題に対するそれぞれの児童・生徒の反応・応答を観察したりするときに、予め用意してある座席表に記録することにより、素早く、落ちなく、重なりなく観察し、記録することができる。また、児童・生徒の空間的移動における活動・行動の方向や内容を記録し、そこから授業の内容・方法（あるいは学習者の学習内容・学習方法）を観察し、わかりやすく記録することができる。活動を主体とした小学校の生活科、中学年の理科、社会科、さらに総合学習等の授業の観察記録、さらに昼休みや放課後等のロングタイムの休み時間における子どもの観察記録に適しているといえよう。

ア. 校舎外での活動における方法

1) 活動を主体とした授業における観察記録の事例

小学校3年社会科「校内の建物や道具をさがそう」というテーマの授業における学習者の観察記録を図8に示す。学習者の行動とともに、どこの場所で何に注目したのかが観察記録のポイントになる。



問題ポイントについてのコメント

- (ポイント1) すぐに興味を引かれるものを発見して、友だちに向け問いを発している。同じ疑問をもって欲しいと思っているようだ。
- (ポイント2) 非常に興味を引かせるものに出会ったが、友だちがついてこないのでもとに戻った。一人になりたくないという気持ちが強いようだ。
- (ポイント3) ここまで観察して、A君は友だちの行動軌跡の周辺を動き回っているという印象だ。よほどその友だちと離れたくないらしい。
- (ポイント4) 先生と話している間に友だちにおいていかれ、一人で観察をはじめますが、友だちを見かけるとすぐ走り出す。友だち中心の行動をとっている。
- (ポイント5) 友だちを追って校舎の周りを走り始める。友だちにおいていかれたくない一心で、観察学習の方がすすんでいる。

図8. 図示法による校舎外での活動を中心とした授業観察例

2) 休み時間等における活動の観察・記録の方法

観察の視点としては観察の目的によるが、昼休みや放課後等のロングタイムの休み時間などでは、観察対象である子ども自身行動や友人との関わりに焦点があてられる。

学校内にどこで、どのような遊具等を活用し、だれと、どのような活動（遊び）をしているのか。また、どのような対象やことがらについて興味・関心を持っているのか。というような視点から観察することにより、子どもの発達や特性を理解する上で貴重な情報を得ることができる。またこの情報は、子どもの生活の把握や、教材研究や授業設計を進める上で重要な要素となる。

観察したことがらの記録として、あらかじめ図9のような学校内の白地図を作っておきそれに記入する場所、対象、時間等を整理しやすい。

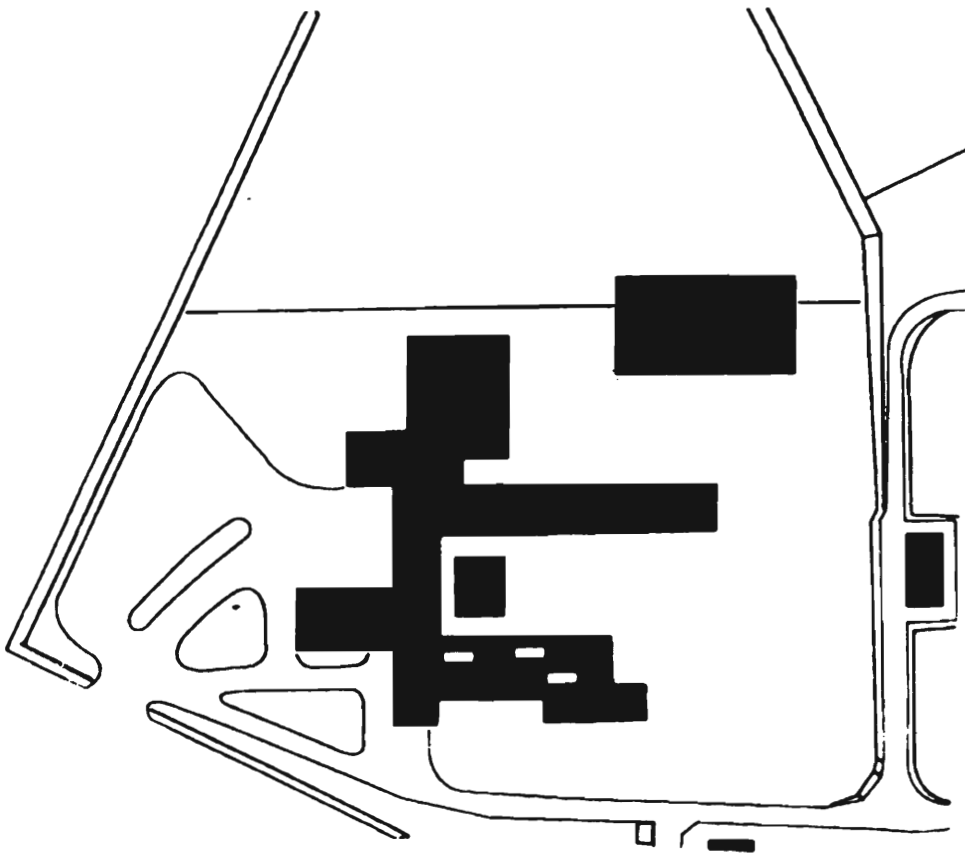


図9. 休み時間等における校舎外の活動観察・記録の用紙例

イ. 授業における活動等の記録方法と事例

教室において机に座って学習する場合は、座席表の活用

授業における学習者の行動の観察記録では、学習（授業）のねらいと学習者の行動とそこにおける学習者の興味関心の対象や意欲というような面に観察の視点を設定していくようになる。例えば、授業の教授・学習過程の「導入部、展開部、まとめ」のそれぞれに段階の「課題の提示、主質問、課題追求活動、発表、まとめ等」の活動におけるそれぞれの学習者の活動、表情、意欲等について、観察記録する。この記録の数時間分の資料から、それぞれの学習者の学習に対する活動の様子や意欲等について分析することができる。図10は、附属函館小学校の授業終了後に子どもが、次の授業でどのようなことを学習したいかを座席表にまとめたものである。

单元名 「変化の秘密をさぐるう」(比例と反比例)

学習問題

面積が 24 m^2 の四角い土地があります。この土地のたてと横の長さの間には、どんなきまりがあるか調べて、式に表しましょう。

- ① $X \times Y = 24$ だから $X \times Y = \text{もと}$ になる数
- ② 24 が面積だから、もとになる数になり、 $X \times Y = 24$ となる
- ③ $X \times Y = 24$ を變形して $Y = 24 \div X$ となる

1.	2.
式でわかりやすくしたので、グラフで表した。比例のグラフは直線ですぐ変わったので、反比例の特ちょうを目盛りで表す。	反比例のXとYの変化をわかりやすくするために式を使ってグラフを出した。「もとにする数(X×Y)」を使うと、グラフは直線が左上にいくと思う。
3. 式で表すと変化する仕方がわかりやすくなると思うので、グラフをかきたい。片方が増えたとすると、片方が減ると、縦は右なると、横は左なると、縦は下がると思う。	9. 反比例をわかりやすく表した。割合が上がるから、増え方を減らして注目してみたい。
4. 反比例のグラフを表現したい。反比例は同じ割合で増えるので、ここに注目すると、比例とまっただけで増えると思う。	8. 反比例は同じ割合で増えるので、どんなグラフになるのか調べたい。反比例は同じ割合で増えたり減ったりしないのでグラフはジグザグになると思う。
5. 反比例をくわしく表すためのグラフをかきたい。反比例の特ちょうを、点を取り、線の位置を調べる。	7. 見ただけでわかるように、反比例をグラフに表したい。Xが上から下へ下がるから、下がると思う。
6. 比例と変化の仕方を比べたいので、反比例の特ちょうをグラフで表したい。今度は、同じ割合で増えないので、比例のとくのように直線にはならないと思う。	6. 反比例の仕方を比べて、Xが上から下へ下がるから、下がると思う。
7. 比例と変化の仕方を比べて、Xが上から下へ下がるから、下がると思う。	5. 反比例の仕方を比べて、Xが上から下へ下がるから、下がると思う。
8. 反比例は同じ割合で増えるので、どんなグラフになるのか調べたい。反比例は同じ割合で増えたり減ったりしないのでグラフはジグザグになると思う。	4. 反比例の仕方を比べて、Xが上から下へ下がるから、下がると思う。
9. 反比例をわかりやすく表した。割合が上がるから、増え方を減らして注目してみたい。	3. 式で表すと変化する仕方がわかりやすくなると思うので、グラフをかきたい。片方が増えたとすると、片方が減ると、縦は右なると、横は左なると、縦は下がると思う。
10. 比例と反比例のグラフのちがいを調べたい。反比例の特ちょうと式の変化の仕方をくわしく調べて、比例のグラフのちがいを調べたい。	2. 式で表すと変化する仕方がわかりやすくなると思うので、グラフをかきたい。片方が増えたとすると、片方が減ると、縦は右なると、横は左なると、縦は下がると思う。
11. 比例と簡単に比べるために、グラフをかきたい。反比例は同じ割合で増えないので、直線にならないと思う。	1. 式で表すと変化する仕方がわかりやすくなると思うので、グラフをかきたい。片方が増えたとすると、片方が減ると、縦は右なると、横は左なると、縦は下がると思う。
12. 比例のグラフと変化の仕方がどう違うのか調べてみたい。反比例は同じ割合で増えないので、直線にならないと思う。	10. 比例と反比例のグラフのちがいを調べたい。反比例の特ちょうと式の変化の仕方をくわしく調べて、比例のグラフのちがいを調べたい。
13. 反比例の特ちょうを表現したい。反比例は同じ割合で増えないので、直線にならないと思う。	9. 反比例をわかりやすく表した。割合が上がるから、増え方を減らして注目してみたい。
14. 比例のとくのようにグラフにきまりがあるかもしれないので、反比例のグラフをかきたい。点の位置や変化の仕方を注目してみたい。	8. 反比例は同じ割合で増えるので、どんなグラフになるのか調べたい。反比例は同じ割合で増えたり減ったりしないのでグラフはジグザグになると思う。
15. 反比例のグラフを表現したい。反比例は同じ割合で増えないので、直線にならないと思う。	7. 見ただけでわかるように、反比例をグラフに表したい。Xが上から下へ下がるから、下がると思う。
16. 比例は上下同じ割合で増えるが反比例は上下ちがうので、まずグラフにどう表すのか調べたい。	6. 比例と変化の仕方を比べて、Xが上から下へ下がるから、下がると思う。
17. 反比例を式で表した。グラフで表したい。反比例は上が増えたら下は減るから変化のちがいを比べる。	5. 反比例をくわしく表すためのグラフをかきたい。反比例の特ちょうを、点を取り、線の位置を調べる。
18. 比例のグラフは直線(同じ割合)になっていくけど、反比例はどう表されているのか考えたい。XとYの変化に着目してみると、直線にはならないと思う。	4. 反比例のグラフを表現したい。反比例は同じ割合で増えるので、ここに注目すると、比例とまっただけで増えると思う。
19. 比例の時、グラフにきまりがあるから、反比例のグラフのきまりを見つけない。反比例は、変化の仕方に注目する。	3. 式で表すと変化する仕方がわかりやすくなると思うので、グラフをかきたい。片方が増えたとすると、片方が減ると、縦は右なると、横は左なると、縦は下がると思う。
20. 特ちょうでグラフを使い分けたい。Xが2倍、3倍になると、Yが1/2、1/3...と減っているから、下に行くようにしたい。	2. 式で表すと変化する仕方がわかりやすくなると思うので、グラフをかきたい。片方が増えたとすると、片方が減ると、縦は右なると、横は左なると、縦は下がると思う。
21. 比例のとくを表現したい。反比例は同じ割合で増えないので、直線にならないと思う。	1. 式で表すと変化する仕方がわかりやすくなると思うので、グラフをかきたい。片方が増えたとすると、片方が減ると、縦は右なると、横は左なると、縦は下がると思う。
22. 反比例をもっとわかりやすく表すために、見たい。XとYの増え方、減り方に着目して曲がり方や向きに気をつける。	10. 比例と反比例のグラフのちがいを調べたい。反比例の特ちょうと式の変化の仕方をくわしく調べて、比例のグラフのちがいを調べたい。
23. 比例と反比例の式の共通点やちがいを比べて、XとYの増え方、減り方に着目して曲がり方や向きに気をつける。	9. 反比例をわかりやすく表した。割合が上がるから、増え方を減らして注目してみたい。
24. 式を表す表を使ってみたら、わかりやすかった。反比例は、比例のとくを比べてみる。反比例は、比例のとくを比べてみる。	8. 反比例は同じ割合で増えるので、どんなグラフになるのか調べたい。反比例は同じ割合で増えたり減ったりしないのでグラフはジグザグになると思う。
25. 比例のとく、グラフで簡単にわかりやすく表した。反比例は、比例のとくを比べてみる。反比例は、比例のとくを比べてみる。	7. 見ただけでわかるように、反比例をグラフに表したい。Xが上から下へ下がるから、下がると思う。
26. 比例か反比例かをわかりやすくするために、反比例のグラフを考えた。比例のとく、棒グラフや点を結んだので、反比例もそこに注目すればいいと思う。	6. 比例と変化の仕方を比べて、Xが上から下へ下がるから、下がると思う。
27. 反比例の特ちょうをグラフで表したい。比例は同じ割合で増えるけど、反比例は同じ割合で増えないので、縦は折れ線グラフで減ると思う。	5. 反比例をくわしく表すためのグラフをかきたい。反比例の特ちょうを、点を取り、線の位置を調べる。
28. 比例は式からグラフにしたら、わかりやすかった。反比例もわかりやすかった。反比例は同じ割合で増えないので、縦は折れ線グラフで減ると思う。	4. 反比例のグラフを表現したい。反比例は同じ割合で増えるので、ここに注目すると、比例とまっただけで増えると思う。
29. 比例と反比例のちがいを表現したい。反比例は、比例のとくを比べてみる。反比例は、比例のとくを比べてみる。	3. 式で表すと変化する仕方がわかりやすくなると思うので、グラフをかきたい。片方が増えたとすると、片方が減ると、縦は右なると、横は左なると、縦は下がると思う。
30. 反比例は、比例のとくを比べてみる。反比例は、比例のとくを比べてみる。	2. 式で表すと変化する仕方がわかりやすくなると思うので、グラフをかきたい。片方が増えたとすると、片方が減ると、縦は右なると、横は左なると、縦は下がると思う。
31. 反比例の関係を簡単に表すためにグラフで表してみたい。反比例は、比例のとくを比べてみる。反比例は、比例のとくを比べてみる。	1. 式で表すと変化する仕方がわかりやすくなると思うので、グラフをかきたい。片方が増えたとすると、片方が減ると、縦は右なると、横は左なると、縦は下がると思う。
32. 比例のとくは右上に上がって、反比例はその逆だと思いたい。反比例は、比例のとくを比べてみる。反比例は、比例のとくを比べてみる。	10. 比例と反比例のグラフのちがいを調べたい。反比例の特ちょうと式の変化の仕方をくわしく調べて、比例のグラフのちがいを調べたい。
33. 表でX、Yのちがいを比べてみる。反比例は、比例のとくを比べてみる。反比例は、比例のとくを比べてみる。	9. 反比例をわかりやすく表した。割合が上がるから、増え方を減らして注目してみたい。
34. 反比例と比例は反対だから、グラフのかき方を知らない。比例と特ちょうを比べてみる。反比例は、比例のとくを比べてみる。反比例は、比例のとくを比べてみる。	8. 反比例は同じ割合で増えるので、どんなグラフになるのか調べたい。反比例は同じ割合で増えたり減ったりしないのでグラフはジグザグになると思う。

図10. 座席表を活用した記録の事例

⑥ 抽出児の観察法

カリキュラムや教材を開発し、それを児童・生徒に教育実践という形で試行し評価・分析することがある。このようなとき、学年や学級全体の約100名あるいは、40名を対象にすることは当然であるが、観察記録し、分析するデータ量を軽減し、確かな分析を行うに必要な数まで小さくするために指標となる学習者（抽出児という）を選び行うことがある。数学でいう標本調査（サンプル調査）と同じ考え方である。教育においては抽出児は、「〇〇くんを何とかしたい」という指導上の願い（ピグマリオン効果?）を込めて、選ぶことが多い。

この抽出児による観察記録と研究方法について梅澤実は次のように示している。

1) 抽出児の選択の観点として、

- ・観察しやすいこと
- ・比較対象できる子
- ・抽出児の人数

の3点をあげている。

2) 選び出した抽出児について、プロフィールを作成する視点として、

- ・パーソナリティー
- ・体験・経験
- ・対人関係

の3点をあげている。

3) 授業において観察する観点として、つぎの4点をあげている。

- ・抽出児が意欲的に取り組んだのは、授業のどんな場面か
- ・そのときの抽出児の特徴的な様子はどんなだったか
- ・学級構成員にみられる一般的な傾向に比べて抽出児の状況はどんなだったか
- ・抽出児の特徴的な学習状況は、抽出児のどんな状況によって支えられているのか（抽出児のプロフィール作成の観点に比べて観察）

(4) 観察・記録を行うための準備

① 記録メディア

授業記録は、研究目的等に応じて、「①観察（授業を頭のなかにタタキ込む、焼き付ける）、②観察筆記（メモ、逐語記録）、③写真・絵、④8ミリ、16ミリフィルム（映画）、⑤オーディオ・テープレコーダー、⑥ビデオ・テープレコーダー」等のメディア等に記録され、そして、最終的に、文字化され「授業記録」（記述された授業記録 Written Protocol）が作成される（井上光洋1996）。

教育実習では、「②観察筆記（メモ、逐語記録）」によることが多い。観察記録用紙として、B4版、A4版、B5版等の記録用紙、あるいはノート、手帳、カード等を用いることが多い。授業観察は、通常教室の脇に立つて行うことが多い。そこで、用紙単体であると記入しにくいので、「紙ばさみ」などを用いると書きやすい。どのような用紙に記録するとしても、観察記録の基礎的事項としての記録用紙には「実施年月日、場所（学校・教室）、授業者名、児童生徒の所属、人数、教科名、単元・教材名、……等」のフェイス・タイトルが不可欠である。また、記録したメディアは、ファイルしまとめて保管しておくことが必要である。

さらに、学級の児童・生徒の座席表（氏名が記入してあればなおよい）を用意しておく、前

述の図示法のように、授業のコミュニケーション（相互作用）だけでなく学級の児童・生徒の様子についても観察記録することができる。

授業は前述のように流れがあり、その記録には、欠落や不正確なものが生じるそれを補うために「⑤オーディオ・テープレコーダー、⑥ビデオ・テープレコーダー」そして「MD（ミニディスク）、ICレコーダー」等のメディアを活用するとよい。

② 観察・記録を行う位置

観察・記録は、教師の活動と児童・生徒の活動がよく観察できる場所で行う。教室の後方から行うことが多いが、できれば、教室前方あるいは側面から行うことにより、児童・生徒の表情、視線、机上の学習活動等を観察することができる。

(5) 観察・記録の信頼性

どのような実験、調査あるいは観察が行われても、その手順・手続きが正しく行われているかチェックする必要がある。また、測定機器の精度が高く、その手順・手続きが正しくても、その実験、調査、観察の観測・測定値には、誤差を伴うことは周知の通りである。教育実践を対象とした観察・記録においても、どのように正確に観察・記録を行ったとしても、そこにはいわゆる誤差が生じる。実験、調査あるいは観察では、いかに誤差を少なくし、安定した測定を行うかという問題は、信頼性（reliability）の問題という。端的にいえば、観察する対象を正確に観察しているかということ、その方法で行えば複数回行って同じようなデータを得ることができるかということである。

信頼性に関わる問題として、次のことがあげられる。

- ・観察の基準
- ・データ量の問題
- ・概念的妥当性
- ・観察者と観察時期

教育実習では、複数の実習生が同一学級に配属され、教育実践の具体的活動である授業（教師と学習者のコミュニケーション・相互作用）を観察したり、休み時間などの子どもたちの活動、放課後の部活などの活動、さらにその子どもたちに対しての教師の指導の活動を観察したりする。そこで、観察した結果の信頼性について、次のことを評価・検討する必要がある。

- ① 複数の観察者が、同時に、同じ対象をそれぞれ独立に観察した結果の一致
- ② 同一観察者が、複数の観察時期に観察した結果の一致（同一観察者内の一致）
- ③ 複数の観察者により異なる時期に観察した結果の一致

(6) 観察にビデオやオーディオ・テープ等のメディアを活用した記録の処理法

最近では、廉価で高性能のビデオ関連機器が普及してきたことにより、教育実践をビデオに収録することが多くなってきた。しかし、そこから記述化した授業記録を作成し研究する方法を積極的に採っているところは多くない。その理由のひとつに、書き起こしに時間がかかることがあげられる。

そこで、ビデオ録画を直接分析することが話題となっているが、書き起こさずに分析を行うことは非常に難しい。それは、録音・録画は、時期の流れとともにデータが記録され、再生されるため

に一覧性がない。しかし、書き起こしされ、文字情報となった記録は、圧縮した形でデータを通覧することができる。この一覧性は、時間的順序に制約されずに要素・部分間の比較などが可能となり、その要素間の関係等を分析したり、一般原理等を推論したりしていくために不可欠である。さらに、データを書き起こす過程において、指示代名詞のさす指示対象を同定したり、発話と発話の行為・状況変化を付加することにより発話間のギャップを埋めたりしながら理解を深めることができる（原田悦子、1993）。

1-3. 授業記録からその仕組みを読み取ろう

授業記録の資料化（遷移過程と構造を表現する「授業の構造図」と「教授方略図」）の方法

授業記録を読み、頭の中で授業の流れや方法についてイメージを持ち、その枠組みや構造をとらえ、さらにそれを分析・考察の対象とすることは難しい。そこで、授業記録の作成とともに、その記録を整理し、資料化する方法が課題となる。

授業は教師の質問という働きかけからはじまるが、ドラマのある授業には、限定質問だけでなく類比質問、否定質問が不可欠である（吉本均）。つまり、教師の学習者への働きかけ、学習者のいくつかの考えを比較・対立させながら吟味・検討し、さらに本時の学習のまとめに向かうという学習展開の構造の視覚化の工夫が課題となる。授業の構造図では、類比質問における分析・比較や、否定質問における反対・対立物の提示とそれを媒介とした問答等が視覚的に表現できることが必要である。そこで、授業における教師の学習者への働きかけ（課題設定・発問）、その課題を解決する学習者のいくつかの考えや活動、そしてその学習者の考えを比較・対立させながら吟味・検討するというような学習展開の過程を構造化し、視覚化するための方法として、授業における教授・学習行動等のキーフレーズ（キーワード、キーセンテンス）を抽出し、情報処理分析の手法を援用し「授業の構造図」を考察した。

「情報処理分析」（R. M. ガニエ、1986）は、学習において子どもがどのような認知過程を辿り、どのような判断（意思決定）や知的能力を必要とし、その結果どのような能力が育成されるのかという、「心的操作」の系列を明らかにする方法であり、学習行為（操作）だけでなく判断（意思決定）という内的過程の流れ図（フローチャート）として図式化し、明らかにできる特徴がある。

授業の構造（内容、遷移過程等）を明確に構造図として視覚的に表現するための手続きを以下に示す。

第1段階（授業の構造図：具体例を図11に示す）

- ① 分析の対象とする授業における教授・学習行動（言語だけでなく非言語も含めて）の中から、授業の目標・内容・方法の視点からキーフレーズ（キーワード、キーセンテンス）を抽出する。
- ② 授業の中の一連の流れ（教授・学習過程）における教授・学習行動を、「ねらい」あるいは「意味・内容」等に基づいて、場面（分節、エピソード、シーン）に分ける。
- ③ 分けられた場面を、「ねらい」あるいは「意味・内容」等に基づいて、教授・学習過程の遷移過程を図示するために、次のルールを設ける。
 - ア) 時間経過は、『上から下へ』を第1原則とする。
 - ・説明等が繰り返されている場面のとき、そこにバリエーションがあり、意味が少しずつ変化しているものについては、「説明(1)」「説明(2)」……というように、時間的経過としてみる。
 - イ) 同じ「ねらい」「意味・内容」の分節内では、『左から右へ』と遷移していく。
 - ・同じ「ねらい」「意味・内容」のもの、「意味・内容」として対峙するものは、横に並べる。

類比質問における分析・比較や、否定質問における反対・対立物の提示とそれを媒介とした問答等が行われている場面は、授業における重要な場面（キーシーン）として読みとれるように、対時していることを明確にする。

ウ) フィードバックfeedbackやフォワードfeed forwardがあったときは関連する事項間を線で結びその関連を表す。

- ④ 教授・学習過程において分けられた場面のいくつかをまとめて、上位の階層の意味づけができるものがあれば、その範囲を点線等で囲む。

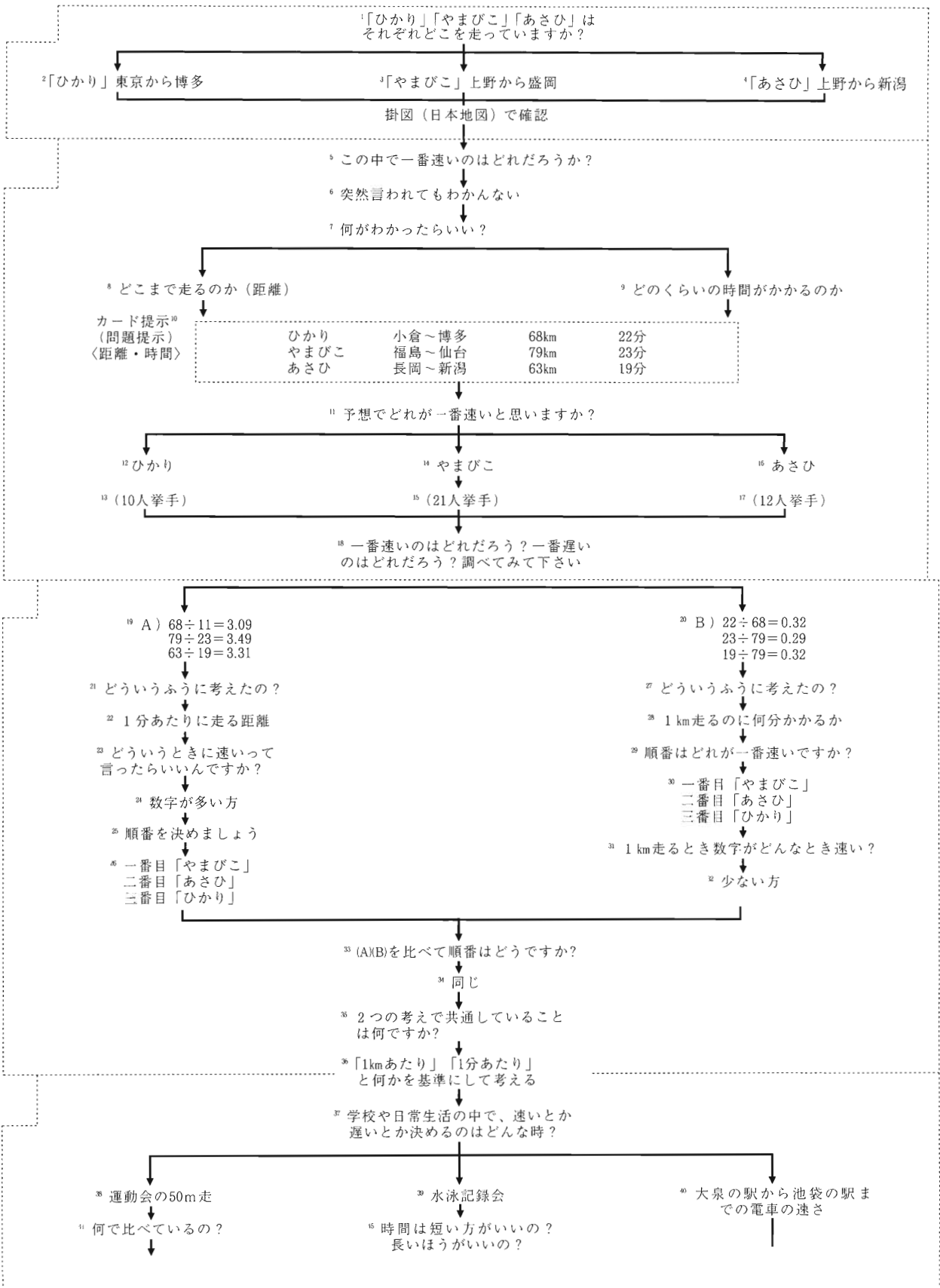
第2段階（授業の教授方略・意図の構造図：具体例を図12に示す）

授業における教授行動は、授業をどのように構成し、どのように学習を展開し、それに対応するための教授のあり方をどうするかという授業展開に関する教授方略に基づく行動である。教授方略は、まず最終目標を設定し、次にそれを達成するために必要な前提条件を前提目標としていくつか設定し、その前提となる目標を順次達成しつつ最終目標へ向かうように構成するという課題分析の考え方に基づいて考察される。つまり、教師は、授業の目標を達成させるために、授業設計時に立案した教授方略に基づき、教授の方策を考案・決定し、教授行動を起こす。さらに、それによる学習者の反応・応答に応じ、対応策を検討・選択し、対応行動としての教授行動を起こす。このとき、授業の目的を達成するために立案した教授方略と教授行動に差異が生じると、その差異を減少させるために、これまでの方策を修正、あるいは新たな教授方略に基づく新しい方策を考案し、実施する。

「授業の構造図」における「場面」のねらい「方略・意図」を考察することからはじまる。この作業では、「授業の構造図」の作成の手続きにおいて、「④教授・学習過程において分けられた場面のいくつかをまとめて、上位の階層の意味づけができるものがあれば、その範囲を点線等で囲む」における「ねらい」を考察することからはじまる。さらに、作成した「授業の教授方略・意図の構造図」に基づき、さらにもう1回「教授方略・意図」について、考察し「図」を作成すると、もう一段階高い教授方略を読みとることができる。実は、1回目の考察による図に表現されるものは、「教授意図」のレベルのものであり、さらにこの2回目の活動によって一段と深く考察され図に表現されるものが「教授方略」といわれるものである。

【参考文献】皆さんがさらに学習をするために役立つと思います。

- 小金井正巳（1981）、授業観察に関する訓練総合システムの開発について、文部省科学研究費補助金・一般研究B研究資料、東京学芸大学
- 重松鷹泰（1970）、授業分析の方法、明治図書
- 東洋他編（1988）、授業を改善する、授業技術講座2、ぎょうせい
- R.M.ガニエ他、持留英世他（訳）（1986）、カリキュラムと授業の構成、北大路書房
- 高田清（1996）、「授業研究における実践記録の意義と方法」、教育実践研究（福岡教育大学教育実践研究指導センター）第4号、pp.43-47
- 吉本均（1995）、発問と集団思考の理論、明治図書、1995
- 佐藤郁哉（1992）、『フィールドワーク』、新曜社
- 川喜田二郎（1967）、発想法、中公新書136、中央公論社
- 中澤潤（1997）、心理学マニュアル「観察法」北大路書房
- 原田悦子（1993）、分析のためのデータ化『プロトコル分析』、新曜社
- 三橋功一（1993）、教育実習ハンドブック、ぎょうせい



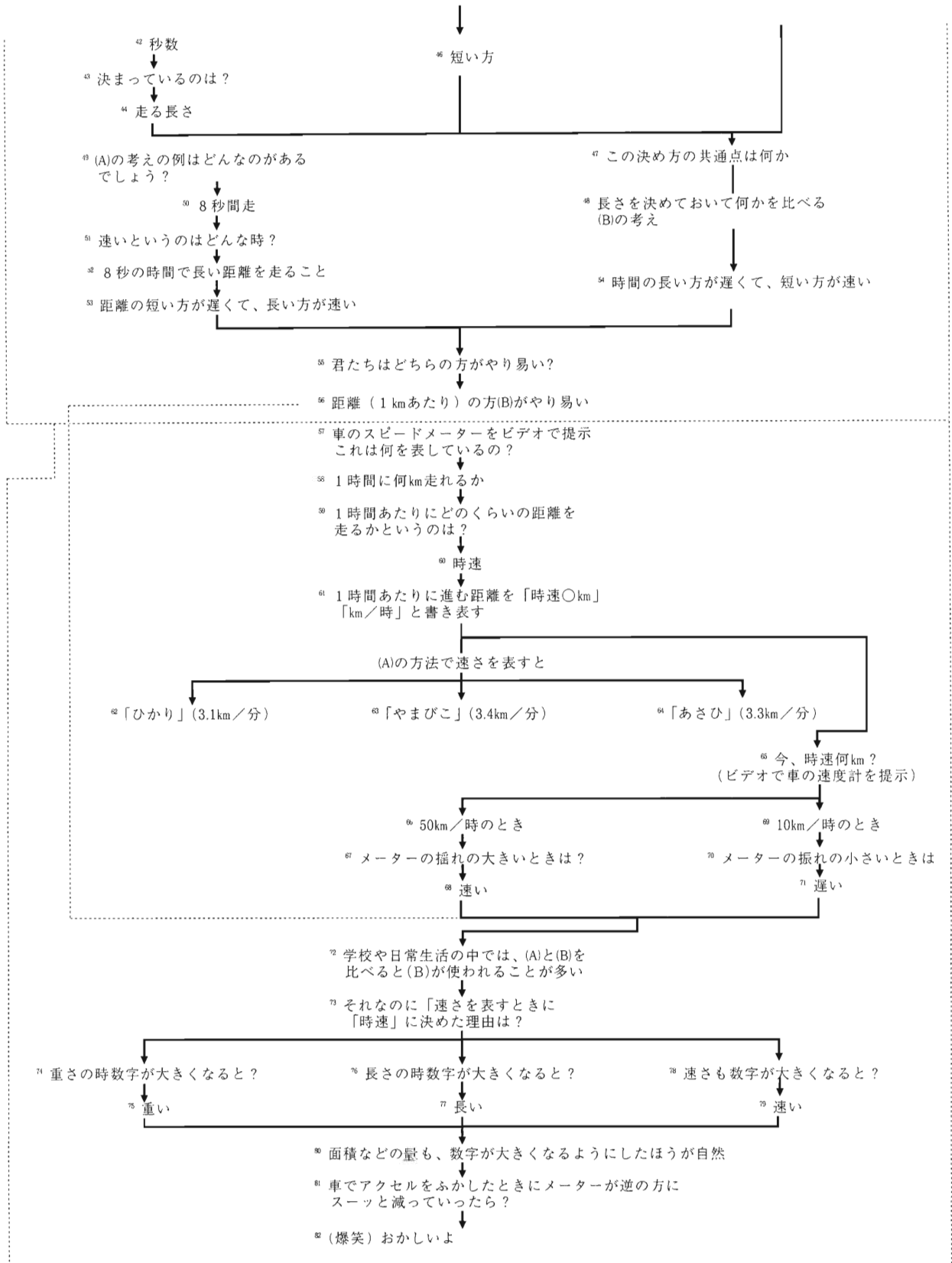


図11. 「速さ (小学校・算数：5年)」授業の構造図

〈「子供の学びとつまずき」(東京書籍：pp.185-186より転記)〉

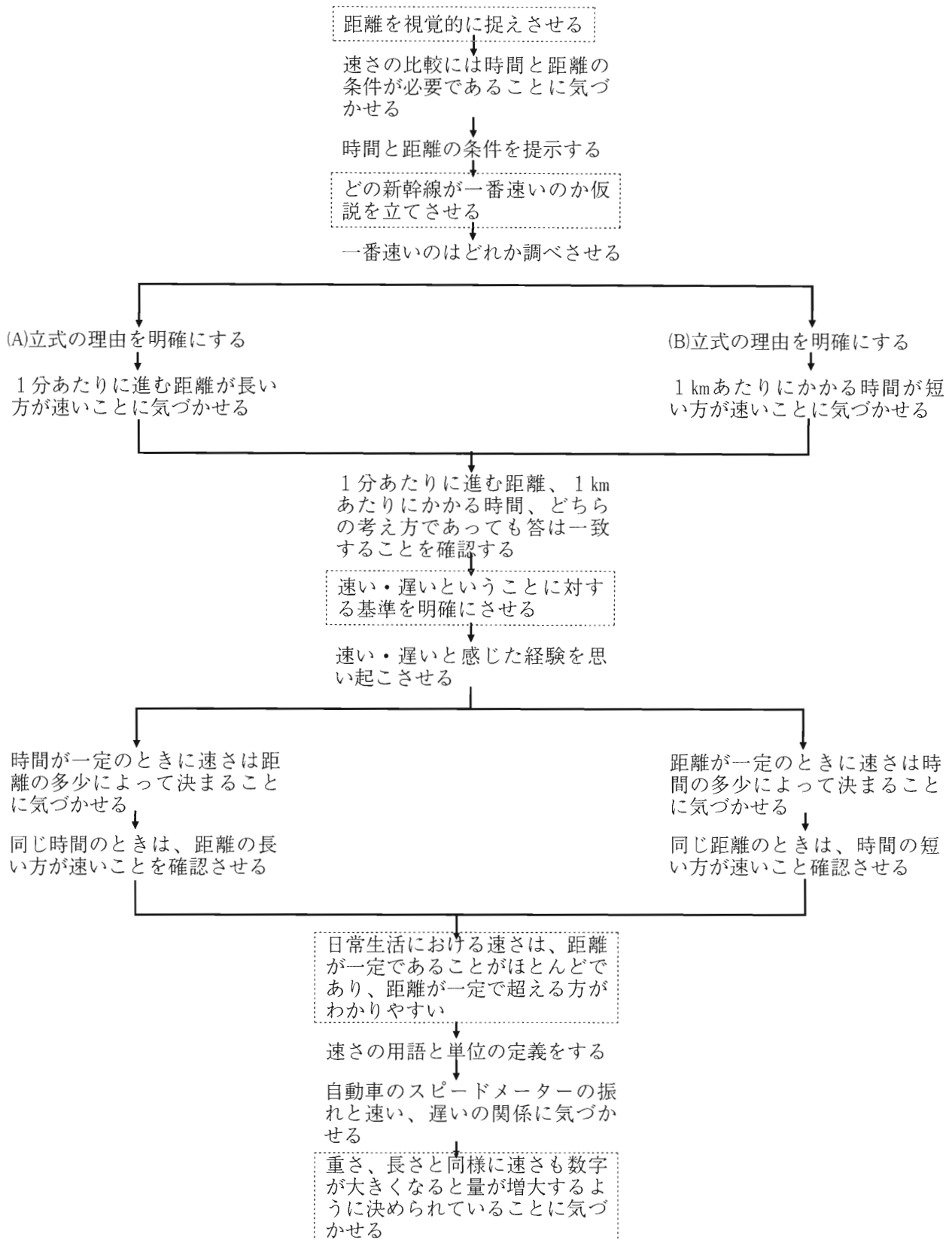


図12. 「図11. 速さ (小学校・算数：5年)」の授業の教授方略・意図の構造図

〈「子どもとメディア」(東京書籍：p.250より転載)〉

2. 学習指導の計画

2-1. 学習指導案作成の目的

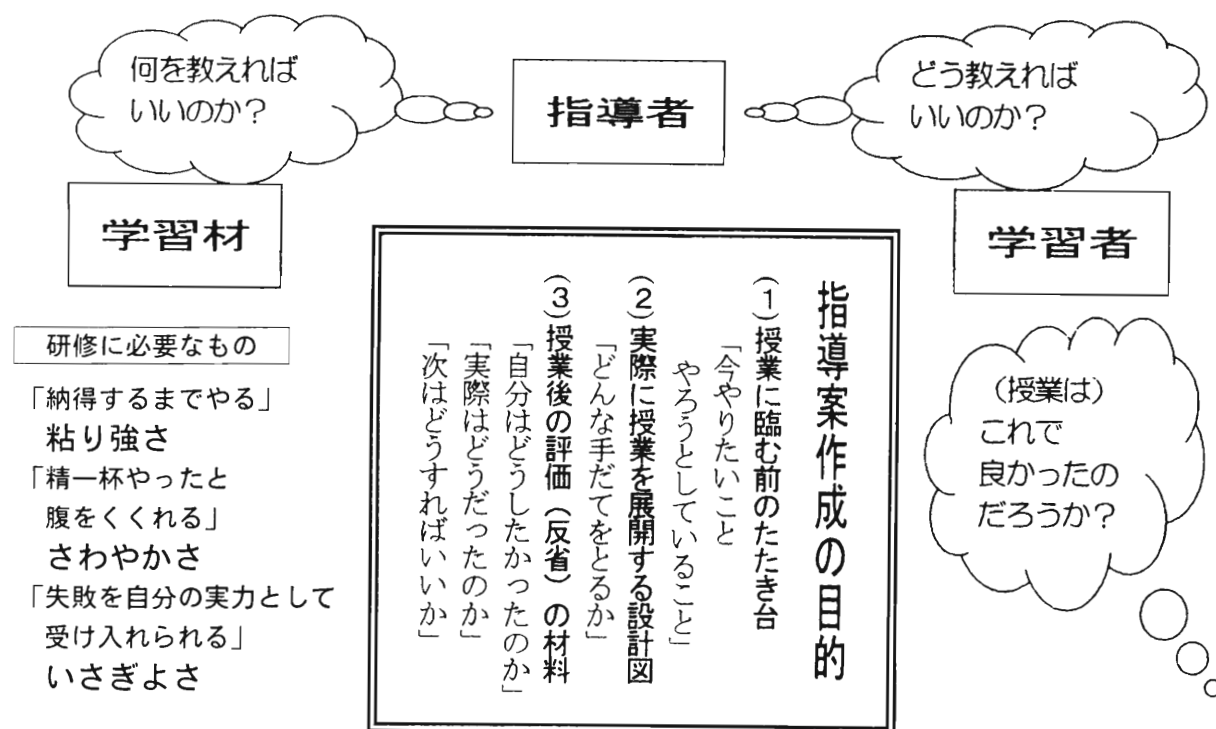
学習指導案は、「今やりたいこと、やろうとしていること」をはっきりさせ、その実現に向けて「どんな手だてをとるか」を明らかにするための、重要な道具です。授業後も、「自分はどうしたかったのか」「実際はどうだったのか」「次はどうすべきか」と振り返るための有効な道具にすることができます。

「何を教えればいいのか」「どう教えればいいのか」「(授業は)これでよかったのか」

教育実習生の「悩み」は、尽きる事を知らないようです。「悩む」こともあっていいのですが、悩んでばかりでは成長することはありません。

学習指導案は、「教師として、今、自分にできることを精一杯やった過程と結果」です。それを「文字に書いてまとめたもの」を持って、授業に臨みます。「ようし、これでやってみよう!」と。

指導案の作成を、「負担、重荷」と感じるか、「教師として自分を成長させてくれる味方である」と受け止めるか、そこが実習生の分かれ道です。納得するまでやる「粘り強さ」、精一杯やったと腹をくくれる「さわやかさ」、今日の失敗を今の自分の実力として受け入れられる「いさぎよさ」、そうしたものは教師として研修する者が持つべき資質です。その研修のための大切な道具が学習指導案なのです。

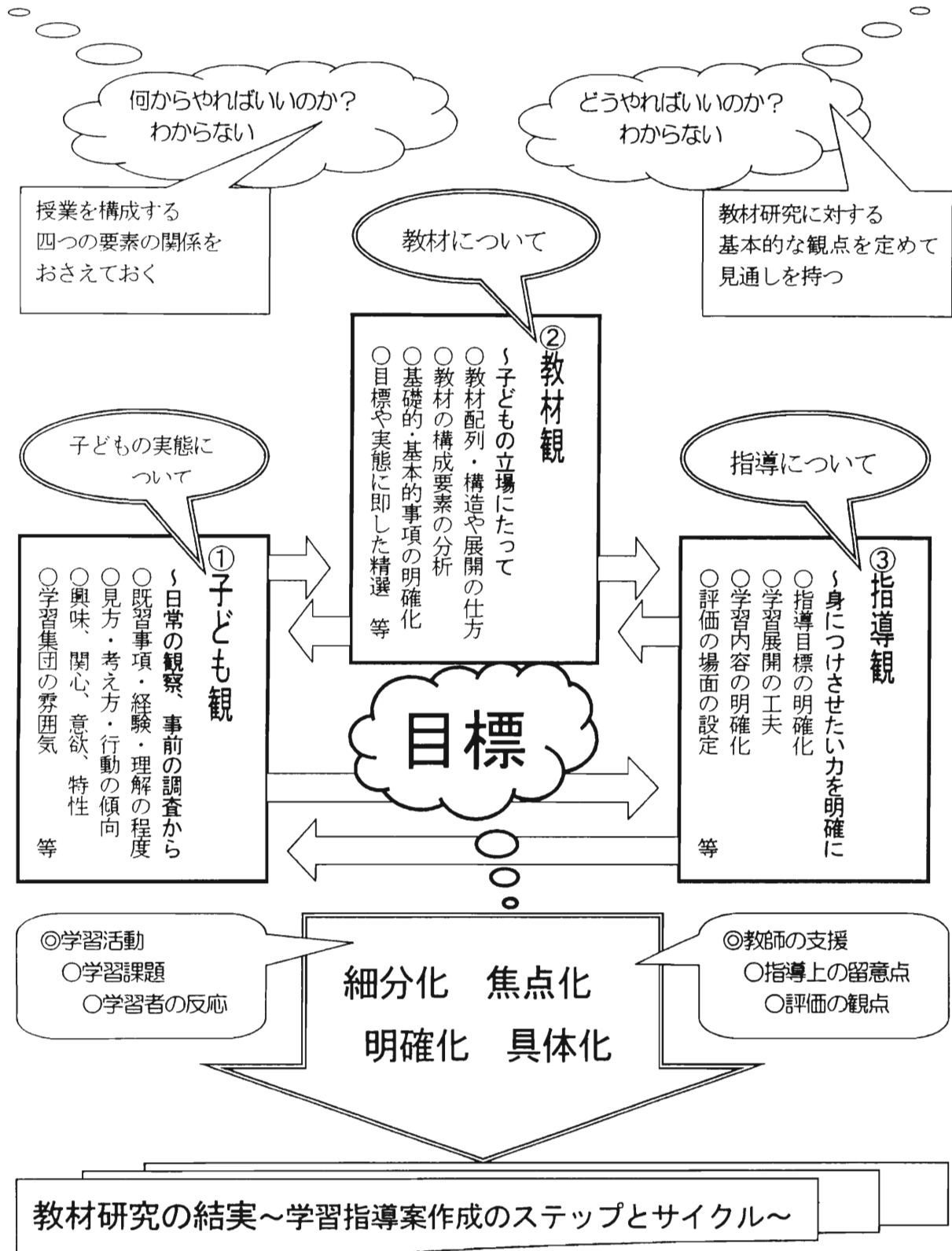


2-2. 教材研究の意義と観点

学習者、教材(学習材)、指導者、そして目標。この授業を構成する4つの要素をよくおさえておくことは、学習指導を進める際の基本です。教材研究は、これらの関係をふまえつつ、教師が確かな見通しをもって授業設計するための営みといえます。

そのためには、教材研究における基本的な観点をしっかりと定めることです。ここでは、①学習者を見る「子ども観」 ②教材をみる「教材観」 ③指導者としての「指導観」の三点から進める教材研究を ④目標(評価観)に結実させる、という「枠組み」の例を図式化してみました。

これらは、唯一絶対のものではありません。同時に、自分がどんな「枠組み」にたって対象をみているか、とらえているかを自覚することは、教材研究の前提です。「今自分は、どういうところに立って、どの方向をむき、どのように物を見ているのか」ということを、自覚するように努めるとよいでしょう。これには、訓練の積み重ねが必要です。



2-3. 学習指導案の例 (北海道教育委員会編 『平成11年度 学校教育の手引き』より)

○○科学習指導案

日時 平成○○年○○月○○日 (○) ○校時

場所 ○○○実験室

生徒 ○○科○年○組○○名

指導者 CT ○ ○ ○ ○

ST ○ ○ ○ ○

通常の教室以外で授業をする場合は、記入します

チームティーチングの場合は、主となる教師 (CT) と副になる教師 (ST) を明記します

1. 単元名 「○○○○」

教科や領域によっては、題材名、主題名とすることもあります
2. 単元について

(1) 教材について、(2) 児童生徒について、(3) 指導の方針についての3点にわたって記述し、教師の授業構想を明確にします。また、校内や教科の研究とのかかわりについて記述する場合があります。
3. 単元の目標

児童生徒の立場に立った表現で記述します。その際、観点別学習状況の評価の観点を考慮して整理します。
4. 指導計画 (○○時間扱い)

時間	☆目標、○主な学習活動	□教師の支援 ◆資料 *評価の観点
1	☆……………に関心をもつ。 ○……………を見て感想をもつ	□……………を見る視点を示す ◆……………のVTR * (関心・意欲) ……………
2 (本時)	☆……………について課題をつくる。 ○……………を調べて見通しをもつ	

単元(題材) についての見通しが明確になるようにします
5. 本時の学習
 - (1) 本時の目標

本時の学習についての目標を記述します。また、児童生徒の情意面の育成にかかわる目標を列記する場合があります。
 - (2) 準備

教科によっては、使用する実験器具、薬品などを記入します。
 - (3) 本時の展開 (2/○○)

段階	○学習活動、●児童生徒の反応	□教師の支援、◆留意点、*評価の観点
導入 (5分)	○前時を想起し、感想を交流し合う ●「……………と思う」「……………のようだ」	□意見の要点を整理し、交流を促す ◆生徒のつぶやきを全体に広げる (関心・意欲) ……………
展開 (25分)	本時の課題「……………しよう」 ○学習計画を立てる	ティームティーチングで指導する場合は、指導者の役割分担を記入しておきます

具体化します

2-4. 学習指導案作成の手順

学習指導の計画は、本来、

- (1) 年間指導計画の具体化
- (2) 単元（題材）の指導計画の具体化
- (3) 学習指導案（単位時間の指導計画）

の段階を踏んでいくものです。しかし、実習はごく短期であり、(3)の一部、多くは、1単位時間の授業計画（本時の展開）とその実践を取りたてて実習することになります。

右の構成例でいうと、1～4の部分の多くが提示されるでしょう。参考例を示したり、なかば決まった計画にそって「5. 本時の学習」のプランをねる場合もあるでしょう。

学習指導案の構成例

- 1 単元（題材・主題）名
- 2 単元（題材・主題）について
・教材観 ・子ども観 ・指導観
- 3 単元の目標
- 4 指導計画（〇〇時間扱い）
- 5 本時の学習
 - (1) 本時の目標
 - (2) 準備
 - (3) 本時の展開
 - (4) 評価

部分的な演習で得た経験

↓ 生かして…

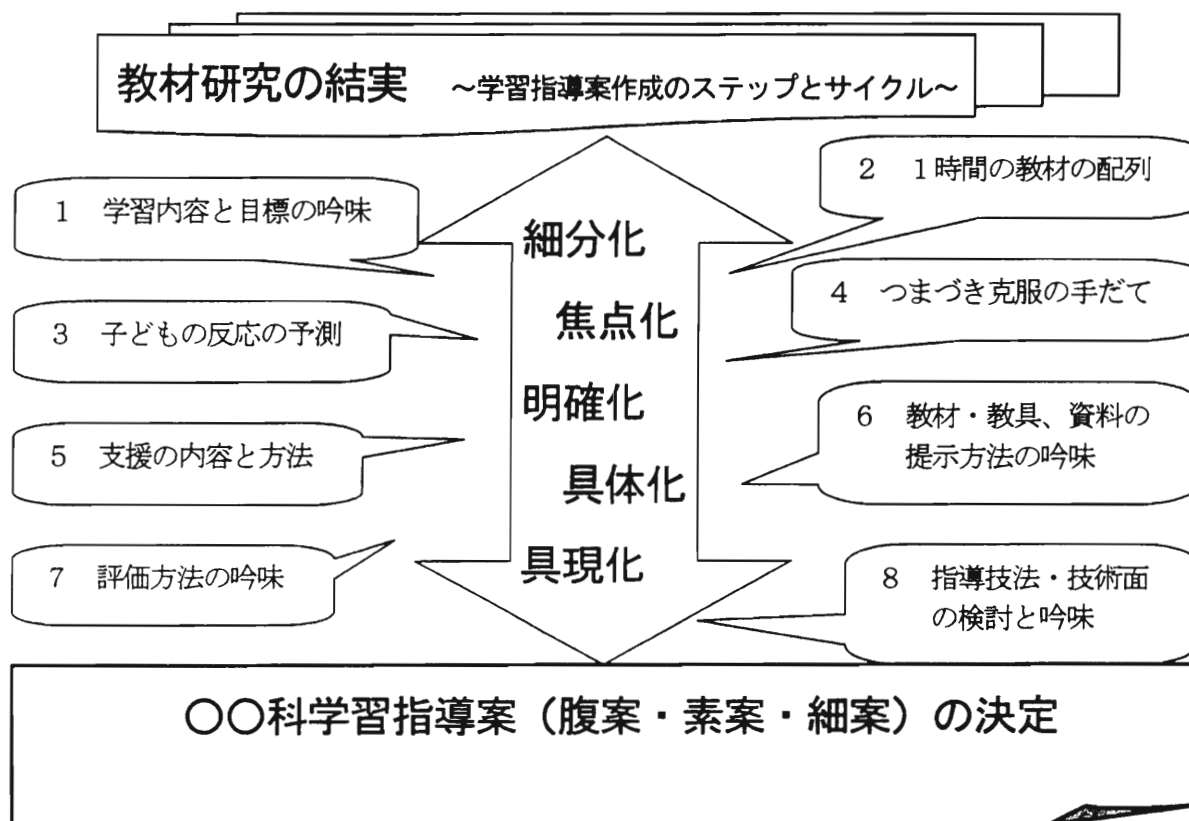
一単元の指導計画

↓ 生かして…

単元の指導計算

そのため、ここでは、本来的な「学習指導案作成の手順」よりも、「本時の学習」に焦点をあてた手順の例を示します。もちろん、これよりもっと前の段階から、自分で計画をねる場合もあり得ます。その際も、指導案作成を細分化した部分的な演習から得たノウハウを、一単位時間の指導、単元の指導へと生かしていくことが大切です。この時、自分の「教材研究の観点」がどうであるか、自覚するように努めることが極めて重要になってきます。

下の手順は一例です。教科や題材の特性によって柔軟に考えて対応することが必要です。



教材研究がある程度進むと、いくつか考えていた「こんな風に進めていこうかな…」というアイデアが、つながり始めます。多くの場合、それは「メモ」の形で表れます。「腹案」の段階です。ある程度材料が増えてきた所で、もう一度基本的な教材研究にもどります。

子ども観から、教材観から、指導観から、目標は…
 細分化・焦点化・明確化・具体化のステップとサイクル…
 素材と方法の吟味、子どもの関心を開くために…
 目標はこれでいいのか、自分は何をやりたいのか、
 それはこのやり方で実現できるのか…

腹案 素案 細案
実習の第一歩を踏み出したのです。「今日の自分の精一杯」それが大事！

今まで自分が積み重ねてきたことを何度もやり直ししながら、
 きちんとした書式にあわせて案を形づくりします…。そして、「できたー！」

「素案」の完成です。

実習生にとって、時間との戦いはさげられないものです。曲がりなりにも「精一杯やった」と胸をはって子どもの前に立ちましょう。本当の実習はそこから始まるのです。「細案」というものが存在するということ、体と頭と胸に刻みこむ実習の第1歩がこの「素案」づくりです。

2-5. 学習過程（指導過程）の各段階の特徴（前掲書『平成11年度 学校教育の手引き』より）

<学習過程の各段階の役割と工夫の観点>

	役割	工夫の観点	教師の働きかけ
導 入	<ul style="list-style-type: none"> ○ こどもの興味・関心や問題意識を高め、自分なりの課題をもたせる。 これまでの学習や経験したことなどに基づき、解決の見通し（おおよその結果、解決の方法や手順、表現方法）をもたせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 問題意識を高める教材との出会い ○ 問題（課題）を自分のものとするような体験的な学習 ○ 問題（課題）を解決する見通しをもたせる 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教材を提示する ・見せる、聞かせる、読ませる、試させる ○ 学習課題をもたせる ・知りたい、調べたいことを明確にさせ、まとめる ○ 解決の見通しをもたせる ・結果を予想させる、解決の手順方法を考えさせる
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子どもが自分なりの考えや方法で問題（課題）を解決したり、互いの考えを表現し合いながら、考えを深め、広げるなど集団での課題（問題）の追求を図っていけるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 興味・関心、思いや願いを生かした活動 ○ 体験的な学習を取り入れた活動 ○ 考えを深めることができる時間と場のある活動 ○ 一人一人の確かな学習を促す活動 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分なりの追求を促す ・子どもの考えや気付きを大切に扱う ・子どもが選択できる多様な学習展開を設定する ・子どものペースに合わせゆとりある活動させる ○ 考えを深めさせる ・互いの考えを比較・検討させる ・個に応じて学習情報を与える ・学習形態、指導形態を工夫する
終 末	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子どもが、展開の過程を通して学んだことをまとめたり、解決の道筋などを振り返り、次の学習への意欲の向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習したことが明確になる活動 ○ 応用したり発展的にとらえたりする活動 ○ 学習を振り返る活動 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 考えをまとめさせる ・ことばや絵などで表現させる ○ 考えを深め広げさせる ・学んだことを他へ適用させる ・新たな課題への意欲の喚起を促す ○ 学習を振り返る自己評価や他者評価、相互評価などをさせる

3. 授業実施の工夫と授業技術の基本

3-1. 授業実施の工夫

学習指導案を作成しても、すぐにはいい授業ができるわけではない。学習指導案がいい脚本、緻密なシナリオであるとすれば、それをもとにより芝居を演じる能力も同時に求められる。

授業を展開していく上で必要なのは、ひとことで言えば“コミュニケーションを豊かにする”ことである。しかしそれだけを繰り返して心がけていても、実践的指導力は高まらない。そこで本章と次章では、教師－子ども、あるいは子ども－子どものコミュニケーションをより活発にするために必要な、授業の実施段階での工夫をいくつか考えてみたい。

(1) 「発問」をじっくり考えてみよう

授業は、いくつかの発問を核として構成され展開されるものであるが、単なる学習課題とはどうもちがうようだ。教師が頭の中で、児童・生徒に「こんなことを考えてほしいなあ」とイメージしたものを直接ことばに直してみても、子どもに伝わるとは限らない。実際に、子どもにはたらしかかけるための手だてとして「発問」をどうとらえればよいのだろう。

発問の目的を大きくまとめると次のようになる。

- 児童・生徒の状態を感知し、理解する
- 児童・生徒に興味・関心を持たせる
- 児童・生徒の思考を発展させる
- 深く掘り下げてかんがえさせる
- 探求の態度を養う
- 思考・発想を転換させる

いずれも、十分に子どもの思考や活動を想定したうえで具体的な問いかけの方法を考える必要がある。表1は、井上(1989)による発問の分類である。学習内容の特徴、児童・生徒の実態をふまえて、組み合わせや流れを考えていかなければならない。

表1 発問の種類と具体例(井上 1989)

	機能と特徴	発問を発する際の教師の視点・よく使われる言葉	具体的な例
想起的な発問	想起的な発問は、学習者(児童・生徒)が見たり聞いたりしたことを喚起させる質問であり、また児童・生徒にとっては、すでに学習している事実、定義、それぞれの経験・体験を想起させることが求められている。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 「だれですか？」 ■ 「どこですか？」 ■ 「いつですか？」 ■ 「何がありましたか？」 ■ 「はっきりいうとどういうことですか？」 ■ 「思い出してください」 ■ 「名前を言って下さい」 	<ul style="list-style-type: none"> ① 徳川家康が江戸幕府を開いたのはいつごろですか？ ② 中国の首都はどこですか？ ③ 『伊豆の踊り子』の著者はだれですか？ ④ ピタゴラスの定理とは何ですか？ ⑤ 『ハムレット』を書いたのはだれですか？ ⑥ 高松塚古墳はどこにありますか？ ⑦ 人間の身体の血管の2つの名前は何か？ ⑧ コロンブスがアメリカ大陸を発見したのはいつごろですか？ ⑨ ラジウムを発見したのはだれですか？
理解力に関	理解力に関する発問は、①学習者(児童・生徒)が想起したことを理解しているか、②学習者が今まで学習したことを理解しているか、を調べるものである。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 記述させる ■ 比較させる ■ 対照させる ■ 自分自身の言葉で言わせたり、言い換えさせたり、表現させる 	<ul style="list-style-type: none"> ① この表から日本の人口の年齢構成が直面している問題について、考えて下さい。 ② 衆議院と参議院の役割を比較しなさい。 ③ 江戸時代の生活と今の生活とはどのように違っていますか。 ④ このグラフから、沖縄の年間平均降雨量を求め

<p>する発問</p>	<p>この発問では、児童・生徒に対して、a) 記述(説明)する、b) 主な自分の考えを述べる、c) 比較・対照する、などを発問することになる。</p>		<p>なさい。</p> <p>⑤ この1節は、世界の人口の分布について、私たちに何を伝えていますか？</p> <p>⑥ 酸と塩基の違いは何でしょうか。</p>
<p>応用力に関する発問</p>	<p>応用力に関する発問は、学習者が、問題解決にあたって想起した知識や技術が使えるかどうかを調べる発問である。この発問は、単純な(単一の)正答をもつような問題を解くための規則や技術を利用する思考を児童・生徒に求めることになる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ (法則や規則)を応用する ■ 解く ■ 分類する ■ 選ぶ ■ 利用する ■ 事例をあげて説明する 	<p>① $x + x y = 10$の時、xの値が変わると、yはどのように変化しますか。</p> <p>② 明石市の緯度は何度ですか。どうして、明石市を中心にして日本の時間(日本標準時)が決められたのでしょうか。</p> <p>③ 樹木鉢に水をやるのに、いちばんよいのは、何時ごろでしょうか。また、それはどうしてでしょうか。</p> <p>④ 世界全体の人口の年ごとの増加率は、何パーセントぐらいですか。地域別に見るとどうでしょうか。ここから(この違いから)どんなことがわかりますか。</p>
<p>分析的な発問</p>	<p>分析的な発問(解明的な発問)は学習者に、ある事象の要因や原因を見極め、理解させたり、推論させたり、あるいは、自分の発言を支持するような事例をあげるように求めるための発問である。この発問は、児童・生徒に対して、a) 自分の考えを組織だてる、b) 証拠を探す、c) 解釈する、d) 一般化する、e) 原因・要因を明確にする、といった思考を求める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ なぜ？ ■ 原因・理由を明確にしなさい ■ 事象の要素・要因をあげなさい ■ 証拠を、推論する ■ 証拠を決定する ■ 証拠を演繹する ■ 結論や結果を導きなさい 	<p>① プリは生まれたばかりの時、何と呼ばれるのでしょうか。なぜ、呼び名が変わっていくのでしょうか。</p> <p>② 氷が水より軽いということは、どんな事実からわかりますか？</p> <p>③ 子どもとその両親の意見が一致しない原因は何ですか？</p> <p>④ 京都は夏とても暑いと君が答えたのはなぜですか？</p> <p>⑤ アジア・アフリカ諸国が、最も急激に人口が増えているのはなぜでしょうか。</p> <p>⑥ この植物の葉が枯れたのはなぜですか？</p> <p>⑦ ヨーロッパが、最も人口の増加率が低いのはなぜですか？</p>
<p>評価的な発問</p>	<p>評価的な発問は、学習者にある考え、問題解決のしかた、芸術上の作品などに関して、判断を求めたり、論争などに関して、根拠のある意見を求めたりするような発問である。この発問は、児童・生徒に対して、a) 論点に基づく意見を与える、b) 考えの正当さを判断する、c) 芸術・文学の長所・感想を述べる、d) 問題解決の方法の長所・短所を判断する、といった思考を求めることになる。この発問における教師の視点には、次のようなものがある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ 理由を判断してください(なぜですか？) ■ この方法には、どんな長所と短所があるか述べてください ■ 大まかによいところ、気に入ったところや感想を述べてください ■ あなたの考えや意見を述べて下さい ■ この問題を解決するにはどのような方法が考えられますか？ 	<p>① 日本の昔の農家の生活ぶりを、最も正確に述べているのはどちらの物語ですか？</p> <p>② この本を読んで、どこがいちばん感動しましたか？ それはなぜですか？</p> <p>③ 抽象芸術に対するあなたの意見は？</p> <p>④ (たとえこのことから、失業者がでるとしても)川を汚染している工場は、閉鎖されたほうが良いと考えますか？</p> <p>⑤ 今後の勉強のために選ぶとしたら、どっちの本がよいですか？ それはなぜですか？</p> <p>⑥ クラシックよりフォークのほうが良いと思うのは、どこが気に入っているからですか？</p> <p>⑦ 日本海などのような海底油田で、石油を掘るのにいちばんよい方法は、どれだと思えますか？</p> <p>⑧ マルクスの思想がキリストの思想よりも大きな影響力をもってきたというのは、本当だと思えますか？</p> <p>⑨ いくつかの国々では、政府が明らかな方法で人口増加を抑圧している。この方法について、あなたは賛成ですか？ それはなぜですか？</p> <p>⑩ 人口の増加によって、多くの飢えを引き起こしているということは、本当だと思えますか？</p>
<p>総合的な発問</p>	<p>総合的な発問は、学習者に、予測させたり、問題を解決させたり、あるいは演繹や帰納をすることを求める発問である。この発問は、児童・生徒に、a) 問題を解く(ここでの問題とは、きまりきった答えがあるものではなく、創造的な答えを認めるものである)、b) 予想する、c) 自分の考え、イメージをいきいきと表現する、といった思考を求めることになる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ もし……なら、どのようなことが起こりますか？ ■ 問題を解いて下さい(1つの正答を求めるのではない) ■ 提案して下さい(どうしたらよいのでしょうか？) ■ 発展させて下さい(どうしたらよいのでしょうか？) ■ 推測・予想してみてください(どうなると思えますか？) 	<p>① 石炭や石油などの化石エネルギーを使い尽くしてしまったら、どんなことが起きると思えますか。</p> <p>② 国際化にむけて世界各国が結びつき、国際協力・理解は、どんな条件が必要だと思えますか。</p> <p>③ 18世紀の生活様式について、自分の感想、考えを書きなさい。</p> <p>④ この物語の主題がわかりますか？ 作者は何を訴えたいのでしょうか。</p> <p>⑤ 情報化が進んで、読書をしなくなっていますが、このままだと、どんなことが起こるのでしょうか？新しい出版の形はどのようになるのでしょうか。</p> <p>⑥ 南極か北極の氷がとけたら、どんなことが起こると思えますか。</p> <p>⑦ どんな政策をとれば、開発途上国の急激な人口増加を減少させられると思えますか。</p> <p>⑧ 急激な人口増加をしている国々の生活・教育などについて、どんな問題が起こりそうですか？</p>

また、子どもに求めたい思考や活動を想定し、それを引き出すために必要な教師からののはたらきかけを考えることも必要になる。図1は、加部ら（1993）の発問に関する類型を、学習活動の流れに即して整理しなおしたものである。

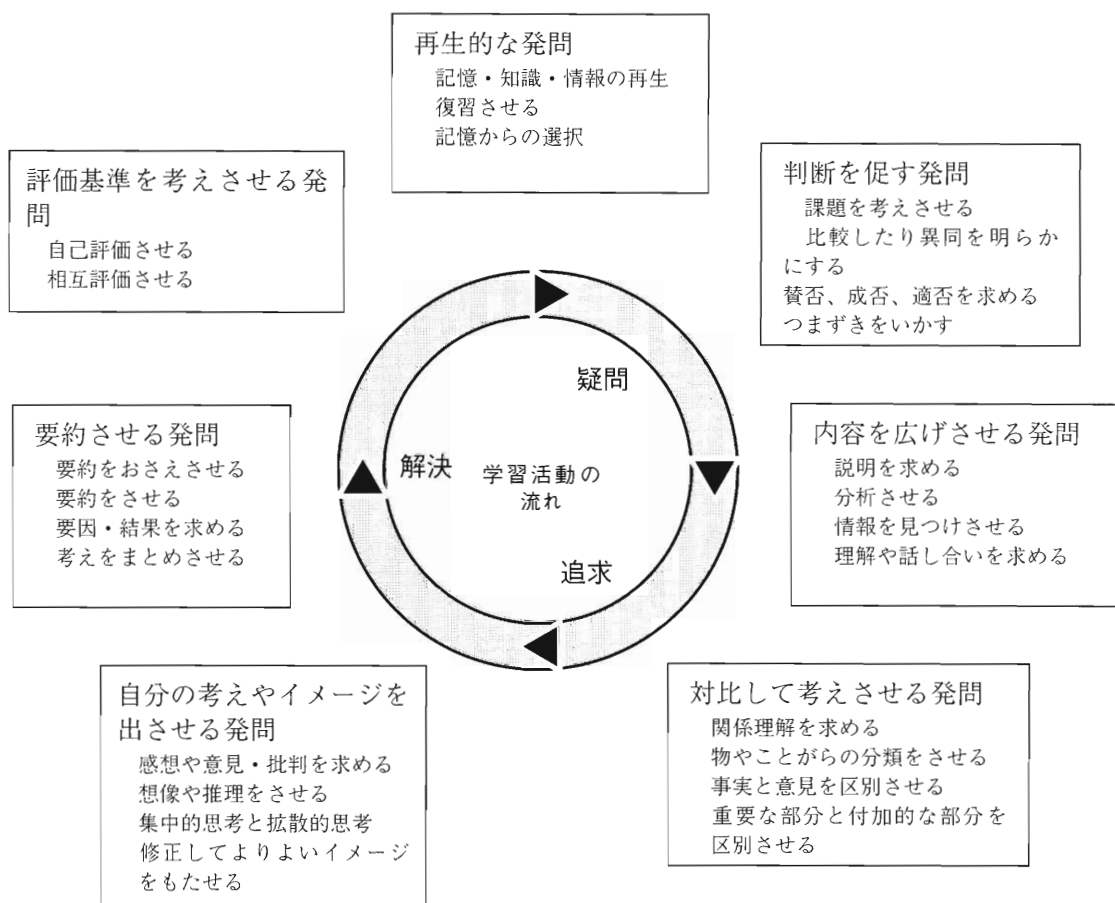


図1 発問の種類と学習活動の流れ

これらの類型を各教科や各学年のおかれた状況にあてはめながら、具体的な学習活動場面を構成していかななくてはならない。たとえば、単元計画や本時の活動計画という順序性を重視すれば、＜導入－展開－まとめ＞という各段階でどのような発問が必要になるかを考える必要があるだろう。また、担当している学年についても、小学校の低・中・高学年、中学校の1・2・3年という発達段階への対応をきわめて素直に考えた方がよい場合と、あくまでもそれを基盤としながらも周囲の環境、学習者の状況を重視した方がよい場合など、柔軟性が求められるだろう。

この他にも、指示、説明のための手だてを講じる必要がある。第2部第VI章を参照してほしい。

(2) 授業中の子どもの考えや動きをどのように理解すればよいのか

授業の展開における発問は、単一で完結するわけではない。むしろ、子どもの思考の流れ・活動の状況をどのようにふまえながら、次の課題へと進んでいくかが重要になってくる。

表2は、教師のとる教授行動と、話し合い活動時の指導のそれぞれに関する類型である（西之園(1999)）。学習活動の展開中、子どもの動きにヴァリエーションが増えたり運動量が大きくなったりすることによって、教師側のはたらきかけを自らがとらえにくくなるのがしばしばある。これらのカテゴリーは、その教師自身の行動を自己分析するためにも有用だろう。

表2 教授行動と話し合い活動時の指導法について（西之園 1999）

授業分析のためのカテゴリー		話し合い学習における指導概念					
1 沈黙	1-1 授業マネージメントを意図した沈黙	1 連結	児童が、他の児童の発言を理解していないにもかかわらず、問い返しができないと教師が判断した場面において、児童から児童への問い返しを起こさせるために、他の児童の発言内容を理解していない児童に問い返しを促す指導				
	1-2 児童による発言内容の訂正を意図した沈黙		2 なりきり	「話し合い学習」の経験が少ない児童に対して、児童同士の話し合いの方法に対する模範を示すために、教師が児童の発言様式をまねて発言する指導			
	1-3 疑問をもたせることを意図した沈黙			3 寄り添い	「話し合い学習」において、ある児童が周囲の意見に影響されて自らの考えている本当の意見を言えない状態であると判断したときに、その児童の意見を引き出すために、その児童の考えを教師が肯定的に評価していることを表明する指導		
	1-4 理解状態を観察することを意図した沈黙				4 規範はずし	児童がそれまでもっている「規範」によって自由に発言しにくいと判断した場面で、その「規範」をなくすために、教師が行う指導	
	1-5 多様な考えを出させることを意図した沈黙					5 教師への依存心の回避	「話し合い学習」の導入段階の指導において、児童の相互作用を発生させるために、教師があえて沈黙する指導
	1-6 主体的な構えをもたせることを意図した沈黙						6 とぼけ
2 確認	2-1 他の児童の発言についての理解状態を把握することを意図した確認	7 挑発	「話し合い学習」において、それまでの意見と違った意見が出された場面で、その意見をもとにして話し合いを活性化するために、出された意見を反復したり、まとめにして言い換える指導				
	2-2 学習内容の理解状態を把握することを意図した確認		8 見逃し	児童の発言が誤った発言であると教師が判断した場面において、話し合いを活性化させるために、教師が即座に評価せず、一度それを受容することによって、他の児童の発言を促す指導			
	2-3 発言内容の明確化を意図した確認			9 後押し	児童が発表したくても発表できない状態にあると判断したとき、個別対話によって児童の意見を聞き、それを肯定的に評価することで児童に自信をもたせ、発言を促す指導		
	2-4 話し合いの方向付けを意図した確認				10 誘い	「話し合い学習」において、話し合いが一部の児童によって行われていると判断したときに、他の児童の発言を促すために、児童の発言を学級全体への問いかけの発言として言い換える指導	
3 問いかけ	3-1 詳しい説明を求めることを意図した問いかけ	11 解散	特定の児童が、他の児童の質問や反論によって、心理的に追いつめられそうな場面において、児童の心理的な緊張感をなくすために、教師がその話題を取り上げ、学級全体の話題とする指導				
	3-2 本音を出させることを意図した問いかけ		8-1 理解を求めることを意図した説明	8 説明	8-2 反省を促すことを意図した説明		
4 例示(指示)	4-1 話し合いのスキルを獲得させることを意図した例示	9 資料提示	9-1 理解を助けることを意図した資料提示		9 資料提示	9-2 説明の手段として使わせることを意図した資料提示	
	4-2 コミュニケーション連鎖を起こさせることを意図した例示		10 評価	10-1 発表の成就感を味わわせるための肯定的評価		10 評価	10-1 発表の成就感を味わわせるための肯定的評価
	4-3 意図を出させることを意図した指示						
5 受容	5-1 心理的緊張感を解消させることを意図した受容						
	5-2 まとめを意図した受容						
	5-3 対立的な意見が出ることを意図した受容						
	5-4 話し合いを方向づけることを意図した受容						
	5-5 話題を転換することを意図した受容						
6 言い換え	6-1 自由な参加を求めることを意図した言い換え						
	6-2 話し合いを活発化させることを意図した言い換え						
7 指名	7-1 理解の変化を確認することを意図した指名						
	7-2 注意を引きつけることを意図した指名						
	7-3 他の児童への印象づけを意図した指名						
	7-4 対立的な意見を出させることを意図した指名						
	7-5 授業への参加を促すことを意図した指名						

上で述べたほかにも、教師の重要なはたらきかけとして、「ほめる・しかる」という行動がある。あくまでも課題解決活動にとって補助的な手段ではあるが、自らが担任する学級で、「学習指導」と「人間関係の形成」とを両立させるためには無視することのできないものである。詳しく取り扱うことはできないが、簡単にその意義と形態をまとめてみる。

まず、一口に「ほめる・しかる」といっても、受容・是認・支持・激励・否認などの形がある。もちろんそれらは、教師と子どもとの間に人間的・民主的な関係があってはじめて効果をもつものであり、威嚇的、抑圧的なものであってはならない（たとえほめことばであっても）。次に「学習」との関わりであるが、大きく4点があげられる。

それらはごく単純に、

- ・学習行動をおこさせる
- ・学習行動を持続させる
- ・学習行動を方向づける
- ・学習行動を強める

の4点であるが、具体的には、次のようなことばかけが考えられる。

「なるほど、いいことに気がついたね」

「〇〇さんは、いい姿勢をしているね」

「ずいぶん進んだね」

「もう少しがんばってみようか」

「△△くんは、おもしろい考え方をしているようだよ」

「そのやり方でつづけてごらん」

「そうだろうか?～が足りないんじゃないかな」

<参考文献>

井上光洋(1989) 「コミュニケーション・スキル」 東洋・中島章夫監修 『授業技術講座 基礎技術編 3

教師の実践的能力と授業技術[基礎編]』 ぎょうせい pp.43-73

藤沢晃治(1999) 『「分かりやすい表現」の技術』 講談社

加部佐助編著(1993) 『図説 小学校教育方法改善講座 3 自己教育力を育てる発問と話し合い』 ぎょうせい

海保博之(1993) 『説明を授業に生かす先生』 図書文化

吉崎静夫(1998) 『デザイナーとしての教師 アクターとしての教師』 金子書房

3-2. 授業技術の基本

(1) 教師が持つべき授業技術

「教材研究も次第に深り、指導案も少しずつ形になってきた。いよいよ授業だ…」この段階で、一層重要度を増すのが、教師の「技術」の部分です。

「教師の腕」「指導の技術」「授業の原則」…、いろいろな言葉で語られますが、ここでは「教材研究の成果を実現するために、教師が持つべき技術」という意味で、「授業技術」という言葉を使うことにします。

仮に教材研究がある程度深まったとしても、それを実現するための技術が未熟であれば、授業の成否に関わります。例えば…、

「説明、指示、発問…、教師の発言かあ…。今まで、分けて考えたことなかったな」

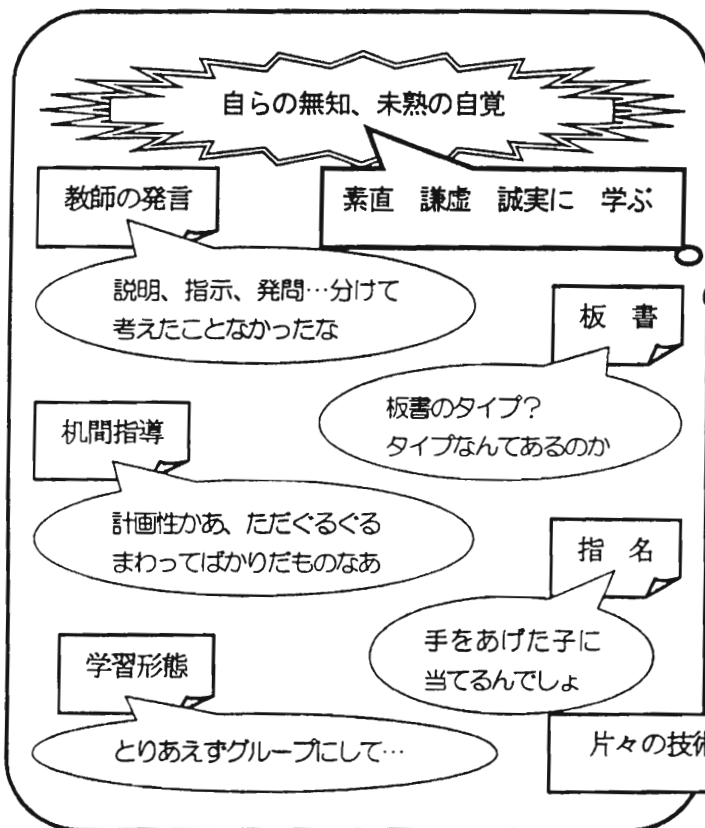
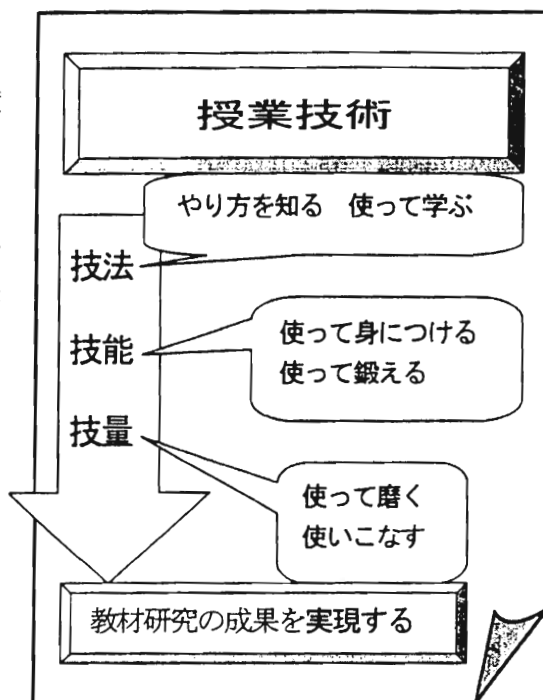
「板書のタイプ？板書にタイプなんてあるの？」

「机間指導に計画性かあ、ただぐるぐるまわってばかりだものなあ」

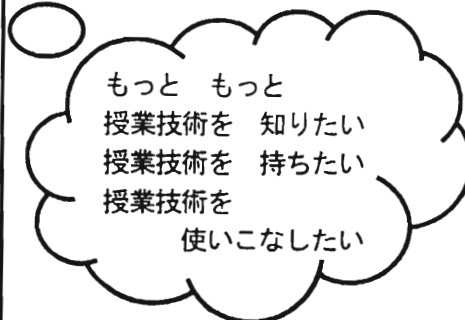
「指名？手をあげた子にあてるんでしょ。ああ、手をあげてくれなかったら、どうしよう」

「学習形態？一人か、グループか、まあ、そのどちらかってことかな」

未熟さを通り越して、無知とっていい状態であるのは珍しくないのです。



しかし、実習生の未熟さは恥ではありません。恥じるでなく、臆するでなく、素直に謙虚に誠実に学ぶ姿勢が今のあなたに必要なものです。自らの無知、未熟を自覚し、授業技術を「知りたい、持ちたい、使いこなしたい」という渴望を抱くことも教育実習の目的なのです。

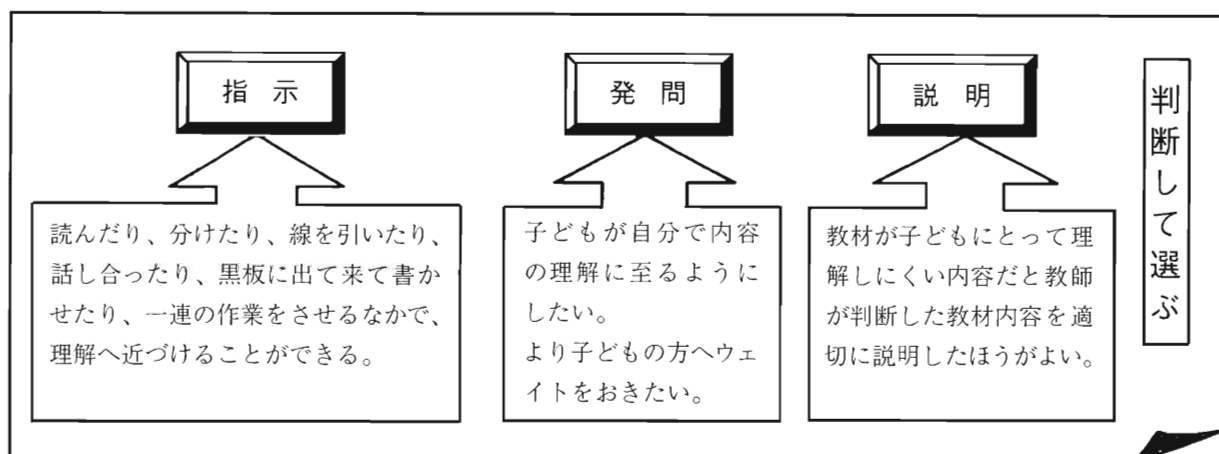


(2) 具体的な授業技術

① 説明、発問、指示

授業における教師の発言はそれぞれの性格から「説明、発問、指示」の三つに分けることができます。「『説明』『発問』『指示』」それぞれの性格をよく知って、教材分析と、生徒の状況と、自分の教育的力量に応じて、的確にそれを選び、それを一時間の授業の構成として、使いこなしていくことが重要です。

また、選び、判断するのは、教材の性格と教師の指導観によっても決まります。



説明をわかりやすくする三つのポイント

- ・重要なところをはっきりと指し示す（説明を印象づける「提示」の仕方を工夫する。）
- ・子どもの知っていることと関連づける。（教師の説明しようとする事と子どもの身近なことを結びつける）
- ・学ぶ方法をさし示す。（学ぶ順序、方法を示す）

発問の5つのポイント

- ①発問の内容は教材解釈から導かれる
- ②個人差が鮮明になるように問うべきである。
- ③分類、群化、整理できるように問う。
- ④単純明解、簡潔に問う。
- ⑤深く、少なく問う。

② 指名

指名の仕方を「教師の意図の有無」で分けてみます。「手をあげた生徒に」「特に考えることもなく」「いつも決まった子どもに」指名している授業は、どんな授業でしょうか。それに対して「ねらいをもって」「子どもをとらえて」「配慮しながら」指名する授業はどうでしょうか。

- 子どもの良さや特性をとらえ、伸ばす
- 個々の活動の場を設定する
- 机間指導でのとらえを展開に生かす
- 同じ子どもや、挙手する子どものみにならないように配慮する
- 子どもの表情をよく見て、発言を大切に扱う

教師がどんな意図をもって「指名」するかによって、その授業も変わってきます。机間指導等で把握した子どもの考えを取り上げたり、広げたりしながら、意図的、計画的に指名することを心がけましょう。

③ 机間指導

一人一人の子どもや、グループ、学級全体の学習状況を的確に把握し、学習目標の実現に向けて授業展開の方向を探ったり、修正したりするための機会です。また、個別指導の機会でもあります。教師は、「何を見るのか」「何を得たいのか」「何を与えるのか」、等々、机間指導における教師の目的を、はっきりと自覚して実施することが必要です。

方法をいくつか紹介しておきます。①「自分の考えを書く」「○か×か、その理由を書く」など、一度自分なりの考えをノートに書かせて巡視する（個々の差が鮮明になる場面を設定した後、巡視する）②メモ可能な座席表等を用意し活用する（個々の評価をメモできるものを用意する）③付筆やカードを用意し活用する④巡視後の展開を予想しておき、修正の必要があるかどうかを探る。

一部にすぎませんが、こうしたことを一つずつ形にしていくことが大切です。

④ 板書

板書の役割には①子どもの意識を集中させ、思考を促す②子どもの考えや疑問、気づき、発想を引き出し、発展させる③子どもの考えを整理し、理解を確かなものにする、等があります。

そのために○学習課題やねらいの明示○学習資料（文字、図表、絵など）の提示○学習過程や授業の構造の明確化○学習結果のまとめ、等々、「板書の良さ」を生かせる場面を構想し、生かすための工夫をすることが大切になります。

板書の工夫点

- 書く位置、文字の大きさ、空間のとり方
- チョークやマジック、カードなどの色の使い分け
- 適切な言葉、簡潔な表現
- 図や表、絵、図式化、模式化、構図
- 小黒板、カード、掲示物、OHP、VTR、スライドなどの教具との効果的な併用
- 子どものノート記録、作業などの様子を考えた板書のタイミング

⑤ 学習形態の工夫

授業の目的に合わせて、効果的な学習形態をとることが大切です。そのためには、学習活動の目的や子供の状態に応じて、一斉学習やバズ学習、グループ学習や個別学習などを組み合わせます。

それぞれの学習形態にそれぞれのメリットがあり、使い方を誤れば、それは即デメリットとなります。よく考えて、やってみます。やりっぱなしではなく、見つめなおします。

学習形態を工夫し、その良さを使いこなすためには、目的にその方法が適していたか、事前、事中、事後、それぞれの場面での検討と評価を欠かさないことがなにより大切です。

<引用文献>

- ・北海道教育委員会編「平成11年度 学校教育の手引き」
- ・大西忠治著「発問上達法 授業づくり上達法PART2」
- ・野口芳宏著作集第2巻 明治図書

3-3. メディアを効果的に活用するには

(1) 情報の「流通性」を考える

どの教科・領域をとってみても、情報が扱われない授業などひとつもない。逆にいえば、どのような情報が流れているのかを教師はたえず気にかける必要があるということだ。そのために有用な道具を、機能別にマトリクス形で整理してみよう。ここでは、実習中の授業でほぼ平均的に利用するであろう道具にしぼってみる。

表1 よく使うメディアの機能

機 能 道 具	● 提示する	● まとめる	● 意欲を高める/ 作業を促す
〈黒板(大、周囲)〉	学習課題の説明・周知	児童・生徒の発言のポイントを記録する	場面の設定
〈スライド・カード・写真〉	ポイントの通知 直接的な理解	立場や考え方の表明	分析する題材としての利用
〈OHP・小黒板〉	作業のモデル (三角定規などを利用して)	個人やグループの意見を書き込む	作業手順の確認
〈ビデオカメラ〉	作品の完成のイメージ 学習課題の解決の手がかり を与える	活動の記録とふりかえるための材料づくり	児童・生徒の問題意識に触れるような情報

(2) 視覚情報の効果的な利用

次に、授業場面で多用される提示情報の使い方について、道具別にまとめてみる。

■ OHPの効果的な利用

OHP (Over head Projector) は、子どもにも簡単に使える便利な教具である。単に、要点をまとめるばかりでなく、効果的な説明の補助手段として用いることができる。図1は、複数のTPシートを重ね合わせて伝達内容を分かりやすくする例である。

図3-11

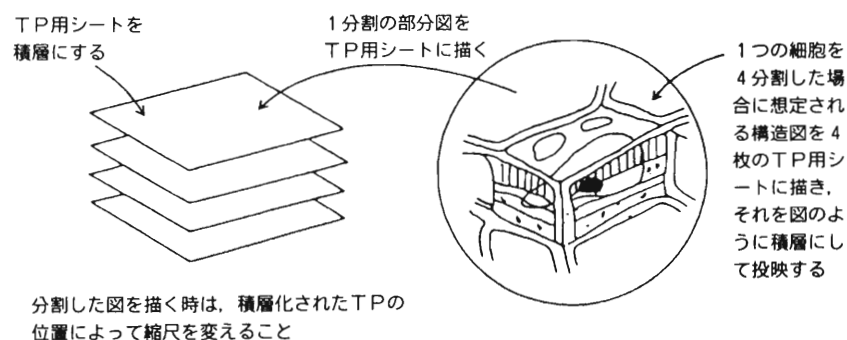


図1 TPシートの利用例

■写真・スライドの効果的な利用

説明や発問を支える資料として、写真・スライドも利用価値が高い。写真の場合には、子どもが直接手にとって見ることもできるだろうし、全体で見ながら話し合う場合には、ビデオカメラを通してテレビモニターで拡大して視聴する場合も考えられる。

■VTR資料の効果的な利用

操作が簡単で、子どもにとっても直接理解の容易な動画情報は、わかりやすい反面で、さまざまな情報が「混雑」しているという特性をもつ（冗長性）。たしかに、子どもの活動や思考をより活発なものにするために積極利用することが望ましい。しかし、スムーズな利用のためには、子どもが、教師の意図したねらい以外のところにとらわれすぎないか、また、誤った時間認識・空間認識を与えてしまう恐れはないのか、などの点に充分注意する必要がある。

■効果を高めるために

教師は、つつい自分の都合で、提示資料を操作しがちである。児童・生徒にとってわかりやすい情報とは何か?を、たえず念頭に置く必要がある。簡単にまとめてみると、次のようになる。

- ・提示された情報を、十分に観察・知覚できるように時間をとる
- ・提示された情報に、適切な説明を加える
- ・不用意に動かしたり、交換しないようにする
- ・見やすい環境を整える（光量、影など）
- ・視野をさまたげないよう努力する

<参考文献>

- 加部佐助編著（1993） 『図説 小学校教育方法改善講座 4 自己教育力を育てる板書、記録・ノート』 ぎょうせい
- 芦葉浪久編著（1994） 『図説 小学校教育方法改善講座 6 優れた授業を支える教材教具』 ぎょうせい
- 教育技術研究会編著（1993） 『教育実習ハンドブック』 ぎょうせい
- 教育技術研究会編著（1993） 『教育の方法と技術』 ぎょうせい

4. 各教科の「骨組み」をつくるには

一 国 語 一

(1) 教材化のまえに

① 4つの言語活動を関連させる

国語の授業は、聞く・話す・読む・書くのいずれかを中心においた展開を行う場合が多い。これら四つの内の一つの活動だけを行っているのは稀で、ある活動を学習するために他の活動がセットで行われている。例えば、読む活動を中心としながら、子どもたちがどのように「読ん」でいるのかを「話させ」、あるいは「書かせ」、あるいは仲間が話したことを「聞かせ」てから次のステップへ進むと言った具合である。そして、それは望ましい授業のあり方である。つまり、四つの言語活動が有機的に組み合わせられていることが理想である。もちろん、いずれかの活動に重点が置かれるということはよくあることだ。しかし、「読む」ことが中心なのだから、乱暴な「話し」方や「書き」方を見逃してもよいというのではない。全ての言語活動に逐一的確な助言や指導が継続的に行われる必要がある。とりわけ小学校においては大事にしたい。子どもは特別な場面で育つこともあるが、多くは何気ない日常の積み重ねで、習慣化された活動の中で育つのである。

② 言語活動の手本を示すこと

このことを考えれば、教師の全ての言語活動が子どもたちにとって「手本」であり「規範」であることを自覚するべきだ。黒板に書く文字の字形、筆順からはじまって、教材を読むときの声の出し方等、あらゆることが子どもに「真似られる」存在であるという自覚である。不得手なことは誰にでもある。実習以前に完璧であるということはないだろう。大切なのはつねに改善していく姿勢である。実習をきっかけにして、自分のかけている点を捉え、次の実習に向けて準備しよう。

(2) 教材に取り組む - 「ごんぎつね」を例にして

「ごんぎつね」は、現在小学校で用いられる五つの教科書の全てに掲載されている。日本中の小学生が学ぶ「国民教材」とも言える作品である。この教材を使って授業することを考えてみよう。

授業は国語の能力形成を目標として展開される。Aという物語教材とBという物語教材では能力形成が異なるということは基本的にない。その目標とされる言語能力は小学校学習指導要領に基づいて考えるとよい。例えば3、4学年の「内容」の「C読むこと」の「ウ 場面の移り変わりや情景を、叙述を基にしながら読むこと」といった記述があるが、3、4年生には読解活動の際に「場面の移り変わりや情景を叙述を基に」読む能力を育成することを念頭に置いて、それを実現するような学習活動を考えればよい。扱おうとする教材を用いて、担当する学年の学習指導要領に示す言語能力や言語活動を展開できるかを考えながら授業を計画するということである。

しかし、「場面の移り変わりや情景」は作品によって異なる。Aという物語とBという物語では異なる。また、物語教材の場合は特にその内容やメッセージが強く子どもたちに働きかける。また学習指導要領のいう「叙述を基に」するとは、それぞれの作品に固有な表現に基づいてとい

うことだから、まずは教材となる物語を丹念に読むという段階が大切になる。

物語は違っていても目指す言語能力は同じ、しかしそれには個々の物語を丁寧に読むことなくして、物語のどの記述を用いてどのような学習をするかは考えようがない。

① 自分の読みを確かめる

まず何も参考資料を見ずに、自分の目で読んでみよう。何を感じただろうか。どのような言葉が気になっただろうか。所詮は小学校4年生が読む程度の文章である。多くの子どもは幼稚園段階で絵本を通して触れていたりさえする。分からない語句など殆どないに違いない。作品のテーマなどもたちどころに分かるはずだ。

しかし、子ども向けの作品なんてとばかにしてはいけない。もう一度読んでみよう。さっきと別の言葉が気になったりしないだろうか。さっき考えたテーマに訂正は必要ないだろうか。この場合は、思いついたことを書き出すという作業が有効である。

- ・「赤い井戸」なんて見たことも聞いたこともないぞ。
- ・最初の「わたし」はどこへ行ったんだ？
- ・「小ぎつね」とあるけど「子ぎつね」とは違うのか。
- ・子どもは「きつね」に人間の言葉なんて分かるわけないなんて考えないのかな。
- ・兵十の目を盗んで栗を置いて行くんだから、なにも「固めて」置くことはないのに。
- ・ごんが死ぬ間際になって兵十にごんの行為が分かるようになっていく。それが劇的なんだな。
- ・このテーマは「かわいそうなごん」という話だな。

どのようなことでもいい、いくつでもいい。自分の読みを土台にしないことには、自分が何を読み飛ばしていたか、何を読み取れなかったかが分からない。初めから、教師用書などの参考文献を読むのは「人のふんどしで相撲をとる」ことと同じである。自分の読み取った内容程度のこと自分が教えらるということという自覚が必要だ。

何度読んでも自分の読み取りには不安があるものだ。しかしそれは永遠に解決しがたい不安でもある。むしろ、その欠けているという意識が次の読みを深める動機なるに違いない。同じクラスや学年に配属になった実習生や指導を受けている先生と読みを比較するのは有効な方法である。互いの読みとりの違いを把握することで、自分が勝手に作っている理解を訂正することができたり、見落とした表現を浮かび上がらせてくれるはずだ。

② 何を学ばせるかを考える

文学教材の場合、作品のメッセージがどうしても動かしがたいものとしてある。「ごんと兵十の分かり合えなかったことによる悲劇」、もう少し難しく言うと「生きていく上での疎外感」という、この作品がもたらす考え方、認識。これは重要な学ぶべき事柄と言えよう。そしてこれは小学生には気づきにくいことである。しかし、気づかないから仕様ががないというのではない。文学はそれまで持っていなかった考え方を教えてくれるといった教育的機能をもっているのだ。だから、国語の教科書の文学はそれを読むときにはちょっと難しい考え方、認識を扱っていることが多い。「ごんぎつね」を、可愛そうな「ごん」と読んでも間違いではない。しかし、兵十にはごんの行為がごんの死を迎えるまで伝わっていなかったということを読み飛ばしてはならない。「伝わらない」このことを捉えさせる機能をもつ教材であるのだ。そして気持ちが「伝わらない」

ことを実体験として学ぶことは大半の自己中心的な小学校4年生にとって重要な認識なのである。

国語は言語を学ぶ教科である。言語が認識を不可分であることから、先に述べた認識が学習内容となることは当然の事である。そして、言葉の読み取り方を学ぶのも重要である。あるいは文学の読み取り方も言えよう。登場人物の内面が変容すること、その変容のきっかけとなったこと、といった物語の枠組みを捉える学習も必要だ。そのために登場人物の気持ちの変化をたどる必要があるし、出来事を読み飛ばさないように確認することも必要だ。場合によっては情景描写をイメージすることも言葉への細かな目配りをする学習として行われる。ふだんはこんな細かな読み方などしない。しかし、ふだんはしない読み方だからこそ、学習するのである。学習した上で、言葉への細かな目配りを意識化させるのである。実は先ほど引用した学習指導要領の「場面の移り変わり……」という記述は、これらの内容と一致することなのである。

③ 学習事項を絞込む

一つの教材で、色々なことを学ぶことが出来る。しかし、実際問題として「色々」やったのでは子どもたちはあきてしまう。学習事項を絞り込み、ここで学習できなかったことは他の教材に譲ることである。一つの文章をあれこれいじるのは大人だからできることだ。こどもは別の文章に会いたがっている。

学習事項の設定と絞込みのための参考資料として最も大切なのが「学習指導要領」であることは既に述べた。担当学年の「内容」を十分に参照して、自分が考えた問題が学習の「内容」足り得るか考えてみよう。

④ 学習事項の設定と計画を行う

学習事項を決める。漢字・語句といった細かなことから、事件の展開、登場人物の心情の変化など。そして最大の山場である、兵十が「ごん」のつぐないに気づいていないということを「5、6」の場面を丁寧に読むことで明らかにすること。そして「ごん」はそのような状況を「ひきあわない」と思いながらも、依然として兵十に気づかれまいようにつぐないの行為を続けたこと。だからこそ生じた悲劇であること。それらを子どもが気が付かないことを前提として、それらのことへ注意が向くようにしかけるにはどうするかを考える必要がある。教師が「話した」らおしまいだ。子どもたちがぎりぎりのところまで考えなくてはならない。物語のテーマは「教えられる」のではなく、「気づいていく」ものだ。でなくては「教師の演説」「教師の説教」ですむ。

どのような発問や活動が良いのだろう。しかも1時間で全てが終了するはずもない。1時間ごとの作戦が必要となる。

⑤ 各時間の細案を作る

1時間の授業を想像してみよう。最初に何を話しかけるか。子どもたちはどのような反応を返すのだろうか。そしてそれに対して今度は何を話すのか。先に述べた「授業はコミュニケーション」であることを忘れずに、授業のシナリオを作ってみるとよい。もちろん子どもたちの反応は予想でしかない。予想外のことなど実際の授業では常につきまとう。しかし、ひとつの予想しかできない場合と複数の予想ができる場合とでは大きく異なる。複数の予想が実際の場面では柔軟な対応を可能にする。そのためにも普段から担当する子どもたちがどのような思考パターンをもっ

ているのかを捉えるための観察が必要になってくる。「多くの子はこうだろうけど、〇〇君はちょっと違うことを話すはずだ」といったことが浮かんできたら、だいぶ観察も進んできていると思ってよい。予想できる反応を書き出して、それぞれにどのように対応するかを考えよう。その連続でシナリオを作成していくのである。

一 算数・数学 一

1. 授業のしくみを考える方法は

授業設計は、授業の実施に先立って行われる授業についての教材分析、教材開発・作成、計画立案などの準備活動である。現在の学校教育では、従来の知識伝達型の授業から、子どもが自分自身の切実な問題として教材と格闘し、試行錯誤を繰り返しながら、新しい発見をしたり、概念を獲得したりするドラマのある授業が求められている。ドラマのある授業は、教師の働きかけにはじまり、その課題を解決する学習者の教材との格闘・活動から出てくる多様な考えを比較・対立させながら吟味・検討し練り上げ、その結果を基盤にして本時の学習のまとめ、あるいは次の課題へ向かうという学習展開の過程がとられると思われる。

このドラマのある授業を生涯追求した教師の一人は、「教師の誠実さとは、ひたすら子どもにへばりついて親切のかぎりをつくすということではなく、教師の人間の力量と技術によって子どもの可能性に働きかけ、無限に引き出すことによって子どもを変え、そうした事実を通して教師みずからも変えていくという創造的な行為のなかにしかありえないのである（武田常夫）」と教育実践に対する教師の関わり方を主張している。

このような授業の設計を経験を積んだ現場教師は、実際の授業風景を思い浮かべ、学習活動やそれを引き起こす働きかけである発問を考えるという授業のシミュレーションを行いながら最適な指導過程（学習過程）を考え指導案を立案していく方法をとっている。これは、教授学習過程における教師と学習者の相互作用というモデルに基づき、教師が頭の中で働きかけやそれに対する学習者の反応を辿りながら、最適と思われる過程を構想しているといえる。このような、授業における教師と児童・生徒の教授・学習行動を予め考える授業設計という活動を通して学習指導案が作成されてきた。

授業設計には、①教育理念に基づく設計、②授業者の経験に基づく設計、③システム工学の手法を適用した設計、④学習理論・教授理論に基づく設計、⑤教育技術・意思決定のモデルに基づく設計、等の多くの方法がある。教育実習校では、指導教官の教育実践経験を踏まえた「②授業者の経験に基づく設計」の方法がとられることが多い。

2. 授業展開を考案する基本的な考え方〈教授方略〉

教師が、授業を設計し、展開するための基本的な方針もしくは考えを教授ストラテジー（教授方略）teaching strategyという（小金井正巳（1978））。別の言い方をすれば、教授ストラテジーとは、その教師がその授業過程において、なぜ、そのような教授行動をとり、そのような形で授業を進めるかについての基本的な考え方や理由である（Strasser,B.（1967））。つまり、教授方略は、その授業を進める教師が、授業設計段階において、具体的な授業の進め方や教授行動を決めるための方針であり、また、各授業場面で判断・意思決定するにあたって、そのよりどころとなるものである。

授業設計段階における教授方略には、「教材に関する教授方略」「学習者の特性に関する教授方略」「授業展開に関する教授方略」の三つがある（児島邦宏（1988））。

① 教材に関する教授方略（教材観）

授業の目標に即しながら、その授業で使用する教材について、授業者として、どのような考えで、どのように受け止め、教授内容との関連からどのように扱うかに関する基本的な考えで、一般に、「教材観」といわれるものがこれにあたる。

② 学習者の特性に関する教授方略（学習者観、子ども観）

子どもが教材をどのように受け止めるか、学習者にどのような学習の深まりや広がりを期待するか、学習の過程でどのような学習活動をさせるかなどについて、ここの学習者の特性に応ずるための授業者としての基本的な考えで、一般に、「学習者観」「子ども観」といわれているものがこれにあたる。

③ 授業展開に関する教授方略（指導観）

教材に関する教授方略、学習者の特性に関する教授方略を踏まえ、授業をどのように構成し、どのように学習を展開し、それに対応するための教授の在り方をどうするかに関する授業者の基本的な考え、一般に、「指導観」と呼ばれているものがこれにあたる。

これは、前述の経験を積んだ教師が、授業風景を思い浮かべ、授業のシミュレーションを行いながら指導過程を考案する方法は、まさに「教材」と「学習者」とを結びつけ「授業展開に関する教授方略」を考案しているといえる。

3. 子どもと同じ学習活動で、授業づくりのための教材を探ろう

授業は、ドラマになぞらえることが多く、教師は、そのドラマのデザイナーであり、アクターとしての役割を担っていると言われている。すぐれた授業は、授業研究の成果を基盤とした綿密な授業の計画・準備すなわち授業設計に基づいて行われる。授業の設計は、建築家に例えるならば設計図の作成、音楽家にとっては楽譜の作成にも相当している。しかし、授業設計で立案された指導案が、建築の設計図や楽譜と異なるのは、その実施段階において、多様で予想外の活動や、反応・応答をする子どもを対象としているので、それに対応して修正しながら、設計された指導案の授業として進めていくことである。

授業は、前述のように教育目標や教科内容だけで決定されるのではなく、学習者の状態と学習過程についての知見とが盛り込まれることを求めたものである。つまり、授業を設計するとは、教材内容、学習環境、教師の行動などによってもたらされる効果を予測しながら自らの教授行動を立案していくこと、すなわち仮説を形成していくことでもある。この仮説は、授業設計書としての指導案に、授業あるいは指導過程（学習過程）として記述される。

これまで、大学生が教科教育の授業等で、小・中学校の授業設計（授業の考案）のために教材研究の活動を行い、指導案を作成するという活動の記録（図1）を辿りながらその手順を捉えてみよう。

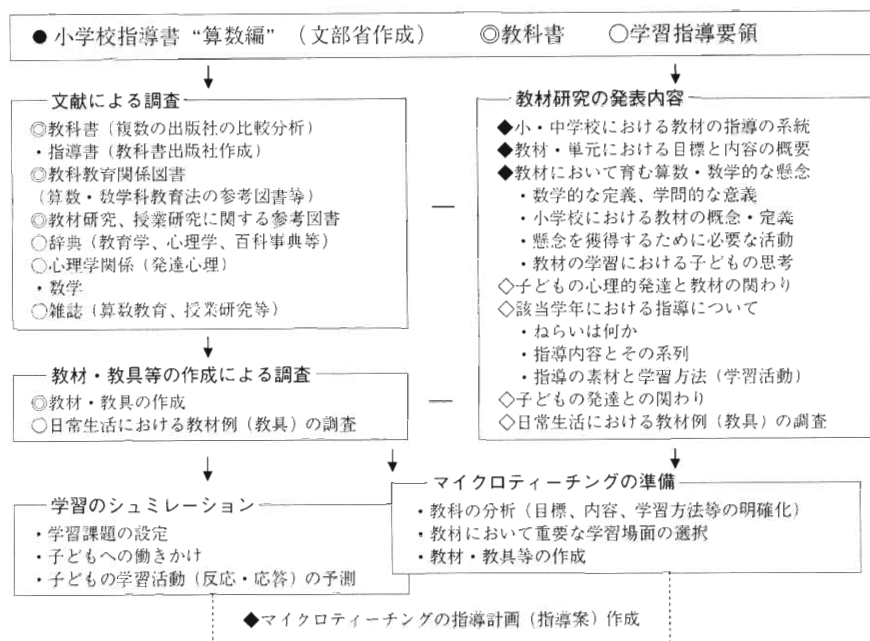


図1 教材研究から学習指導過程の構想への手順

4. 教材研究から学習指導過程の構想への手順 (図1) の概要

第1段階：学習指導の目的・内容等の概要の調査

「小学校学習指導要領 解説 算数編」「中学校学習指導要領 解説 数学編」を手がかりとして教材の概要を捉える

第2段階：文献による調査

ア) 心理学、教材研究、数学等の専門書や教材に関わる参考資料を使って、下記のことを調べる。

- ・その教材の定義やキーとなる概念を明確にする
- ・教材と子どもの心理的発達の関わりを調査をする
- ・その教材の指導上の問題点の検討をする

(「資料1.『速さ』の指導に関わる先行研究・実践等の調査例」参照)

- ・教材に関わる学習者のレディネス (学習の準備状況、既習状況等) の調査

(算数・数学の学習は、階層性が強く系統的な教材を対象としているので、この調査は重要である。教材の系統を視覚化したものが「教材系統図」であり、図2はその一例である。)

イ) 「算数・数学の教科書」の教材内容、学習指導過程等の比較・分析を行う。

- ・小・中学校の「算数・数学の教科書」は、6つの出版社から発行されている。
- ・教科書を比較・分析することにより、教材内容、学習の素材、学習過程、問題・発問、解決のために学習活動等の具体的な内容を捉える。

(表1、表2は教科書の比較・分析の具体的な活動例である。また、この複数の教科書の学習過程の構造を分析し、集成的例を図3に示す)

第3段階：教材による学習の具体的な活動 (シミュレーション) 等を行う

ア) 教科書の問題を多様な考え方で解く

- ・教科書の問題を多様な考え方で解く活動を行い、子どもの思考について検討する。
- ・問題の数値や解き方を分類し、学習課題を階層構造化する。

- ・この活動を通して、子どもが問題を解決していく過程で、教師として配慮しなければならないことがらを吟味する。

(図4「2桁の引き算の学習における子どもの考えるメカニズムの『情報処理公析』例」参照。)

イ) 教材・教具の作成・作図の活動を行う

- ・合同な図形の作図、四角錐の体積の求積における立体モデルの作成などにより、子どもの課題追求の活動・過程のシミュレーション(資料2 立体モデルの作成例)

○この段階で、授業展開の構想について、学習者の特性の視点から検討することが必要である。

(「資料3 学習者の実体を捉えるために」参照)

第4段階：学習指導過程(授業計画)を構想・立案する

授業計画のときの課題として、次の4点がある。

- ①その教材で重要な(やまばとなる)場面を選択する。
- ②中心となる質問(主質問)は、「開かれた質問」とする。
- ③課題追求のための学習活動があり、その予想される子どもの活動あるいは反応応答は、4～5通りある。(このとき、子どもがその教材で起こすであろう誤答やつまずきなども予想する。)
- ④その4～5通りの子どもの反応・応答に対する教師の対応行動を考案する。

(図4は、「異種の2量の割合」の学習過程の導入部の骨組みを考案したものである。)

資料1. 『速さ』の指導に関わる先行研究・実践等の調査例

第1段階：学習指導の目的・内容等の概要の調査

I. 日常生活における「速さ」は

速さを競うトラック競技では、ゴールに着く順番で順位が決まり、スタートからゴールまでに要した時間が記録として残ることになる。つまり、陸上の走る競技の「速さ」の記録は、スタートからゴールまでの所要時間で表される。

札幌・函館間に新鋭特急「スーパー北斗」がデビューしたとき、「札幌＝函館、2時間59分…、約40分短縮…」というキャッチフレーズが出ていた。これまでより約40分短縮ということで、その速さと利便性をアピールしている。このように、私たちの生活の中では、ある場所からある場所への移動に必要な時間で速さを表すことが多い。

速さを表すもう一つの方法がある。私たちが、自動車を運転しているときに速度計を見て、車の速さが「時速50km」であるとわかる。また、天気予報で、台風の時に「風速10m/秒」と聞き、その風の強さを知ることができる。

このように速さは、目的に応じて、ある場所からある場所への移動に必要な時間と、その物の動きそのものを表す方法の二つを適宜使い分けをしている。

II. 「速さ」の学習はなぜ難しいのか

1. 学力調査での「速さ」の正答率は

日本の子どもの算数・数学の学力は、世界でも屈指であることは周知のとおりである。IEA(国際教育到達度評価学会)の「第2回国際数学教育調査」によると、「ある人が3,000mをちょうど8分で走った。この人の平均の速さは毎秒何メートルか」(答えは、5肢から選択)という速さの問題についての正答率は33%(国別では、最高:42%(オランダ)、最低:19%(米国)、日本:37%)となっている¹⁾。この速さの問題は、比の第3用法と速さの単位の換算の2段階か

らなるものであるが、正答率の低いことが問題となっている。

国内では、埼玉県入間地区算数数学教育研究会が、地区内の小学校1年から中学校3年生まで5万数千名を対象に、昭和31年度（1956年）から毎年「算数数学学力調査」を行っている¹⁾。その調査でも、平成元年（1989年）まで、「速さ」の問題が29回出題され、そのうち23回が50%以下の正答率である。この調査でも、速さを捉えることと単位換算の二つの難しさがあると分析されている（例：150kmの道のりを3時間20分で走る自動車の時速は何kmでしょう。昭和48年：正答率：18%）。

「速さ」は「距離」と「時間」の2つの量によって決まるが、その2量の進法が、距離は十進法であり、時間は六十進法と異なることから、単位換算の処理の複雑さが正答率の高くない原因の一つであると思われる。

2. 「速さ」が難しいのは、なぜか

小学校の算数の「量と測定」の領域では、長さ、重さ、面積、体積・容積、時刻・時間、角の「外延量」という量の概念や測定の方法を学習し、さらに、5年生で速さ、人口密度、比重等の「異なる二つの量の割合で捉える量」の「内包量」について学習する。

速さや比重等の量は、運動会の徒競走や水に物を浮かべたりというような具体的な現象を見る限りでは、感覚的に捉えることが可能であるが、定量的に捉えて比べようとするとなかなか難しい。それは、これらの量が、長さや重さなどと異なり、長さや時間、体積と重さというように二つの異なる量の関係で決まる新しい量であるからである。一般的には、速さは、長さやかさのように手にとって触れたり、見て確かめたりできる量ではないので、計算による数値によって決めなければならないところにその難しさがあるのかもしれない。

布施川らは、児童が速さの概念を捉えることの難しさについて、

- ・子どもは、「速さ」という量と「距離」という量が未分化である。
- ・教科書に「速さ」という量の説明がない。「速さは、単位時間あたりに進む道のりで表します。」という表記は、「速さ」を表す方法の説明であり、「速さ」＝「道のり」と混同しやすい。
- ・「時速 χ km」が、走る距離の長さに係わらず、同じ速さであることを理解していない（このことを「『速さの保存』が成立していない」と呼んでいる）。
- ・子どもは、計算によって求めた「速さ」と、車が走っている「速さ」とを同一と捉えていない。のように指摘している²⁾。

柳瀬は、「速さ」の学習の難しさを、次のように指摘している³⁾。

- ・教師自身に、“速さ”が「長さ」と独立した「量」であると考えていない。
- ・子どもは、時速を表す数値を、単なる長さと考え、1時間あたり進む平均の長さ（距離）として捉える意識が低い。
- ・「速さ」を“追い抜かれた”“早くゴールに入る”など、瞬間速度的、あるいは、時間または長さの一方の量で判断することが多いため、時間あたりに平均した量という論理で捉えるのに抵抗がある。

これらは、「速さ」と「長さ」の二つの概念が量として未分化であり、時速30kmは常に速さであるという「等速性」があるということの理解が子どもたちに難しいことを示している。ピアジェは、「量の保存」の概念の獲得は、長さやかさなどの外延量の量概念の形成にとって極めて重要な前提条件であると言っているが、速さの概念にも「速さの等速性」の理解が必要であろうとい

う指摘である。さらに、速さは、計算された結果としてあるのではなく、動いているものには必ず固有の速さがあることも明確な理解となっていないという指摘である。

さらに、駒込⁴⁾や丸山⁵⁾は、「速さ」の難しい原因の一つとして、子どもが日常生活で使ってきた「速さ」は、運動会や記録会の徒競走、水泳記録会、駅と駅間の(列車の)所要時間等「等距離間の所要時間」の例が多く、「単位時間における距離の比較」の例は、極めて少ないことにあると述べている。前者は、ゴールに着くまでに要した時間、即ち「結果としての速さ」を表しており、後者は、その物体の動いている「現時点の速さ」を表しているといえる。子どもにとっての速さは、前者の考え方によることが多い。しかし、算数・数学における速さ(時速 χ km)は、後者のその物体の動いている「現時点における速さ」である。このように、算数の学習場面と子どもの日常生活における速さの捉え方に相違があることに難しさの原因があると指摘している。

ヴィゴツキーは、科学的概念の形成は、概念の体系化を目指すものであるから、子どもの生活概念が蓄積され、一定の水準に達していることが前提になり、それまでの生活概念の発達に質的変換を迫るような力が加わらなければならないと指摘しており、これが学校における教授・学習であると述べている⁶⁾。日常的な概念として捉えられている「速さ」を、科学的な概念へと変えるための方策は何だろうか。

参考文献

- 1) 関根英皓他,『40周年記念誌 人間の算数数学学力調査』,埼玉県入間地区算数数学教育研究会, 1989, p. 64.
- 2) 布施川博美・麻柄啓一,「児童の速さの概念に関する教授心理学的研究」,『千葉大学教育学部研究紀要』,第37巻,第1部, 1989, pp. 55-66.
- 3) 柳瀬 修,「楽しい『速さ』の指導のひとつの試み」,『算数教育』,No216, 1976, pp. 14-21.
- 4) 駒込連邦他,『算数 子どもの考え方・教師の導き方』,国土社, 1982, pp. 205-220.
- 5) 丸山 保他,「単位あたりの考え方を利用した速さの導入の指導」,『新算数指導実例講座 第6巻 量と測定』,金子書房, 1991, pp. 143-161.
- 6) ヴィゴツキー,柴田義松(訳),『思考と言語』(下),明治図書, 1962, pp. 137-147.

※この資料は、「子どものつまずきと手立てを考えるー『速さ』の学習の事例を通してー」(子どもの学びとつまずきー「わからない・できない」を活かす教科教育:(教科教育研究図書 第6巻) <東京書房> 1997: pp. 176~189)に基づき作成した。

第2段階: 文献による調査

前述の武田常夫は、「授業の発見」の中で授業の教材研究について、次のように述べている。

「授業とは問うことだ、問うて問うて問いぬいていくそのプロセスのなかで子どもの思考は燃焼し、子どもの精神は形成される。そのために教師は教材を研究し真に問うべきことばを豊富にたくわえる。論理で問い、事実で問い、解釈で問い、あらゆるものを結集して子どもの精神に働きかけていく。それが授業なのだ。したがってそれは教師の浅い断片的な知識をいい気持ちで教壇からばらまいているような授業とは本質的に異なる行為なのである。(P. 45)」

「森田先生がひまさえあれば教科書をひろげている意味がようやくわかってきた。森田先生は、教科書のなかの指導することがらがわからないので調べているのではない。教材のなかから授業を構成する核となるもの、展開する動力となるもの、子どもを燃えさせた熱源となるものを発見し、

それをどのように配置し、組織して子どもにアプローチしていくか。先生はそのための格闘をこころみているのだ。教師が教材を調べるといことはわからないことを調べてわかるようにしておくといった甘いものではないのだ。すべてをわかったうえで、そこからさらにあたらしい課題を発見し、子どもをゆさぶっていく確かな事実を発見するための創造の苦悶だったのである。(pp. 40-41)』

これは、授業に臨むための準備段階での教材研究とは、教師自らの生き方、授業・学習に対する問い方が大きく関わっていることを指摘している。

また、斉藤喜博のことばを借り「子どもの興味とか関心とかいうものは、教師が授業を通してはぐくむものであり、子どもの次元に合わせるものではない (P.106)」、さらに「子どもの考えたことを何でもその通りだと承認してしまうのなら、教師はいらないでしょう。それなら子どもの好きにやらせておけばいいのです。授業は子どもの考えをゆさぶり、反駁し、否定しながらさらにあたらしい考えを生み出していく無限の追求ですよ。(p.44)」と、授業の内容を掘り下げるための視点を提案している。このようにして「授業を自分の全力を燃焼させてつくりあげる創造のいとなみととらえた先生たちが、いままでの指導書や教育誌の呪縛から自らを解放して、自分の眼で見、自分の力で授業を組み立て、自分の責任において子どもをみる (p.108)」という創造的な授業への関わり方を説いている。

このように、よい授業を創造し、実施するためには、この段階のいわゆる教材研究を質の高いものとするのが不可欠の要素である。

(1) 教材系統図の作成

階層性の強い数学の内容を系統的に捉えるため、小学校6年間、中学校3年間の指導計画をもとに上下学年の学習内容・教材の関連を明らかにする必要がある。指導する教材と既習事項との関連を明確にすることは、既習事項の習得状況を知ることになり、生徒理解や的確に指導する方策を立てるために役立つ。この教材の系統を視覚化したものが「教材系統図」である。また学生が教材系統図を作成することは、教材の上下学年の系統を明らかにするだけでなく、当該学年の教材のキーとなる概念や用語等を指導内容から抽出する活動を行うことになり、教材の内容を把握することにもつながると思われる。

「教材系統図」の作成の手順は、いくつかある。その一例と「図2 教材系統図」の例を示す。

資料として、「小学校学習指導要領解説―算数編―」や「中学校学習指導要領解説―数学編―」、教科書及びその教師用指導書などを用いる。

①当該学年の教材について

- 1) 教科書の指導内容を、いくつかの小単元に分ける。さらにその小単元を構成する内容に分ける。このとき教科書の目次等教材の内容を一覧できるものが活動を進めるよりどころとなる。
- 2) 小単元や具体的な内容の枠囲みを行い、指導する順序に中央に縦(上下)に並べる。
- 3) 教材の内容と関連する「学習指導要領の指導内容の項目番号」を調べる。
- 4) この教材で指導するキーワード、キープレーズ等(概念・定義、用語、公式、定理、記号等)を教科書から調べ、該当箇所記入する。

③当該教材と関連する下学年の既習内容について調べる。

下学年の教材におけるキーワード、キープレーズ等を調べる。

③当該教材と関連する上学年の学習内容について調べる。

上学年の教材におけるキーワード、キーフレーズ等を調べる。

②、③の活動については、教科書の教師用指導書、教科書の出版社が作成した「教材の系統」等の資料を手がかりとして活用するとよい。

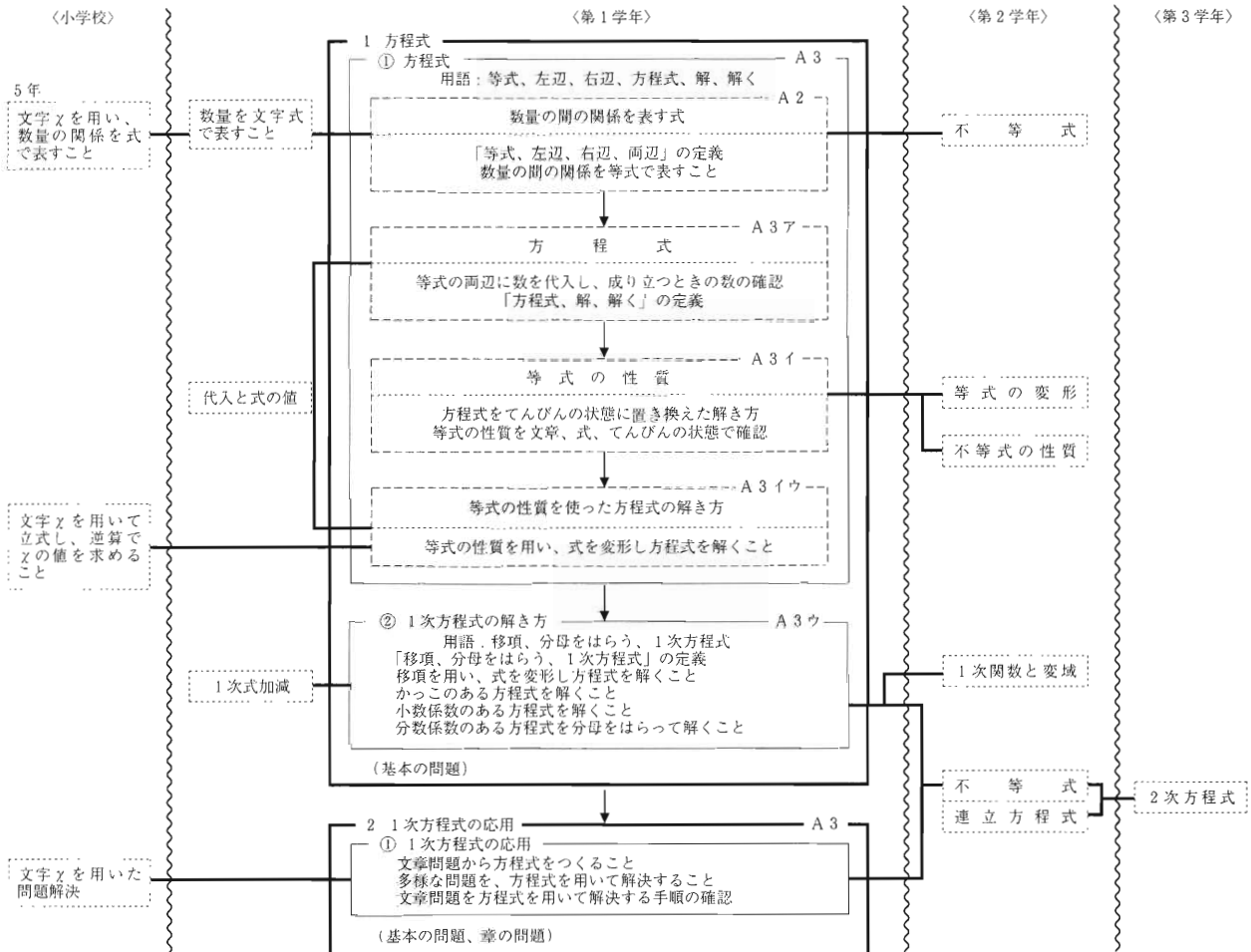


図2 教材系統図（「方程式」）

(2) 教科書の比較分析

小・中学校の6つの出版社から発行されている「算数・数学の教科書」を比較・分析することにより、教材内容、学習の素材、学習過程、問題・発問、解決のために学習活動等の具体的な内容を捉える。

次に、6つの教科書の記述の比較・分析の活動例（表1 小学校の教材、表2 中学校の教材）を示す。さらに、複数の教科書の学習過程の構造を分割し、集成的例（図3）も示す。

表1 6つの教科書の記述を分析する枠組み

教科書分析【小学校・算数・5年：B(1)】「基本図形や平行四辺形の面積の計算や求められ方などの理解を深め、面積を求めるところで進まうにすよ。
7. 三角形及び平行四辺形の面積の求め方を考え、それを用いること。」

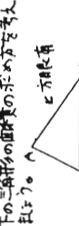
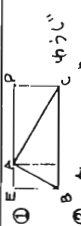
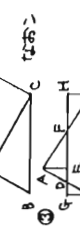
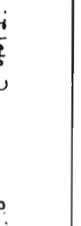
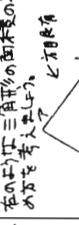



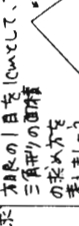
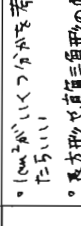
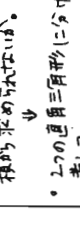
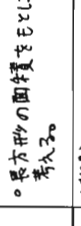
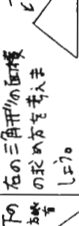
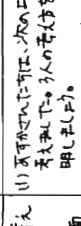

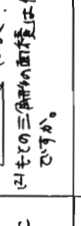
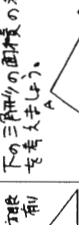
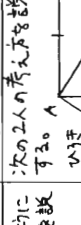


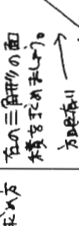
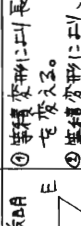
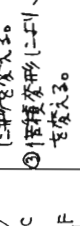
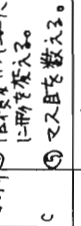
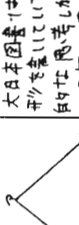
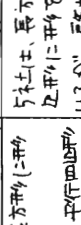
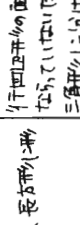
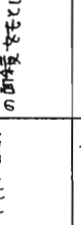
目 標	東京書籍	教育出版	豊林館	大阪書籍	大日本図書	学校図書	考 察	
課題	<p>三角形の面積の求め方がわかる。</p> <p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p>  <p>①  かずき</p> <p>②  りえ</p> <p>③  ちえ。</p>	<p>三角形の面積の求め方がわかる。</p> <p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p>  <p>①  かずき</p> <p>②  りえ</p> <p>③  ちえ。</p>	<p>三角形の面積の求め方がわかる。</p> <p>あるの「目」をひいて、下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p>  <p>①  かずき</p> <p>②  りえ</p> <p>③  ちえ。</p>	<p>三角形の面積の求め方がわかる。</p> <p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p>  <p>①  かずき</p> <p>②  りえ</p> <p>③  ちえ。</p>	<p>三角形の面積の求め方がわかる。</p> <p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p>  <p>①  かずき</p> <p>②  りえ</p> <p>③  ちえ。</p>	<p>三角形の面積の求め方がわかる。</p> <p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p>  <p>①  かずき</p> <p>②  りえ</p> <p>③  ちえ。</p>	<p>三角形の面積の求め方がわかる。</p> <p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p>  <p>①  かずき</p> <p>②  りえ</p> <p>③  ちえ。</p>	<p>学校図書は「三角形の面積の求め方を考えよう。」と述べている。また、下の三角形の面積の求め方を考えよう。と述べている。また、下の三角形の面積の求め方を考えよう。と述べている。また、下の三角形の面積の求め方を考えよう。と述べている。</p>
図などの掲載を明確にする工夫	<p>方眼紙を用いて作図をする。</p> <p>△の面積を求めよう。</p> <p>△の面積を求めよう。</p> <p>△の面積を求めよう。</p>	<p>方眼紙を用いて作図をする。</p> <p>△の面積を求めよう。</p> <p>△の面積を求めよう。</p> <p>△の面積を求めよう。</p>	<p>方眼紙を用いて作図をする。</p> <p>△の面積を求めよう。</p> <p>△の面積を求めよう。</p> <p>△の面積を求めよう。</p>	<p>方眼紙を用いて作図をする。</p> <p>△の面積を求めよう。</p> <p>△の面積を求めよう。</p> <p>△の面積を求めよう。</p>	<p>方眼紙を用いて作図をする。</p> <p>△の面積を求めよう。</p> <p>△の面積を求めよう。</p> <p>△の面積を求めよう。</p>	<p>方眼紙を用いて作図をする。</p> <p>△の面積を求めよう。</p> <p>△の面積を求めよう。</p> <p>△の面積を求めよう。</p>	<p>方眼紙を用いて作図をする。</p> <p>△の面積を求めよう。</p> <p>△の面積を求めよう。</p> <p>△の面積を求めよう。</p>	<p>方眼紙を用いて作図をする。</p> <p>△の面積を求めよう。</p> <p>△の面積を求めよう。</p> <p>△の面積を求めよう。</p>
この教材における概念	<p>面積の求め方がわかっていく形に変わっていく。</p> <p>面積の求め方がわかっていく形に変わっていく。</p> <p>面積の求め方がわかっていく形に変わっていく。</p>	<p>面積の求め方がわかっていく形に変わっていく。</p> <p>面積の求め方がわかっていく形に変わっていく。</p> <p>面積の求め方がわかっていく形に変わっていく。</p>	<p>面積の求め方がわかっていく形に変わっていく。</p> <p>面積の求め方がわかっていく形に変わっていく。</p> <p>面積の求め方がわかっていく形に変わっていく。</p>	<p>面積の求め方がわかっていく形に変わっていく。</p> <p>面積の求め方がわかっていく形に変わっていく。</p> <p>面積の求め方がわかっていく形に変わっていく。</p>	<p>面積の求め方がわかっていく形に変わっていく。</p> <p>面積の求め方がわかっていく形に変わっていく。</p> <p>面積の求め方がわかっていく形に変わっていく。</p>	<p>面積の求め方がわかっていく形に変わっていく。</p> <p>面積の求め方がわかっていく形に変わっていく。</p> <p>面積の求め方がわかっていく形に変わっていく。</p>	<p>面積の求め方がわかっていく形に変わっていく。</p> <p>面積の求め方がわかっていく形に変わっていく。</p> <p>面積の求め方がわかっていく形に変わっていく。</p>	<p>面積の求め方がわかっていく形に変わっていく。</p> <p>面積の求め方がわかっていく形に変わっていく。</p> <p>面積の求め方がわかっていく形に変わっていく。</p>
難しさの解消のために課題をすすべる工夫	<p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p> <p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p> <p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p>	<p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p> <p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p> <p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p>	<p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p> <p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p> <p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p>	<p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p> <p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p> <p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p>	<p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p> <p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p> <p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p>	<p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p> <p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p> <p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p>	<p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p> <p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p> <p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p>	<p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p> <p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p> <p>下の三角形の面積の求め方を考えよう。</p>
この教材の着眼点と工夫・対策	<p>同じ形の三角形を使って、平行四辺形にする考えが、求め方がわかっていく。</p> <p>平行四辺形の面積を求めよう。</p> <p>平行四辺形の面積を求めよう。</p>	<p>同じ形の三角形を使って、平行四辺形にする考えが、求め方がわかっていく。</p> <p>平行四辺形の面積を求めよう。</p> <p>平行四辺形の面積を求めよう。</p>	<p>同じ形の三角形を使って、平行四辺形にする考えが、求め方がわかっていく。</p> <p>平行四辺形の面積を求めよう。</p> <p>平行四辺形の面積を求めよう。</p>	<p>同じ形の三角形を使って、平行四辺形にする考えが、求め方がわかっていく。</p> <p>平行四辺形の面積を求めよう。</p> <p>平行四辺形の面積を求めよう。</p>	<p>同じ形の三角形を使って、平行四辺形にする考えが、求め方がわかっていく。</p> <p>平行四辺形の面積を求めよう。</p> <p>平行四辺形の面積を求めよう。</p>	<p>同じ形の三角形を使って、平行四辺形にする考えが、求め方がわかっていく。</p> <p>平行四辺形の面積を求めよう。</p> <p>平行四辺形の面積を求めよう。</p>	<p>同じ形の三角形を使って、平行四辺形にする考えが、求め方がわかっていく。</p> <p>平行四辺形の面積を求めよう。</p> <p>平行四辺形の面積を求めよう。</p>	<p>同じ形の三角形を使って、平行四辺形にする考えが、求め方がわかっていく。</p> <p>平行四辺形の面積を求めよう。</p> <p>平行四辺形の面積を求めよう。</p>

表2 教科書の比較・分析の具体的な活動例（中学校「方程式」）

項	目標と関連	東京書籍	啓林館	教育出版
②1次方程式の解き方	<p>移項の意味がわかる。</p> <p>移項を用いて方程式を解ける。</p> <p>かっこのある方程式を解ける。</p> <p>小数係数の方程式を解ける。</p> <p>分母をはらい、分数係数の方程式を解ける。</p> <p>1次方程式の意味がわかる。</p>	<p>○ $5x = 6 + 4x$ を用い、等式の性質の(導入)を導いているか。「一般に、等式の一方の辺にある項はその項の符号を変えて他の辺に移すことができる。このことを移項という。」(定義)</p> <p>○ $4x = 18 - 2x$ を用い1つの項だけの移項 $9x - 5 = 2x + 23$ を用い2つの項の移項の例示と各6問の設問</p> <p>○ $5x - 2(x - 1) = 14$ を用いかっこのある方程式の解き方の例示と4問の設問</p> <p>○ $0.25x - 0.14 = 0.36$ を用い小数係数の方程式の解き方の例示と2問の設問</p> <p>○ $\frac{1}{3}x - 4 = \frac{1}{5}x$ を用い分数係数の方程式の解き方の例示と4問の設問 「係数に分数を含む方程式では、分母の公倍数を両辺にかけて、分数を含まない形に変形してから解くとわかりやすい。このように変形することを分母をはらうという。このとき、分母の最小公倍数がすぐ求められれば、それを使えば簡単である。」</p> <p>「これまで学んできた方程式は、移項して整理することによって(1次式) = 0の形に変形できる。このような方程式を1次方程式という。」(定義)</p> <p>(基本の問題) 方程式の解を見つける問題 4問 方程式を解く問題 6問</p>	<p>○ $4x - 15 = 9$ を用いて等式の性質から移項を導いている。「このように、等式では一方の辺の項を、符号を変えて、他方の辺に移すことができ、これを移項するという。」(定義)</p> <p>○ $8x = 5x - 21$ を用い1つの項だけの移項の例示と4問の設問</p> <p>○ $7x - 2 = 6 + 3x$ を用い2つの項の移項の例示と解の確かめと6問の設問</p> <p>○ $7(x - 5) = 9x + 1$ を用いかっこのある方程式の解き方の例示と4問の設問及び*分数の項の2問の設問</p> <p>○ 小数係数の方程式の1問の設問 * 1次方程式のまとめの前に出題</p> <p>○ $\frac{x+1}{2} = \frac{1}{5}x + 2$ を用い分数係数の方程式の解き方の例示と4問の設問及び各1問の設問 「上のように、方程式の両辺に公倍数をかけて、分数を含まない方程式になおすことを分母をはらうという。」 * 「分母をはらう」強調なし</p> <p>「これまで学んだ方程式は、移項して整理すると $ax = b$ の形になる。このような方程式を一次方程式という。」(定義)</p> <p>○ 一次方程式の解く手順を示す (練習) 1 / 2 ページ</p>	<p>○ $4x - 2 = 10$ や $2x = 3 + x$ を用い、等式の性質や移項の導入をしている。「等式のある一方の辺にある項を、その符号を変えて他方の辺に移すことを移項という。」(定義) ($4x - 2 = 10$)</p> <p>○ $3x = -2x + 20$ を用い1つの項だけの移項の例示と4問の設問</p> <p>○ $5x + 2 = -3x - 22$ を用い2つの項の移項の例示と6問の設問</p> <p>○ $7x - 5 = 3(x + 5)$ を用いかっこのある方程式の解き方の例示と4問の設問</p> <p>○ $2.1x - 3.2 = 0.5x$ を用い小数係数の方程式の解き方の例示と4問の設問</p> <p>○ $\frac{2}{3}x - 4 = \frac{1}{2}x + 7$ を用い両辺を6倍して解かせ、2問の設問 「係数に分数を含む方程式では、両辺に分母の公倍数をかけて、係数を整数にして解くとよい。このように変形することを分母をはらうという。」</p> <p>○ $\frac{x}{3} - \frac{x-3}{4} = 8$ を用い分数係数の方程式の解き方の例示と2問の設問 「移項して整理すると、左辺が x の1次式になる方程式、つまり、$ax + b = 0$ の形になる方程式を x についての1次方程式という。」(定義)</p> <p>○ $\frac{x-2}{2} = \frac{x+4}{5}$ を用いて改めて1次方程式の解き方のまとめを示す。 (練習) 8問 (練習問題) 1 ページ</p>

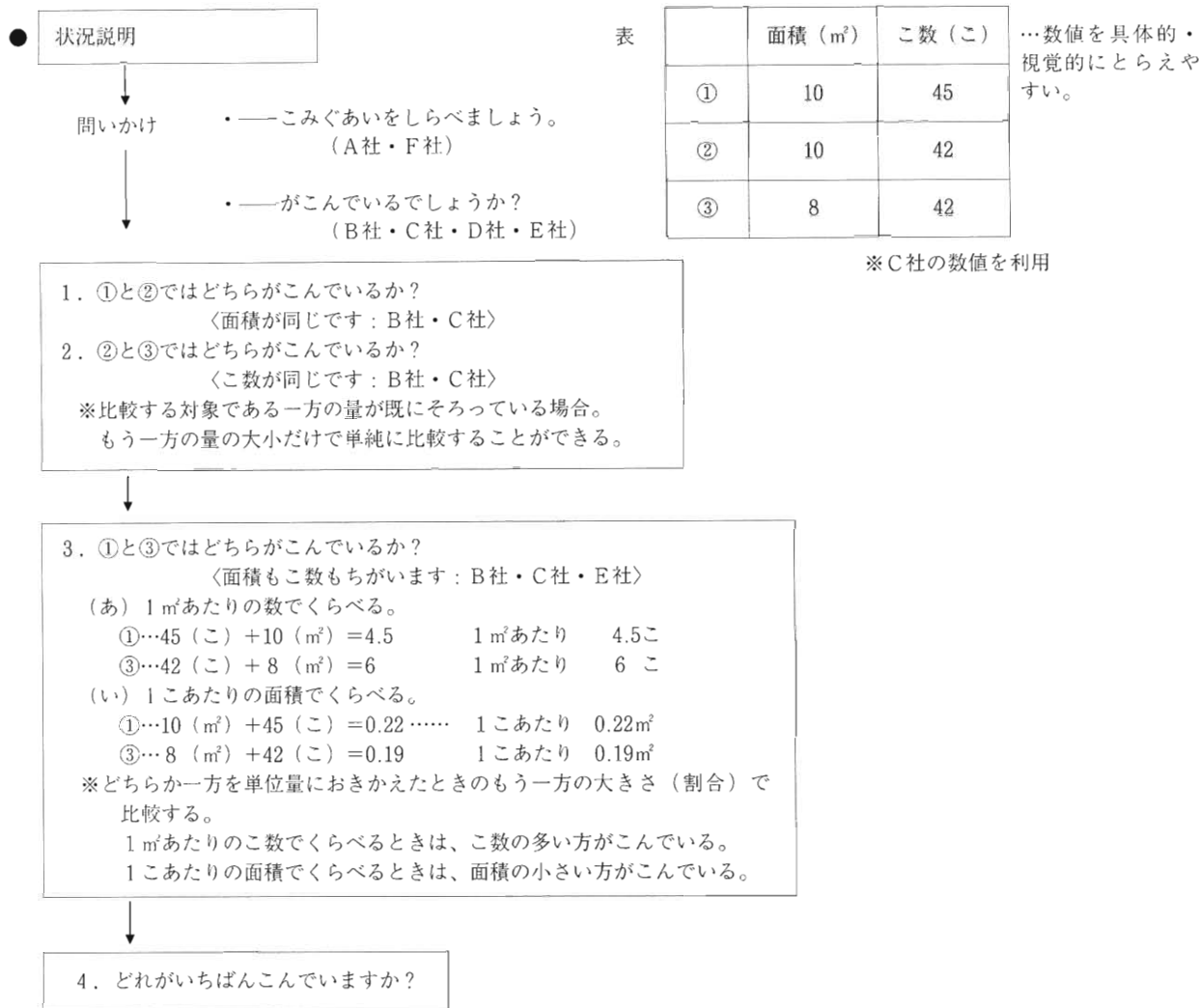


図3 学生の教科書分析(「異種の2量の割合」単位量あたりの大きさの導入部分)

第3段階: 教材による学習の具体的な活動(シミュレーション)等を行う

(1) 情報処理分析

R.M. ガニエは、学習において子どもがどのような認知過程をたどり、どのような判断(意思決定)や知的能力を必要とし、その結果どのような能力が育成されるのかという、“心的操作”の系列を明らかにするものとして、図4に示す。

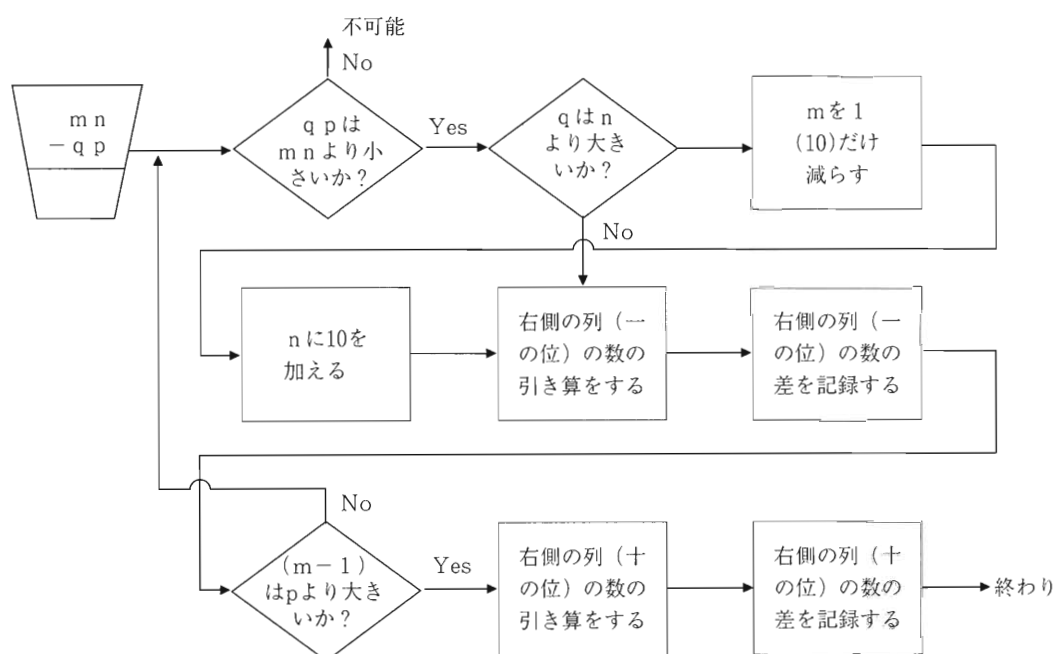
この情報処理分析は、教材の最終目標となる活動を行うのに必要な判断(意思決定)や操作の系列を確化することによって行われる。つまり、その教材の学習に置ける最終目標を明確に記述し、その目標達成の手続きに必要な過程を示すものであり、その手順の中の活動は、判断(意思決定)、操作という学習者の能力と大きく関わっている。それを「流れ図」として表したものが、情報処理分析である。

それを、手順への“入力”は台形、“行為(操作)”は長方形、“判断(意思決定)”はひし形という記号により流れ図(フローチャート)として図4のようにかく。

mn-pqという2位数の減法の計算を例に考えてみる。

この計算では、

- 1) 先ずmnとpqの大小比較が行われる。
 - 2) 次に、1の位のnとqの大小比較がなされる。その結果、 $n > q$ であるならば、
 - 3-1) 1位数どうしの計算方法でそのまま単純に引き算ができる。
しかし、 $n < q$ であるならば、
 - 3-2) 10の位から借りる（いわゆる繰り下がり）の操作が必要となってくる。
……… 以下の手順は略 ………
- ここでは、3-1)の1位数どうしの引き算のように既習事項もあれば、3-2)の繰り下がりの操作のように新しい学習事項もある。さらに、2)の1の位のnとqの大小比較のように、次にどのような操作が適切であるかという判断を必要とする過程も含まれている。
- この教材では、2)の判断から3-2)の繰り下がりの操作の後、引き算を行う一連の過程が新しい学習事項として、指導の焦点となることが明確となる。



2けたの引き算に関する情報処理分析（ガニエによる：Principles of Instructional Design p.102）

〈参考文献〉

○Robert Mills Gagne and Leslie J Briggs (1979) Principles of Instructional Design (Second Edition), Holt Rinehart Winston

図4 「2桁の引き算『mn-qp』の学習における子どもの考えるメカニズムの『情報処理分析』例」

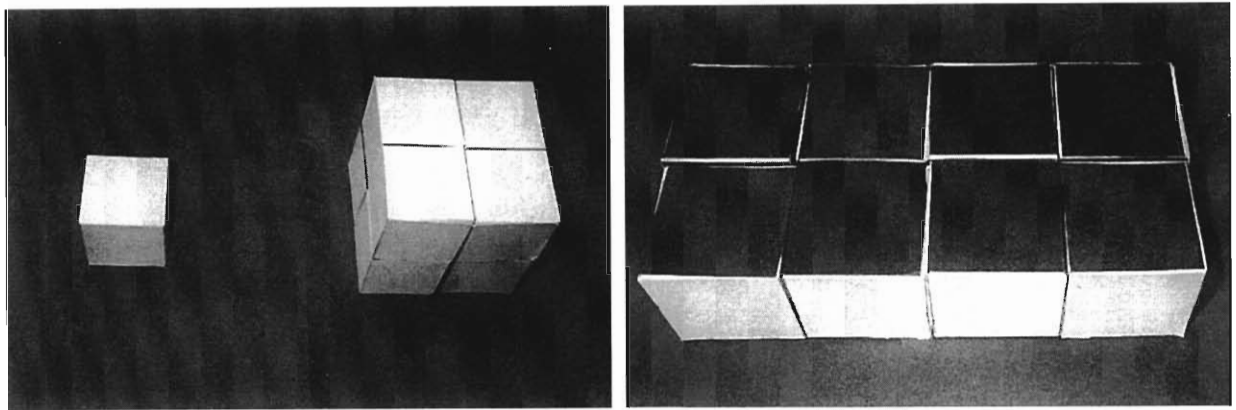
(2) 教材・教具の作成・作図等の活動を行う

合同な図形の作図、四角錐の体積の求積における立体モデルの作成などにより、子どもの課題追求の活動・過程のシミュレーションを行う。（立体モデルの作成例：資料2）

(3) 学習者の実態を捉えるために

授業展開の構想について、学習者の特性の視点から検討することが必要である。（参照：資料

3 学習者の実態を捉えるために）



資料2 立体モデルの作成例

資料3 学習者の実態を捉えるために

学習者の実態に即した指導計画を立案するために

- 1) 学習者の既習事項や生活経験
- 2) 学習者の興味・関心
- 3) 学習者の発達段階

等、学習内容に関わりのある事柄を事前に把握しておく。

児童の実態について（例）

5年ふじ組の児童のこれまでの学習では、整数と小数、小数のかけ算やわり算等の計算などアルゴリズムの確定しているものをスキルとして学習することを得意としている子が多く日常の授業やはげみの時間（計算練習の時間）等では意欲的にやっている。

しかし、課題解決において多方面からのアプローチをしたり、問題の構想を数式に表現しそこから論理的に考え追求を行ったりすることを得意とする子は発達段階の関係もありあまり多くない。

そこでこれまでの算数の学習では、課題を解決する学習において具体的な創作活動を取り入れた指導を中心に行ってきた。この分数と小数の学習においても、本時の課題の追求過程においてテープを折り重ねたり、さらに切り取ったり、あるいは数直線上に表すことによってその根拠や理由を明確にする方法を取り入れることにした。

第4段階：学習指導過程（授業計画）を構想・立案する

図4は、「異種の2量の割合」の学習過程の導入部の骨組みを考案したものである。

授業は、時間の流れとともに時系列に進行する。しかし、そこではいくつかの葛藤や論争といった場面が同時進行的に行われており、それらを巧みに構成しドラマが展開されているといえる。これは、「プランは、一連の操作を実行する順序をコントロールする生活体内の階層構造過程（G. A. Miller ら）」の指摘にあるように、「知的格闘」を経て構造化された計画や教授方略に基づいて、時系列で行動や活動が実行されていると考えられる。そこで、学習指導計画を構想・立案するときには、構造化した表現方法をとるとよい。

発 問

この表は学校の花だんの面積と植えてある花の本数を表しています。

どの花だんの花が一番こんでいるでしょうか。

	面積 (m ²)	本数 (本)
チューリップ	10	50
すいせん	10	40
すみれ	5	40

[子どもから考えられる応答(答え).]
 発問に対する応答は大きく分けると2つ方法としては5つが考えられる。

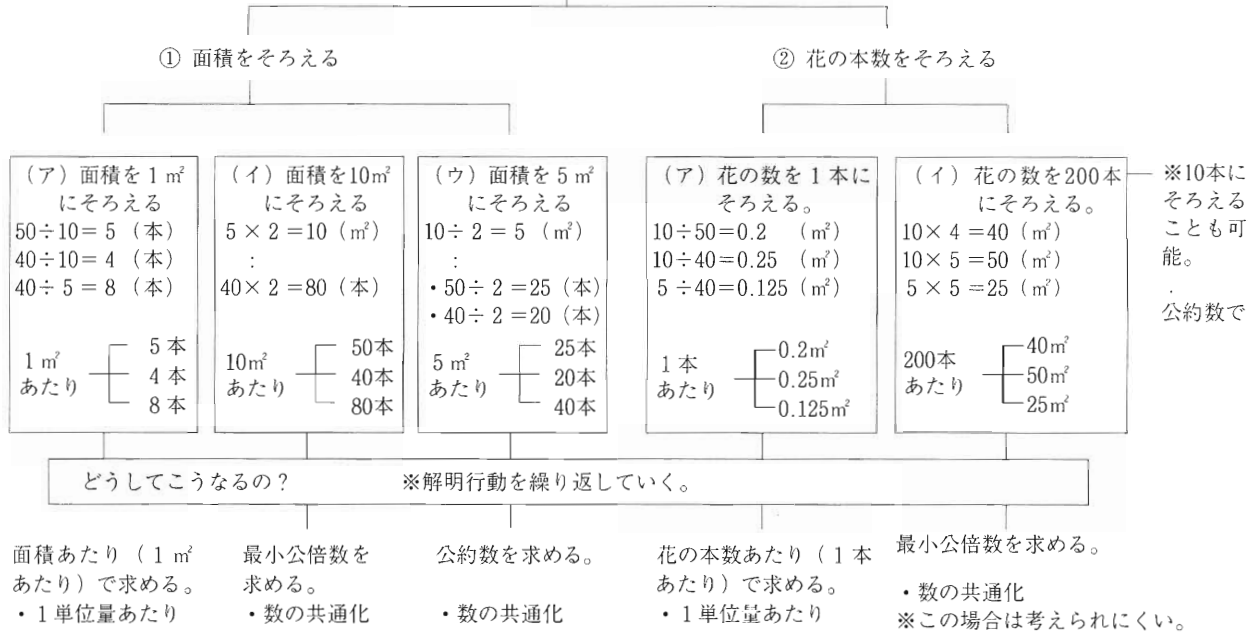


図5 学生のマイクロティーチングの計画 (単位量あたりの大きさ)

授業設計のときの課題の中で、

③ 課題追求のための学習活動、予想される児童の活動あるいは反応・応答は、4～5通りある

④ その4～5通りの子どもの反応・応答に対する教師の対応行動を考える

の2点を検討するには、次のことを手がかりとするとよい。

「開かれた質問」に対する応答は、一つに限られることなく、また正答・誤答というよりは質問の意図に対してより適切かどうかを判断したり、応答の独創性を評価したりすることになる。

従って、この質問に対する応答は、学習者自身がそれを組み立て創り出す必要がある。その結果、次の③、④の課題を解決することができる。

③、④の学習者の行動とそれに対する教師の対応行動に関しては、ストラッサーの「教授の概念的モデル」(図5)に基づいて考えると次のようになる。

発問に対する学習者の反応・応答を観察・解釈・診断の結果、“計画されたタクテクス”が、教師の意図に従って順調に進められていると判断されれば、そのまま進めることになる(4b「タクテクスの継続」)。しかしながら、その時点で最初に意図したねらいが達成できていないと判断され

れば、そのタクテクスの一部を修正したり（4c₁「タクテクスの修正」）、その教師のレパトリーの中から別のより適切な対応策を選び出したりして（4c₂「新しいタクテクス」）、その“計画されたタクテクス”を変更することが必要となる。そのタクテクスを指導計画立案の際、教材研究の成果として予め考えておくことである。

このことは、授業の事前にマイクロティーチングを行うときに、子ども役の学生に対しても教師のねらい（4b「タクテクスの継続」）に沿った反応・応答だけでなく、「タクテクスの修正（4c₁）」や「新しいタクテクス（4c₂）」が必要となる反応・応答をすることも検討しておくといよい。

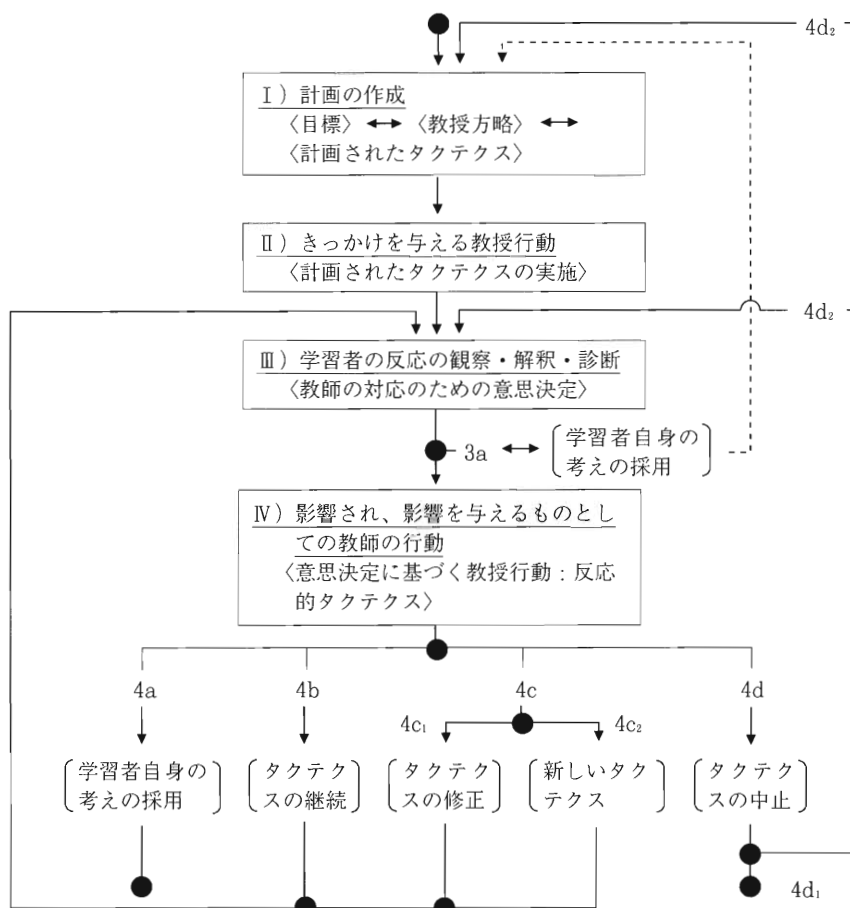


図6 「教授の概念的モデル」(ストラッサーによる)

【参考文献】

- Gagne,R. M. (1979) “Principle of Instructional Design”. Second Ed.,New York,Holt,Rinehart and Winston
- 小金井正巳 (1978) 「教授ストラテジー」 教育学大事典 第2巻、第一法規
- 児島邦宏 (1988) 「授業方略と授業形態」 授業技術講座 〈1 授業を創る－授業設計－〉 3章、ぎょうせい、pp. 一110
- 三橋功一 (1995) 「教材研究・授業設計に焦点をあてた初等算数教育法のプログラムの開発」、教科教育学研究 第13集、第一法規、pp.39-61
- 三橋功一 (1996) 「子どものつまずきとその解決の手だてを考える－「速さ」の学習の事例を通して－」、子どもの学びとつまずき「わからない・できない」を活かす教科教育、東京書房、pp.176-189
- 武田常夫 (1976) 「授業の発見」、一壘書房
- Strasser,B., (1967) “A Conceptual Model of Instruction” The Journal of Teacher Education (18, I, PP.68-74)

－ 社 会 －

1. 授業の学習主題をどのように設定するか

授業の骨組みを作るためには、まず、授業の枠組みと授業の実施レベルを考え、授業の学習主題を設定しなければならない。

授業の枠組みは、1時間毎の授業を規定する大まかな諸条件と自己の指導力量や習熟の段階を考慮しつつ、学習主題（たとえば、小5年「自動車生産」、小6年「江戸時代」、中1年「サハラより南のアフリカ」等）に到達するために、一連の学習活動の指導計画を組み立てることである。この中で、後述するが、社会科では、一連の学習活動の指導計画を組み立てることは特に重要である。なぜなら、1時間毎の授業は、その1時間毎に相互に切断されて孤立的・単独的に営まれているのではなく、その前後の授業の一定の積み上げ・関連・継承・発展・応用などをめざして実施されるからである。

授業の実施レベルは、およそ、①日常的に日々営まれるもの、②とりたてて教材研究や学習指導研究等を蓄積・重視し、自主的に学習指導案を作成して公開的・研究的に実施するもの（通常、「研究授業」と称され、第三者等による授業の分析・批評等を前提にして実施される）、に区分して考えることができる。ただし、①と②は相互還流的なものである。①は教師本人の素朴な癖などが現れやすく、誤解やひとりよがりの思い込みなどを含みつつ営まれることがあるが、本人教師もそうした自己の癖などに気がつかないことが多い。したがって、②によって、自己の授業実践が分析・批評され、たえず、自己反省し、批判等に耐え、指導力量の向上と習熟に努めることは重要である。

教育実習における教科の授業実施とは、上記の②（研究授業）を自覚的に重点的にすすめるものであるが、その反面、「見てもらう」「見させる」授業として、おもて向きにスラスラ流れる授業になる場合もある。このような授業も避けられないが、その中においても、「考えぬかれた」「熟慮された」学習指導によって、子どもの学力形成と成長を促すことは重要である。「考えぬかれた」「熟慮された」学習指導を組み立てるためには、入門期段階では、指示・配当された教科の指導時間の中で、まず、自己が相対的に最も得意とする分野や内容・指導項目を選び、学習主題として設定し、自己の本領を発揮することから始めることが必要である。つまり、入門期段階という自己の成長過程において、研究授業に向かう場合、自己が自信をもち、おもしろいと考えているものから学習主題を設定し、やがて、しだいに、その学習主題のレパートリーを拡大していくことが重要である。

2. 学習活動の指導計画（指導時間の配分と指導内容の確定等）をつくる

(1) 授業の学習主題を設定した後、学習をいくつかの指導内容に分節化（1時間毎の授業時間）して時間配分し、その学習主題を総計何時間で学習するかを確定するとともに、「本時案」としてどの指導内容を扱うかを確定する。社会科の学習はもともと「総合的な学習」の性格や要素をもっているが、重視すべきは、①以前に、他分野・他教科・他学年における学習内容を含めて学習しているものとの関連性、②子ども達が日常生活や地域社会（ニュースやトピックスなども含めて）において経験しているもの（と思われるもの）との関連性、③学校運営の環境・条件（行事日程等も含む）や学級の子ども集団の特徴など、を考慮し、上記の学習活動の指導計画を作り、かつ、学習主題の意義づけ（その学習主題を学ぶことはどのような意義があるか）を考えることである。これによって、学習活動の指導はその日のたんなる「思いつき」や「気分」でやるのではなく、以前に学んだことの蓄積と関連性を踏まえて新しいことを学び、さらに、将来の学習に発展・応用させるという、学習の意図的な順次的・系統的展開が可能になる。

学習主題の意義づけをする場合、学習指導要領やその解説書・教科書に眼を通すとともに、当該の学習主題に対する研究状況や学問研究の到達点なども可能な範囲で把握しておくことも必要である。なぜなら、授業では、子どもから、特定の事に対して、高度な特殊・専門的な質問や発言が出てくることもありえるし、教師はそれらを想定し、子どもからの質問・発言への解説・補足などにはできるだけ留意しておくことは重要である。

- (2) 社会科の学習活動の指導計画作成では、黒板使用や資料の解説だけでなく、学習主題の意義や特徴に対応して、子どもに、調査（見学・観察、資料収集）・作業・研究・発表などに取り組ませるための時間を配分することがより適切な場合が多い。この場合の学習活動の指導計画作成においては、特に、学校外での調査（見学・観察）・作業に及ぶ場合は、教師は、事前に周到な準備と調査、訪問先との協力依頼・連絡・打ち合わせ、安全配慮などを行うことは当然であるが、授業時間配分においても、事前学習（何を調べるか、何に注目させるかという事前の指導や予想と計画の作成、グループ編成と調査の役割分担）などを明確に位置づける必要がある。ただし、教育実習においては、特に「終末授業」と称される研究授業においては、上記の時間配分のなかで、発表の授業時間が配分され、その学習指導がまかされることが多い。発表は、図表化、「壁新聞」形式（絵画、写真を含む）、劇化（人形劇なども含む）、紙芝居、記録・文集化、ビデオ映像化、実物収集と展示化、模型化、口頭発表、シンポジウムなどが工夫されている。研究授業における発表を中心にした学習指導の組み立ては無難であることが多いが、その発表・まとめをさらに高める指導への挑戦も展望した方がよい。すなわち、①子どもの発表に対するさらなる質問・意見の組織化と討論の展開、②子どもの発表・まとめから新たな学習課題の提案・提示への展開、などである。

今日、①が指導しにくいのは、調査→発表形式の学習においては、個々の子どもは自己の（グループの）分担した調査→発表に精一杯であり、他人の（他のグループの）調査・発表にまで眼を向ける余裕がないことに起因していることが多い。しかし、①が実践されるならば、さらに深みのある理解を促すことができる。

3. 「本時案」の授業の組み立て方

- (1) 「本時案」の授業の組み立てにおいて最も重要なのは、その1時間の学習活動の範囲において何を学ばせ、何を理解させるかという具体的に到達すべき指導目標（子ども側においては学習目標）を明確にすることである。指導目標は、繰り返して述べるが、上記のように、前回の学習活動や授業との関連・継承をうけて設定する。この指導目標の明確化にもとづき、本時の学習課題を授業の学習過程において子どもに簡潔に提示することが必要である。そして、さらにその学習課題の提示によって子どもがどのように反応するか、子どもに何を考えさせ、どのような活動・作業にとりくませるか、などの学習過程を想定することが重要である。指導目標は、たとえば、個々の学習主題とその指導計画に対応して、学習指導案においては具体的に「〇〇の社会的・経済的な政策や事業の理由・意義・構造を学ぶ」「〇〇の歴史的な事件・事業の原因・理由・影響を学ぶ」「〇〇の社会的諸生活（産業・事業等）の改善・改革・工夫の内容・課題・願いを学ぶ」「〇〇の地理的な条件・環境の特質を学ぶ」などとそれぞれ記載されることが多い。

以上、学習主題、本時の指導目標、学習過程における本時の学習課題の簡潔な提示、を例示すると下記のようになる。

◎小学校5年

- 学習主題（総計6時間配分）「公害を防ぐ努力」
- 本時の指導目標（5時間目）「水俣病の原因を考え、工場や国・県の対策を学ぶ」
- 本時の学習課題の簡潔な提示「水俣病の患者の苦しみをとりのぞくにはどうしたらよいか」

◎中学校1年

- 学習主題（総計5時間配分）「サハラより南のアフリカ」
- 本時の指導目標（5時間目）「アフリカへの国際協力を学ぶ」
- 本時の学習課題の簡潔な提示「アフリカにはどのような援助が求められているか」

- (2) 社会科の学習過程は、通常は、主に教師の指導上の発言（指導言）によって組み立てられる。指導言は学習内容と子どもの思考・行動に対応し、一定の教育的働きかけの意図や理由をもち、およそ、説明、発問（主に子どもの思考に働きかける）、指示（主に子どもの行動に働きかける）、助言から構成される。入門期段階では、説明・発問・指示・助言の区別と関連を明確化しにくいのが、習熟することによってしだいに自覚的な区別をすることができる。さらに重要なことは、以上の教師の指導言としての説明・発問・指示・助言の営みは、やがて、教師の指導力量向上と子ども達の成長によって、子ども達自身が自らそれらを相互に駆使することをめざして行われることである。つまり、子ども達自身が自ら、説明し、発問（疑問・質問を出し）し、指示し、助言し合って、特定の主題・課題の解明や解決にすすむことであり、これこそが、自主的・自発的な学習の論理というべきものである。したがって、教師の上記の指導言は、子ども側に向けられた「提案」という性格をもち、やがて、その指導力量向上によって、たえず、子ども達からの反論、意義申したて、（部分）修正意見等を積極的に組織することになっていくものである。
- (3) 社会科の学習過程を想定する場合、教師の説明のみで展開される授業は絶対的な誤りではないが、難易度としては非常に高度になるか、あるいは逆に安易に流れるか、教師の一方的な抑圧的な教え込みの印象や傾向を生むことが多い。それゆえ、教育実習における授業が上記のような研究授業として実施されることを考慮するならば、発問（とそれにもとづく子どもの発言や討論の組織化）や、諸作業・行動などを組織するための指示の組み立てを工夫し重視したほうがよい。なお、説明の場合、①各種の教育機器を使用・操作する時はあらかじめリハーサルしておくこと、②小学校高学年や中学校の教科書記載の特定の固有名詞や事件名等で難しい漢字表記のものは、教科書を見ずに板書できるように練習・記憶しておくことが重要である。また、教育実習の研究授業において、社会科では、実習生自身が説明の資料作成として、積極的に実物収集・模型制作・写真撮影などを準備することが多い。その場合、そうした資料の作成・紹介を通して、子どもに何に注目させるか、何を考えさせるか、などを深く想定することが重要である。
- (4) 発問は教師の子どもへの問いかけである。社会科では、特にいわゆるクイズ形式の一問一答に終始するような問いかけを避け、指導目標の明確化と本時の学習過程における学習課題の簡潔な提示にもとづき、主な発問を3～4個程度作り、子どもがさまざまな方向から解明し、あるいは発言・討論に導くことが重要である。主な発問は、「○○の理由・原因はいかなるものか」「どのような改善・工夫・願いがみられるか」「どのような特質や違いがあるか」などと組み立てられることが多い。そのためには、教師は指導目標の明確化に際し、子どもだったらどのように考えるか、どのような質問・疑問を出すだろうか、どのような先入観（や断片的な理解）をもっているだろうか、などと想定しておくことが必要である。また、上記の教師の指導言に対して、子どもたちが反応しない場合やその指導言自体を理解できない場合も想定し、さらにわかりやすく言

い換えることや説明の仕直しや一定の軌道修正化に留意しておくことも必要である。なお、発問の実践的な研究参考書としては、大西忠治著『発問上達法』（民衆社）が有益である。

- (5) 「本時案」の授業を組み立てる場合、理解や作業が遅い子どもや不得意な子どもがいることを考慮・想定することが必要である。そして、特に作業や行動を指示する場合、たとえば「〇〇するのに自信がない人や質問がある人は遠慮なく手を挙げなさい」などと付け加えることが重要である。

一 理 科 — 科学概念を学ぶための授業づくり

1. 理科授業の骨組みは何で決まるか

理科授業の最も理科らしいところは「実験」を行えるという点にあります。実験とは実験器具を使った単なる操作を意味するものではなく、数学や歴史を学ぶときのように頭の中だけで空想する思考実験も含まれます。それは「自分の考えが正しいかどうかを確かめるための積極的な行為」でなくてはなりません。ですから、実験の前には「たぶんこうなるに違いない」という「仮説」が必要です。

理科授業では、いくつかの仮説と実験がくり返されて、最終的にはすべての児童生徒が、科学概念や法則と言われる科学者と同じような考え方がもてるように仕込まれる必要があります。

理科教師の仕事を建築家にたとえると、設計図という「仮説」にもとづいて、建築材料や道具としての「実験」や「観察」をたくみに使いわけながら、最後には「科学概念」や「科学的方法」が身に付き、立派な建物を建てることに相当します。

	建 築 家 の 仕 事	教 師 の 仕 事
構 想 と 設 計	建物の目的にかなったイメージを想像し、設計図をつくる	教育上の目的・目標の意義と何を教えたいかを考える
困 難 性 の 予 測	建築するうえでの問題点や課題を予測し、解決策を展望する	子どもの誤概念を予測し、困難な課題を予測する
資 材 の 収 集 と 準 備	建築材料を購入し、機材、人材を集め、準備と訓練を行う	実験・観察のための教材や文献を集め、予備実験など教材研究を行って、困難な課題の解決に展望を得る
計 画	作業の手順を決め、企画書をつくる	教育目的・目標にかなった教材配列を考え、学習指導計画（単元案）をつくる
分 担	それぞれの作業班に役割分担し、手配書をつくる	1時間の分量にふさわしい内容の学習指導案（各自案）をつくる
作 業	建設作業を行う	授業を実践する
点 検	完成した建物の検査を行い、設計どおりにできたかどうかを確認する	アンケートやテスト、授業観察などによって授業を評価してもらう
終 了	建物を依頼主に引き渡し、クレームに対応し、記録に残す	評価をもとにして反省点や改善点を記述し、授業記録として残す

2. 授業づくりのステップとポイント

- (1) 「何を教えたいか」を考える —これで授業の質が決まる

建築家が立派な建物を建てようとするとき、まず建てるべき建物の目的にかなった美しい全体像

をイメージし、惚れ込むことから始めると言われます。教師の最初の大切な仕事は「教えるべきこと」を理解し、心の底から「教えたい」という気持ちになることです。そのためには、その授業で教えるべき事柄がどのような科学概念と関係があるのか、その科学概念を身に付けることがなぜ大切なのか、その概念を知ることによって自然や世界を見る目がどのように広がるかを解釈する必要があります。そこで教師自身がそのことを初めて知ったときの知的興奮や感動を思い出すことが役に立つでしょう。教師自身が「おもしろい」と思わない内容は子どもたちに受け入れられるはずがありません。

(2) 科学概念を学ぶ「難しさ」を考える 一子どもの立場になる

多くの科学概念は常識的な考え方とはかなり違っていています。だからこそ学校でわざわざ教える必要があるのですが、子どもたちの考えにはどんな勘違いや間違いがあるかを想像してみるのが重要です。そのような考え方は「誤概念」と呼ばれていますが、そのような考え方を取り除くためには「決定的な証拠」が必要です。それもひとつだけでなく、できるだけたくさんあるに越したことはありません。そのような証拠を授業で示すことができれば、子どもたちは自分の誤りに気づき、自分で正すに違いありません。

(3) 「決定的な証拠」となる実験・観察を探す 一教材研究のはじまり

建物を建てるにはたくさんの建築材料が必要です。それと同じように、これまでに開発されている実験や観察を調べあげて、最もその授業にふさわしい実験・観察の教材を探しましょう。指導教官や先輩の経験、過去の授業記録や文献が大いに頼りになります。もし、いいものがなければ自分で改良を加えた手作り教材や「特注」実験を開発する必要があります。

(4) 間違いを誘導する答えと質問の順番を考える 一授業案の設計

それらの実験・観察に先立って、子どもたちにどのような質問をすべきかを考えましょう。どのような順番で実験。観察と質問を並べたらいいか、どんな「まぎらわしい答え」を用意したら子どもが間違えるか、子どもの立場になって、子どもの仮説、考え方の変化を想像してやるのが役立ちます。特に、一度では納得できない頑固で、ものわがりの悪い、気難しい子どもになったつもりで考えてみましょう。最初の質問は最も難しい、だれもが間違えるような質問を使い、いくつかの比較的簡単な質問と実験を順番に並べてステップを踏ませ、授業の最後には難しい質問に全員が正解できるというのが理想的です。

授業の構想ができたら授業案を書いてみよう。それぞれの学校や授業スタイルによって違った書式がありますが、重要なポイントは授業の目的や目標、配列される質問と答えの予想、実験や観察です。第三者からみてその授業の全体像がわかるように書く必要があります。

(5) 討論と活動、お話しを入れる 一教師も楽しむ

まぎらわしい答えがうまく見つかり、実験する前から教室では自然に論争が生まれます。自分が選んだ答えに自信がない人も、いろいろな意見を聞いているうちに確信がもてるようになります。積極的に手をあげて自分の意見を堂々とのべる人もあらわれるに違いありません。教室で討論が始まりそうだったら「どうぞ意見を述べてください」と水を向け、教師は論議の交通整理につとめま

しょう。実験がうまくいけば、見ただけで結論がわかるので、教師は長々と説明をしなくてもすむでしょう。

さらに、学習する科学概念が発見された逸話や科学者についての歴史、応用されている身近なものや身近な現象、教師自身の体験談などをもちこんだ「お話し」があると、児童生徒だけでなく教師にとっても授業の楽しさがいっそう増します。生き生きと楽しそうに学習する子どもたちの姿をみながら話しかけることは教師にとっての楽しみでもあります。

また、どうしても児童生徒に体験させたい魅力的な実験や観察があれば、生徒実験を企画し、大いに活動してもらいましょう。いっそう学習への関心が高まってきたら、グループによる自由研究や課題解決プロジェクトへの取り組み方を教えましょう。

(6) まずやってみて子どもに聞いてみよう 一授業の評価法

授業が成功したかどうかは、教師にとってとても気になることです。まず、授業をやったら必ず子どもたちに「面白かったですか?」「何がわかりましたか?」と聞いてみましょう。もし少しでも時間があれば、授業の最後に小さな紙切れやアンケートを配って授業の感想などを自由に書いてもらうと役に立ちます。それを見れば、教師が教えたいと思ったことが理解されていたかは見事にわかることでしょう。励ましの言葉に勇気づけられ、辛口の批判にもがっかりせず、素直に受け止め、もう一度チャレンジしましょう。子どもの批判は「もっと勉強がわかりたい」「立派な先生になってほしい」という思いに通じているのですから。

一 音 楽 一

1. 音楽の授業で何を伝えたいのか

音楽の授業によって育てたい子供達の能力には、大きく次の3項目がある。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">(1) 心を豊かにし、生活を明るく豊かにする。(2) 音・音楽による表現力とコミュニケーションの能力を育てる。(3) 達成感を味わい協調性を育てる。 |
|--|

これらについて、少し具体的に述べる。

(1)では、音楽に感動できる感性、美に対する豊かな感性を育てること。そして、生涯音楽を演奏したり鑑賞したりして楽しみ、音楽によって生活に潤いを与えること。

そのためには、まず子供達に音楽の楽しさを歌やさまざまな楽器の演奏体験を通して味わわせることが大切である。演奏体験つまり表現活動には、2つのポイントがある。

①演奏技術の問題。演奏技術は低いより高い方が、より一層音楽を楽しむことができる。しかし、技術至上主義に陥ると演奏する喜びを失ってしまうことがあるので、そのバランスをよく考え、子供が楽しみながら技術を向上させられる指導方法を工夫すること、子供自身が意欲的に学習するよう工夫すること、が大切である。ここで教師の力量が問われる。

②音楽のさまざまな要素に関わる表現能力と鑑賞能力の問題。たとえば、旋律の強弱の付け方、曲の盛り上がりの付け方、リズムやテンポの付け方、などがある。これらは、表現活動の中だけでなく、プロのすばらしい演奏を多く聴く等の鑑賞活動を通して身につけて行く。このとき、漠然と鑑賞する

のではなく、どのような音楽的要素に注目して聴くのか、どのような表現のすばらしさを聞き取るのかをはっきりさせて、子供の関心を高めて聴くことが大切である。

(2)は、音楽の原点といえる内容である。ここには、二つのコミュニケーションが存在する。

①自分の気持ちを音による表現に託して、聴く人に伝える。そして、聴いた人は、表現者の気持ちを聞き取る。

②自分の気持ちを音で現し、自分の内面と対話する。

これらは、表現活動により行われる。そこには、既成の楽曲の演奏という再創造活動と新しい楽曲を創造する創作活動のふたつが存在する。どちらの活動も聴くという活動の中で、自分に身についたものを再構築すると考えられる。自然の音のリズムや音色から学ぶ場合もあるだろう。また、再創造の場合、楽譜を自分なりに解釈して演奏できる能力を育てることも必要である。

(3)の達成感は、一人では仕上げることのできない多くのパートの含まれる楽曲を一人一人が自分のパートを仕上げ、皆で練習を重ねて楽曲を仕上げ、心一つにして発表できたときなどに、強く感じられる。例えば、箏曲“春の海”を初心者が演奏したいとき、二人で協力し、楽譜の左手パートと右手パートを分担して合奏すれば、曲を演奏することが実現でき、感激し感動し達成感を味わうことができる。つまり、音楽には一人でできないことが、皆で協力することでできるすばらしい可能性がある。

これら3項目は、すべてが一つの題材の中に含まれてくる。そして、これら3項目を相互に関連させながら、指導することが重要である。

2. 授業に先立つ教師の心構え

- (1) まず教師が教える楽曲や教材に感動していること。そして、子供と感動を共有できること。
- (2) 表現活動と鑑賞活動の二つの領域を有機的に結び付いて、授業を展開すること。
- (3) 児童生徒の興味、関心、意欲を引き出すこと。
- (4) 教材楽曲の演奏ができること。

次に、これらについて、少し解説する。

(1)について、先に述べたさまざまな能力を育てるために使われる音楽の教材が、有効な成果を生み出すためには、その楽曲や教材に対する教師の感動がとても大切である。教師が“この曲には、こんなすばらしい点がたくさんあるのだから、これを子供達に伝えたい。どんな方法で伝えれば、よく伝わるだろうか。”と真剣に考え工夫して授業することで、子供達にも教師の感動が伝わる。つまり、教える楽曲や教材にまず、教師が感動できることである。教師がその楽曲に感動していない場合も、その教材を色々調べて研究するうちに、その楽曲の良さや素晴らしさがわかり感動するものである。

(2)について、音楽には、表現活動と鑑賞活動の二つの領域がある。この二つは表裏一体の関係にある。演奏表現する時には、自分の演奏を自分の耳で聴いているはずである。つまり、鑑賞しているのである。また、人の演奏を鑑賞することで、自分の演奏に取り入れられる点を見だし、成長するという関係にあるので、このふたつを常に、意識的に結び付けて授業を展開することが望ましい。

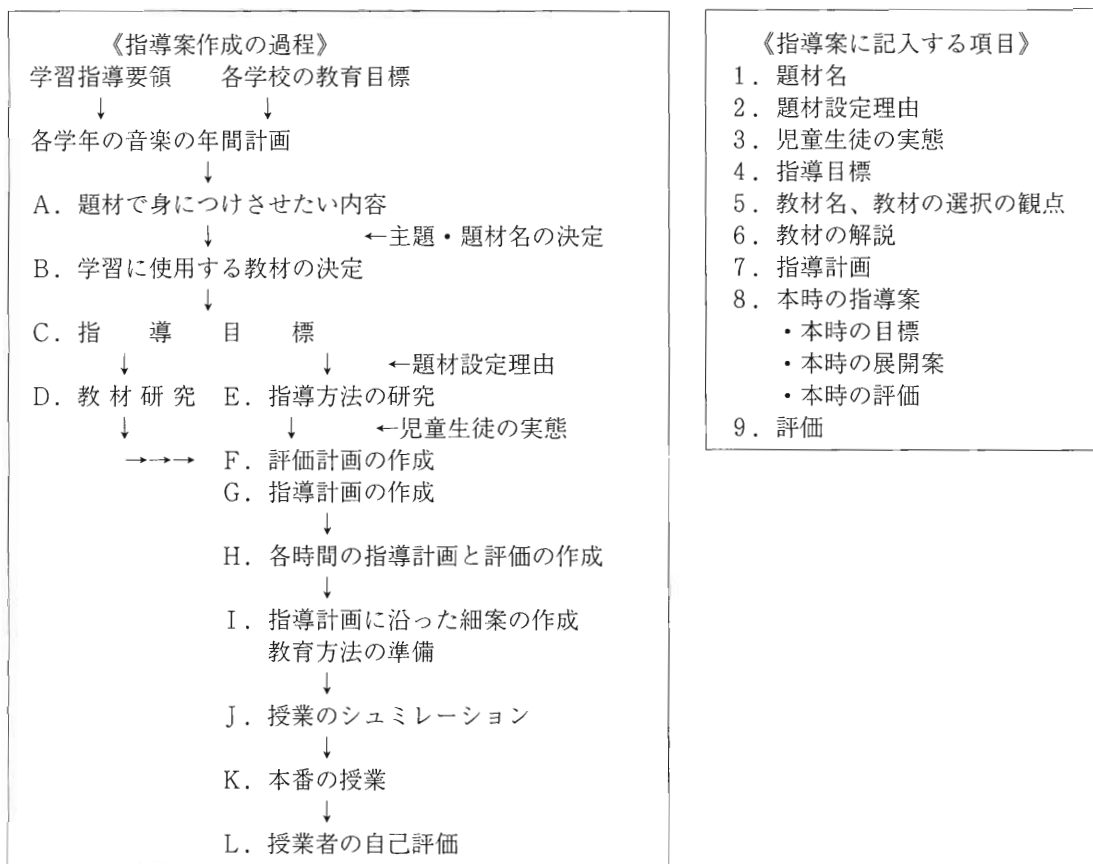
(3)について、音楽では表現活動はもちろんのこと、鑑賞活動でも児童生徒の積極的な活動が不可欠である。音楽は情意面の濃い教科なので、児童生徒が興味、関心、意欲を持って学習に取り組もうとしないと、知覚も十分働かず、十分な成果が現れないので、児童生徒の興味、関心、意欲を高める教

師の指導の工夫が大切である。その一例として、導入で、曲のイメージを膨らませるため、絵や映像などの視覚教具を用いたり、詩の意味を理解させたり、その曲の良さを感動をもって伝えられる演奏を聴かせたり、する方法がある。

(4)について、教師が自分で演奏してみることで、その曲の難しい所、楽しめる所などを把握でき、子供の活動を予測することができる。また、歌の曲では、伴奏があった方が曲に広がりができ、味わいが深まる。表現活動の楽曲は、歌えて、演奏できて、伴奏が弾ける方が、はるかに子供の意欲を高めることができる。

3. 指導案作成について

まず、この過程を図式化してみる。



次に、上記ふたつの表の各項目の実施にあたって特に留意する点をのべる。

A→学習指導要領の解説をよく読み、その内容から導き出すと良い。(ここでは、主題による題材構成で考えている。)

B→Aで決定した内容を実現するのに、ふさわしい楽曲を探す。何故、その楽曲がふさわしいのかの理由をはっきりさせることが大切。

C→ここでは、A, B, のキーワードになるものが、記述される。

2→これはA, B, の考えをわかりやすくまとめて、何故この学習を行うのか、わかりやすく記述する。

D→①その楽曲の音楽的要素の分析、楽曲の構成にかかわる研究など。

②その楽曲の時代背景、作曲に至る過程、作曲者についてなど。

③歌詞を伴う楽曲は、歌詞の意味、表現しようとしている内容、言葉のニュアンス、言葉の発音（外国語の時）など。

E→指導内容をどのような方法で指導すれば、児童生徒に学習内容が身につくか、その方法を考える。料理でいえば、材料をどのような方法でどのような味付けをするのかという段階。

3→学習に対するレディネスに応じて、子供がわかる方法で教材を提示しなければいけないので、実態は的確に把握しておく。いくら内容が良くても、子供が興味や関心、意欲を示さなければ、学習が成立しない。

F→目標と表裏一体の関係にある。

G→何時間計画で、題材を仕上げるのかの予定を立てる。

H, I→Gに記入された各時間の内容を具体化する。

導入では、興味、関心を高められる、視覚的刺激、見本演奏による聴覚的刺激、発問による刺激、活動による刺激を工夫することが必要である。

展開では、まず、音や音楽による表現や鑑賞の実技の活動時間を多くつくり、その一部で、発問やプリントにより学習事項を提示し考えさせ、目標達成に向かえるよう工夫することが必要である。

まとめでは、演奏表現により、本時の学習成果が身についているかチェックできることが望ましい。

授業時間内の、時間配分は重要で、鑑賞曲の演奏時間は何分なのか、歌唱曲は1回何分かかるとのかなど、細かい点の事前チェックも重要である。

J→実際にリハーサルして、本当に時間配分や指導方法、発問、学習形態等が、適切であるかチェックする。

K→計画どおりの実施が困難な場合は、目標は変えず、方法を変更することもありうる。

L→計画どおりに実施できなかった理由を探り、改善する。

以上述べてきたことを参考に、教科書の教材で実践してみよう。

一 図画工作科、美術科 一

図画工作科や美術科の内容は「表現」と「鑑賞」の二領域で構成されている。ここでは「表現」に関する授業の骨組みについて述べたい。「表現」に関する授業の骨組みとは、子どもの造形力－思いを形に表す力－を育成するための授業の組み立てということである。では、そのような力を育成するための授業はどのような手順で組み立てればいいのか。いろいろな観点から考えることができるが、特に重要な手順とその要点は次のとおりである。

1. 事前に教材の試作を行う

第一には、子どもが取り組む教材を教師自身が事前につくってみるということである。

なぜなら、自分で作ってみることによってうまくいかないところはどこかがよくわかるからである。自分の思いを形に表す力は授業を受ける子どもたち全員につけることが目的である。あらためて言うまでもなく、画家や彫刻家など、将来、美術専門の道へ進もうとする子どもにのみ力がつけばいいと

いうものではない。クラス全員が「自分ならではのいいものができた」という成功体験をもてるようにすることが教師の重要なつとめである。この教材ではどこをどのようにすれば、子どもたちに成功体験をもたせることができるか、それを自らつくることによって的確にとらえるのである。

さらに言えば、ものをつくりだすということがどれほど大変なことであるかを実感として受けとめることができるからである。よく「思いのままに」「のびのびと」という言葉が使われるが、子どもだから自由にのびのびと簡単につくることができるだろうと考えるのは誤りである。「何をつくったらいいのかわからない」「どのおもしろいアイデアが浮かばない」「どのようにつくったらいいのかわからない」などと悩む子どもたちは少なくないのである。自ら新たなものをつくりだすという行為には相当な困難がつきまとう。その困難を教師が実感として受けとめられるからこそ、それを克服するための指導法を子どもの立場に立って真剣に考えることができるのである。

2. 具体的な手立てを明確にする

第二には、自分でつくった体験をもとに指導の手立てを具体的に講じることである。

大事なことは「具体的に」ということである。指導案のなかの「指導上の留意点」をみると一見詳しく書いてあるようにみえても、よく読んでみると抽象的な語句が欄をうめているだけということが往々にしてある。「一人ひとりに豊かな発想をもたせることができるようにする」「自分の思いが表現できるように思いのままにつくらせる」などという文言である。それだけでは子どもの前で何をどう指導すればよいのかわからない。教師は常に子どもと直接に向かい合う立場である。問題は、「具体的にどのような手立てをとればよいのか」ということなのである。

この具体的な手立ては、主に二つの視点をふまえることが重要である。その一つは、発想を豊かにするためにはどうすればいいのか、もう一つは、その発想を具体化するためにはどんな技術が必要なのか、という点である。

(1) 発想を豊かにするための手立て

それでは、豊かな発想を引き出すためにはどうすればいいのだろうか。工作の場合を考えれば、教材の基本形を提示することである。たとえば、「やじろべえ」をつくることを考えるとわかりやすい。「さあ、好きな形のやじろべえをつくってみましょう」とだけ言われたらどうだろうか。これだけでは何をどうつくればいいのかがよくわからない。そればかりか、やじろべえとしてのつり合いをとるための条件もわからない。大切なことは、まず、つり合いをとるための条件を押しさえつつ、どんなやじろべえをつくるかを発想することである。そのためには、つり合うための条件をふまえた最も単純な形、言い換えれば、やじろべえとしての一番おおもとになる形—基本形—を提示するのである。

よく見かける一般的なやじろべえを考えてみよう。左右の腕に重りをつけて真中の軸でつり合いをとるタイプである。それを自分の指先にのせてゆらゆら揺れるようにしてみるのである。さて、この基本形の形や動きからはどんなものを連想するだろうか。たとえば、まっすぐに伸びた腕の形からはピンと伸ばした立派な髭を連想する子もいるだろう。左右に揺れる動きからは、四つに組んだお相撲さんが押したり押されたりしている様子を連想する子もいるだろう。また、二人の大人が向かい合って餅をついている様子を連想する子もいるだろう。では、とんぼのような形をした基本形（Yの字を水平にしたような形）からはどんなものを連想するだろうか。たとえば、羽根を広げ

た鳥を連想する子もいるだろう。また、天使を連想する子もいるだろう。さらには飛行機や空飛ぶ忍者を連想する子もいるだろう。このように基本形の提示は豊かな発想を引き出すための重要な切り込み口なのである。

(2) 発想を具体化するための技術

こうした発想を具体化するためにはどんな技術が必要だろうか。やじろべえの基本形から発想したものを色画用紙でつくる場合には、特に二つの技術が必要になる。

一つ目は、つくろうとする形をはさみできちんと切ることができる技術である。子どもの様子を見てみると、はさみの先でチョキンチョキンと何度も小刻みに切っていることがしばしばある。このようにすると切った跡がギザギザになりやすい。これでは美しい仕上がりにはならず、子どもが自信を失う原因の一つになる。きれいに切るためのポイントは、はさみの先を使うのではなく根元近くを使って切るということである。

二つ目は、はがれたり糊がはみ出したりしないようにしっかりと貼ることができる技術である。子どもの糊のつけ方を見てみると、貼ろうとする紙の中心部分にだけ糊をつけがちである。このようにすると、紙のへりがめくれ上がってはがれやすくなったりその隙間にほかの部分がはさまって壊れやすくなったりする。また、紙の真ん中に糊を盛り上げるようにつけることもある。これでは糊がはみだしてほかの部分についてしまったりはみ出した糊が白くなったりして、やはり美しい仕上がりにはならない。接着のポイントは、貼ろうとする紙のへりまで糊をつけるということである。このことはセロハンテープを貼るときも同じである。セロハンテープの真ん中だけを押しつけるのではなく、へりまでしっかりと押さえつけて貼ることが基本である。

なお、切り取ったものをすぐに貼らないということも大切である。配置をいろいろ変えてみて一番いい場所を決めてから貼るのである。たとえば、顔をつくる時の様子を思い浮かべてほしい。目の傾きを変えただけでも表情が大きく違ってくる。目をつり上げれば怒っているような表情になり、下げれば困ったような顔になる。口や眉毛の配置も変えれば、さらに多様な表情をつくりだすことができるだろう。体全体を考えてみても同じである。手や足をまっすぐに伸ばせば直立不動の姿勢になり、少し足を曲げれば歩いているように見える。また、足を大きく開けば全力で走っているように見える。貼る前に配置を変えてみることで、これはよりいい形を見つけるための手立てであるとともに、はじめの発想をさらに広げるための手掛かりにもなるのである。

以上、授業の骨組みを作るための主な手順とその要点について述べてきた。とりわけ図画工作科や美術科においては、事前に自らつくってみること、そして、その体験をもとに具体的な指導の手立てを講じること、この二つを重要な観点とした。また、その要点として、発想を豊かにするための手立てやその発想を具体化するための技術についても述べた。これらは授業を行うための最低限の教材研究である。教育実習を通して、教師としての実践的指導力の基礎をしっかりと身につけてほしいと考える。

－ 体 育 －

体育の授業は運動を学習する児童生徒と運動とモノ（施設、設備、用具など）と教師から成り立っている。単元計画（はじめ、なか、まとめ）と1時間の流れを考えるとこの4つの要素がどのように相互に関連し合っているかを調べる必要がある。その手順は大まかに次のようになっている。

1. 単元名を決める：学習指導要領や実習校の年間計画が参考になる。
2. 単元で取り上げる運動の特性を調べる：このとき次のことを調べる
 - ・その運動種目はどのような楽しみ方があるのか？例えば競い合う運動なのか？時間や距離といった目標を達成しようとするのか？などである。
 - ・その種目はどのような仕組みになっているのか？例えばルールは？場の設定は（ゴールの大きさ、コート広さ、使用する器具など）？そしてどのような技術が必要か？
3. 児童生徒がその種目をどう捉えているか次の点を調べる。
 - ・児童生徒はその種目にどのような興味・関心を持っているか？
 - ・児童生徒はその種目について今までどのような学習をしてきたか？
 - ・児童生徒はどのような技術を身につけているか？などこれらは児童生徒にアンケートを採るなどするとよく分かる。もちろん担任の先生からも情報を受ける必要がある。
4. 単元の目標を決める
2の運動の特性と3の児童生徒の実態に授業者のねらいを反映させる形で単元の目標を決める。このとき学習指導要領やその解説書、指導資料そして実習校の研究紀要が大いに参考になる。
5. 学習の道筋（学習過程）を次の手順で決める。
 - ・単元の大きさ（何時間扱いにするか）と1時間の流れをどうするかを決める。このとき次の点に留意する。
 - 1) 一人一人の運動欲求を大切にする：やってみたいという気持ちは一人一人違う。
 - 2) 一人一人のめあてが異なることを大切にする：一人一人の技能が異なっているからめあても異なる。
 - 3) 一人一人の学習のペースを大切にする：すぐできる人もいればなかなか上達しない人もいるためである。
 - ・以上の点に注意して単元計画を立てる。このときには実習校の先生とよく打ち合わせることが必要です。また、詳しい内容については小学体育の教育法と保健体育科教育法で説明がある。とりあえず、「小学校体育指導資料 指導計画の作成と学習指導（文部省）」、「中学校保健体育指導資料 指導計画の作成と学習指導の工夫（文部省）」、「小学校体育科の授業研究（教育出版）」などが参考になる。

6. 1時間目開始までに次のような準備をしておく。実習校の先生に、今までこのような資料があったかを確認し、もしあればそれらを参考にする。
 - 児童生徒が学習全体を見通すことができる資料を作る。
 - 児童生徒が自分のめあてを確認できる資料を作る。
 - 児童生徒が自分の学習を記録し、評価もできる資料を作る。
 - 児童生徒がとまどったり、困ったときに参考になる資料を作る

7. 授業のはじめの段階で留意すること
 - 1時間目のオリエンテーションをしっかりおこなう。
 - 授業で守らなければならない基本的約束事をしっかり決めて、徹底する。
 - 事前に作った学習資料で児童生徒に授業の概要としつかりとした見通しを持たせる。
 - 役割の分担も決める。

8. なかの段階で留意すること
 - 各自がしっかりと自分にあつためあてをもっているかを確認する。
 - 各自のめあてと運動の方法が合っているかを観察し、合っていない場合は指導する
 - 学習が停滞している児童生徒にはしっかりと個人指導をおこなう。個人指導では技術指導ばかりでなく他に停滞している理由がないかも把握する。
 - 危険な行動をとっている児童生徒には厳重に注意する。
 - このほかやることはたくさんある。児童生徒の様子をしっかりと観察し、状況に応じて適切な指導を心がける。

9. まとめの段階で留意すること
 - 授業のはじめに立てた目標がどのように達成されたかを具体的に表現できるように指導する。

一 家庭

(1) 教材化の前に

家庭科では、子どもたちが生活の中で実感的にとらえた生活課題を、実践的・体験的な活動を通して解決し、学習で身につけた知識や技能をあらゆる生活場面に活用させていくことのできる能力を身につけさせなければならない。しかし、学習主体者の子どもたちはすでに生活についての経験を持っているので、特に家庭科で学習をしなくても子どもたちなりに生活を認識し、生活を営んでいくことはできる。では、なぜ家庭科の学習が必要か？ それは、①近年、物質的な豊かさと少子化による親の過保護により、子どもたちに生活に必要な素地が形成されていない。②子どもたちの既存の生活経験は限られたものであり、必ずしも新たな生活局面に対応できる力が身につけているとは限らない等の必要性からである。したがって、家庭科では子どもたちの生活力を広げていくために、生活の仕組みについての客観的な認識を育て、生活の営みについての価値観を育てるための幅広い学習が必要となってくる。

これまで家庭科は、技能教科として子どもたちに技能を身につけることに主眼が置かれてきた。生活に必要な技能を身につけさせることは必要なことであるが、その指導が単なる技能の習得に終わってしまってはならない。家庭科では表1に示すように、衣・食・住・家族・地域・環境・消費者問題など多くの内容を指導しなければならない。ひとつの内容を指導する際に、これがどの子どもたちにとつても、どの学校、地域においても最適であるという指導方法はなかなかない。教師はその指導方法を探求しながら、毎日の授業に取り組んでいるのである。

ここでは、家庭科でこれまで行われてきた授業法のパターンを紹介する。あなたはどのパターンの指導方法で、問題解決型の学習を展開させていくかを考えてみて下さい。

(2) 学習内容と教授方法の関連づけ

① 何を学習させるのか、どんな力を身につけさせるのか。

家庭科の学習内容は、表1に示すように大きく分けて「家族と家庭生活」と「生活の自立と衣食住」である。各々の学習の目標は何かを考える。

表1 新学習指導要領にみる小・中学校家庭科の学習内容（2002年実施）

小学校 5年 60時間 6年 55時間	家庭の仕事 家族とのふ れあい	近隣の人々 との生活 環境に配慮 した工夫		調和のとれ た食事のと り方 簡単な調理	日常着の着 用と手入れ 生活に役立 つ物の製作 ・活用	身の回りを 快適に整え る	物や金銭の使 い方・適切な 買い物
	家族と家庭生活		生活の自立と衣食住			家族と家庭生活	
中学校 1年 70時間 2年 70時間 3年 35時間 (技術含む)	自分の生活 と家族・家 庭生活	家庭生活と 地域のかか わり	幼児の生活 と家族関係 幼児の生活 とふれあい	栄養と食事 食品の選択 と日常食の 調理 食生活の課 題と調理の 応用	衣服の選択 と手入れ 簡単な衣服 の製作	室内環境の 整備と住ま い方	家庭生活と消費
	家庭と家族 関係						

② どのような教授法で問題解決学習につなげていくのか。

子どもたちの日常生活を対象にして、子どもたちの興味・関心を高めたり、探求心を刺激するために生活上の問題点を投げかけたり、また子どもたちの生活の実態を見直すことから自ら問題や課題を発見させたり、「なぜ、そうなっているのか」「なぜ、そうするのか」調査や実験をすることにより追求し、得られた知識や技能を「実際にやってみる」ことにより、「何がよいか」「どうすればよいか」反省や評価することで、よりよい生活に変革させていく等の教授法の中から、どのパターンで実施するかを考える。

表2 家庭科の学習指導パターン

What 型		Why型	How型	
教材提示的		誘導的	問題提起的	
基礎的知識	基礎的技能	科学的認識	問題解決方略	問題解決方術
〈有意味受容学習〉	〈オペレーション対象方法〉	〈発見学習〉	〈問題解決学習〉	〈プロジェクト法〉
① 上位概念 ↓ ② 下位概念 ↓ ③ 包摂	① 手順 ↓ ② 部分技能 ↓ ③ 全体技能	① 課題把握 ↓ ② 課題解決の仮説 ↓ ③ 仮説検証 ↓ ④ 結論	① 暗示 ↓ ② 知的整理 ↓ ③ 仮説 ↓ ④ 推論 ↓ ⑤ 検証	① 目的設定 ↓ ② 計画 ↓ ③ 実行 ↓ ④ 評価

[中間美砂子『家庭科教育学原論』家政教育社, 1987]

ア. What型 (教材提示的)

基礎的知識や基礎的技能を身につける場合に適用されることが多い。このパターンでは教師が十分な教材研究を行い、資料を作成し、どの順序で提示すれば最も効果的か十分に検討しておく必要がある。例としては、「栄養と食事の関係」「衣服の機能と着方の関係」「室内環境の整備と住まい方の関係」等の学習の場合に適用される。なお、オペレーション法は「運針」「部分縫い」など要素作業を取り出して学習する方法であり、オペレーション対象法は「袋づくりのなみ縫い、返し縫い」など要素作業を含んだ他の作品へも転移できる能力を身につけさせようとするものである。

イ. Why型 (誘導的)

科学的認識を育て、転移性のある知識を身につけるためには、認識のプロセスを大切にしなければならない。したがって、誘導的学習を通して発見させていくことが効果的である。例としては、「ゆで卵は何分ゆでればよいか」「みそ汁の実はどういう順序で入れればよいか」などを実験的に発見していく場合などに適用される。

ウ. How型 (問題提起的)

課題解決能力であり、基礎的知識、基礎的技能の習得、科学的認識力の育成はすべて、生活課題解決能力の基礎となる問題解決能力に収れんされなければならない。教師は、問題を提起するにとどまり、子どもはこれまでに習得した知識・技能、科学的認識力などを駆使して問題解決をすることになる。その際、問題解決の方法を決めるものとして、価値認識が必要となっ

てくる。価値観なしには、問題解決は不可能である。例としては、「限られた小遣いで、ファミコンを買う」という状況設定で、「どのような解決方法が考えられるか」や「家族への贈り物を作る」という場合などに適用される。

③ 授業に必要な教材づくりをする。

どのような方法で授業をしていくか、全体的なイメージがつかめたら、具体的な教材を考え、教材づくりをする必要がある。授業設計は、教育価値をもつ学習内容をどのように教材化していくかという教材づくりおよび年間にわたる教材の系列化ともいえる。

What 型（教材提示的）では、教材のひとつとして資料の作成が求められているが、資料というのは単に配布用のプリントをさすものではない。コンピュータを使って食事のバランスをチェックさせたり、作り方の手順を示したビデオや実物標本・段階標本・部分標本を提示することもある。Why 型（誘導的）では、ワークショップ形式で話し合いをもったり、How 型（問題提起的）では、ロールプレイングやディベート、ペープサート、紙芝居やビデオ等を取り入れた教材も考えられる。

④ 他の人の力を借りる。

「私は家庭科が苦手だから」と言って、家庭科の指導から逃げてしまうのではなく、苦手な所は他の人々の力を積極的に借りて、自分の苦手意識を補っていけばよい。

また、子どもたちの日常生活における経験不足から、一人の教師で授業をすることもむずかしくなっている。学校内や学年内でチームティーチングを積極的に取り入れていくことも考えていきたい。また、地域の人の力を借りる人材活用も積極的に取り入れるとよい。

⑤ 安全に気をつける。

実験・実習の際には、教師が児童・生徒の安全に気をつけるのはもちろんだが、子どもたちにも包丁や火の使い方などに気をつけさせるような指導を授業前に必ずしておくことが重要である。

(3) 評価

① 評価の意義

学習指導は計画・実践・評価の循環であり、絶えず改善を求める過程でもある。学習の進展のない、堂々巡りの悪循環をするような指導は教師にあってはならない。

② 評価の目的

教師のための評価目的は、学習させた内容が児童・生徒に適切であったかを知ることができる。また、準備した資料、指導方法、教室管理は適切であったかなど、授業効果を判定することもできる。一方、児童・生徒のための評価目的としては、学習目標に対する自己の理解・技能・表現力等の程度を知ることができ、自己が暮らす中でどのような位置にあるかを知ることにも役立つ。これは、児童・生徒が自己の長所や短所を知る上でも役立つ。家庭科では、評価はまさによりよい授業への改善向上のため欠くことができない基本的な手続きである。

家庭科では、学習した内容が日常生活の多くの場面が活用され、子どもたちによりよい生活をしていこうとする意欲を持たせ、行動につなげていくことが重要である。したがって、「授業が終わったら、あとはどうでもいい」と子どもたちに判断されるような授業にならないように、教師自身もよりよい生活を目指す努力をしていきたい。

一 技術科 一

良い授業とは、どのような授業のことなのかを考えることは大変重要なことです。けれども、「良い」という価値観は実に多様なものです。誰にとって良いのか、何がどのように良いのかということ判断しようとしてもそれはなかなか難しいことです。

しかし、良い授業とは少なくとも「判りやすい授業」であることは間違いありません。では「判りやすい授業」とはどのような授業なのでしょう。それは、少なくとも次の条件を満たしている必要があります。

- ① 授業の内容が煮詰められている事。(内容が整理・焦点化されている。)
- ② 発問が系統だてられている事。(生徒の思考活動を導く流れになっている。)
- ③ 授業の方法に変化がある事。(多彩な指導方法が組み合わされている。)
- ④ 説明が具体的である事。(教師の意図や学習すべき内容が明確に伝わる。)
- ⑤ 大きな声で聞きやすく、平易な言葉で理解しやすく、指示も判りやすい事。

授業は生きものであると言われます。そのため、あらかじめ授業の計画などを作成したりしてもあまり意味がないし、必要もないという言い方がされることもあります。確かに授業は、生きものというのに相応しい性格を持っています。目標の達成に向けて予想もできなかつた発言や発想が表出され、新しい展開を行っていく工夫をしなければなりません。

そうした生徒の反応に対して、臨機応変に対応しながら授業目的を達成していくためには、徹底した授業準備による自信、豊富な知識と優れた技能、生徒の反応を敏感に感じ取りつつそれに即応できる、豊かで繊細な感性と柔軟で臨機応変な思考力・判断力などが総合的に求められます。

授業の名人とか達人とか呼ばれる人々は、このような能力を身につけています。けれども、初めて授業を行おうとする初心者がそうした人々の真似をすることは困難です。十分に能力を持たないまま、ただ成り行きに任せて授業を行えば、目標を達成する生きものとして展開されるものではありません。ですから、教師の深い思慮による積極的な働きかけが必要になります。初心者の場合は、能力が低い分だけ手間暇をかけて授業の準備をしていく他に「判りやすい授業」を行う手だてはありません。

ではどのようにして、そして何に対して「手間暇をかける」のが望ましいのでしょうか。

授業の骨子づくりの手順とポイント

授業は生きものであると述べましたが、別な表現をすれば「料理」のようなものです。全く同じ素材の組み合わせでも、目的に応じて様々な料理を作り上げることができます。しかも、「授業」という「料理」は、一品料理ではなくコース料理として考える必要があります。この「料理(授業)」の前の「料理(授業)」は何だったのか、この後の「料理(授業)」は何なのかを考えながらどのような「料理(授業)」に仕上げるのかを考えなくてはなりません。しかも、味を重視するのか、見栄えを重視するのか、食べる人の健康を重視するのか、和風にするのか洋風にするのか中華風にするのか……大人向きにするのか、子ども向きにするのか、お年寄り向きにするのか等など、実に様々な条件が考えられます。授業とは、そうした様々な条件を一つひとつ整理しながら作り上げていくものです。従って、決して楽な作業ではありませんし、全体を見通しながら一つひとつの授業を綿密に構成し、配置していく総合的な能力が求められるのです。

1. まず何をすべきか

初心者がいきなり指導案を書こうとするのはあまりにも無謀です。指導案を書くまでに、まず行うべきことがあります。

- ① 本来は、教科目標と領域目標からその領域でどのような内容を扱うべきかを考え、年間指導計画案を立案します。まず指導目標があって、その目標を達成するための指導内容を定めるべきなのです。そして、その指導内容を教えるための教材を選定していくのが本来の手順です。

しかし、教育実習生の場合には、指導教官が立案した年間指導計画に合わせて、当該授業の「内容」を指定されることが多いようです。

そこで、教育実習生として行うべきことは、その指導内容でもっとも重視すべき内容は何か。どのような能力を身につけさせるべきなのか。そのために、どのような教材を用意するのが良いのかということ、学習指導要領の教科目標や領域の目標と照らし合わせて確認することです。

- ② 確認すると言っても、それぞれの学校やそれぞれの学級には個々別々の特徴があります。教育実習生として、そうした特徴をしっかりと把握することが大切です。
- ③ 一応の確認が済んだら、次に行うべきことは、確認した内容を自分の言葉で書き出してみることです。

2. 骨子を作る作業について

授業の最低条件は、指導目標の明確化、教育内容の系列化と教材の構造化が図られていることです。そのためには、次のような項目を自分なりに整理することが必要です。

- ① 何をどこまで教えるのか（目標）。なぜこの内容をそこまで教えなければならないのか（教育目的）。以上の2つを明確化します。

留意事項

目標は大きく4つ程度に分類して考えていくことです。つまり、知識・技能・思考力・態度といった分野ごとに目標を定めるのです。

- ② 次に、当該授業においてもっとも重視すべき目標を絞り込みます。その時に、どの内容にどの程度の時間を配分すべきかを考えていきます。

また、どのような授業にしていくべきかを「目標」と合わせて考えていきます。例えば、授業全体として「生徒の構想力を育てる授業」にしようとか、「学び方を学ばせる授業」にしようとか、或いはまた、「発表・表現力を育てる授業」にしようという教師としての授業の質を決めていくということです。

留意事項

上記の②の作業を進める時に、指導者として配慮しておくべきことがあります。

ア) 生徒のレディネス（予備知識の状態、製作体験のレベル）

イ) ①の4つに分類した目標すべてが大切ですが、その授業において一番重視すべきものは何かということをしかりと判断することです。

ウ) このような作業を進めることで、その授業の評価すべき項目も明確になってきます。目標が曖昧では、評価も曖昧なものになってしまいます。

- ③ 時間の配分とともに、どのような方法で指導していくべきかを考えます。例えば、普通教室で行うのかそれとも技術室で行うのか、個人活動を中心とするのかグループ活動を中心とするのか、

或いは、実験を行うのか製作活動を行わせるのかなどといった条件を決めていきます。(指導過程・学習形態の検討と決定)

- ④ 次に、そうした状況において最も適切であると思われる教材(製作題材など)を選びます。

留意事項

教材をどのように選ぶのかということは、実は大変に難しいことです。理想を言えば、適切な教材は次のような条件を満たしています。

- ア) 豊かな教材であること。つまり、その教材で「技術」「技能」の理解・習得が可能であり、生徒の個人差に応じることのできる教材であること。そして、その教材によって学習経験を深化・発展させることができ、技術的な物の見方や考え方を養うことができるものであること。
- イ) 生徒にとって新鮮で知的好奇心をそそるもの。
- ウ) 生涯学ぶことを楽しみにし、自己を高めていくことのできるもの。
- エ) 一人ひとりの個性を生かし、仲間と共に伸ばしていくことのできるもの。
- オ) 筋道を立てて考えていく力を養い、科学的な学習方法を身につけさせることができるもの。
- カ) 鋭い感受性を養い、豊かな人間性の育成に繋がるもの。

このような条件総べてを満たす教材はなかなか見つかりません。ですから、授業目的に最も合った教材条件を満たす「最大公約数的な教材」を選ぶことが大切です。

- ⑤ 製作題材の場合には、まず自分が製作してみる。

要するに、教材研究を十分に行うことです。技術科のような製作活動を伴う指導の場合には、頭で考えるだけでは不十分です。道具と材料に向き合って、その教材が本当に適切なものであるかどうか、難しい部分はないのかということの一つひとつチェックしていきます。要するに、「道具と材料が教えてくれる」のです。

留意事項

技術科の場合には、危険を伴う作業が多いことから、例えば製作活動を行う前に何を注意し、そしてどのような配慮をすれば良いのかということ、教師自らがチェックしておく必要があります。

- ⑥ 熱心に教材研究を進めていくと、段々と教えた中身が増えてきます。そこで、もう一度指導目標に戻って、何をどのように、どこまで教えるべきかを考えて指導内容を精選していきます。何を授業の中心とするかを、再度明確化するわけです。

- ⑦ 次に、授業に際して準備すべき教具や道具、材料などを書き出してみます。さらにそのような物が実際にあるのか、十分な数があるかどうか、備品の確認を行います。

- ⑧ この段階まで来れば、どのような発問・説明をするべきかというポイントが分かってきます。或いは、どのような発問・説明をするべきかを考えていきます。

3. 指導案を作る前に行うこと

いよいよ指導案を作られる状況が整ってきました。しかし、ここでいきなり指導案を書かない方が良いでしょう。まず行うことは、指導案の素案を作ることです。このことは、指導者としての思考整理手段として指導案の形式を借りるということなのです。時間の流れに合わせて自分のイメージを作っていくのです。その際に留意することは、①何をどこまで教えるのか。②授業過程をどのように展開させるか。③どこでどのような発問をするべきか。ということをおおまかに筋立てて考えていきます。

4. 指導案素案の検討の視点

この段階までに随分と色々な事を考え、慎重に教材を選定してきているはずですが、でもそれは、「自分が良いと思つたから」その教材を選定し、理想的な授業の展開を考えたわけです。しかし、いま一度、できるだけ客観的にその「教材」を見つめ直すことが大切です。同時に、この段階で指導教官からアドバイスを貰うことも大切でしょう。

- ① 本当に、その教材と教具と指導方法で良いのか。
- ② 個を生かす教材を選定しているか。
- ③ その教材は、代替性と系統性を持っているか。(授業は、教材そのものを教えることだけが目的なのではありません。あまりに特殊な教材を選んでいないか、次の学習に繋がるような内容を持っているかどうかを検討します。)
- ④ 個を生かす学習過程の工夫をしているか。
- ⑤ 個を生かす教育機器・教具の活用を図っているか。

5. いよいよ指導案を作りますが、その前にさらに確認することがあります

- ① 自分にあつた指導案を作っていますか。授業は教師と生徒という「人と人との関わり」において営まれ、成立するものです。教師の個性もまた大切な要素です。自分の個性を最大限に有効利用できているかどうかを良く考えましょう。ただし、それはあくまでも「教育活動において自分の個性をプラス面に作用させる。」という大前提で考えるべきものです。地を出すことが個性を出すことではありません。
- ② 評価目標が曖昧になっていないかどうか、確認します。評価目標即ち到達目標です。授業においては、何を目指してどのレベルまで努力すればいいのかを生徒にはっきりと知らせる必要があります。そのことを教師がしっかり把握していないと、生徒は路頭に迷うだけとなります。
- ③ 授業の中心となる発問や活動は十分に考えられているかどうかを見ていきます。そして、授業過程の段階づけを行い、分節化して授業の山場を作っていきます。

授業の流れが独り善がりになっていませんか。生徒のレベルに合わせていますか。

生徒の中には信じられないほどに不器用であったり、慎重すぎるほどに慎重でなかなか作業に入っていけない生徒も多いのです。反対に粗雑で無頓着に作業して失敗する生徒も少なくありません。そうした事態に対応する準備はできていますか。

或いは、時間が十分に確保されていますか。詰め込みになっていませんか。授業中に集中させるポイントをきちんと自覚していますか。

留意事項

教材研究を熱心に行うと、教師自らが教材に惚れ込み、どうしても自分のレベルで教材解釈を始めてしまいます。教材研究には多大な時間を費やしていること、授業をしなければならないという強い動機があつて教材研究をしてきたということを忘れがちになります。あくまでも生徒の視点で再検討しましょう。

一 英 語 一

中学校の英語授業では、生徒が英語という外国語を自分で使う楽しさを実感できるように、教師は分かりやすい授業計画を立てなければならない。どの授業でも、授業目標の達成に向けて、教師はさまざまな提示や練習・活動を選び、生徒に無理のないよう組み上げて、授業を創り上げる努力をすべきである。

● 授業の基本段階

中学校の英語授業の場合、大きく分けて5つの段階がある。

- (1) 復習あるいはウォームアップ
- (2) 文法事項の導入
- (3) 練習・コミュニケーション活動
- (4) 本文の指導
- (5) 整理と宿題

もちろんその課によって、練習・コミュニケーション活動だけとなつたり、本文の読解指導のみとなつたりするため、全ての授業がこの手順に従うわけではない。

上の手順の中で最も重要なのは、(2)の導入と(3)の練習の部分である。まず導入は何にも増して入念な計画が必要である。導入が授業の成否を決定すると言っても過言ではないからである。文法事項の導入は、大きく分けて、文法説明から入るものと、演示する方法があるが、できる限り実習生諸君は後者、つまり具体的な場面や絵によつて文法事項の意味・使い方を生徒に見せる方法を考えてほしい。文法事項によっては、具体的な演示が難しいものもあるが、できる限り「具体的に」示すことを基本とすべきである。

そして次に「練習・コミュニケーション活動」であるが、ここでは特に「易から難へ」の段階を踏んだ練習の組み方を心がけたい。実習生のよくある間違いは、昨今のコミュニケーション活動を重視するあまり、導入が終わったとたんにゲーム的な活動に移行してしまうことである。最悪の場合、「楽しかったけど、一体何を身につけようとしたのか分からない」という結果になる。コミュニケーション活動は、あくまで指導事項を習熟させるための手段であるということを忘れてはならない。最も重要なことは、応用段階であるコミュニケーション活動に至るまでの事前段階で、下積みとなる「基礎練習」をきっちりと組み込むことである。どの生徒も指導事項を十分に言える、使える状態にしてからコミュニケーション活動に入りたい。

● 授業構築のチェックポイント

授業を構築する際に心がけるべきポイントをいくつか挙げる。

- (1) 指導目標を設定する
- (2) 指導内容を精選する
- (3) 教材研究は十分にできているか?
- (4) 必要最小限の、かつ分かりやすい文法説明を
- (5) 日本語ばかりの活動になっていないか?
- (6) 定着の確認の手段を組み込む
- (7) 教師の行動一つ一つの目的を明確に意識する

(1)授業の目標は、授業の骨格を決める上できわめて重要である。授業の成否は、その目標に照らし合わせて、はじめて判断ができる。ここで大切なのは、「何を」教え、「どこまで」達成させるかということである。たとえば主語が3人称で一般動詞を含む疑問文(Does he like…?)を教えるとする、まず「何を教えるか」に関しては、主語はどこまで含むか(she, Tom, Jane, etc.)、動詞は他に何を使うか(like, play, have, etc.)など、言語材料をどこまでの範囲とするか吟味が必要である。

さらには次の問題として「どこまで達成させるか」がある。これらの疑問文を、どのスキル分野で習熟させるのか(言えるようにするのか、書けるようにするのか、読めるようにするのか、聞けるようにするのか)を意識する必要がある。また達成のレベルとしては、機械的練習で疑問文を作ることができればそれでよいのか、コミュニケーション活動で自由に使えるようにするのか、運用力をどこまで高めるかも意識しておきたい。

(2)は、実習生は指導内容の何が重要で何が重要でないかの判断がつかず、一時間の授業に多くを詰め込みすぎる傾向がある。指導事項を絞り込み、重点的に練習すべき事項を選択することが大切である。

たとえば、英語のto不定詞の授業で、3用法(名詞的用法、形容詞的用法、副詞的用法)の全てを最初の時間に説明することには無理があるし、不必要である。当該の課の新事項である一つの用法に重点をおいて指導し、3用法の整理は後で必要に応じて行えばよい。

また、一時間に盛り込みすぎる理由の一つには、実習生が長期的な指導カリキュラムを把握していないこともある。その学年、あるいはその上の学年で、どのような事項が指導されるか一通り教材に目を通しておくと良い。

(3)教材研究は、十分にできているだろうか?特に、指導する文法・語彙については、その文法的性質、使われる場面、細かなニュアンスなど、教師は、実際に教える事柄以上に知っていなくてはならない。授業で教える部分は、多くの場合「氷山の一角」であり、教師の知識は広さと深さを持つべきである。たとえばhave toとmustはどう違うか? Be going toとwillは? Couldとwas able toの違いは? I like a chicken/chicken.の違いは? My family is…かMy family are…か? こうした知識は、授業の中で必ずしも直接的に教える必要はないが、授業のさまざまな局面で間接的に役立つ。たとえば have to の導入を考えるときに、must との意味の差異を意識していると、どのような場面を設定して導入するのが have to の最も自然な意味を示すことができるのか、おのずと分かってくる。英語の文法力・語彙力を磨く努力をしよう。

(4)は、英語の実習生にとって最も陥りやすいのは、

「説明すれば、定着する」

という思いこみである。自分の頭の中にある整理された規則を説明すれば、生徒たちは指導事項が使えるようになると思うのは大きな錯覚である。分かりやすい説明はもちろん必要である。しかし実際の運用練習を段階的に積み上げることこそが、習熟への道であると心得るべきである。説明は簡潔に必要最小限とし、口頭練習に重点を置くことが大切である。

「具体例を示して、練習して、応用させる」

ということが授業の基本である。

またこれに関して、「文法用語」が定着にどの程度役立つか、よく判断する必要がある。たとえば I want to～ や I like to～ の表現を指導する際に、「to不定詞」や「名詞的用法」などの文法用語を多用した説明が導入に大きく役立つことは考えにくい。文法用語の使いすぎに注意。

(5)については、実習生は何でも丁寧に説明したくなるため、いきおい日本語が多い授業になりがちである。授業計画を立てる際に、自分がどこで日本語を使って、どこで英語を使うか、意識的に切り替える必要がある。英語の授業であるはずなのに、教師も生徒も日本語ばかり使っているようではない。

(6)については、実習生は教えることで精一杯であり、それが定着したかどうかはまだなかなか気が回らないという傾向がある。指導案に、指導した内容を授業のどこで確認するのか、あらかじめ考えておきたい。たとえば一通り導入・練習した後で、個人指名して英問英答したり、英作文をノートに書かせて机間巡視によって確認するなど、授業のいくつかの局面で指導事項がどの程度定着しているのか確認する必要がある。定着度によって、その場で訂正したり、補強の練習を加えたり、全体に注意を促すなど、どのような対処をするのかも、あらかじめ考えておきたい。

(7)は、実習生が指導案中に記された教師の行動の一つ一つが、目的行動である点を見逃しがちであることを示している。例えば、「机間巡視」という記述はよく見かけるが、何のために行うのかまで明記しているケースは少ない。「机間巡視をして質問を受ける」、「机間巡視をして積極的に練習するよう促す」等、机間巡視もそれぞれ意味がある。授業の一つ一つの活動がどのような目標を持っているのか、意識して授業を組み立てたい。

最後に、実習に参考となる図書を紹介しておく。

- 米山朝二他 『英語科教育実習ハンドブック』 大修館
東眞須美編 『英語科教育法ハンドブック』 大修館
伊藤健三他 『英語指導法ハンドブック 導入編』 大修館
隈部直光 『英語授業182場面集』 申教出版
原田昌明 『英語の言語活動 What & How』 大修館

5. 各教科の授業案例

1. 小学校編

各教科指導案

2. 中学校編

各教科指導案

3. 高等学校編

各教科指導案

1 小 学 校 編

国語科学習指導案

日 時 平成〇〇年〇月〇〇日 () 第〇教時
児 童 〇年〇組 男子〇名 女子〇名 計〇名
指導教官 〇 〇 〇 〇 教諭
指 導 者 教育実習生 〇 〇 〇 〇

I 単 元 「おじさんのかさ」

II 単元について

この作品は、傘の形態的な美しさに心を奪われ、雨が降っていても傘を開くことのなかったおじさんが、子供たちの楽しそうな歌声を聞いて、初めて傘を開き、傘の機能的な美しさに気づいていくというものである。

子供たちに身近な「かさ」を題材にしているので親しみがもちやすく、文章構造も明瞭で読みやすい。「雨が ふったら ポンポロロン 雨が ふったら ピッチャンチャン」という言葉の繰り返しがリズムカルで、読んでいて楽しい作品である。

本学級の子供たちは、音読、動作化に意欲的であり、また、自分の考えや思いを言葉で表現することに対しても積極的である。

これらのことから、本文や挿絵を基にしておじさんの気持ちのイメージをふくらませ、音読や動作化を通して、リズムの楽しさを味わいながら、おじさんの気持ちの変化を読みとることができるよう支援していきたい。

III 目 標

動作化や音読などの多様な言語活動を通して、登場人物の気持ちや様子に対する想像をひろげ、お話の面白さを味わうことができるようにする。

IV 学習計画（13時間）

- (1) 「自分の大切なもの」は何か、それを使えるかどうかを話し合い、教材への興味や関心を高める。 … 1 時間
- (2) 挿し絵からおじさんへのイメージをひろげる。範読を聞き、「おもしろかったところ」「不思議に思ったところ」を書く。 … 1 時間
- (3) 場面ごとに人物の行動や心情を詳しく読み取る。
 - ・ 第1場面 おじさんのかさは、どんなかさかを読み取る。
(イメージ図) … 1 時間
 - ・ 第2場面 おじさんはどんなことがあっても、かさを開かなかったのは、かさを大事にしていたからだということを読み取る。(動作化、吹き出し) … 3 時間 (本時 6 / 13)
 - ・ 第3場面 どんなことがあってもかさを開かなかつたおじさんが、子供たちの歌声をきっかけに、とうとうかさを開いてしまった理由について読み取る。 … 2 時間
 - ・ 第4場面 「雨がふつたら ポンポロロン」が「傘に雨が当たった音」だということ、「雨がふつたら ピッチャンチャン」が「長靴が水たまりに入った音」だということを読み取る。(動作化、音読) … 2 時間
 - ・ 第5場面 おくさんのせりふの面白さを味わう。 … 1 時間
- (4) 今まで学習してきたことを生かして劇化する。 … 2 時間

V 本時案

(1) 目 標

動作化や音読を通して、かさを開いてしまったおじさんの様子や気持ちを想像しながら、おじさんの気持ちの変化を読み取る

(2) 展 開

	学 習 活 動	教 師 の か か わ り
導 入	<p>○前時の学習を想起する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・男の子に頼まれても、かさを開こうとしなかったおじさんを思い出す。 <p>○本時の学習場面を確認し、学習課題を設定する。</p>	<p>○かたくなまでにかさを開かなかったおじさんの気持ちを想起できるようにしたい。</p>
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> <p>どうして、おじさんはかさをひらいてしまったのだろう。</p> </div>	
展 開	<p>○第5場面を音読する。</p> <p>○かさを開いてしまったおじさんの気持ちを考え、話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「あめがふったら…」…歌の楽しさに気づく。 ・〈つられて〉…動作化を通して言葉の意味を理解する。 ・「ほんとかなあ。」…おじさんの迷いに気づく。 ・〈とうとう…ひらいてしまいました〉 …「とうとう」、「～しまいました」に着目する。 <p>○かさをひらいてしまったときのおじさんの様子を動作化する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おじさんの気持ちを考えながら表現する。 	<p>○全体に聞こえるような大きな声で音読できるようにさせたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・意図的計画的な指名。 <p>○「ほんとかなあ。」と言った時のおじさんの気持ちを中心に読み取らせたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どのような言葉からおじさんの心情を考えることができるか話し合い、自分の考えの根拠をはっきりするように促す。 <p>○前時の場面とつなげて動作化をすることで、おじさんの気持ちの大きな変化に気づかせたい。</p>
整 理	<p>○おじさんの気持ちを考え、吹き出しに書く。</p> <p>○わかったことを話し合う。</p> <p>○次時の学習の内容を知る。</p>	<p>○自分の考えをまとめさせたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の流れを感じとり机間指導の順番を決めておく。 <p>○自分なりの言葉で発表させたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・机間指導の状況に応じて指名する子を決める。 <p>○第6場面についての予告をする。</p>

算数科学習指導案

日 時 平成〇〇年〇月〇〇日 () 第〇教時
児 童 4年〇組 男子〇名 女子〇名 計〇名
指導教官 ○ ○ ○ ○ 教諭
指 導 者 教育実習生 ○ ○ ○ ○

I 単元名 「面積」

II 単元について

本学級の子どもたちは、積極的に問いを生み出し、自分なりの見通しや方法をもって追究し、自信をもってその考えを発表できるというよさをもっている。また、これまで、方眼や色板等で広さを比べる学習を通して、広さの概念の基礎となる活動を行ってきた。

そこで、本単元では、単に単位や公式の暗記をするのではなく、陣取り遊びで取った自分の広さと友達の広さを比べることから学習を進め、自力追究や他者との意見の交流を通して求積方法や公式の便利さに気づかせたいと考えた。

これらのことにより、子どもたちが、求積方法について多様な考えを生み出し、それらを実際の操作で確認しながら、最終的には公式を導き出すことができるような支援をしていきたい。

III 単元の目標

- (1) 身の回りにあるものの広さに関心をもち、進んで面積を求めることができるようにする。
- (2) 面積も長さやかさの場合と同じように、単位の大きさを決めてそのいくつ分として数値化して求められることに気づくようにする。
- (3) 面積の公式を用いて正方形、長方形の面積を求めることができるようにする。
- (4) いろいろな面積の単位や正方形、長方形の面積の公式によって求めることができるようにする。

IV 指導計画（12時間扱い）

- (1) 広さくらべ … 2時間（本時2/12）
 - ・陣取り遊びを通して、広さ（面積）の意味をとらえるとともに、広さ比べへの興味・関心をもつ。
 - ・広さの比べ方を自分なりに考え、友達と比較・検討する。
- (2) 長方形や正方形の面積 … 3時間
 - ・前時の活動を想起しながら、単位面積に着目して、長方形の面積を求める方法を考える。
 - ・長方形や正方形の面積は計算で求められることに気づき、公式としてまとめる。
 - ・複合図形の面積の求め方を考え、理解する。
- (3) 大きな面積の単位 … 1時間
 - ・大きな面積を表す場合に平方メートルや平方キロメートルなどの単位を使うと便利なことを理解する。
- (4) まとめ … 2時間

V 本 時 案

(1) 目 標

正方形と長方形の広さを多様な方法で比べる活動を通して、広さの比較方法を理解し、面積の概念をとらえることができるようにする。

(2) 展 開

	学 習 活 動	教 師 の 支 援
導 入	<ul style="list-style-type: none"> ○前時の陣取り遊びで、自分の取った陣地がどれだけの広さかを思い出す。 ○提示された正方形と長方形の「広さ」について話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○子どもたちの取った陣地を提示し、「広さ」比べについての興味・関心を強くもたせる。 ○“直感的に比べる”など予想を立てさせ本時への意欲づけを図る。
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ○本時の学習問題を把握する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin: 10px auto; width: fit-content;"> 正方形と長方形の「広さ」を比べる方法を考えよう。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ○正方形と長方形の「広さ」を自分なりの方法で比較する。 《予想される活動》 ①直接重ねてみる。 ②違う紙に写してみる。 ③重ねてあまった部分を切ってみる。 ④縦と横の長さを測り、周りの長さを出す。 ⑤おはじきなどを敷き詰めて考える。 ⑥方眼を書き込む など <ul style="list-style-type: none"> ○それぞれが調べた方法を発表し合い、その方法について話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○学習カードに、追究の見通しや方法を記入させ、自分なりの考えを明確にもつことができるようにする。 ○子どもたちがそれぞれの方法で追究できるようにできるだけ学習コーナーを設置し教材・教具を準備しておく。 例えば、 ①はさみ・定規 ②薄い紙 ③たけひご ④方眼紙 など ○机間指導をしながら、子どもたちの意見を把握し必要に応じた働き掛けを行う。 ○それぞれの方法の関連性を把握し、整理する。
整 理	<ul style="list-style-type: none"> ○正方形と長方形の「広さ」はいろいろな方法で比べることができることと、それぞれの方法のよさを理解する。 ○次時の学習の見通しをもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「正しく、便利に、簡単に」比べるという視点で考えることを促し、どちらが広いかを明らかにさせたい。 ○ふりかえりカードを用意し、「楽しかったこと」「これから使えそうなこと」「まだ、はっきりしないこと」について記入させる。

社会科学習指導案

日 時 平成〇〇年〇月〇〇日 () 第〇教時
児 童 〇年〇組 男子〇名 女子〇名 計〇名
指導教官 〇 〇 〇 〇 教諭
指 導 者 教育実習生 〇 〇 〇 〇

I 単 元 名 「安全なくらし」(火事をふせぐ) 〈13時間扱い〉

II 単元について

本学級の児童は、社会科の学習を通して、新たな社会的事象と出会ったときに、それに興味・関心を持ちながら、自分なりの問いを生み出し、社会的事象に対して自ら積極的に働きかけて追究することができる。

そこで本単元は、学校や地域の防災施設を調べるという活動を設定することにより、地域の人々の生命や財産を脅かす火災などの災害から、人々の安全を守る工夫について考えることをねらいとする。

また、消防署などの関係諸機関が緊急に対処する体制をとっていることを知り、その働きとそこに従事している人々の工夫や努力を考えることをねらいとしている。

このことにより、児童が身近な生活の中で、防災意識を高めながら、安全なくらしについての考え方を深め、工夫することができるような支援の充実に努めていきたい。

III 単元の目標

- (1) 災害から人々の生命や財産を守るため、関係の機関が相互に連絡を取り合いながら緊急に対処する体制をとっていることやそこで働く人々の工夫や努力をとらえることができるようにする。
- (2) 見学や調査など、地域の人々の安全を守るための活動を追究していくなかで・必要な資料を集めたり作ったりして、具体的に問題を解決していくことができるようにする。

IV 指導計画 (13時間扱い)

1. 火事をふせぐ

- (1) 学習計画を立てる … 1 時間
- (2) 学校の消防施設 … 2 時間
 - ・校内を回りながら消防施設の種類や配置を調べる。
 - ・調べたことを配置図にまとめ、学校の火事に備えた設備の工夫について考える。
- (3) 地域の消防施設 … 2 時間 (本時 5 / 13)
 - ・地域を回り、消防施設の種類や配置を調べる。
 - ・地域の消防施設の配置の違いや工夫について考える。
- (4) 消防署をたずねて … 3 時間
 - ・消防署の働きについて関心を持ち、調べる計画を立てる。
 - ・消防署を見学し、通信司令室を中心とした仕組みについて調べる。
 - ・消防署の人たちの努力や工夫について考える。

2. 交通事故をふせぐ

- (1) 交通事故のようす … 2 時間
 - ・交通事故の件数や原因、校区の安全施設などについて調べる。
 - ・調べたことから交通事故を防ぐための工夫について考える。
- (2) 110番の仕組み … 2 時間
 - ・通信司令室を中心とした仕組みについて調べる。
 - ・警察署の人たちの努力や工夫について考える。

3. 安全を守るために

- (1) 火事や交通事故を防ぐために自分たちでできることを考える。 … 1 時間

V 本 時 案

(1) 目 標

身近な地域社会の消防施設を調べることにより、その地域の防災工夫に気づくことができるようにする。

(2) 展 開

	学 習 活 動	教 師 の 支 援
導 入	<p>○前時の学習を想起する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校周辺施設、自分の身近な地域の防災施設を調べ、気づいたことを思い出す。 	<p>○前時の学習を想起するように促す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・防災についてを調べ学習の目的を想起することを促す。
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">地域の消防施設について、工夫されていることを考えてみよう</div>	
展 開	<p>○友だちのまとめを自由に見ながら、気づいたことを発表する。</p> <p>〈予想される意見〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調べた地区では消火栓が一番多い。 ・防火水そうはそれほど多くない。 ・避難場所が書かれている案内板があった。 ・予想通り配置にきまりがありそうだ。 など <p>○消防施設の地域間の特徴に気づく。</p> <p>〈予想される意見〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・住宅街や商店街、広い道路に消防施設は多い。 ・田畑や山の方の地域、狭い道路に消防施設が少ない。 	<p>○発表を系統立てて整理するようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表に目的をもち、自分たちが主張したいことを明らかにする。 <p>○消防施設の地域間の特徴に気づくよう促す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・共通点、相違点を整理する。 <p>○施設ごとや全体としてみるなど視点をかえて考えるよう促す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地図上に整理するなどして、全体に指示できるよう準備しておく。
開	<p>○地域の消防施設の設置や数に対する工夫について話し合う。</p> <p>〈予想される意見〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人の多く集まるところに多い。 ・人があまり住んでいないところは少ない。 ・火事が置きやすい場所はどこか。 など 	<p>○地域の消防施設の配置及び数に工夫がなされていることに気づくように促す。</p>
整 理	<p>○地域の消防施設の工夫をまとめる。</p> <p>○火事を消す仕組みについて興味をもち、消防署を見学する計画を立てる。</p>	<p>○地域の消防施設の工夫をまとめ、新たな問いを生み出すことを促す。</p> <p>○何について、どのような方法で調べるのか見通しをもつように働きかける。</p>

理 学 習 指 導 案

日 時 平成〇〇年〇月〇〇日 () 第〇教時
児 童 〇年〇組 男子〇名 女子〇名 計〇名
指導教官 〇 〇 〇 〇 教諭
指 導 者 教育実習生 〇 〇 〇 〇

I 単 元 名 「てこのはたらき」

II 単元について

本学級の児童は、てんびんに同じおもさのおもりをつるしたとき、支点からおもりまでの距離が等しいとつりあうことから、両端につるしたもののおもさは同じであることを捉えてきた。その反面、日常生活においてはてこを用いた道具を何気なく利用しているものの、どのように用いられているか考えたり、そのしくみについて考えたりすることは少ないと思われる。

ここでは、てこの存在に触れることで、「てこのかたむけるはたらきは力の大きさと支点からの距離の積である」、「左右のはたらききが等しいとき、てこがつりあう」といった一定の法則を見つけられるようにする。また、日常の生活の中で使用されているてこを利用した道具について関心をもち、そのしくみを考えられるようにする。

学習に対する児童の実態としては、観察や実験などの体験活動を通して自力追究することへの欲求が強い。そこで、そのような意欲的な態度を伸ばすことを念頭におきながら、学習環境を整えること、教材の充実を図ること、友達どうしのかかわりを促すことなどを通して科学的な見方や考え方を高めたい。

III 単 元 目 標

- ・小さい力で重いものを動かすことができることから、てこを傾けるはたらきを力を加える位置と力の大きさの関係でとらえ、つりあうときのきまりを定量的にとらえることができるようにする。
- ・日常生活でてこの原理を用いた道具に着目し、てこのきまりと関連づけることができるようにする。

IV 指 導 計 画 (11時間扱い)

(1) てこを用いて、手で重いものを動かす活動からしくみを考え、力のかわりにおもりを下げて同じ働きをすることをとらえる …5時間

- ・重いものを持ち上げる工夫を考え、話し合う (1時間)
- ・大きなたこを体験し、気づいたことを交流する (1時間)
- ・大きなたこを用い、てこの支点からの距離とおもさの関係について調べる (2時間)
- ・てこの支点からの距離とおもさの関係について正確に調べる方法を話し合う (1時間)

(2) てこ実験器を用いて、てこがつりあうとき、おもりの数と支点までの距離の関係を調べ、法則性を見つける …5時間

- ・てこのきまりを見つける方法を考え、話し合う (2時間)
- ・おもりの数やおもりのかける場所を変え、おもりの数と支点までの距離との関係を調べる (2時間) 本時1/2
- ・てこがつりあうときのきまりについて話し合い、きまりを確認する (1時間)

(3) 身のまわりの道具にてこが利用されていることに気づき、そのしくみを考える …1時間

- ・てこが利用されていると思われる身近な道具を持ちより、そう思う理由を話し合う

V 本 時 案 (8/11)

(1) 学習目標

- てこのきまりを調べるために自分の考え（変化させようとするもの・比較しようとするもの）を意識し、実験に取り組むことができる。
- 友人と意見を交流しながら自分の意見を修正し、てこのきまりについての自分なりの考えをもつことができる。

(2) 展 開

学 習 活 動	教 師 の 支 援
<p>前時まで</p> <p>前時までに児童は、てこで重いものを持ち上げる活動から、小さい力で重いものを持ち上げることができることを知り、支点から力点までの距離とそれにかかる力には何らかの関係があることを発見した。そこから「てこにはどんなきまりがあるのだろうか」という問いが生まれ、てこのきまりを見つけるための方法を考えた。本時は児童が考えた方法ももとにてこのきまりを追究する活動の場である。</p>	
<p>○前時までの学習を想起する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px 0; text-align: center;">てこのきまりを見つけよう</div> <p>○てこのきまりを見つけるための方法を確認する。</p> <p>○自分なりに考えた方法で、実験活動をする。</p> <p>【準備するもの】</p> <p>てこ実験器、鉄製スタンド、おもり</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between; margin-top: 10px;"> <div style="width: 30%; border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>方法 1</p> <p>おもりをかける位置を変えて、ちょうどつりあう位置を調べてみる。 (片側のおもりの位置は変えない)</p> </div> <div style="width: 30%; border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>方法 2</p> <p>おもりの個数をいろいろ変えてみて、ちょうどつりあう位置を調べてみる。 (片側のおもりの位置は変えない)</p> </div> <div style="width: 30%; border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>方法 3</p> <p>てこがつりあう位置を探し、共通点を探してみる。 (片側のおもりの位置は変えない)</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: center; margin: 10px 0;"> <div style="width: 30%; text-align: center;">↓</div> <div style="width: 30%; text-align: center;">↓</div> <div style="width: 30%; text-align: center;">↓</div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between; margin-top: 10px;"> <div style="width: 30%; border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>結果 1</p> <p>支点から同じ距離でちょうどつりあう。 →同じ位置より遠くになると力が少なくてすむ。</p> </div> <div style="width: 30%; border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>結果 2</p> <p>同じ個数でつりあう。 →同じ距離だと楽にてこを持ち上げることはできない。</p> </div> <div style="width: 30%; border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>結果 3</p> <p>支点からの距離が2倍だと半分のおもりでつりあう。 →支点からの距離を2倍にすると力は半分ですむ。</p> </div> </div> <p>○てこの支点からの距離と重さには関係があることをつきとめる。</p> <p>○調べたことをまとめていく。</p> <p>○自分の行った実験の結果を、他の班の結果と比べ実験でわかったことを話し合う。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px 0; text-align: center;">支点からの距離と重さには関係がある。</div> <p>○次時の学習への見通し</p>	<p>○前時の学習の内容を想起させ、本時の学習の意欲化を図りたい。</p> <p>○どのような条件制御を何のために行うかを意識させながら、各グループの実験内容を紹介しあう場を設定する。</p> <p>○他の班の活動も意識しながら取り組むよう語りかける。</p> <p>○子ども同士の情報交換を促す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どのグループが、どんな実験をしているか、わかるように提示物などを整理しておく。 ・机間指導中、交流する目的を把握しておく。 <p>○実験・観察の結果を正確に表現するよう語りかける。</p> <p>○自分なりの表現でまとめるよう促す。</p> <p>○実験結果から、自分なりに考えたことや、友人の考えと比べて考えたことを交流するように促す。</p> <p>○次時学習の確認をし、意欲化を図る。</p>

音楽科学習指導案

日 時 平成〇〇年〇月〇〇日（ ）第〇教時
児 童 〇年〇組 男子〇名 女子〇名 計〇名
指導教官 〇 〇 〇 〇 教諭
指 導 者 教育実習生 〇 〇 〇 〇

I 題材名 「すてきなハーモニー」(4年『もみじ』合唱)

II 題材について

本学級の子供たちは、新しい音楽と出会ったとき、その曲のもつよさや美しさを感じ取り、自分なりに工夫して表現しようとするよさをもっている。これまでの音楽の学習では、歌詞に描かれた情景や様子を思い浮かべながら、声や楽器による表現方法を工夫したり、強弱の調の変化など、曲を構成している要素を生かして、曲想表現を工夫したりする活動に意欲的に取り組んできた。また、自分や他者の表現を鑑賞して自分なりの考えをもち、その考えを発表したり、気付いたことを表現に生かそうとする態度も育ってきている。

この『もみじ』は、秋の情景を全体にわかりやすい言葉で表現しており、子供たちが秋のイメージをひろげて歌いやすい教材と考える。優美な感じの主旋律に加え、輪唱・対旋律・3度の響き・動きのある副旋律と、変化に富んだ合唱編成になっており、様々な形の2声の響きが味わえる。しかも、その全てが合唱の基本的な味わいを提供してくれる要素であり、歌うことの大好きな子供たちが、合唱の魅力を十分に味わうことが期待できると考えた。

展開にあたっては、子供たちが自分たちの表現を鑑賞できる場を設定し、表現のよさを自覚したり、更に工夫したい点などの表現を見直す視点を、子供たち自らが意識したりできるような支援を充実させ、そのための活動時間も十分に保障していきたい。そのことにより子供たちは、自分たちで工夫する点を見つけ出し、表現することへの自信を深めながら、自分たちの力で一つの音楽をつくりあげていく喜びを味わうことができるものと考え。また、他者との交流を通じて、自分や他者の取り組みのよさを意識し、工夫して合唱することへの意欲を高めることができるように、学習環境の工夫や語り掛けなどの支援をしていきたい。

III 題材の目標

- 秋の情景や紅葉している山の様子などを思い浮かべ、自分なりに曲想表現を工夫しながら、音の響きや重なりを感じて表現することができるようにする。

IV 学習計画(4時間扱い)

- (1) 「もみじ」の歌詞の内容や曲想をとらえ、自分なりに工夫して合唱したいという問いを生み出す … 1時間
- (2) 歌詞の内容や曲の感じに合うように、自分なりの表現をする。 … 2時間
 - ・主旋律と副旋律を歌えるようにする。
 - ・自分なりに曲想表現を工夫して歌う。
 - ・友達と2重唱する。
 - ・パートを分けて2部合唱をする。
 - ・互いの表現を交流したり、表現を録音したものを鑑賞したりする。
- (3) 気付いたことや感じ取ったことを基に、学級全体で表現する。 … 1時間(本時4/4)
 - ・友達や自分たちの表現を鑑賞し、工夫したい点や更に高めたい点などを話し合う。
 - ・話し合ったことを基にして、曲想表現を工夫し、学級全体で2部合唱する。

V 本 時 案

1. 目 標 曲の感じがよりよく表現できるように、気付いたことや感じ取ったことを基にして、学級全体で曲想表現を工夫しながら、音の重なりを感じて合唱できるようにする。
2. 展 開

学 習 活 動	教 師 の 支 援
<p>○前時までの学習を想起し、表現していく上での共通の視点を確かめる。</p> <p>○これまでの表現から感じ取ったことや気付いたことを基にして、学級全体で曲想表現を工夫しながら練習をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達と表現を交流して、互いのよさや感じ方の違いに気付く。 ・友達の表現のよさを感じたり、それを発表したりする。 ・出された意見を表現に生かすように練習する。 ・自分の感じ方や表現を修正する。 など <p>○録音したものを観賞する。</p> <p>○これまでの気づきを生かして、学級全体で合唱する。</p> <p>○学習を振り返り、感想を発表する。</p>	<p>○やさしい感じを出すための表現の工夫（共通の視点）を確認し、それを生かして表現できるようにしたい。</p> <p>○子どもが興味や関心をもち、意欲的に活動できるような投げ掛けの工夫をしたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前時までの合唱の録音テープなどを準備しておく。 <p>○子供自らが、気付いたことや感じ取ったことを生かして、表現を修正したり高めたりできるようにしたい。</p> <p>○子供が、表現を見直す視点を、自ら意識できるような語り掛けを工夫したい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・誰がどのような課題意識をもっているのかあらかじめ調査、把握しておく。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>発声・音量のバランス・強弱・リズム 音の長さ など</p> </div> <p>○子供たちの演奏を録音し、自分たちの演奏を客観的にとらえ、より豊かな表現の追究ができるように促したい。</p> <p>○今までの気づきを生かして、工夫して表現できるように働き掛けたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前時との比較で、本時、意識して修正した点を発表させたい。 <p>○表現や取り組みなどを振り返り、表現の高まりや学級全体で一つの音楽をつくりあげた喜びを実感させたい。</p>

図画工作科学習指導案

日 時 平成〇〇年〇月〇〇日 () 第〇教時
児 童 〇年〇組 男子〇名 女子〇名 計〇名
指導教官 〇 〇 〇 〇 教諭
指 導 者 教育実習生 〇 〇 〇 〇

I 題 材 「つなぐと ゆらゆら」(造形遊び)

II 題材について

本学級では、造形感覚を働かせ、主材料となるものの性質に気づくことができるよう、用具を整理し、自由に主体的な造形活動ができるよう促してきた。また、高学年だからこそ材料や場所にすすんでかかわり、それらをもとに構成したり、つくるものと周囲の様子を考え合わせたりして活動する題材を多く設定してきた。

こうした造形活動の中で、材料から思いをひろげてきた本学級の児童に、今回は自分の発想・思いをしっかりともち、材料や場所と出会い、友達と交流しながらその思いをひろげ、粘り強く自分の思いを追求してほしいと考え、本題材を設定した。

また、本題材では、活動の途中で互いに交流したり、鑑賞したりするような、友達の作品の中にあるよさを見いだす機会を大切にしていきたい。こうした機会を設けることで、さらに自分の作品をつくりつづける意欲を高め、また友達と協力し、より自分の思いにあった表現製作活動を展開できるよう支援していきたい。

III 目 標

- (1) 自分の思いをもって、木切れが揺れる面白さを味わいながら、意欲的に取り組むことができるようにする。
- (2) 木切れなどの身近な材料の形や色などの特徴を生かし、組み合わせて、その形から自分らしい表現の構想ができるようにする。
- (3) 表現の意図に応じて、木切れなどを切ったり、組み合わせたり、結合させたりしてつくることができるようにする。
- (4) 互いの作品の工夫やよさに気づき、伝え合い、協力してつくりつづけることができるようにする。

IV 指導計画(6時間扱い)

- (1) 木切れを接合して、ゆらゆら揺れる動きを楽しみ、イメージをふくらませる。 … 1時間
- (2) ゆらゆら動く木の接合から、思いつくものをつくる。 … 1時間
- (3) つるす台を友達と協力して組み立てる。 … 1時間
- (4) つるすものを切る、削るなど工夫してつくる。 … 2時間(本時4/6)
- (5) つくったものをつるしたり、動かして遊んだりする … 1時間

V 本 時 案

(1) 目 標

- 自分の思いに近づくように、方法や工夫をすすんで試すことができるようにする。
- 材料を生かした発想や構想ができるようにする。
- 動きの変化に着目して、材料などの構成を工夫することができるようにする。

(2) 準 備

- 教 師 示範作品、資料、万力、彫刻板、木工用具
- 児 童 木の枝、くぎ、たこ糸、針金、接着剤、ヨート、ヒートン、ひも、毛糸、彫刻刀

(3) 展 開

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導 入	<ul style="list-style-type: none"> ○前時までの学習を振り返る ○本時の学習のめあてをつかむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○材料の組み合わせの工夫ができるように促す。
	動きの変化に着目し、材料の組み合わせを工夫してみよう。	
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の計画を基に、自分の使いたい材料や用具を作ってつくる。 <p>〈予想される活動〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・使いたい材料、それにあった用具を選ぶ。 ・安全に気をつけて、正しい用具の扱いをしようとする。 ・思いに合う形になるよう材料を切ったり、組み合わせたりしてつなぎ合わせる。 ・動きの様子を見て、削ったり、切ったりしながら、自分の思いに合った形に変えていく。 ・つるして、動き方の様子を確認、形を変えるなどする。 ・つるしながら、動きに合う形、大きさかどうか確かめる。 ・つくりながら気づいたことをすすんで自分の表現に生かそうとする。 ・友達と必要な情報を求め合ったり、教え合ったりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○子供一人一人が意欲的に製作活動に取り組めるように、次のような教材・教具を準備し、自由に選択できるようにしたい。 ・自由に使える材料を用意する。 木切れ、くぎ、たこ糸、針金、ヨート、ヒートン、ひも、毛糸 など ・自由に使える用具を用意する。 万力、彫刻板、木工用具（のこぎり、木槌、糸鋸、きり、ベンチ）など ・動きを確かめるコーナーをつくっておく。 ○子供たちの試みのよさや工夫のよさを認め、意欲を引き出していけるよう、次のような語りかけをしたい。 ・試みのよさや表現のよさを見だし、自覚できるようにする。 ・友達と交流し合うことを促し、発想や転換したり、ひろげたりできるようにする。 ・安全に心がけて製作する。
整 理	<ul style="list-style-type: none"> ○次時への学習の見通しをもつ ・製作過程での自分のがんばりや工夫したことを振り返る。 ・さらにどのような工夫ができるか考える。 ・必要な用具や材料について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○次時の学習の見通しをもつことができるようにしたい。 ・製作過程での子供たちのがんばりの様子や工夫のすばらしさを紹介する。 ・次時ですべきことについて、学習カードで確認するよう促す。

体育科学習指導案

日 時 平成〇〇年〇月〇〇日 () 第〇教時
 児 童 〇年〇組 男子〇名 女子〇名 計〇名
 指導教官 〇 〇 〇 〇 教諭
 指 導 者 教育実習生 〇 〇 〇 〇

I. 単 元 名 バスケットボール

II. 単元について

バスケットボールは、攻守混合で行われ、高いところにある小さなゴール（バスケット）に、作戦をたて、シュートを決め、得点を競うことを楽しむゲームである。

子供たちは、ゲームに参加し、シュートを決め、得点を競い合うゲームをしているときに楽しさを感じる。しかし、同じような力になるチームを決め、ゲームをしても、プレーへの参加やシュートに能力差が大きく影響する。また、みんなでパスを回しても、戦術的に問題が生じる。

そこで、4種類のゲームを考え、子供たちが自分にあったゲームを毎時間選択し、集まったメンバーでチームやルールを決め、ゲームを楽しむという方法を考えた。また、ゴールは、シュートが入りやすくするために、大きさを直径65cmにした。さらに、ゲームへの参加を考え、オールコートでの3on3を基本にゲームをすることにした。これにより、ゲームに参加し、シュートを決め、得点を競い合うことが可能になり、一人一人がよりバスケットボール本来の楽しさに触れることができると考えた。

III. 目 標

- ・自分にあったバスケットボールの楽しみ方を見つけ、運動にひたった楽しさを味わうことができるようにする。
- ・バスケットボールの運動世界を創り上げるため、全体の調和の中で参加の仕方を考え、進んでプレーできるようにする。

IV. 学 習 計 画 (14時間)

ねらい1 今の力で楽しむことができるバスケットボールを考え楽しもう。

ねらい2 作戦をたて、バスケットボールにひたって楽しもう。

	1	2 ~ 11	12 ~ 14
0 ↓ 45	オリエンテーション	ね ら い 1 ゲーム 1 事前に決めたメンバー、ルールでゲームをする。	ねらい2 イベント
		振 り 返 り 参加、シュート、競い合うという観点で振り返り、ルール、メンバー等を変更。	メンバーを固定し、大会計画し、実行する。
		ゲ ー ム 2 新しいルールやメンバーでゲームを楽しむ。	
		次時の準備 ゲーム選択、メンバー決定	

V 本 時 案 (8/14時間)

(1) 目 標

- ・「ゲームに参加」し「シュートを決め」「得点を競い合う」ゲームにするために、メンバー（ひと）、ルール（こと）コート、用具（もの）を工夫しバスケットボールを楽しむことができるようにする。
- ・楽しいバスケットボールの世界をつくるため、参加の仕方を考え取り組むことができるようにする。

(2) 展 開

	学 習 活 動	教 師 の か か わ り
導 入	○W-up	健康状態の確認、基本的な動きの指導
	○ゲーム1 ・対戦順、時間、審判等の見直しをもつ。 ・参加の仕方を考える。 選手、応援、オフィシャル等その時の自分の状況を判断し、行動する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲームの進行状況を把握しスムーズな進行を促す。 ・ゲーム中に三角のポジションで攻撃することを意識するよう促す。 ・良き動きやプレーをほめる。 ・一人一人の参加の仕方を把握し、楽しい運動世界をつくるよう働き掛ける。
展 開	○振り返り ・「参加、シュート、競い合う」ができていたかどうか。 「うまくいっている時」 作戦をたて、ゲーム2をする。 「問題点がある時」 「もの」「こと」「ひと」を窓口として工夫する。	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人が自分の考えを交流できるように雰囲気づくりをする。 ・作戦をプレーで生かすことができるように具体的な動きをイメージするよう促す。 ・問題点を焦点化するよう促す ・解決方法のアドバイスをする。
	ゲーム2 ・対戦順、時間、審判等の見直しをもつ。 ・振り返りを生かし、ゲームにひたって楽しむために、参加の仕方を考える。 ・参加の仕方を考える。 選手、応援、オフィシャル等その時の自分の状況を判断し、行動する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲームの進行状況の把握しスムーズな進行を促す。 ・作戦を意識するよう促す。 ・振り返りが生きているかどうか把握する。生きていないときは、ちがう方法を考えるよう促す。 ・一人一人の参加の仕方を把握し、楽しい運動世界をつくるよう働き掛ける。
整 理	○次時の準備 ・ゲームの選択 ・チーム決め ・ルールの確認 ・グループ内で本時の気付きの交流	<ul style="list-style-type: none"> ・人数やメンバーを考え一人一人の思いが生きるチーム作りを促す。 ・短時間で話し合いができるよう促す。 ・本時の学習を生かすように促す。

家庭科学習指導案

日 時 平成〇〇年〇月〇〇日 () 第〇教時
児 童 〇年〇組 男子〇〇名 女子〇〇名 計〇〇名
指導教官 〇 〇 〇 〇 教諭
指 導 者 教育実習生 〇 〇 〇 〇

I. 題 材 名 「作っておいしく食べよう」

II. 題材について

本学級の児童は、これまで野菜サラダの調理を通して調理用具や器具の扱い方、ゆでる調理法を学習してきた。また、調理実習を通して自分で料理を作る楽しさを味わってきた。しかし、食品やその組み合わせ方などの関係を系統的にとらえる機会は少なかった。

そこで、日常の食事の中で欠くことのできないごはんのみそ汁の調理を通して、その栄養的な特徴や調理法についてとらえさせるとともに、食事に使われている食品に目を向け、食品を組み合わせる食べることの大切さや、日常の食事のあり方について気づかせていきたいと考えた。

これらのことから、児童が毎日の食事に目を向け、学習したことをこれからの家庭生活に生かすことができるような支援の充実に努めていきたい。

III. 題材の目標

- 毎日の食事や、食事に使われている食品に関心をもち、食品を組み合わせる食べることの大切さがわかる。
- ごはんのみそ汁の栄養や調理のしかたについて調べ、調理計画を工夫して立てることができる。
- 食品の栄養的な特徴や体内でのおもなはたらき、調和のよい食事のとり方がわかる。

IV. 指導計画〈9時間扱い〉

- (1) 毎日どんなものを食べているのかな…………… 1時間
 - ・毎日食べているものを調べ、食品の組み合わせについて考える。
- (2) ごはんのみそ汁を作ってみよう…………… 6時間
 - ・おいしいごはんの炊き方やみそ汁の作り方を調べ、手順を考えながら工夫してごはんのみそ汁の調理計画を立て、作る。
- (3) なぜ食べるのだろう…………… 2時間
 - ・食品の栄養的な特徴や体内でのおもなはたらき、調和のよい食事のとり方について調べ、これからの生活にどのように生かしていくことができるか考える。

V. 本 時 案

(1) 目 標

ごはんのみそ汁の調理が効率的にできるように、手順を考えた調理計画を立てられるようにする。

(2) 展 開

	学 習 活 動	教 師 の 支 援
導 入	<p>○前時までの学習を想起する。</p> <p>○本時の学習のめあてをつかむ。</p>	<p>○前時の学習を想起し、本時のねらいを明確にとらえさせるとともに、本時の学習意欲を高めさせたい。</p>
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> <p>ごはんのみそ汁作りの計画を立てよう。</p> </div>	
展 開	<p>○ごはんのみそ汁の調理が同時にできるようにするための工夫について考える。</p> <p>○材料と分量、作り方、用具、分担などを話し合う。</p> <p>○安全に調理するにはどんなことが必要かを話し合う。</p> <p>○グループごとに実習計画を発表する。</p>	<p>○二つのものを調理するのはこの実習が初めてなので、効率よく調理ができるように時間や作業分担を考えていくように促す。</p> <p>○グループごとに話し合った内容をまとめることができるように、実習計画表を用意する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・材料と分量 ・作り方（切り方、味つけ、順序など） ・調理にかかる時間 ・調理用具、器具 ・作業分担 <p>○調理用具や器具の安全で衛生的な扱い方について話し合うように促す。</p> <p>○他のグループの実習計画を自分たちの計画と比べながら聞いていくように促す。</p>
整 理	<p>○本時の学習を振り返り、次時の学習の見通しをもつ。</p>	<p>○次時には、楽しく安全に実習ができるように働きかける。</p>

生活科学習指導案

日 時 平成〇年〇月〇日 (〇) 第〇教時
児 童 1年〇組 男子〇〇名 女子〇〇名 計〇〇名
指導教官 〇 〇 〇 〇 教諭
指 導 者 教育実習生 〇 〇 〇 〇

I. 単 元 名 「1ねんランドにごしょうたい！」

II. 単元について

本学級の児童は、友達と仲良く遊んだり、作業に取り組んだりする様子が見られ、協力してものごとを進めることを好んでいる。また、入学して以来、上級生にいろいろな面でお世話になっていることから、日頃から何かの形でお礼をしたいという気持ちをもつようになってきている。

そこで、お世話になっている上級生にお礼をしたいという願いをもとに、1学期に生活科で取り組んだ「公園探検」から、自分たちの公園や遊園地をつくって招待するという単元を子供とともに設定した。このことにより、自分たちの公園や遊園地（ランド）をつくるための工夫をしたり、「お礼の気持ち」を表すために、どのようにイベントを進めるとよいのか、という工夫に気付くものと考えた。

本単元を進めることで、子どもたちが「お礼をしたい」という気持ちを表すための工夫を考えるとともに、人（友達、上級生など）のかかわりを意識して、学校の一員であることの自覚を深めることも期待したい。

III. 目 標

- 招待した上級生にお礼の気持ちを表すために、自分でできそうなことを進んで行おうとする。
- 「1ねんランド」の一員として、計画を考えたり、楽しい遊びやゲームを作ったりしようとする。
- 友達と協力することのよさや、お世話してくれる人たちの気持ちに気付く。

IV. 単 元 計 画 (15時間扱い) ……本時 5 / 15

- (1) 今までお世話になったことを想起することで、…………… 2 時間
上級生にお礼の気持ちを表したいという願いや
ねらいを生み出す。
- (2) お礼の気持ちを表すことができる「1ねんら…………… 8 時間
んど」を作るための計画・作成を行う。
- (3) 「1ねんランド」に上級生を招待し、楽しん…………… 4 時間
でもらう工夫をしながら進める。
- (4) 活動を通して楽しかったことや気付いたこと…………… 1 時間
などを学級で交流し合う。

V. 本 時 案 (5/15)

(1) 本時の目標

- 「お礼の気持ち」を表わすために、遊びやゲームを工夫して作ったり、進め方を考えたりすることができる。
- 友達と協力して、自分たちの「らんど」をよりよくしようと考え、協力することの大切さに気付くことができるようにする。

(2) 本時の展開

お礼の気持ちを表すことができる遊びにしよう

〈予想される子どもの活動〉

【プレイルームで】

おばけ屋敷

- ・中を暗くする工夫をしよう。
- ・おばけ役、中に入れる司会役、修理役にわけよう。
- ・音楽もつけてみよう。

【教室で】

ビー玉とばし

- ・わかりやすいルールにしよう。
- ・たくさんの人ができるようにしよう。

輪 投 げ

- ・いろいろな大きさの輪を作ろう。
- ・ペットボトルの柱に点数をつけてみよう。

トントン相撲

- ・自然のものを利用した力士を作ろう。
- ・土俵の形を工夫しよう。

カードゲーム

- ・ゲームのルールを学年ごとに変えよう。
- ・たくさんの人ができるようにしよう。

《教師の支援》

- 「お礼の気持ち」を表すように、楽しんでもらうための工夫を促す。
- 遊びのルールを工夫することで、多くの人で楽しめることへの気付きを促す。
- 全体交流の場を設け、それぞれの遊びの工夫を紹介したり、改善点に対する気付きを促す。
- 一人では困難な作業でも、友達と協力して工夫することで、よりよいものにしていくことができるという気付きを促す。
- 「らんど」全体のことを考えて、お互いのゲームの場所の工夫をしたり、イベントとしての進め方への気付きを促す。
- 次の活動への意欲づけを図りたい。

【プラタナス広場で】

迷 路

- ・分かれた迷路を作ろう。
- ・学年により大きさや太さを変えよう。
- ・季節の感じを出そう。

的 あ て

- ・大きな的を作ろう。
- ・割り箸で鉄砲を作ろう。
- ・打つ位置を変えてみよう。
- ・的の点数を変えてみよう。

紙 芝 居

- ・本のおもしろいところを選ぼう。
- ・紙芝居の絵をわかりやすくかこう。
- ・お客さんの座る位置を考えよう。

【その他】

飾り付け

- ・お世話してもらったことを絵にかいて飾ろう。
- ・外と中の飾りをつなげよう。
- ・季節の感じを出した飾りにしよう。

招待状作り

- ・大きな招待状を作ろう。
- ・招待するときに、教室へ行って声をかけるようにしよう。
- ・声をかけるときの役を決めたり、進め方を決めたりしよう。

2 中 学 校 編

国語科学習指導案

日 時 平成〇〇年〇月〇〇日（ ）第〇教時
生 徒 北海道教育大学教育学部附属函館中学校
第〇年〇組 男子〇名 女子〇名 計〇名
指 導 者 教育実習生 〇 〇 〇 〇

I. 題 材

「かけがえのない地球」 筆者 島村英紀 (教育出版)

II. 題材について

この題材では、文章構造（主に段落の関係）の中で、文章の構成や展開に留意させる指導計画を立てる。ただし、読むことで学習を完結することなく、筆者の考えについて話し合い、自分の考えをまとめたり、発表しあったりして、読む、書く、話す・聞く活動を関連させて学習を展開させることができる題材である。本題材においては、環境に関しての自分の考えを書くということで完結させたい。

III. 題材の目標

- (1) 地球環境に対する問題提起から、人類の責任を考えることができるようにする。
- (2) 文章の中心の部分と付加的な部分、事実と意見などを読み分けて、文章の構成や展開を正確にとらえ、内容の理解に役立てることができるようにする。
- (3) 地球環境への自分の考えを、文章の構成を意識し書くことができるようにする。
- (4) 文章に表れているものの見方や考え方を理解し、自分のものの見方や考え方を広げることができるようにする。

IV. 指導計画（7時間扱い）本時4／7

V. 本 時 案

学 習 内 容	指 導 目 標	時 間
・「かけがえのない地球」を読み、地球環境についての自分の考えを持つ。	・地球環境に対する問題提起から、人類の責任を考えるようにする。	第1時
・「かけがえのない地球」を読み、文章の構成や展開を正確にとらえ、内容の理解に役立てる。	・文章の構成や展開を正確にとらえ、内容の理解に役立てることができるようにする。	第2時 第3時
・文章の構成や展開の仕方についてわかったことや気づいたことを相互に交流し合い自分の表現に役立てる。	・文章の構成や展開を正確にとらえ、内容の理解に役立てることができるようにする。	第4時 (本時) 第5時
・地球の環境についてわかったことや気づいたことを相互に交流しあい、自分の表現に役立てる。 ・地球の環境に対する自分の考えを、文章の構成を工夫してまとめて書く。	・自分のものの見方や考え方を広げることができるようにする。 ・地球環境への自分の考えを、文章の構成を意識し書くことができるようにする。	第6時 第7時

1. 題 材 「かけがえのない地球」

2. 目 標 (1) 文章の構成や展開をとらえ、内容の理解に役立てることができるようになる。

3. 学習の展開

学 習 活 動	教 師 の 働 き かけ	指 導 上 の 留 意 点
<ul style="list-style-type: none"> ・前時の学習を各自ふりかえる。 ・本時の学習課題を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時に一人一人がとらえた文章の構成を、各自想起させる。 ・本時の学習課題を確かめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ノートに貼ったスクロールの本文を利用させる。 ・学習課題を黒板に掲示し、注目させる。
<p>「かけがえのない地球」で、筆者は、どのように文章を構成し、展開しているか。</p>		
<ul style="list-style-type: none"> ・文章の構成を形式段落ごとにまとめる。 ・「かけがえのない地球」についての文章の構成や展開についての考えを交流する。 ・文章の構成についての考えをいくつかの班で発表する。 ・文章の構成と論理の展開の仕方に着目する。 ・次時、文章の構成や展開の仕方についてわかったことや気づいたことを相互に交流し合い自分の表現に役立てることを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文章の構成をとらえるために、形式段落ごとにそのはたらきを、とらえさせる。 ・「かけがえのない地球」についての文章の構成や展開について、次のような関係認識の仕方などを用いて考えさせる。 <ul style="list-style-type: none"> ①同類・異類 ②並列・累加 ③一般・特殊 ④全体・部分 ⑤上位・下位 ⑥主要・副次 ⑦原因・結果 ⑧肯定・否定等 ・文章の構成や展開について、段落相互の関係に留意させて考えさせる。 ・それぞれの班の発表をもとに、文章の構成をまとめて説明する。 ・次時、自分の表現に役立つように文章の構成や展開の仕方について相互交流することを予告する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・班で話し合わせろ。 ・関係認識の仕方にこだわることなく、文章の叙述にもとづいて考えさせる。 ・意見や考えをよく交流させる。 ・班で考えた根拠を文章に戻って考えさせるようにする。 ・生徒の考えたことを受容する。

数 学 科 学 習 指 導 案

日 時 平成〇〇年〇月〇〇日 () 第〇教時
生 徒 第〇年〇組 男子〇名 女子〇名 計〇名
指導教官 〇 〇 〇 〇 教官
指 導 者 教育実習生 〇 〇 〇 〇 ⑩

I 単 元 「二次方程式」

II 単元について

この題材に関連あるものとして、小学校の第5学年で文字Xを用い、数量の関係を式で表し、逆算を用いて解くということに触れた。中学校の第1学年では、一元一次方程式を用い、数量の関係を表す式を解いて未知数を求めるということをした。第2学年では、不等式、連立方程式を用い数量の関係を表す式について考えを発展させながら、理解を深めてきた。第3学年では、式の展開、因数分解、平方根などの二次方程式を解くにあたって、必要なことを取り扱い理解してきた。

この単元では、方程式のよさを確認し、方程式の特徴に応じて能率のよい解法を選択できるようにし、具体的な問題を通して、問題の解法に二次方程式を活用することで数量の関係を表現・処理をする能力を養いたい。

本時では、動点の動きをとらえ、図形全体がどのように変化するかを理解させ、面積を二次方程式で表現させ、関係式をつくらせたい。

III 単元の目標

- (1) 二次方程式を利用して、いろいろな問題を解決しようとする。
- (2) 解の公式、因数分解による二次方程式の解法の仕組みが理解できる。
- (3) 問題の中の数量関係をとらえ、二次方程式に表すことができる。
- (4) 問題に合った解の吟味をすることができる。
- (5) 二次方程式の特徴をとらえ、解法を選択し、能率良く解くことができる。

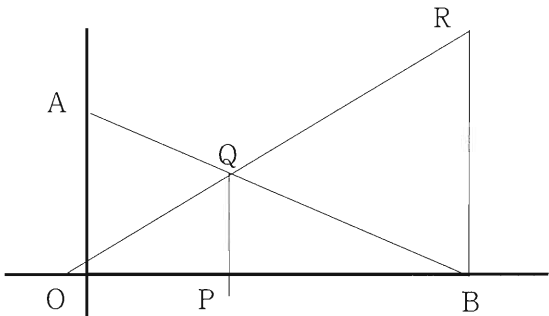
IV 指 導 計 画

- (1) 二次方程式のその解き方 …………… 1 時間
- (2) $ax^2 = b$, $(x+m)^2 = n$ の解き方 …………… 1 時間
- (3) $x^2 + px + q = 0$ の解き方 …………… 1 時間
- (4) 二次方程式の解の公式 …………… 1 時間
- (5) 二次方程式と因数分解 …………… 1 時間
- (6) 二次方程式の利用 …………… 5 時間 (本時 5 / 5)

V 本 時 案

- (1) 題 材 二次方程式の利用
- (2) 目 標
 - ① 問題文より動点の動き、図形の変化をとらえようとする。
 - ② 問題文より図形の面積と動点との関わりについて考えることができる。
 - ③ 二次方程式を用いて、図形の面積を表現できる。
 - ④ 秒数による図形の変化を理解できる。

(3) 本時の展開

学習内容	教師の働きかけ	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> 既習事項の確認 座標平面上の点の動きを把握する。 	<ul style="list-style-type: none"> 図形の問題を解くときに注意することを確認。 <p>問題 点A(0, 4)、点B(8, 0)が座標平面上にある。点Pは原点を出発しX軸上を点Bまで毎秒2の速さで動く。点Qは線分AB上の点で線分PQとX軸が垂直になるように動く。また、線分OQを点Qの方向へ延長した直線と点Bを通り、X軸と垂直な直線との交点をRとする。ただし、座標軸1めもり1とする。</p>  <p>次の問いに答えなさい。</p> <ol style="list-style-type: none"> t秒後の点P、Qの座標をtを用いて表せ。 t秒後の台形AOPQの面積をtを用いて表せ。 台形AOPQの面積と三角形QPBの面積が等しくなるのは何秒後か。 三角形ROBの面積が△AOQの面積の2倍となるのは何秒後か。 	<ul style="list-style-type: none"> 問題はプリントにして配る。 動点Pが動くことでどのような図形全体が変化することをとらえさせる。 条件をはっきりさせる。 設問中のtは、$t \neq 0$である。
<ul style="list-style-type: none"> 解決方法の見通しをもつ 課題解決 	<ol style="list-style-type: none"> 毎秒2の速さで点Pは動くので、t秒後のOPの長さは2t、よって、点Pの座標は(2t, 0)、点QのX座標は点PのX座標と同じで、$Y = -1/2 X + 4$上の点なので、点Q(2t, -t + 4) 台形AOPQの面積は、 $1/2 \times 2t \times (-t + 4 + 4)$ $= -t^2 + 8t$ { $1/2 \times OP \times (OA + PQ)$ より } $\triangle QPB$の面積 = 台形AOPQの面積 $\triangle QPB$の面積 + 台形AOPQの面積 = $\triangle AOB$の面積 $\triangle AOB$の面積が16なので 台形AOPQの面積 = $16 \times 1/2 = 8$ $\triangle AOQ = 1/2 \times OP \times OA$ $\triangle ROB = 1/2 \times OB \times RB$ 直線OQの式は $Y = (-1/2 + 2/t) X$ 点Rの座標は (8, -4 + 16/t) これらより、 $2 \times 1/2 \times 2t \times 4 = 1/2$ $= 1/2 \times 8 \times (-4 + 16/t)$ $t = -4, 2 \quad 0 < t \leq 4$ より、$t = 2$ 	<p>まず、点Pを求めさせる 時間×速さ=距離より、 点P、点QのX座標がわかる。</p> <p>台形の面積 $= 1/2 \times h \times (a + b)$</p> <p>$1/2 \triangle AOB$ = 台形AOPQの考え方を用いる。</p> <p>点Rのy座標が必要なことに気づかせる。 そのためには点OQの式が必要なことに気づく。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 本時のまとめ 次次の予告 	<ol style="list-style-type: none"> ①動点のある図形は動点が動くことで図形がどのように変化するかイメージする。 ②未知数の変化の範囲に気をつける。 	

社会科学習指導案

日 時 平成〇〇年〇月〇〇日 () 第〇教時
 生徒 北海道教育大学教育学部附属函館中学校
 第〇年〇組 男子〇名 女子〇名 計〇名
 指導教官 〇 〇 〇 〇 教官
 指導者 教育実習生 〇 〇 〇 〇

I 単元名 「国家のおとろえ」

II 単元について

平安時代において、完成されたかに見えた古代律令制だが、公地公民制のいきづまりにともない荘園制が生まれ、律令制は変質していった。そのような時代の中で、貴族階級が政治の実権を握ったが、やがて新興の武士団が台頭し、中央や地方の争乱の中で成長していった。

一方、律令国家権力の支配が十分に及ばなかった東国でも、安部、清原、藤原氏が争乱を通じて興亡し、やがて奥州藤原氏が百年にわたって東国の覇権を握ることになった。

この単元では、政治の実権が貴族階級から武士階級に移り、古代から中世へと移行していく時代や社会の変容について生徒に捉えさせた。

III 最終目標

- (1) 古代律令制が変質し、荘園制が発達する中で、貴族階級が政治の実権を握ったことを理解させる。
- (2) 古代律令制の崩壊がすすむ中、武士勢が台頭し、中央や地方の争乱の中で成長していった過程を捉えさせる。
- (3) 中尊寺は、東国に武士がおこったころ、国風文化や浄土の思想の影響を受けて建立されたことを理解させる。

IV 指導計画

学 習 内 容	指 導 目 標	時 間
(1) 平安の部	<ul style="list-style-type: none"> ・桓武天皇による律令制建て直しについて理解させる。 ・平安時代の鎮護国家仏教について理解させる。 	1
(2) 貴族の政治	<ul style="list-style-type: none"> ・藤原氏の摂関政治について理解させる。 ・有力農民が、成長した過程について資料で確かめる。 	1
(3) 国風文化	<ul style="list-style-type: none"> ・日本風の文化が発達したことを理解させる。 ・浄土の教えについて、その広がりを理解させる。 	1
(4) 武装する豪族	<ul style="list-style-type: none"> ・土着層が武装化したことについて理解させる。 ・棟梁を中心に武士団が形成されたことを理解させる。 	1
(5) 奥州藤原氏と東国の歴史	<ul style="list-style-type: none"> ・抗争を経て、奥州藤原氏が覇権を握ったことや陸奥の都「平泉」の様子について理解させる。 	1 (本時5/6)
(6) 院政と平氏	<ul style="list-style-type: none"> ・院政について理解させる。 ・平氏が政治の実権を握った様子について理解させる。 	1

V 本 時 案

1. 題 材 奥州藤原氏と東国の歴史

2. 目 標 (1) 中尊寺は、東国に武士がおこったころ、国風文化や浄土の思想の影響を受けて
建立されたことをとらえる。

(2) 身近な教材を通して、歴史に興味を持ち、さらに調べようとする意欲を持つ。

3. 本時の展開

学 習 活 動	教師のはたらきかけ	指 導 上 の 留 意 点
<ul style="list-style-type: none"> ・ 平等院鳳凰堂について復習する。 ・ 記念写真を見て、後ろに写っているものは何かを考える。 ・ 中尊寺金色堂について調べる。 ・ 平等院鳳凰堂と共通する点について調べる。 ・ まとめをする。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 平等院の歴史的な背景、人物との関係 ・ 金色堂の歴史的な背景、人物との関係 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 建立者、中に安置されている物、当時の時代背景などを確認する。 ・ 中尊寺金色堂が写っている写真を提示する。 ・ 資料集をもとに調べさせ、ワークシートにまとめさせる。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 概要・規模・形状等 ・ 歴史的背景に関すること ・ 関係する人物のこと ・ 効率的で、バランスのよい調べ学習をさせる ・ 平等院の資料をOHP（教師作成）で提示し、比較させて関連事項を捉えさせる。 ・ 東北に武士がおこった頃、国風文化や浄土の思想の影響を受けて、奥州藤原氏によって中尊寺が建てられたことを捉えさせる。 ・ 次時の予告をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ より多くの生徒に発表させ、授業への意欲を高める。 ・ 生徒に身近な写真を大きく拡大して提示することにより、導入段階での興味づけを行う。 ・ 事前指導において、調べる観点のことやワークシートへのまとめ方などの指導をし、調べ学習の見通しを持たせる。 ・ 机間指導をし、全員が学習できるよう支援する。 ・ 同時代の平等院と比較させることにより、歴史的な背景を考えさせ、捉えさせたい。 ・ 本時の学習との関連について触れ、次時学習への興味を持たせる。

理科学習指導案

日 時 平成〇〇年〇月〇〇日（ ）第〇教時
生 徒 北海道教育大学教育学部附属函館中学校
第〇年〇組 男子〇名 女子〇名 計〇名
指導教官 〇 〇 〇 〇 教官
指 導 者 教育実習生 〇 〇 〇 〇

I 単 元 「植物の世界」

II 単元について

豊かな自然が失われつつある中で、生徒たちが直接自然にふれあう機会は少なくなっている。そこでこの単元では、生徒の内に秘めた自然への好奇心を生かしながら、身近な植物への直接観察や観察機器を活用した学習活動を行ないたい。その中で、様々な環境にそれぞれ特徴のある生物が生活していることを気づかせ、生徒自らの発見や知識の習得の喜びを体感させながら自然に対する関心・意欲を高めさせたい。さらに、生徒自ら課題を見出し意欲的に探求する活動を行なうことで、より高度で意外性に満ちた学習展開をすることができる。また、学んだことを身近な植物で主体的に確かめてみる習慣をつけることで、日常生活の中での探求的な発想をふやし、科学的な能力・態度を生徒に身につけさせたい。

III 最終目標

1. 植物の世界に興味・関心を持ち、進んで新しい問題を見いだす意欲を身につけさせる。
2. 自然の中に生きる様々な植物について、科学的な見方や考え方を養わせる。
3. 観察や実験についての基礎的な技能を習得させるとともに、その結果から規則性を見い出し、分かりやすく発表する能力を身につけさせる。
4. 植物の世界についての豊かな知識を広め、自然現象についての原理・法則を深く理解させる。

IV 指導計画

- | | |
|-----------------------|----------------|
| 1. 外に出てみよう | 4 時間 |
| 2. 花はどのようにして種子をつくるか | 5 時間 |
| 3. 植物はなぜ日光が必要か | 6 時間 |
| 4. 植物はどのようにして水を取り入れるか | 3 時間 |
| 5. 植物も呼吸するか | 2 時間（本時 1 / 2） |
| 6. 植物のなかま | 6 時間 |

V 本 時 案

1. 題 材 「植物も呼吸するか」
2. 目 標

- ・植物も呼吸していることを確かめ、生物としての営みは、動物と変わらないことを説明できる。
- ・植物の呼吸と光合成の関係を考察し、自分の考えを積極的に発表しようとする。

3. 本時の展開

学 習 活 動	教師の働きかけ	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> ・前時の学習を思い出す。 ・動物の呼吸について考える。 ・植物の呼吸について調べ、光合成との関わりについて考えることを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の確認をする。 ・動物（人）の呼吸について確認する。 ・石灰水に呼気を入れて確認させる。 ・本時の学習内容を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・石灰水を吸い込まないように注意させる。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">呼吸と光合成の関係について調べよう</div>		
<ul style="list-style-type: none"> ・植物の呼吸について考える。演示実験を観察する。 ・石灰水の変化より、呼吸について考える。 ・植物の呼吸についてまとめる。 ・実験内容を理解する。 ・結果を考え、ワークシートに記入する。 ・実験結果により呼吸と光合成の関係について考え、ワークシートにまとめる。 ・自分の考えを発表する。 ・植物と呼吸の関係についてまとめる。 ・植物のつくりについてまとめることを知る。 ・ワークシートを提出する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・植物の呼吸について確認する。 ・もやしを入れた袋の空気を、石灰水に入れる。 ・ワークシートを配布する。 ・オオカナダモを用いた光と呼吸、光合成の関係を調べる実験について説明する。 ・BTB溶液を入れた3本の試験管（何も入っていないもの、オオカナダモを入れたもの、オオカナダモを入れアルミホイルで覆ったもの）に光を当て、その変化を観察する。 ・BTB溶液の色はどう変化するか考えさせる。 ・実験結果より呼吸と光合成の関係を考察させる。 ・多様な意見を発表させる。 ・実験結果と教科書の図を関連させながら、呼吸と光合成の関係をまとめさせる。 ・次時の予告をする。 ・ワークシートを集める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全員が見えるように演示する。 ・もやしの状態（暗い所に一晚置いておく）を確認する。 ・時間を十分にとる。 ・BTB 溶液の濃度に注意する。 ・予め光を当てておいた3種類の試験管を用意する。 ・時間を十分にとる。 ・机間指導を行いながら生徒の考えを把握する。 ・生徒の意見をまとめながら、考えを深めさせる。 ・モデル（図）を用いながらまとめる。

音楽科学習指導案

日 時 平成〇〇年〇月〇〇日（ ）第〇教時
生 徒 北海道教育大学教育学部附属函館中学校
第〇年〇組 男子〇名 女子〇名 計〇名
指導教官 〇 〇 〇 〇 教官
指 導 者 教育実習生 〇 〇 〇 〇 印

I 題 材 名 混声3部合唱「十字架（クルス）の島」

II 単元について

この曲は、校内合唱コンクール〇年〇組の自由曲である。長期間にわたる練習に堪えられる内容の楽曲として、曲想や歌詞の内容などからふさわしいものだと判断し選曲した。

信仰の自由がなかった時代にキリスト教信者への弾圧によって、大勢の人々の命が失われた。その悲劇と、それでも信じ続けた人々の信仰心の潔さを歌っている。へ短調～へ長調～へ短調～イ長調～へ短調～へ長調と転調を繰り返し、テンポもめまぐるしく変化する。讃美歌のメロディーが引用されていることから、当時の支配者と信者の関係と、ひどい弾圧にも耐えぬいた信者の様子が伝わってくる。この曲を通して、またコンクールに向けての学級づくりを通して合唱することの楽しさ、協力する事の大切さを実感させたい。また、歌詞をよく味わうことで、より豊かな表現力を育成したい。

III 最終目標

- (1) 歌詞の内容や、それに伴う曲想を理解して、表情豊かに歌うことができる。
- (2) 声部の役割について考えさせ、主旋律を生かした合唱表現をさせる。
- (3) 合唱活動を通して、学級全体で歌う楽しさや喜びを味わうことができる。

IV 指導計画（8時間）

学 習 内 容	指 導 目 標	時 間
歌 詞 の 考 察	<ul style="list-style-type: none">・模範合唱をCDで観賞し、曲全体の雰囲気をつかませる。・歌詞を読み、曲の内容を理解させる。	1
パ ー ト 演 習	<ul style="list-style-type: none">・パート毎に音とりをし、自分のパートを正しい音程でリズムで自信を持って歌えるようさせる。・アーティキュレーションを意識して歌えるようにさせる。・パート内で互いに協力して練習させる。	3
全 体 合 唱 練 習	<ul style="list-style-type: none">・自分のパートの役割を確認しながら合唱させる。・アーティキュレーションを意識しながら合唱させる。・歌詞の内容を理解させながら合唱させる。	3 (本時5/8)
ま と め	<ul style="list-style-type: none">・学級全体で表現したいことを確認し、合唱させる。・歌いあわせる喜びを感じながら合唱させる。	1

V 本 時 案

(1) 題 材 「十字架の島」 山本 和夫 作詩 岩河 三郎 作曲

- (2) 目 標
- ・曲の前半部分を、強弱を意識して歌うことができる。
 - ・曲想や歌詞の内容を理解して歌うことができる。
 - ・混声3部合唱の美しさや楽しさを感じてのびのびと歌いあわせることができる。

(3) 本時の展開

学 習 活 動	教 師 の 働 き かけ	指 導 上 の 留 意 点
<ul style="list-style-type: none"> ・目標把握 	<ul style="list-style-type: none"> ・各パートの音程を覚えた後の、次の課題を発表させる。 	
<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> <p>目標：歌詞の内容を意識しながら、強弱をつけて歌うことができる。</p> </div>		
<ul style="list-style-type: none"> ・合唱カードの記入 ・発声練習 	<ul style="list-style-type: none"> ・軽く体操をさせ、発声練習をさせる。 ・指揮・伴奏に合わせて既習曲を合唱させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・姿勢や口形などに留意させる。
<ul style="list-style-type: none"> ・前半部の合唱 	<ul style="list-style-type: none"> ・強調を意識して前半部の合唱をさせる。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・テープの鑑賞 	<ul style="list-style-type: none"> ・テープを聴きながら課題の交流をさせる。 ・歌詞や味わい情景を想像しながら、強弱や表情記号との関係がどのようになっているかを考え、発表交流させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・絵を描かせるなど、イメージ化を図りやすいようにする。
<ul style="list-style-type: none"> ・曲想・歌詞の理解と細分練習 	<ul style="list-style-type: none"> ・歌詞の内容に留意しながら、強弱をつけて歌う練習をさせる。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・まとめの合唱 	<ul style="list-style-type: none"> ・まとめの合唱をさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・録音をする。
<ul style="list-style-type: none"> ・テープの鑑賞 ・感想の交流 	<ul style="list-style-type: none"> ・録音したものを鑑賞し、1回目との違いを感じ取らせる。 ・各パートからの感想や今後の課題を発表させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・達成された点は賞賛し、残された課題は次の練習で改善するよう呼びかける。

美術科学習指導案

日 時 平成〇〇年〇月〇〇日（ ）第〇教時
生 徒 北海道教育大学教育学部附属函館中学校
第〇年〇組 男子〇名 女子〇名 計〇名
指導教官 〇 〇 〇 〇 教諭
指 導 者 教育実習生 〇 〇 〇 〇

I 題 材 「私の顔」ーレリーフによる表現ー

II 題材設定の理由

中学生になると自分の容姿、特に自分の顔に対しての関心も高まり、鏡を見る回数も多くなっていく。ここでは自分の顔をモチーフにしたレリーフの制作を通して、立体的な表現能力を養いたい。自分の顔は、いつも関心を持って見ており、また、いつでも手軽に観察できる。そのためしつかりと観察させることにより、立体的に対象をとらえる能力を十分に養えるのではないと思われる。

また、自分の顔に何かを組み合わせることによって絵画表現の中で学習してきている画面構成の力も、さらにこの学習の中で生かしたい。素材は可塑性に富む粘土を使用することによって、生徒にのびのびと制作させたい。

III 最終目標

1. レリーフの特徴を理解し、わずかな凹凸の変化の中で豊かな立体感や奥行きを表現させる。
2. 自分の顔とそのまわりのものを効果的に構成させる。
3. 可塑性に富む粘土での自由な表現を楽しみながら、意欲的に制作させる。

IV 指導計画（8時間）

学 習 内 容	目 標	時 間
1. 学習課題、表現方法の理解	レリーフの表現上の特徴を理解できる	1
2. 構図を考え、スケッチを行う	自分の顔をスケッチし、調和のとれた構図をとれる	1
3. 地山をつくり粘土に下絵を描く	粘土の上に大まかな下絵を描くことができる	1
4. 粘土をつける（粗づけ）	凹凸に応じて大まかな粘土をつけることができる	1 本時
5. 粘土をつける（細部、仕上げ）	全体と部分の調和を考えながら、凹凸の変化を用いて立体感や奥行きを表現できる	3
6. 作品を鑑賞し合う	お互いの作品の良さを見つけ、作品を味わうことができる	1

V 本 時 案

1. 題 材 粗づけをしよう
2. 目 標 (1) 細部にとらわれず大まかに全体の形がつかめるように粘土をつけることができる。
(2) 粘土の可塑性を生かし、失敗を恐れずのびのびと積極的に制作することができる。
3. 準 備 教師：完成作品、粗づけ段階の作品、粘土べら、食品用ラップ
生徒：スケッチ
4. 学習の展開

	学 習 活 動	教 師 の 働 き かけ	指 導 上 の 留 意 点
導 入	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の学習の確認をする。 ・本時の学習内容を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の流れを思い出させ発表する。 ・粘土に下絵が描かれているか確認する。 ・本時は粘土の粗づけを行うことを伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時のポイントと進行状況を机間指導をし確認する。 ・作品例を用いて比較し説明する。
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・制作を開始する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・細部にとらわれず大まかに、全体の形をとらえるように粘土をつけさせる。 ・スケッチが消えたら、粘土べらで描きながら粘土をつけさせる。 ・全体の凹凸面に注意させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・粘土べらの使い方を説明する。 ・机間指導しながら遅れている生徒には特に個別指導を行う。
整 理	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習の自己評価をする。 ・次時の学習内容について知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒作品を提示しながら本時の学習を振り返らせ、自己評価をする。 ・次時は細部の制作に入ることを伝える。 ・後始末をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習目標の達成度等についてまとめる。 ・食品用ラップで作品を包む。

保健体育科学習指導案

日 時 平成〇〇年〇月〇〇日 () 第〇教時
 生 徒 北海道教育大学教育学部附属函館中学校
 第〇年〇組 男子〇名 女子〇名 計〇名
 指導教官 〇 〇 〇 〇 教諭
 指 導 者 教育実習生 〇 〇 〇 〇

I 単 元 「マット運動」

II 単元について

マット運動の授業は、自分の努力や工夫によって課題を達成した喜びを味わうことのできる単元である。また、生徒一人一人の技能段階や、学習意欲の差が大きい単元でもあるため、技の系統性を重視した段階的学習指導が展開される必要がある。この部分の工夫は、視聴覚機器を使って課題解決していく指導を試みる。

この単元では、マット運動でも他のスポーツ領域と同じように個人のみならず、集団で行う楽しみ方もあるだろうと考えた。集団的なマット演技作りによって、マット運動自体の機能的特性を広げる意味あいも持たせたいと考えた。集団的な達成感、学び合う楽しさなどについて、生徒にとらえさせたい。

III 単元の目標

- (1) 集団マット演技作りなどの活動を通して個々の単技の数や習熟度を上げるようにさせる。
- (2) 単技が「できる」ためのテクニカルポイントを色々な資料や教師のアドバイス等から把握させる。
- (3) 班員と協力しながら、全員が「楽しい」と思える学習活動を展開させる。
- (4) 自分に適しためあてや練習内容の選択が適切に行えるようにさせる。

IV 指 導 計 画 (12時間扱い) 本時11/12

- (1) 第1ステージ「今できる技を増やす」…………… 3時間
- (2) 第2ステージ「できる技を連続させて楽しむ」…………… 3時間
- (3) 第3ステージ「集団マット運動に挑戦して楽しむ」…………… 3時間
- (4) 第4ステージ「発表会の準備をし、互いの良さを認め合う」……… 3時間 (本時2/3)

学 習 内 容	指 導 目 標	時間
第1ステージ 今できる技を増やそう マット運動の楽しさに触れよう	オリエンテーション めあて①今できる技を習熟させる。 めあて②新しい技に挑戦させる。 単技の習熟度を上げさせる。	3
第2ステージ できる技を連続させて楽しもう	めあて①できる技を増やさせる。 めあて②できる技を連続させ楽しませる。 連続技の円滑さを上げさせる。	3
第3ステージ 集団マット運動に挑戦して楽しもう	集団マット演技を理解させる。 技の構成をさせる。 集団で演技する楽しさを味わわせる。	3 3
第4ステージ 発表会の準備をし、互いの良さを認め合おう	発表会で行う技を練習させる。 他の班の発表を見て相互評価させる。 単元全体の反省を行わせる。	

V 本時案指導計画（12時間扱い）本時11/12

(1) 題 材 「集団マット演技を作ろう！」

(2) 目 標

- ① 班員と協力して、全員が楽しめる集団演技作りを行うことができる。
- ② 8mm映像を活用して、集団演技の自己評価を正しく行うことができる。
- ③ より高い完成度や難易度を求めて各自のめあての技に挑戦することができる。
- ④ 模範映像を見て技のテクニカルポイントを正しく捉えることができる。

(3) 本時の展開

学 習 活 動	教 師 の 働 き か け	指 導 上 の 留 意 点
1. 素早く集合、元気良く挨拶する。	1. 健康観察を行う。	
2. 今日の学習内容を把握する。	2. 学習の見直しを持たせる。	
3. 良く使う部位をきちんとほぐす。	3. 各班ごとに工夫させる。	3. 各班ごとに単技にあった補強運動を工夫させる。
4. 活動に適した場を認定する。	4. 安全な場に留意させる。	
5. 発表内容における各自の単技の練習を行う。	5. 各技の練習人数が均等にあるように事前に指示する。	5. 場の工夫、段階的な練習などに注意させる。
6. 各自の技のテクニカルポイントを模範映像からつかみ、相互評価する。	6. 単技のテクニカルポイントを視聴覚機器によってつかませる。	6. コンピュータや8mmビデオの操作方法に注意させる。
7. グループ発表の場を作る。	7. 器具、マットの使用を協力して行わせる。	
8. 実際に発表を行ってみる。	8. 班員全員の努力を認め合わせるようにする。	
9. 技の出来栄を録画して観点に従い自己評価する。	9. ワークシートに記入させる。	9. ワークシートの観点については、前時の学習カードからフィードバックして観点を立てる。
10. 課題を学習カードに記入する。	10. 実際に演技を行ってみて問題点を体感させ、記録させる。	10. 短時間だが生徒の発言を大切に扱う。
11. 良く使った部位をほぐす。	11. バディでストレッチを行わせる。	
12. 班長が今日の成果を発表する。	12. 和やかな雰囲気各班の努力を賞賛する。	

技術・家庭科学習指導案

日 時 平成〇〇年〇月〇〇日（ ）第〇教時
 生 徒 北海道教育大学教育学部附属函館中学校
 第〇年〇組 男子〇名 女子〇名 計〇名
 指導教官 〇 〇 〇 〇 教諭
 指 導 者 教育実習生 〇 〇 〇 〇

I 題 材 「簡単な木製品の製作～木工具の使い方～」

II 題材について

「ものづくり」において、思い通りの作品を製作するには、自分が思い描くデザインを構想図として正確に書き表すことに加え、工具の取り扱いに慣れることが必要である。製作において、簡単なように見えながらもっともつまづきの多い工程はのこぎりびきである。この工程に不満が残ると、作業実習そのものへの意欲も低くなる。のこぎりびきが概ね正確に行われれば、かんながけの時間も少なく、作業はスムーズに進む。

このことから、本題材では「のこぎりびき」に視点を当て、「縦びき用の刃」「横びき用の刃」や「あさり」など、のこぎりそのもののしくみに関する知識とともに、材料を直線かつ直角に切断するための押さえ方や目線、体の動きなどの技能面について支援を行う。学習形態としては、課題解決的な学習や発表活動を導入する。単なる知識や技能を学ぶことにとどまらず、生徒一人一人の自分の責任をしっかりと果たす心や情報を集め整頓し活用する力、グループ活動における仲間と協力し進める力、調査内容をわかりやすく他者に伝える力の総合的な育成を視野に入れている。

製作では「よりよいものにしたい」という意欲が、さらなる工夫や新たな技能の習得を生み、素材の特性を生かした作品へと変えることが多い。これらの学習法を通して、主体的に学ぶ態度が生徒一人一人に芽生えることも願っている。

III 単元の目標

1. 調査や体験学習から学んだ「両刃のこぎりの刃の特性」を意識し、繊維方向や板の厚さに応じて、のこぎりを正しく扱う態度を育てる。
2. 正しい作業姿勢や目線、体の使い方に留意し精度の高いのこぎりびきをさせる。
3. 刃物であることの認識を持ち、安全にのこぎりを扱うことや、工具としての寿命を全うさせるための適切な使用、管理ができるように生徒一人一人に意識させる。
4. のこぎりの歴史や種類、先人の工夫について知り、のこぎりへの知識を深めさせる。

IV 指導計画（5時間扱い…本時2／5）

主な学習内容	指導目標	学習形態	時数
○両刃のこぎりの体験活動から学習課題を選択、調査グループの編成	○学習の方法と内容を提示し、各自がのこぎりびきの体験活動から課題を選択し、課題意識を持ったグループ編成する。	個人 ・ グループ	1
○資料および人材を活用しながら調査活動を行う	○さまざまな資料（書籍・VTR・実物・熟練者の指導など）を提示しながら、まとめの作成を促したり、のこぎりびきの体験が円滑に進むように配慮する。	グループ	2 本時 1／2
○各班に戻り、調査内容を班員に教える	○それぞれの課題についての調査結果や、体験してみて気づいたことを班で確認し合う。	グループ	1
○学習のまとめ	○既習事項を用いてのこぎりびきを行わせ、技能を高める。	グループ	1

V 本 時 案

1. 題 材 「のこぎりの使い方～調査活動をしよう～」

2. 学習目標

- (1) 学習課題の解決に向けて、書籍やVTRなどの資料や熟練者へのインタビューなどさまざまな方法を用いて調査活動を行うことができる。
- (2) 班で協力して話し合いや調査などの活動を行うことができる。
- (3) 調査内容についてのメモを、「まとめ」の時間を意識してノートに整頓することができる。

3. 学習の展開

学 習 活 動	教 師 の 働 き かけ	指 導 上 の 留 意 点
○本時の活動・学習課題を知る。		●前時までの体験から、よくなかった（改善）点を発表させる。→言えなくなってもよい。
	<p style="text-align: center;">【学習課題】</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>「直線・直角のこぎりびき」をめざして、情報を集め、のこぎりびきを体験してみよう。</p> </div>	
○各グループごと調査方法を決定する。	◎体験、書籍、熟練者への取材、VTR、インターネット検索などの方法で調査するかを話し合い、決定を促す。	●安易な方法にならないように班長に事前に指導する。
○取材活動を行う。	◎取材活動が円滑・協力して行われているかを観察しながら、必要に応じて助言を行う。	●メモを取るように指示をし、気づいた点があればすぐ体験活動を行わせる。
	<ol style="list-style-type: none"> 1. パソコンによるインターネット検索 2. VTR（木工具の使い方） 3. 熟練者への取材活動 4. 書籍（教科書・図書室） 5. のこぎりびきの体験 	●机間（会場間の）指導…必要に応じて声かけや実演などを行う。
○感想・評価	◎調査内容や方法、課題に対する達成度について感想や評価を記入させ、数人に指名し交流を行う。	●それぞれの自己評価にコメントを付け加え、次時への課題や見通しを持たせるようにしたい。
○まとめ 次時の予告	◎調査・体験を深めるため、次時の予定を知らせながら、家庭でもできる点について調査活動を行ってみよう促す。	

英語科学習指導案

日 時 平成〇〇年〇月〇〇日（ ）第〇教時
 生 徒 北海道教育大学教育学部附属函館中学校
 第〇年〇組 男子〇名 女子〇名 計〇名
 指導教官 〇 〇 〇 〇 教官
 指 導 者 教育実習生 〇 〇 〇 〇

I 単 元 Unit8 Starting Out 「今、何時?」

II 単元について

Starting Outでは、主たる言語材料としてWhat time～？を扱う。お互いの日常生活についてのインタビュー活動を通して、時間を尋ねる表現とその応答の仕方に習熟させ定着を図りたい。また・いろいろな動作や行動の言い方を紹介し、表現に幅が出るようにしてコミュニケーションする力を育てたい。さらに、学習形態を工夫し、タスクを利用した活動や情報をまとめ発表する活動などを取り入れた授業を展開したいと考えている。

この題材では、時差・日付変更線などの言外の情報にも注目させ、言語材料を導入する一つの手立てとして興味・関心をもたせようとしている。本時では、「表現しコミュニケーションする力」の育成に主眼をおくため、これらの情報については二次的なものとして扱うが、普段から意識させていきたい。

III 単元の目標

- (1) 時間を表す言い方を用いて、場面に応じて運用することができるようにさせる。
- (2) いろいろな都市の時刻を通して、世界のタイムゾーンへの理解を深めさせる。

IV 指 導 計 画（5時間扱い）本時1／5

- (1) Starting Out…………… 1時間（本時）
- (2) 由美たちの冒険…………… 2.5時間
- (3) Let's Try and Write……1.5時間

V 指導内容と配当時数

学 習 内 容	指 導 目 標	時間
Starting Out	・What time ～？の表現を用い、時間を尋ねたり言ったりする言い方ができるようになる。	1
由美たちの冒険 －未来の学校－	<ul style="list-style-type: none"> ・英語での教科名の言い方に慣れさせ、自分の学校の時間割について曜日や教科をしぼって表現したり対話できるようにさせる。 ・Whose ～？の表現を用い、ある物についてその持ち主を尋ねたり言ったりする言い方ができるようになる。 ・将来のエネルギー資源について関心をもたせ、エネルギー節約のために自分たちにどのようなことができるのか考えさせる。 	2.5
Let's T.&W.	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の一日の生活について英語で書くことができるようにさせる。 ・「由美たちの冒険」、66～69ページの場面を役を決めて再現させる。 ・本文のストーリーの中の約30年後の学校と、現在の自分の学校とで違っている点、同じ点に気づかせる。 	1.5

Ⅵ 本 時 案

1. 題 材 Unit8 Starting Out 「今、何時？」

2. 目 標

- (1) 一日の生活を表す言い方を理解し、表現することができる。
 (2) What time ～ ?を用いて、ペアやグループなどで相手の日常生活について尋ねたり応答したりすることができる。

3. 本時の展開

学 習 活 動	教 師 の 働 き か け	指 導 上 の 留 意 点
<ul style="list-style-type: none"> ・ウォームアップ ・時間を表す言い方と天候の言い方について練習する。 ・一日の生活を表す言い方を練習する。 ・時間を尋ねる言い方を用いて、インタビュー活動をさせる。 ・まとめ 	<ul style="list-style-type: none"> ・簡単な英問英答を通して雰囲気高めさせる。 ・世界の主要都市名が英語でどのように発音されるか注意させる。 ・各都市の時刻や天候をCDで聞いて理解できるように援助する。 ・朝起きてから夜寝るまでの動作・行動の言い方を紹介し、練習させる。 ・時間を提示して、「～時に～します」という言い方についても練習させる。 ・What time ～ ?を用いて、隣同士で一日の生活をインタビューさせる。 ・タスクを与えて、いろいろなパートナーとのペア活動に取り組ませる。 ・三人称について表現する言い方を紹介し、ペアワークで集めた情報をもとに、グループ内でインタビューさせる。 ・本時のまとめを板書し、次時の学習内容を予告する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・英語を学習する雰囲気を作る。 ・世界地図を利用する。 ・Oral Checkをしながら、理解度を確認する。 ・どのような場面で使われる言い方なのか、絵などを用いて理解させる。 ・ペアやグループで協力しあえる雰囲気大切にさせる。 ・グループごとにワークシートの色を変え、他のグループとの交流を深めさせる。 ・間違いを気にせずに発表することができる雰囲気を大切にする。

3 高等学校編

高等学校地理歴史科 日本史B 学習指導案

実習校名 ○○○○高等学校
第○○学年○○組
日 時 ○○年○○月○○日 第○○校時
指導教官 ○ ○ ○ ○ 教諭
指 導 者 教育実習生 ○ ○ ○ ○

1. 学習主題「明治維新と立憲体制の成立」

本学習主題は、日本近現代史の重要な起点になった明治維新から自由民権運動を経て立憲体制が成立する時期を、欧米の文化・思想的影響及び東アジア世界をめぐる国際的環境との関連において把握することを目的にしている。すなわち、日本が、対外的には、幕末開国によって欧米の帝国主義的な国際関係に編入させられた後、国内的には、明治維新によって、統一国家形成と中央集権体制の構築をめざして、政治機構・法制・経済・外交・社会・文化等の改革に着手し、新政府内部の諸抗争や自由民権運動等を経つつ、1889年（明治22）に大日本帝国憲法（明治憲法）を制定し、天皇を頂点にした統治制度（立憲君主制の政治・官僚体制）を成立させるに至った歴史的過程を理解させるものである。

本学習主題は、日本の近代国家・国民国家の成立の特質を理解するうえで極めて重要な意義と内容を含んでおり、かつ、世界史の科目や、公民教科の政治・経済及び倫理の科目における政治思想・倫理思想等の内容と関連するものも多く、ていねいに理解させることが必要である。

2. 指導計画

- ① 新政府の発足と戊辰戦争～旧幕府軍の敗北、天皇親政と太政官制度等
- ② 中央集権体制と社会制度改革～版籍奉還・廃藩置県、徴兵制による軍隊配備と警察制度、藩閥政府、四民平等と華族制度、秩禄処分等
- ③ 経済の近代化～地券発行、地租改正、富国強兵と官営工場、郵便・交通制度、貨幣・金融制度、殖産興業政策と政商等
- ④ 文明開化～近代思想の流行と天賦人權論、学制、官立大学と私学、廃仏毀釈と宗教政策、情報・ジャーナリズムと言論・出版活動、太陽暦採用等
- ⑤ 初期の外交・国際関係～岩倉具視使節団、新政府と東アジア国際関係、琉球と北海道等
- ⑥ 士族の反乱と農民運動～佐賀の乱、西南戦争、地租改正反対運動等
- ⑦ 自由民権運動～民撰議員設立の建白書、政治結社と政党、自由党、言論・集会・結社の統制、松方緊縮デフレ財政と軍備拡張、民権運動の激化と弾圧等
- ⑧ 国会開設の方針と準備～明治14年の政変、国会開設の勅諭、参謀本部の独立と軍人勅諭、民間の憲法草案（私擬憲法）、伊藤博文らの憲法調査、内閣制度創設、宮内省と内大臣、地方自治制（市制・町村制）の成立、枢密院の設置等
- ⑨ 明治憲法体制の成立～明治憲法と天皇大権の特質、統帥権の独立、帝国議会と参政権の制限、諸法典編纂、教育勅諭等

3. 本時の学習課題

指導計画の「⑤初期の外交・国際関係」において、「新政府と東アジア国際関係」を考察し、特に、近代日本における対中国・朝鮮関係の基礎的な理解をする。

4. 本時の学習課題の指導目標

本時の「新政府と東アジア国際関係」の学習は、近代日本が、冊封体制に象徴される前近代までの中国を中心とした東アジア世界の国際秩序関係から最終的に暴力的に離脱する外交的・文化的・思想的背景を統括し、日清・日露の両戦役以降から現代に至る東アジア世界の歴史展開の基礎的な理解をすることにある。冊封体制は古代中国において成立した中国の皇帝支配制度（中華思想・華夷思想、儒教における礼と徳治主義の原理にもとづく）宗家（本家）をみなし、近隣諸国・民族の王・首長に対して爵位を授与するなどして、外交・交易等のゆるやかな支配関係を営むことである。これは、異民族の王朝としての清朝まで続き、特に前近代までの朝鮮や琉球がその政治・外交の思想的な影響下にあったが、日本は遣唐使廃止後は、冊封体制による中国からの交易・文化等の影響は弱められた。しかし、19世紀までは、日本を含む中国近隣諸国の知識人・文化人にとって、中国を中心とした漢語・漢文にもとづく教養・文化体系は東アジア世界の普遍性を帯びていた。

5. 本時の学習過程

	学 習 活 動	指導上の留意点
導 入	<p>①前近代までの日本と中国・朝鮮の主な外交関係を復習し、中国・朝鮮が鎖国政策をとったことを理解する。 （14世紀から15世紀における倭寇、秀吉の朝鮮侵略、江戸幕府と朝鮮通信使等により、外交関係を総括する）</p> <p>②前近代までの中国を中心とした東アジア世界の政治思想・外交思想の背景（文化・風俗関係を含む）を理解する。 （明朝に対する足利義満の朝貢関係、李氏挑戦の建国の精神、琉球王朝の「守礼の門」、髪形の風俗など）</p>	<p>◎前近代までの日本・中国・朝鮮の外交関係を総括する</p> <p>◎2000年発行の「2000円」紙幣の「守礼の門」に着目させる</p>
展 開	<p>③中国・朝鮮は、日本の開国と明治維新の新政府発足をどのように受けとめたか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 中国の対応と1871年日清修好条規の締結 ● 1874年征台の役の背景と処理問題 ● 朝鮮の鎖国政策と日本の国交樹立要求の拒絶 <p>④征韓論の主張の歴史背景と防衛構想を考えよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 征韓論をめぐる新政府内部の分裂・抗争 ● 日朝関係をめぐる新政府の防衛構想の幻想 <p>⑤1875年江華島事件と朝鮮の開国の意義を考えよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 武力による朝鮮開国と1876年日朝修好条規の締結 ● 朝鮮における対日関係の悪化と壬午・甲申事変の勃発（1882～1884年） 	<p>◎中国・朝鮮と日本の外交処理形式に着目させる</p> <p>◎征韓論の分化と対ロシア関係に着目させる</p> <p>◎朝鮮王朝政府に内部対立が生まれることに着目させる</p>
ま と め	<p>⑥東アジア国際関係と日清関係の新展開を考えよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 1885年天津条約締結と朝鮮問題 	<p>◎やがて、日清戦争に進むことに着目させる</p>

数科学習指導案（高等学校）

1. 単元名 『第2章 複素数と複素数平面 第1節 複素数』

2. 単元について

「方程式を解く」ことは、数千年にわたる人類の知的営みの一つである。自然科学の目標は、いわば「自然という方程式」の解を求めることにあり、この課題は現在に至るまで続いている。方程式を解くために、すなわち、方程式に解を存在させるために、虚数は生まれるべくして生まれてきた。虚数は実在を超越した概念のように見えるため、生徒にとってはその実在をつかむのが困難であるが、このような誕生の歴史を踏まえながら、まずは慣れさせ、自然な流れで納得させたい。

次に、 $f(x)$ を整式とするとき、 $f(x) = 0$ という方程式が解けるということは、整式 $f(x)$ が1次式の積の形に分解されることと同値である。この分解の一般性は、虚数を仲間に加えて拡張された数の世界、すなわち複素数の世界において初めて実現する。すなわち、 $f(x) = 0$ の方程式はここに完全に解を保証させる場を得るのである。複素数の有用性をこの面からも理解させ、次の「複素数平面」へのステップとしたい。

3. 単元の目標

- ・虚数、複素数の表現や計算方法に慣れ、この新しい数の登場の必然性と有用性が理解できる。
- ・2次方程式の判別式の意味を理解し、運用できる。
- ・2次方程式の解と係数の関係を理解し、それらを応用することにより、2次方程式についての知見を深める。
- ・剰余の定理、因数定理により、高次の方程式の解法が理解できる。

4. 指導計画（12時間）

- (1) 新しい数…………… 2時間
- (2) 複素数…………… 3時間
- (3) 2次方程式の解…………… 1時間
- (4) 解と係数の関係（Ⅰ）…………… 1時間
- (5) 解と係数の関係（Ⅱ）…………… 1時間
- (6) 高次方程式…………… 3時間
- (7) 節末問題…………… 1時間

5. 本時案

- (1) 題材 「1-1 新しい数」（1/2時間）
- (2) 本時の目標
 - ・虚数の虚数単位を導入し、その表現に慣れる。
 - ・虚数独自の表現や計算方法があることを認識する。
 - ・2項2次方程式が完全可解になったことを確認する。

(3) 本時の展開

学 習 活 動	指 導 内 容 ・ 指 導 上 の 留 意 点
<p>○有理数・無理数の復習と実数の定義</p> <p>○2次方程式 $X^2 = -3$ の解法について考える。</p> <p>○「新しい数」の導入と計算規則。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・虚数単位 $i : i^2 = -1$ ・負の数 $-a (a > 0)$ の平方根：$\sqrt{-a} = \sqrt{a} i$ <p>○練習問題：問1、問2、問3</p>	<p>○これまでに学んできた「数の概念」について確認する。</p> <p>○方程式の解を求めていく過程で、どのようにして自然数→整数→有理数→実数という数の概念が拡張されてきたかを認識させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ $x + 1 = 0$ を解く→負の数の導入 ・ $x^2 = 2$ を解く→無理数を導入 など <p>○実数の性質について確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ a が実数ならば、$a^2 \geq 0$ <p>○$x^2 = -3$ は実数の範囲では解けないことから「新しい数」の導入の必要性を認識させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 2次方程式を扱うとき、解けないという例外を設けるよりは、すべての2次方程式が2つの根をもつと考えるほうが合理的で有用である。 <p>○記号の表す意味を確認する。</p> <p>○虚数単位 i を含んだ計算についての注意。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ i を含んだ計算は、i を文字とすると文字式のように扱い、i^2 がでたら -1 で置き換える。 ・ 通常の $\sqrt{\quad}$ の計算規則が成立しない。 (具体例をあげて説明する。) <p>○「$i^2 = -1$、$\sqrt{-a} = \sqrt{a} i$」が基本であることを印象づける。</p> <p>○問題を通して、2項2次方程式が可解になったことを認識させる。</p>

付記：この指導案の形式例は、道内外の数校の高等学校の数学科学習指導案の形式を参考に作成したものであるが、参考にした高等学校の数が極めて少ないことを強調しておきたい。指導案の作成にあたっては、それぞれの実習校での指導に従うこと。

高等学校音楽科学習指導案

日 時 〇〇年〇〇月〇〇日 第〇〇校時
実習校名 〇〇〇〇高等学校
第〇〇学年〇〇組
指導教官 〇 〇 〇 〇 先生 ㊦
指 導 者 教育実習生 〇 〇 〇 〇 ㊦

1. 題 材 名 「美しい言葉の合唱作り」

2. 題材設定の理由

一般の合唱表現においては、音量によるダイナミックな表現や全体的な音楽表現上の完成度に着目するあまり、一つ一つの「ことば」のもつデリケートなニュアンスが軽視される傾向が見受けられる。

この題材では、日本語の詩に作曲された合唱作品を取り上げ、私たちが日常見逃しがちな、ことばの特性を再認識させることにより、日本語を美しく発音して歌うことと、詩における一つ一つのことばのもつ意味を明確に伝える表現をすることを追及させるというねらいがある。

また、イントネーションや語感を大切にした言語表現が、鳴り響く旋律や和声の中で音楽と結ばれるとき、合唱音楽は、生徒達にとって身近かな存在であるにもかかわらず、新しい美の世界として定着していくものと思われる。

3. 指 導 目 標

- (1) 日本語のもつ音声や音韻の美しさを感じ取らせるとともに、詩そのものに内在する音楽的な響きに気づかせる。
- (2) 合唱表現の中の「ことば」は、一種の舞台語であることを理解させ、一つ一つのことばが聴衆にとって自然に聞こえるような舞台上の表現語法を身につけさせる。
- (3) 合唱表現にふさわしい、美しい響きを得るための正しい発声法を身に付けさせる。

4. 教 材

同声二部合唱『そこに風がいる』 岩崎千早 作詞 黒沢吉徳 作曲

5. 学 級 所 見 (省略)

6. 指 導 計 画 (3時間扱い)

第1時 『日本語発音アクセント辞典』ですべての言葉のアクセントを調べ、正確なアクセントで詩を朗読し、言葉のイントネーションや語感を大切にすることを意識させる。

第2時 詩の朗読の復習をする。

各パートの音取りをして、旋律の動きと言葉の抑揚が自然に結合するために・どのように工夫されているか気づかせ、言葉の抑揚を生かした合唱表現をする。

第3時 言葉の抑揚を生かした合唱表現の復習。

詩の内容を効果的に表現するために、ハーモニーとピアノ伴奏が、どのように工夫されているか気づかせ、学習成果を生かした合唱ができるようにする。

7. 評 価

- (1) 日本語のもつ音声や音韻の美しさを感じ取り、詩と旋律の関連に気づき、さらに、詩に内在する音楽的な響きに気づくことができたか。
- (2) 詩の言葉の発音において、日常の話し方より精密な口形の作り方と発声や共鳴の方法・ことばの意味や詩の雰囲気や内容を的確に伝達できるような舞台上の表現語法などを身につけることができたか。
- (3) 美しい響きで合唱表現するための、発声法を身につけることができたか。

美術科学習指導案

日 時 平成 年 月 日 () 第 校時

場 所

生 徒 年 組 男子 名 女子名 計 名

指 導 者

1. 題 材 名 モーフィング機能を活用した「動くポスター」(環境をテーマとして)

2. 題材について

生徒は、街頭や校内に掲示されている環境ポスターを日常生活のなかで数多く目にしている。また、ほとんどの生徒が小・中学校において環境ポスターを制作した経験をもっている。なかにはコンピュータソフト「illustrator」の機能を生かして制作した生徒も数名いる。ただしこれまでの作品は1枚のポスターとして制作したものであり、最初の画像がまったく違った画像へ変化する「動くポスター」を意図して制作したものではない。

本題材は、コンピュータのモーフィング機能を活用して、環境に関する「動くポスター」を制作するものである。モーフィングとは最初の画像から最後の画像へ順次変化させる機能のことである。この機能は最近のテレビCMや映画のなかでよく使われている。たとえば、テレビCMでは子どもがサッカー選手へ、映画では金属の塊が人間の形へ、また、年配の女性が若い女性へ変化するシーンなどである。

指導にあたっては、まず環境問題や自然との共生に関する二つの画像(「動くポスター」の最初と最後の画像)を制作し、次にモーフィングソフト「Morpher」を活用して中間の画像を作成するようにしたい。特に「Morpher」の使用方法については、「画像の取り込み」の段階から「動画の作成」段階まで、そのポイントを押さえた指導を的確にわかりやすく行うことが必要であると考え。そして、最終的には、映像としての「動くポスター」に音声や音楽、自然の音なども取り込めるような力を身につけさせたい。

3. 題材の目標

- (1) 環境をテーマとした画像作成(最初と最後の画像)に進んで取り組む。
- (2) 環境をテーマとして、モーフィング効果を踏まえた二つの画像を制作する。
- (3) モーフィングソフトウェア「Morpher」を活用して、二つの画像から「動くポスター」を制作する。
- (4) お互いの作品を鑑賞し合い、それぞれのよさを認め合う。

4. 指導計画(総時数10時間)

- (1) 環境をテーマとした二つの画像(最初と最後の画像)を制作する。———— 4時間
- (2) 最初と最後の画像を取り込む。———— 1時間
- (3) モーフィングを活用して「動くポスター」を制作する。———— 2時間(本時1/2)
- (4) 「動くポスター」に音声や音楽、自然の音などを取り込む。———— 2時間
- (5) お互いの「動くポスター」を鑑賞する。———— 1時間

5. 本 時 案

- (1) 目 標 モーフィング機能を活用して、二つの画像から「動くポスター」を制作する。

- (2) 準 備

教師 モーフィングソフトウェア「Morpher」、パソコン、テレビ

生徒 二つの画像(「動くポスター」の最初と最後の画像)

(3) 展 開

学 習 活 動	時 間	指 導 上 の 留 意 点
1 本時のめあてを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">モーフィング機能を活用して、二つの画像から「動くポスター」を制作する。</div>	10	<ul style="list-style-type: none">○ 前時に制作した二つの画像を示しながら、本時のめあてを確認させる。○ テレビ画面に教師が自作した「動くポスター」を映し出し、モーフィング効果を出すための制作手順（「Morpher」による）を説明する。
2 モーフィング機能を活用して、「動くポスター」を制作する。 (1) 最初と最後の画像の対応する点（接点）を選択する。 (2) 「接点」を結んで「境界」を設定する。 (3) 画像の変換方法を選択する。 (4) 描画を選択する。 (5) 動画を保存する。	25	<ul style="list-style-type: none">○ 「接点」の作成方法を示す。<ul style="list-style-type: none">① 「接点編集モード」を選択する。② ウィンドウ上でダブルクリックし接点を指定する。○ 接点を削除する場合には、「編集」メニューの「削除」を選択させる。○ 「境界」の作成方法を示す。<ul style="list-style-type: none">① 「モード」メニューより「境界編集モード」を選択する。② 境界を構成する一つの接点をクリックする。③ 他の「接点」をクリックする。○ 「変換方法」を選択させる。<ul style="list-style-type: none">① 「モーフィング」を選択する。② 「フレーム教」を選択する。○ 「描画」の方法を選択させる。<ul style="list-style-type: none">① 「モード」メニューの「レンダリング開始」をクリックする。② 繰り返し画像が変化するように「往復作成」を選択する。○ 「動くポスター」として制作した動画を保存させる。
3 「動くポスター」を鑑賞する。	10	<ul style="list-style-type: none">○ 本時に制作した「動くポスター」をテレビの画面に映し出し、工夫した点などを発表し合う。
4 次時の確認をする。	5	<ul style="list-style-type: none">○ 次時の制作手順と準備物の確認を行う。

6. 評 価

- (1) 環境をテーマとした画像作成（最初と最後の画像）に進んで取り組むことができたか。
- (2) 環境をテーマとして、モーフィング効果を生かした二つの画像を制作することができたか。
- (3) モーフィングソフトウェア「Morpher」を活用して、二つの画像から「動くポスター」を制作することができたか。
- (4) お互いの作品を鑑賞し合い、それぞれのよさを認め合うことができたか。

保健体育科指導案

対象学年 1 年次男女共修

1. 単元名 テニス・卓球・バドミントンから 1 種目選択

2. 運動の特性

(1) 一般的特性

いずれの種目ともネットを挟んで相対するプレイヤーがシングルやダブルスでラケットを使ってボールやシャトルを打ち合い、お互いに得点を競い合うスポーツである。

(2) 生徒からみた特性

- 部活動・少年団経験者、中学での経験者と未経験者がいてそれぞれの技能は異なるがこれらの種目に対する興味関心は高い。
- ラリーで楽しむことを知っているが、正式な試合の方法やルール、技術構造、練習方法、マナーなどはよく知らない。
- 基本的な技術の習得を求めているとともに、ラリーも続く緊張感のあるゲームができることを期待している。
- 技能レベルが異なった友達がペアーを組んで楽しむためにルールを工夫し、ゲームができると楽しい。

(3) 学習のねらい

- 基本的技術を習得しながら、自分たちの力にあったゲームの方法、ルール、練習方法などを工夫し、さらに技能を高めてラリーの続く緊張感のあるゲームを楽しむ。
- 団体戦では作戦（攻めかた、守り方、オーダー順、ペアーの組み方など）を工夫し、ゲームを楽しむ。

(4) 学習の道筋と指導計画

○21時間扱い

1 時間：オリエンテーション

2 から 8 時間：ねらい 1（7 時間）

優しいルールで緩いボールやシャトルのラリーを中心としたシングルスゲームをリーグ戦で楽しむ。

9 から 15 時間：ねらい 2（7 時間）

シングルスでの経験を生かし、優しいルールでダブルスのゲームをリーグ戦で楽しむ。

16 から 21 時間：ねらい 3（6 時間）

今まで習得した技能をさらに高めたり、新しい技術を習得しながら作戦を工夫したゲーム（シングルスまたはダブルス）を対抗戦で楽しむ。

(5) 学習と指導の展開〈テニスの例〉

オリエンテーション（1 時間）

1. 選択授業の意義と単元計画を知り、自分がやってみたい種目を選択する。
2. 選択した種目について学習の見通しを持ち、運動特性、学習のねらいと道筋、学習の仕方（学習ノートや学習資料の利用の仕方など）について理解する。
3. グループングをし役割分担、学習の約束やマナー、安全上の注意などを知る。

	学 習 活 動	指 導
な	<p>ねらい1 (7時間)</p> <p>優しいルールで緩いボールのラリーを中心としたシングルスゲームをリーグ戦で楽しむ。</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> ○1時間の学習の流れは「練習→ゲーム」を原則とする。 ○練習の方法を知り、自分にあった課題を見つける。 ○自分たちの技能にあったルールを見つけ、ゲームを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○基本技術、練習方法、ルール、審判法などは教科書や資料で提供する。 ○安全についての指導は事前に徹底し、後は必要に応じて行う。 ○ルールが技能レベルとあうように指導する。マナーをよく守らせる。 ○学習ノートによる指導を行う。
か	<p>ねらい2 (7時間)</p> <p>シングルの経験を生かし、優しいルールでダブルスのゲームを楽しむ。</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> ○1時間の流れは「練習→ゲーム」を原則とする。ただしグループによって練習を考える。 ○ダブルスの動きやポジションを知り、自分たちの練習をする。 ○チーム戦を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ダブルスのルールや動きや技術を指導する。 ○チーム戦のやり方、作戦の立て方などを指導する。 ○ルールやマナーを大切にすることを徹底して指導する。 ○学習ノートから個人課題、ペアの課題、グループ課題を見つけ、指導する。
	<p>ねらい3 (6時間)</p> <p>今まで習得した技能をさらに高めたり、新しい技術を学びながら、作戦を工夫したゲーム(シングルスまたはダブル)を対抗戦で楽しむ。</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> ○1時間の流れは「練習→ゲーム」または「ゲーム→ゲーム」とする。 ○ゲームから出てきた個人やペアの課題を解決する練習をする。 ○ミックスダブルスなどいろいろな人とペアを組んでゲームの仕方を楽しむ。 ○正式なルールやコールの仕方に挑戦して、ゲームを楽しむ。 ○テニスの授業で学んだ点とこれからの課題をまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○練習で個人やペアの課題解決の方法が分かるように指導する。 ○対戦者同士でゲームの方法を選択したり、時間の使い方を決めるよう指導する。 ○活動に必要な資料はその都度提供する。必要があればビデオテープやカメラを使用する。 ○学習ノートを有効に使い、個人、ペア、グループでまとめができるように指導し、授業終了後も興味をもてるようにする。

Teaching Procedure(A) : Regular Class

JTE :

1. Class : English (Reader), Students; male 32 + female 14 = total 462.
2. Textbook : Unicorn Course, Bunei-do
3. Section/Page : Lesson 9, "Heart Warming Story" pp.86-88,
A Cancer Victim Ends his Cross-Canada Run
4. Date & Time: ??/??/2001, second period (50 minutes), Second period of Chapter 2.
5. Lesson objectives:
 - a. grasp the gist of the story clearly
 - b. learn useful expressions and new structures and come to use them freely

Length	Activity	JTE	Students
5	Greetings & Roll Call		
	Oral Introduction	Present JTE's experiences the day before or current topics in English. Feedback. Explain in Japanese if necessary. Ask "What did you do yesterday?"	Listen. Summarize JTE's story either in English or Japanese, selectively. Answer selectively.
5	Review of the last class	Summarize the paragraph read in the previous class.	
20	New paragraph	Model reading. Pronunciation practice of new words and idioms.	Listen. Repeat after JTE.
			Read aloud at their own speed.
		Content reading. Paraphrase some parts.	Read a few sentences & summarize them selectively.
		Ask questions on the content. Explain the useful sentence patterns or grammar.	Answer selectively.
5		Give some sentences using new phrases or structures to confirm the new knowledge.	
10	Practice	Guided composition practice. Give a few Japanese sentences.	Put them into English using new words or structures.
		Composition.	Express what they want, using new words or structures. Write individually, Some to write their own sentences on the blackboard.
		Check the answers, Walk around the class.	
	Feedback	Share the mistakes and the correct answers.	
5	Review	Listen. Answer. Q & A on the content.	Chorus reading. Some to ask questions. Answer selectively
	Consolidation	Schedule for the next period.	

Teaching Procedure(B) :Team Teaching

AET :

1. Class : English (Reader), Students;male32 + female14 = total 46
2. Textbook: Unicorn, English Course, Bunei-do
3. Section/Page: Lesson9, "Heart Warming Story" pp.86-88,
A Cancer Victim Ends his Cross-Canada Run
4. Date & Time: ??/??/2001, second period (50minutes), The last period of Chapter 2.
5. Lesson objectives:
 - a. think through English activity in summarizing the lesson
 - b. improve communicative competence through reading experience and gain more confidence in
 - c. confirm the fact that what they have been learning in regular classes is useful and "natural" English
 - d. pronunciation / listening
 - e. UTILIZE AET in the regular class context

Length	Activity	AET & JTE	Students
10	Greetings&Roll call		
	Oral introduction	Conversation between JTE&AET on 1. What did you do yesterday? 2. Current topics (写真1) JTE: Summarize the content in Japanese if necessary.	Listen. Some to summarize either in Japanese or English.
	Listening	AET: Present topics experiences connected to the content of the lesson. JTE: feedback if necessary.	Listen.
10	Individual Q-A Session	AET&JET ask a few questions to each student. AET&JTE are in charge of half of the class each. (写真2) JTE: feedback if necessary.	Answer indivisually.
5	Summary	AET: Summarize the lesson in her own way. Q&A practice on the lesson. "For Summary A" (写真3)	Some to answer. Repeat the points in chorus.
10	Drill	Exercises of new words and structures. AET&JTE individual feedback, check and correct the answers. (写真4) Share the answers. (写真5)	Individual writing. Some to write the sentences on the blackboard.
10	Review of the lesson	Question sheet made by AET on the lesson. Listening quiz. Check the answers.	Answer silently. Check the answers individually. Hand the sheet to AET&JTE.
5	Sound Practice	AET show the model. With or without textbook. "Pronunciation" P.88.	Repeat.
	Consolidation	Schedule for the next day, (写真6)	

Ⅱ. 道徳、総合的な学習の時間、特別活動について

1. 道徳の時間の指導

1-1. 道徳とは

道徳とは、人が人として生きていく道筋そのものである。人間らしく心豊かに過ごしていくためには、どのような行為や考えが社会の規範に準じているのかを判断していくことと言える。

学校教育における道徳教育は、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念をもち、豊かな心で個性豊かな文化の創造を民主的な社会及び国家の発展に努め、進んで平和的な国際社会に貢献し未来を拓く主体性のある日本人を育成するために、その基盤としての道徳性を養うことを目標としている。

1-2. 小学校におけるねらい及び指導計画と指導案

(1) 各学年のねらい

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
主として自分自身に関すること	<ul style="list-style-type: none"> ○規則正しい生活をし、自分がやらなければならないことをしっかり行う。 ○よいことと悪いことの区別をし、素直な生活をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○よく考えて節度ある生活をする。 ○正しいと思うことを勇気をもって進め、正直で明るい生活をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○節度、節制を心掛け、希望と勇気をもち努力する。 ○真理を大切にし、工夫してよりよい生活をする。 ○自分の特徴を知り、誠実に明るい生活をする。
主として他の人とのかかわりに関すること	<ul style="list-style-type: none"> ○気持ちのよいあいさつを心掛ける。 ○友達と協力し、他人への感謝の気持ちをもち、親切にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○礼儀の大切さを知り、相手のことを思いやる。 ○友達と理解し合い、まわりの人々に尊敬と感謝の気持ちをもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○礼儀を重んじ、相手の立場に立って親切にする。 ○互いに信頼し合って友情を深める。 ○謙虚な心で尊重する。
主として自然や崇高なもののかかわりに関すること	<ul style="list-style-type: none"> ○自然に親しみ、動植物を大切にする。 ○生命に大切にする。 ○美しいものにふれる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自然のすばらしさや不思議さに感動する。 ○生命の尊さを感じ、大切にする。 ○美しいものへの感動。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自然環境を大切にする。 ○かけがえのない生命を尊重する。 ○美しいものへの感動と畏敬の念をもつ。
主として集団や社会とのかかわりに関すること	<ul style="list-style-type: none"> ○約束やきまりを守り、まわりの人々を敬愛する。 ○郷土の文化や生活に親しみ、愛情をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○公德心をもち、進んで勤労する。 ○まわりの人々を敬愛し、協力する。 ○郷土を愛し、異文化にも興味をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の役割を自覚し、集団に積極的に参加する。 ○誰に対しても公正・公平に接する。 ○まわりの人々を敬愛し、よりよい集団を作る。 ○郷土を愛し、外国との親善に努める。

(2) 指導計画

<第4学年 指導計画例>

月	主題と資料名	時数	指導のねらい	関連(ひろがり)
4	心のこもった思いやり 「本当の親切」 2-(1)	①	・思いやりをもって、誰に対しても親切にしようとする態度を育てる。	学級活動 一年生を迎える会 理 芽生えにそなえるころ
	自然のすばらしさを感じて 「赤い実と小鳥」 3-(3)	①	・大自然の驚異・不思議さ・美しさに気づき、美しいものに素直に感動する心情を深める。	みどりの日 リサイクル活動
	お金の大切さ 「生かされたお金」 1-(1)	①	・物やお金を大切にし、節度と節制のある生活をしようとする態度を育てる。	募金活動 環境教育
5	ふるさとのあたたかさ 「きぼうのさくら」 4-(5)	①	・郷土の温かさやよさに気づき、郷土の文化や生活を大切にしようとする心情を育てる。	社 県の人のくらし 国 方言について 社 わたしたちの国土
	自分の国のよさをみつけて 「おり紙のプレゼント」 4-(6)	①	・日本の文化や伝統に関心を持ち、日本の国を大切にしようとする心情を育てる。	国際理解教育 運動会 学級活動 国 一つの花
	もう一度考えて 「交差点のえ顔」 1-(2)	①	・自分の言動を振り返り、落ち着いて行動しようとする態度を育てる。	学級活動
6	人として 「命のにぎりめし」 3-(2)	①	・人として生きることの大切さに気づき、生命を尊重しようとする態度を育てる。	
	最後まで努力する心 「台風の島に生きた人」 1-(3)	①	・困難を乗り越え、自ら決めたいことを粘り強くやり遂げようとする態度を育てる。	国 太陽をさがしに親子レクリエーション大会
6	家族の大切さ 「一まいの写真」 4-(3)	①	・家族の温かさや大切さに気づき、家族の一員として明るく楽しい家庭を築こうとする心情を育てる。	

(3) 指 導 案

<本時の展開例>

第4学年	主題—本当の友情2-(3)	資料名「つなぎ合わせたメダル」(文部省)
ねらい	互いに理解し、信頼し、助け合って友情を深めていこうとする心情を育てる。	

段階	児 童 の 学 習 活 動	教 師 の 支 援
気づく とらえる 見つめる ひろげる つなげる	<ul style="list-style-type: none"> ・友情を感じた経験について話し合う ・「つなぎ合わせたメダル」の写真を見て、感想を自由に話し合う。 ・資料「つなぎ合わせたメダル」を読む。 ・今まで励まし合ってきた友達だから。 ・ここまで努力してきたから、勝敗は関係ない。 ・どちらが勝っても2位か3位だから。 (資料の内容や場面をとらえる) ・二人の友情をメダルで区別したくない。 ・同じ高さを跳んだのだから結果は同じ。 ・後輩のがんばりをたたえよう。 (主人公の生き方から価値をとらえる) ・友情は相手のことを思いやることが大切。 ・お互いのことを理解し合うことが必要だ。 ・相手のことを信頼することが大切だ。 (自分なりの価値のとらえを明らかにする) ・友達の大切さや優しさを感じた体験談。 ・友達との友情を深めることができなかったときの体験談。 ・児童の作文「友情」を聞く。 ・道徳のノートに感想をまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「友情」「友達」についてのアンケート活用する。 ・教師の範読 ・「主人公はなぜ、相手に勝ちたいという気持ちが急に薄れたのですか？」 (問題点を明らかにする発問) ・「主人公は、どんなことを考えて、後輩を同じく2位だと考えたのでしょうか？」 (主人公の生き方を考える発問) ・「友情についてどう考えますか？」 ・道徳ノートの活用 (資料からの学びをとらえ、自分なりの価値を明らかにする) ・一人一人の感じ方や考えを明らかにする。 ・体験に基づき本音を語ることを促す。 ・「友情」を題材にした児童の作文を紹介することで、真の友情をとらえる希望や期待感を感じることを促す。

1-3. 中学校におけるねらい及び指導計画と指導案

道徳教育は、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活に生かし、個性豊かな文化の創造と民主的な社会及び国家の発展に努め、進んで平和的な国際社会に貢献できる主体性のある日本人を育成するため、その基盤としての道徳性を養うことを目標としています。

道徳の時間においては、学校の全教育活動を通じて行う道徳教育の目標を受け継ぎ、これを補充・深化・統合することを目標としています。

(1) 道徳の目標と内容

① 主として自分自身に関すること。

ア 望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、節度と調和のある生活をするようにする。

イ より高い目標を目指し、希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもつようにする。

ウ 自律の精神を重んじ、自主的に考え、誠実に実行してその結果に責任をもつようにする。

エ 真理を愛し、真実を求め、理想の実現を目指して自己の人生を切り開いていくようにする。

オ 自らを振り返り自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を求めるようにする。

② 主として他の人とのかかわりに関すること。

ア 礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動ができるようにする。

イ 温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し感謝と思いやりの心をもつようにする。

ウ 友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合うようにする。

エ 男女は、互いに相手の人格を尊重し、健全な異性観をもつようにする。

オ それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解して、謙虚に他に学ぶ広い心をもつようにする。

③ 主として自然や崇高なもののかかわりに関すること。

ア 自然を愛し、美しいものに感動する豊かな心をもち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めるようにする。

イ 生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重するようにする。

ウ 人間には弱さや醜さもあるが、それを克服する強さや気高さがあることを信じて、人間として生きることに喜びを見いだすように努める。

④ 主として集団や社会とのかかわりに関すること。

ア 自己が属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し、協力し合っ
て集団生活の向上に努める。

イ 法の精神を理解し、自他の権利を重んじ義務を確実に履行するとともに、公德心をもって
社会の秩序と規律を高めていくように努める。

ウ 正義を重んじ、だれに対しても公正、公平にし、社会連携の精神をもって差別や偏見のな
いよりよい社会の実現に尽くすように努める。

エ 勤労の尊さを理解するとともに、社会への奉仕の気持ちを深め、進んで公共の福祉と社会

- の発展のために尽くすように努める。
- オ 父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築くようにする。
- カ 学級や学校の一員としての自覚をもち、教師や学校の人々に敬愛の念を深め、協力してよりよい校風を樹立するようにする。
- キ 地域社会の一員としての自覚をもち、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に尽くすようにする。
- ク 日本人としての自覚をもって国を愛し、国家の発展に尽くすとともに、優れた伝統の継承と新しい文化の創造に役立つように努める。
- ケ 世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献するように努める。

(2) 指導計画例

① 主題名及び月別担当表一覧

	第 1 学 年	第 2 学 年	第 3 学 年
4 月	・礼儀 2-(1) ◎自らすすんで 1-(2)	・友達のよさ 2-(3) ◎信頼を寄せて 2-(3)	・広い心・謙虚 ② 2-(5) ◎自然に学ぶ 3-(1)
5 月	・約束を守る 1-(1) ・教師への信頼 4-(6) ☆自己の役割 4-(1)	・克服する強い心 1-(2) ・役割の自覚 4-(1) ☆みんなのために 4-(1)	・望ましい生活習慣 1-(1) ・強い意志 2-(2) ☆リーダーとして 4-(1)
6 月	・自主的な態度 1-(3) ・思いやる心 ① 2-(2) ・かけがえのない自分 1-(5) ◎はたらく意義 4-(4)	・思いやる心 ② 2-(2) ・節度ある生活 1-(1) ・人間の気高さ 3-(3) ◎男女の協力 ② 2-(4)	・誠実に生きる 1-(3) ・身につけたいこと 2-(1) ・国とは? 4-(8) ◎生きがいを求めて 4-(4)

② 展開の概要

学年・月	1 年	5 月
主 題 名	約束を守る心 { 1-(1) }	
資 料 名	「つりざおの思い出」(小泉 博 作； 学研「中学私たちの道徳1年」)	

目 標	約束ごとや時間を守る事の大切さや、自分の身勝手が周囲に及ぼした影響を考えさせ、今後望ましい社会生活を営むための心構えを育てる。	
関連する教育活動	総合学習、保健体育、学級生活	
資料の特色	気に入った釣りざおを母の思いやりで手にし、釣りに出かけるが、夢中になりすぎて、両親の愛情を裏切る結果となってしまう。いとこの死に目にも会えず、周囲に迷惑をかけ、苦しい思いをする。本資料を通して、約束ごとや時間を守る事の大切さをじっくりと考えさせたい。	
	教師の働きかけ	指導上の留意点
	<ul style="list-style-type: none"> ・資料を読ませる。 ・感想と体験を交えて発表させる。 ・父親の誘いを振り切った主人公の気持ちをどう思うか考えさせる。 ・5時30分に帰ると約束しながら、どうして実行できなかったのか考えさせ、発表させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の日常生活の中でも、時間を意識し、それを守っているかを意識して読ませる。 ・釣りといとこの病気見舞いのどちらを選ぶか、価値観の相違についても話し合う。 ・主人公の安易な約束の仕方について考え、自分勝手な行動でつらい思いをする事になったが、つらいのは自分だけでない事にも気づかせる。

(3) 「道徳の時間」における指導過程

指導過程は、子どもに道徳的価値の内面的自覚を促すための道筋であり、指導や学習の手順が適切に構成されていることが必要です。指導過程を構成しようとする場合に考慮すべき事項として、次のような諸点が考えられます。

- 主題のねらいを明確にする
- それぞれの指導段階（導入、展開、終末）を適切におさえる。
- 適切な資料を指導過程のそれぞれの段階に有効に位置付ける
- 指導の方法を効果的に組み合わせる

<指導過程における各段階の役割>

(●は評価の内容を示す)

段階	分節	役割と方法	評価の内容と留意点
導入	価値への付け	○ねらいとする価値への方向付けを図る。 ・生活経験の想起 ・教師の説話 ・調査結果、絵、写真、実物の展示など	●自己の体験を想起し、主題に興味・関心をもたせる。 ・短時間でとらえさせる。 ・雰囲気づくりを工夫する。
展開	価値の究・把握	○中心資料を通して価値を追究する。 (主人公の生き方を通して価値を深める) ・主人公への自我関与、共感 ・自分のこととしての心情の深化 ・主人公の生き方や友達の考え方のよさへの気付き	●登場人物の生き方について、自己の生き方に照らして考え、表現させる。 ・提示方法を工夫する。 ・中心発問では時間をかけ、多様な考え方感じ方を引き出し、話し合わせる。
	価値の自覚	○価値を主体的に自覚する。(資料から離れる) ・今までの自分の生き方の振り返り ・心に残ったことの自分の生き方や考え方への結び付け ・友達の生き方のよさへの気付き	●友達の生き方のよさに気付かせ、自分の生き方を振り返らせる。 ・懺悔や反省を強めない ・補助資料を提示する
終末	意欲化	○価値についての整理、まとめ、意欲化を図る。 ・教師の説話 ・格言・ことわざ ・作文 ・手紙 地域の人材活用など	●自己の課題をもたせる。 ・おしつけをしない ・決意表明をさせない

道徳学習指導案(例)

生徒 3年〇組 男子〇〇名 女子〇〇名 計〇〇名
 指導者 教諭 〇〇〇〇〇

I. 主題名 礼儀の大切さ <項目2-(1)>

II 資料名 『マッチ』

III. 主題設定の理由

1. 生徒の実態

この時期の生徒達は、人それぞれの考えがあることに気づいてはいるが、自分中心に考える傾向が強いため、自分の考え方に固執しがちとなり、人間関係が円滑にいかないことが多い。……………このように人間のものの見方は完全でなく、一面だけしかとらえていないことが多いことを認識させ、他を認め尊重する態度がいかに自己の成長にとって大切かということを感じさせたい。

2. 主題について

この主題は、礼儀の本質を理解し、時と場に応じた適切な言動をする、という内容に基づいて設定されている。……………が重要であると考え、この主題を設定した。

3. 資料について

この資料は、上野駅発の準急列車の一つのボックスに……………そして最後に、「こんなことを記す必要はないのですが、書いているうちは気が紛れるのです」。これを見た老紳士は涙する。

IV. 本時案

1. ねらい

・時と場に応じた適切な言動ができるようになるためにも、それに関する助言を素直に受け止め、誠実に対応する態度を育てる。

2. 本時の展開

過程	学習活動(主な発問)	期待される生徒の反応	指導上の留意点
導入(気づく)	<ul style="list-style-type: none"> *日常生活において、他者に注意、忠告された経験を振り返る。 ・公共の場で注意されたことはなかったか。それはどのような時で、その時の気持ちはどうだったか。 	<ul style="list-style-type: none"> *ねらいとする価値に興味・関心をもつ。 ・バスの中でうるさくして注意された。 ・恥ずかしかった。 ・何で私達だけ注意するんだ。 	<ul style="list-style-type: none"> *ねらいとする価値への方向付けをする。 ・アンケート調査をもとにして指名する。
展開(考える)	<ul style="list-style-type: none"> ・資料1を通しての感想をもつ。 ・この話を聞いてどう思いました。 	<ul style="list-style-type: none"> *ねらいとする価値を把握・追究する。 ・列車の中でマッチの火をつけるなんて、この学生は何を考えているんだろう。 ・注意されてそのボックスだけ険悪なムードになったのでは。 	<ul style="list-style-type: none"> *一人一人の考え方や感じ方を明らかにしていく。 ・初発の発問なので、あまり深入りせず、老紳士と学生の両者について批判的
終末(まとめる)	<ul style="list-style-type: none"> *本時のまとめ ・1週間後に学生と紳士が再会したら、どんな感じになるだろうか。 ・今日の授業を振り返って、人と人のかかわりにおいてどんなことが大切なのかを教師の感想も交えて話す。 	<ul style="list-style-type: none"> *相手の心情や考えを感じるための役割演技を行う。 ・実際に学生と老紳士になりきって演じる。 ・見ず知らずの相手に対しても注意できる。今はそういう世の中ではない。 ・相手の心情や立場を重んじること。 	<ul style="list-style-type: none"> *資料を離れ、自分自身のあり方に目を向けさせる。 ・時間を与える ・今までの生活を振り返らせることにより、自分の今後の生き方を考えさせる。

2. 総合的な学習の時間の指導

2-1. 総合的な学習について

(1) 「総合的な学習の時間」の創設の趣旨

各学校が地域や学校の実態等に応じて、創意工夫を生かして特色ある教育活動を展開できるような時間を確保することに、その趣旨がある。このような時間が創設される理由として、今の子どもたちに、国際化や情報化をはじめ、社会の変化に主体的に対応できる資質や能力を育成するため、また、先行き不透明な21世紀をたくましく生きていく上で、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」を育成するために、教科等の枠を越えた横断的・総合的な学習を円滑に実施する必要がある。

そこで、このような時間を確保することが求められてきたのである。

(2) 「総合的な学習」とは

上記のような創設の趣旨に基づき、総合的な学習の時間に行われる学習活動としては、地域や学校、児童の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や児童の興味・関心等に基づく学習など、創意工夫を生かした教育活動が考えられる。

具体的な学習活動としては、たとえば、国際理解、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、児童の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題などについて、適宜学習課題や活動を設定して展開するようにすることが考えられる。

(3) 小・中学校の「総合的な学習の時間」の目標

- 自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく課題を解決する資質や能力を育てること。
- 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。

2-2. 附属小学校における総合的な学習の時間

本校においては、教科等の時間では保証しきれない「発展的な問い」を児童自らが主体的に追究することそのものが、総合的な学習であるといえよう。つまり、あるテーマに沿った調査・研究活動や、児童が理想とする表現に向かって、話し合いや活動を積み上げながら、自分たちの手で創りあげる総合表現活動的な学校行事等も総合的な学習のひとつと考えている。

(1) 附属小学校における「総合的な学習の時間」の目標

- 日常生活や学習の中から問いを生み出し、自分なりの考えや見通しをもって主体的に追究しつづける態度や能力を育てる。
- 適切なものの見方、感じ方、考え方や学び方を身に付け、追究方法を工夫しながら他者とのかわりを強め、意欲的に取り組む態度や能力を育てる。
- 学んだことを生活に生かし、自分の生き方を考えていくことができるようにする。

(2) 指導計画（抜粋）

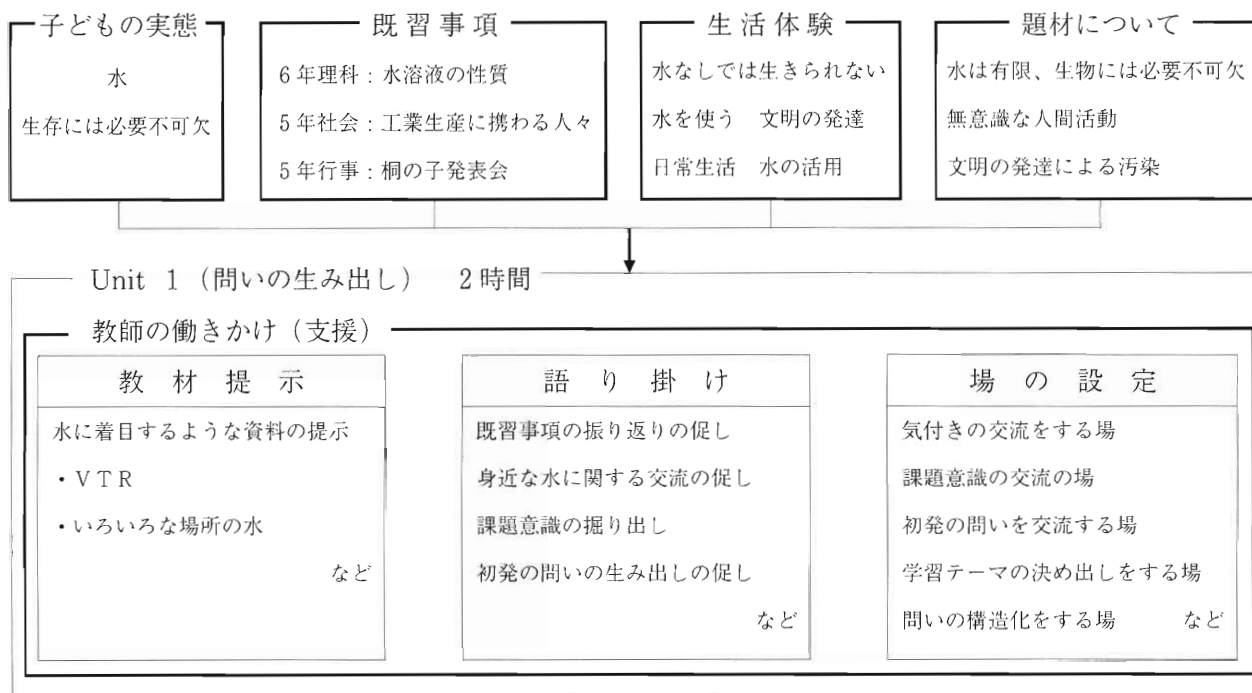
< 第6学年 >

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
国際理解教育			世界の国々の食生活 7時間					英語で話そう 8時間				
環境教育		空気を大切にしよう 6時間		環境を守ろう 8時間								
福祉興味関心健康	修学旅行をつくろう 8時間			交流学习 8時間								
学情校報特教特色育	スポーツ祭の準備 10時間						発表会の準備 15時間		卒業文集をつくろう 10時間			

(3) 総合的な学習活動案（一部抜粋）

第6学年 総合的な学習の時間（環境教育） 題材の構想

題材名「ちょっと待って！そのまま飲んでも大丈夫？」 ～水を大切に～ 10時間扱い



2-3. 附属中学校における総合的な学習の時間

本校で行っている、総合的な学習の特徴は、3つのタイプの学習を有機的に関連させながら、自らの生き方について考えることができるように実践されているところもある。すなわち、『フィールド・スタディー』、『テーマ・スタディー』、『スキル・スタディー』の3つである。

フィールド・スタディー

地域の特性を生かした体験的な学習や問題解決的な学習を通して、課題発見や探求活動に主体的に取り組む態度を育てることを目標とした学習である。今年度は、従来の『歴史・文化』を主題とした「調べ学習・完結型の学習」から、『職業・生き方』を主題とした「発表・発信型の学習」へと改善を図った。具体的には、1年生の時に『郷土函館総合学習』、2年生の時には『道都札幌総合学習』、3年生の時には『首都東京総合学習』へと体験を重ねてゆき、最終的には『郷土函館活性化論』へと発展させてゆく活動である。（函館活性化論イメージ図参照）

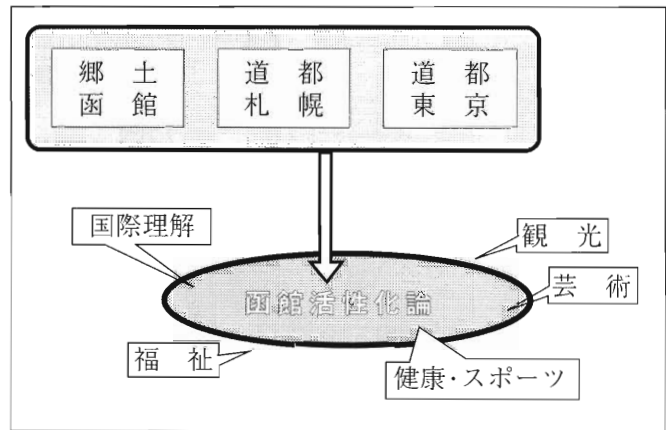
テーマ・スタディー

今日的・学際的な主題に取り組む学習を通して、自ら生き方を考える態度を育てることを目標とした学習である。これまで本校で実践を重ねてきた『環境学習』のノウハウをもとに、より生徒の興味・関心に沿うことを目的として、今年度は、新たに『国際理解』、『観光』、『芸術』、『福祉』、『健康・スポーツ』の各テーマ、スタディーの実践をした。（右図参照）

新たにこれらのテーマを新設したことにより、生徒はより積極的に自らの視点を持って『函館活性化論』へと取り組む姿が多く見られている。

スキル・スタディー

体験や問題解決における実践スキルの習得を通して、広く学びに生きて働く力を育てることを目標とした学習である。テーマ・スタディーやフィールド・スタディーの活動を通して、メディアリテラシーについて理解を深めさせるとともに、課題解決にあわせたスキルの習得を図ることをねらいとしている。具体的には「テーマの決め方」、「取材の仕方」、「情報の保持と整理」、「レポートのまとめ方」など、様々なスキルを3年間の学習活動の中で繰り返し体得させ、「確かな学び」を具体化するための生徒の基礎的な能力の育成を目指している。（下表参照）



函館活性化論イメージ図

附属函館中の総合的な学習

時期／タイトル	ライフ・テーマ・スタディー	ライフ・スキル・スタディー	ライフ・フィールド・スタディー
目標	今日的、学際的な主題に取り組む学習を通して、自ら生き方を考える態度を育てる。	体験や問題解決での実践スキルの習得を通して、広く学びに生きてはたらく力を育てる。	地域の特性を生かした体験学習や問題解決的な学習を通して、課題発見や探求活動に主体的に取り組む態度を育てる。
1年前期 35時間	1期 20時間	情報教育Ⅰ（10時間） ・電源の入れ方、キーボードの操作 ・ワープロソフトの利用 ・WWWブラウザと検索エンジンの使い方（ネチケット） ポर्टフォリオ（8時間） ・ポर्टフォリオの作り方 ・収集した資料のまとめ方 ・計画の反省と課題	フィールドⅠ 郷土函館（17時間） ・地元へ根ざした人、業種 ・函館の自然と文化 ・訪問や依頼の仕方（依頼状、礼状） ・調べ方の基本（資料の入手と分類） ・研修テーマの決め方 ・研修計画の進め方 ・グループ活動の基本（約束、実際）
1年後期 35時間	2期 15時間	環境（18時間） ・身近なゴミ問題とリサイクル ・地域に根ざしたフィールドワーク ・地球規模の環境保護 ・大学講師の講演	プレゼンテーションⅠ（10時間） ・レポートの書き方（分かりやすいレポート） ・スピーチの仕方（分かりやすい発表の発声） ・パネルディスカッション（演習） 情報教育Ⅱ（7時間） ・画像やグラフを取り入れたレポート ・視覚機器を使ったレポートの作成 ・パワーポイントの使い方

1年生70時間部分のみ抜粋

2 学年 総合的な学習の時間 実践例

I 題 材 「インタビューを学ぼう～スキルスタディを通して～」

II 題材について

現在、本校では、第1学年および第2学年で「身近な問題に目を向けること」を中心に、総合的な学習の時間の学習を進めている。そこでは、生活の場である「函館」から「道都札幌」へ、「身近な」環境問題から「全地球的」問題へと視野を次第に広げ、体験活動も重視しながら学習を展開させている。そして第3学年では、「郷土函館の活性化」を考える中で、函館のよさや他地域から学ぶ点などをより深く理解し、それらの情報収集と整理、意見文の記述と発表・討論などの方法を学習する。これら3年間の学習を通して、自らの生き方に目をむけ、真摯に考え、自己実現を目指して学び続ける生徒を育成する。

そこで、3年間の総合的な学習を見直し、その全ての基礎となる力をつけさせる目的で、「スキルスタディ」を設定し、2年生では、アポイントの取り方やプレゼンテーションの仕方、インタビューの方法について学習する。インタビュー学習については、「道都札幌」（1学期）の頃から、基礎的なもの（簡単なインタビュー計画表の作成）を行ってきたが、表面的なものに終わっており、今回の学習でインタビューのコツを学ぶこともさることながら、インタビューを積極的に行う姿勢も育てたいと考えている。

III 最終目標

- 1 インタビュー学習を通し、他者とのよりよいコミュニケーションづくりについて理解を深め、実践につなげようとする姿勢を育てる。
- 2 さまざまな情報を収集し、問題の本質をとらえる力を育てる。
- 3 小集団の学習活動を通して、お互いに協力し合い、自分の考えを伝え合う方法を身につけさせる。
- 4 インタビュー学習を自分の課題としてとらえ、実際の場面に生かす力を育てる。

IV 指導計画

	学 習 過 程	学 習 内 容	時数
道都札幌編 フィールドスタディⅡ	1 インタビューの仕方と聞き方	○インタビューする場合の留意点や、知り得た情報を他へ伝達するための視点と情報の吟味の仕方について知る。	1
	2 先輩に学ぼう	○3年生に「札幌研修」時の苦勞した点や留意点、交通手段などについて、インタビュー形式で質問し記録を行う。3年生からアドバイス（評価）をもとに、インタビュー方法や質問について改善点を話し合う。	2
	3 インタビューしてみよう	○札幌研修における訪問を想定し、質問項目を吟味し、グループ内で模擬インタビューを行う。	2
	4 道都札幌での反省・課題	○札幌研修で行ったインタビュー（街頭を含む）について、反省点や成果を話し合う。	1
首都東京編 フィールドスタディⅢ	5 聞き手にわかりやすい話し方	○正しい発生や発音、抑揚について知り、文例に沿って練習を行う。	1
	6 インタビューを学ぼう	○よりよいインタビューの方法や質問の観点について講師から助言を受け、その方法や観点をふまえて実際に質問項目を立て、インタビュー活動を行う。	1 (本時)
	7 自分の興味のある職業について調べよう	○自分の興味のある職業についていろいろな情報ソースを用いて調査を行う。	1
	8 実践インタビューを行おう	○前時の学習内容を生かして、インタビュー計画表をもとに自分の興味ある職業について互いにインタビュー活動を行う。	1

V 本 時 案

1 題 材 「インタビューを学ぼう～スキルスタディを通して～」

2 学習目標

- (1) 2者のインタビュー内容を積極的に視聴し、インタビューに関する広い見方や考え方を持つことができる。
- (2) 専門家の講評を聞くことを通して、よりよいインタビューの進め方を把握することができる。
- (3) アナウンサーに対してのインタビュー学習を通して、「アナウンサー」という職業について関心を持ち、理解を深める。

3 学習の展開

学 習 活 動	教 師 の は た ら き か け	指 導 上 の 留 意 点
◎本時の学習内容を確認する。	○「教師」に対する2者のインタビュー（計画表に基づくインタビューと、無計画なインタビュー）の様子を試聴するとともに、専門家のアドバイスの仕方について知らせ、自らも実践しようとする意欲を持たせる。	・首都東京研修につながる内容であるので、積極的に取り組めるよう意欲づけを図る。
2者のインタビューを聞き、よりよいインタビューの方法に向けての視点を広げよう		
◎2者のインタビューを聞き、メモ用紙にまとめる。	○2者のインタビューから、自分のインタビューに生かせるポイントをつかみとろうとする意識をもたせる。	・生きた情報に学ぶという意識を持ち、メモをさせる。 ・数人に指名し、2者のインタビューについて気づいた点を発表させる。
◎専門家のアドバイスを聞きメモをとる。	○専門家によるインタビューのコツを学び取らせる。	
◎メモの交流を行う。	○インタビューのコツについてグループで確認させる。	
◎インタビュー計画表を作成する。	○計画表について説明した後、アナウンサーという職業についてのインタビュー計画表を（3～4人のグループで）作成させる。	・インタビューのコツを生かした計画表作りを行わせる。
◎アナウンサーにインタビューを行う。	○インタビューを行う際の留意事項について確認する。	・広い視野でインタビューすることの大切さを知らせる。
◎アナウンサーからのアドバイスをもらう。	○専門家から頂くアドバイスを次回の学習に生かせるよう促す。	
◎次時のまでの課題を整理する。	○相互のインタビューの素材を次回までに収集しておくことを確認し、今日の授業から、新たに学んだインタビューのコツを整理整頓しておく。	・今日の授業をもとに、知り得たことを再確認する。

3. 特別活動

3-1. 小学校における特別活動とは

(1) 特別活動の意義

- ① 集団の一員として、なすことによって学ぶ活動を通し、自主的、実践的な態度を身に付ける。
- ② 教師と児童及び児童相互の人間的な触れ合いを基盤とする。
- ③ 児童の個性や能力の伸長、協力の精神などの育成を図る。
- ④ 各教科、道徳、総合的な学習の時間などの学習に対して、興味や関心を高める。また、各教科等で培われた能力などが総合・発展される活動である。
- ⑤ 知、徳、体の調和のとれた豊かな人間性や社会性の育成を図る。

(2) 特別活動の目標

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図るとともに、集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。

【望ましい集団活動の条件】

- ① 活動の目標を全員でつくり、その目標について全員が共通の理解をもっていること。
- ② 活動の目標を達成するための方法や手段などを全員で考え、それを協力して実践すること。
- ③ 一人一人が役割を分担し、その役割を全員が共通に理解していること。
- ④ 一人一人の自発的要求が尊重され、互いの心理的な結びつきが強いこと。
- ⑤ 成員相互の間に所属感や所属意識、連帯感や連帯意識があること。
- ⑥ 集団の中で、自由な相互交渉が助長されるようになっていること。

(3) 特別活動の内容

① 学級活動

ア. 学級や学校の生活の充実と向上に関すること。

○学級や学校における生活上の諸問題の解決、学級内の組織づくりや仕事の分担処理など、学級の児童全員が協力して活動する。

イ. 日常生活や学習への適応及び健康や安全に関すること。

○希望や目標をもって生きる態度や基本的な生活習慣の形成、望ましい人間関係の育成、学校図書館の利用、心身ともに健全で安全な生活態度の育成、学校給食と望ましい食習慣の形成などのかかわる課題を、児童の自主的な話し合い活動を取り入れつつ解決する。

② 児童会活動

○全校の児童で組織する児童会において、学校生活の充実と向上を図るために諸問題を話し合い、協力してその解決を図る活動を行う。

③ クラブ活動

○学年や学級の所属を離れ、主として第4学年以上の同好の児童で組織し、共通の趣味・関心を追求する活動を行う。

④ 学校行事

○学校行事においては、全校または学年を単位として、学校生活に秩序と変化を与え、集団への所属感を深め、学校生活の充実と発展に資する体験的な活動を行う。

- a. 儀式的行事 …… 入学式、卒業式など
 - ・学校生活に有意義な変化や折り目を付け、厳粛で清新な気分を味わい、新しい生活の展開への動機付けとなるような活動を行う。
- b. 学芸的行事 …… 学芸会、学習発表会など
 - ・平素の学習活動の成果を総合的に生かし、その向上の意欲を一層高めるような活動を行う。
- c. 健康安全・体育的行事 …… 避難訓練、運動会など
 - ・心身の健全な発達や健康の保持増進などについての関心を高め、安全な行動や規律ある集団活動の体得、運動に親しむ態度の育成、責任感や連帯感の涵養、体力の向上などに資するような活動を行う。
- d. 遠足・集団宿泊的行事
 - ・平素と異なる生活環境にあつて、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、集団生活の在り方や公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができるような活動を行う。
- e. 勤労生産・奉仕的行事
 - ・勤労の尊さや生産の喜びを体得するとともに、ボランティア活動など社会奉仕の精神を涵養する体験が得られるような活動を行う。

(4) 指導計画

<第3学年> (抜粋)

月	活動名	活動内容	主な指導内容と活動内容	学校行事
4	○3年生になって ○楽しい給食 ○通学路と安全な歩行 ○自転車の乗り方	(1) (1) (2) (2) (2)	・自分の願い ・学級の目標 ・必要な係 ・係の活動計画 ・日直の仕事 ・掃除当番の分担 ・給食当番の分担 ・配膳の仕方と工夫 ・通学路の確認と安全な歩行とルール ・安全な自転車の乗り方の確認 ・点検表	○入学式 ○始業式 ○対面式 ○4計測 ○健康診断
5	○バスのマナー ○楽しい遊具 ○桐の子スポーツ祭 ○図書館の利用	(2) (2) (1) (2)	・バスの乗り方やバスの中でのマナー ・遊具の安全な使い方、正しい乗り方 ・桐の子スポーツ祭の目標 ・種目の決定 ・役割分担 ・練習計画 ・図書カード	○桐の子スポーツ祭 ○避難訓練

6	○遠足に行こう ○健康な心と体 ○手洗い	(1) ・遠足の目標 ・遠足での約束 ・活動計画 (2) ・心と体の関係 (2) ・手洗い	○春の遠足 ○避難訓練 (休憩時)
---	----------------------------	---	-------------------------

(5) 指 導 案

1) 題材名 「牛乳について知ろう」

2) 題材について

牛乳は、たんぱく質やカルシウムなどを多く含む栄養的に優れた食品の一つである。また、カルシウムの吸収率が高く、手軽に摂取することができる食品でもある。

そこで、子どもたちに、牛乳の中のカルシウムの働きや、高い牛乳の栄養価などを知らせることにより、牛乳が、自分の健康や成長に必要な食品であることに気付くことができるようにしていきたい。そして、牛乳が他の食品に比べてカルシウムを多く含んでいることに興味をもち、積極的に牛乳を摂取していこうとする態度を育てていきたいと考える。

3) 題材の目標

自分の健康や成長に関心をもち、進んで牛乳を飲もうとする意欲を高めることができるようにする。

4) 展開 (一部)

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	資 料
○給食に、毎日牛乳がつく理由を考える。	<ul style="list-style-type: none"> ●給食に毎日出てくるものについて着目できるようにする。 ●牛乳の栄養価が高いことに気づくことができるように教材を提示する。 ●牛乳にカルシウムが多く含まれていることに気付くことができるように働きかける。 ●牛乳の中のカルシウムの働きについて気付くことができるようにする。 <ul style="list-style-type: none"> ・丈夫な骨や歯を作る。 ・出血を止める。 ・イライラをしずめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・牛乳パックの模型 ・牛乳の栄養価の絵 ・カルシウムの働きの絵 ・カルシウムの含有量を比較できる模型
○牛乳のカルシウムの含有量と、1日の牛乳の適切な摂取量について理解する。	<ul style="list-style-type: none"> ●牛乳と他の飲み物のカルシウムの含有量を比較し、牛乳はカルシウムを摂取するために、優れた食品であることに気付くことができるようにする。 <ul style="list-style-type: none"> ・スポーツドリンク ・リンゴジュース など ●1日の摂取量のめやすが600mlであることを知らせる。 ●牛乳の栄養価が高いことから、休日なども毎日、摂取することが望ましいことに気付くことができるようにする。 	

3-2. 中学校における特別活動とは

(1) 特別活動の目標

中学校における特別活動の目標について、学習指導要領では次のように述べています。

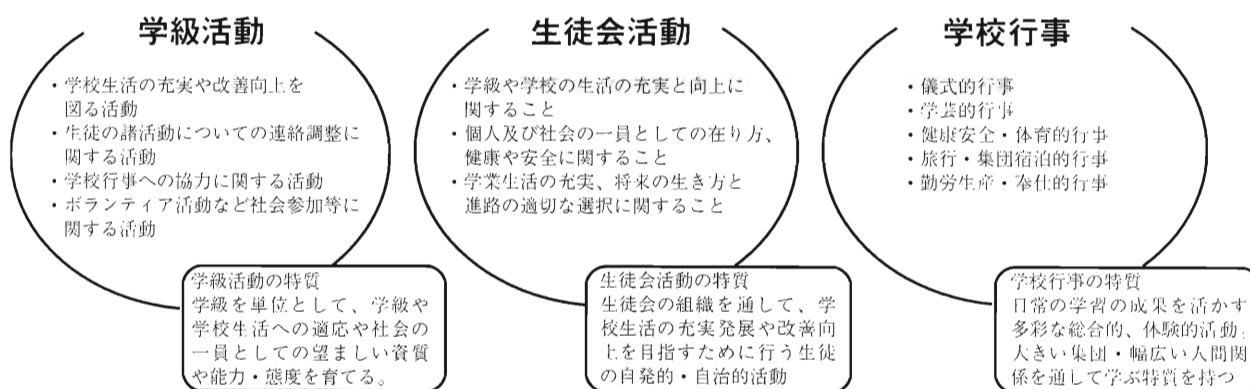
望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。

そして、この目標を達成するために、学級活動、生徒会活動、学校行事といった学校での様々な活動を通して、個性の伸長と豊かな人間性の育成、集団や社会の一員としての自覚と責任感などを学ぶことが、特別活動の主な内容となります。

現在の中学校においては、不登校、いじめ、校内暴力、非行など様々な問題が顕在化していますが、特別活動では、「望ましい集団活動を通して」生徒が学校生活によりよく適応していくことや、自己の生き方を主体的に考え、自らの意志と責任を持ってたくましく自己実現を図っていける人間を育成していくことが、中学校段階での重要な課題といえるでしょう。

(2) 特別活動の内容

特別活動の内容は、大きく次の3つから構成されています。



「学級活動」は学校における生徒の生活の単位組織としての活動の基盤となるもの、「生徒会活動」は全校の生徒が協力し合って、目標の達成を図り成果を生みだしていくもの、「学校行事」は儀式や学芸、集団宿泊、勤労生産など多彩な内容を持つものといったように、それぞれの活動内容には、集団の単位や活動の形態・方法、時間の設定などで、それぞれの活動にあった特質を持っています。これらの特質を踏まえながら、各学校が創意工夫を生かして、それぞれの活動内容や、教科・道徳・総合的な学習の時間などの領域との関連を図りながら、具体的な指導計画に創り上げて行くことが大切です。

(3) 中学校の特別活動年間指導計画例

＜第3学年＞

重点 目標	領 域	学校行事	生徒会活動	学 級 活 動	学年団活動
4 月	きまりを守り正しい生活をしよう	始業式 着任式 入学式 3年総合学習 健康診断 身体測定 学級役員 任命式 授業参観日	部活動紹介 対面式 生徒会オリエンテーション	<ul style="list-style-type: none"> ・最上級生としての心構え ・学級目標づくり ・個人目標づくり ・3年生の生活設計 ・将来への希望 ・前期学級役員・係の選出 ・教室環境整備 ・前期学級係活動の計画 ・ゴールデンウィークの過ごし方 	学年団開き
5 月	身体を鍛え、自分の能力を伸ばそう	体力測定 学級懇談会 避難訓練 体育祭	生徒総会 体育祭応援練習 体育祭係活動 体育祭係活動 反省	<ul style="list-style-type: none"> ・体育祭目標と練習計画づくり ・体育祭種目別出場者決定 ・進路の相談 ・健康・安全な生活 ・個性の発見 ・前期生徒会議案審議 	花壇設営
6 月	自己の役割を知り、行動に責任を持とう	開校記念日 家庭訪問 中体連陸上競技大会 期末テスト	文化祭演劇脚本選定委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・体育祭の反省 ・学習を見直そう(1) ・中体連参加と応援 ・梧桐祭の意義と原案審議 	進路ガイダンス
7 月	時間を計画的に活用し、合理的な生活をしよう	学年保護者会 中体連総合大会 美術鑑賞 1・2年総合学習 始業式	中体連総合大会応援練習 中体連総合大会壮行式	<ul style="list-style-type: none"> ・中体連総合大会の参加と応援 ・私の進路 ・1学期を振り返って ・1学期係活動反省 ・文化祭学級組織づくり ・夏休みの過ごし方 ・夏休みの計画づくり 	
8 月	礼儀を重んじ正しい行動を身に付けよう	始業式 教育実習生着任式	中体連水泳壮行式	<ul style="list-style-type: none"> ・教生先生を迎える態度 ・夏休みの成果 ・2学期のスタートに当たって 	

(4) 特別活動の学習指導案の例「よい友人関係をつくろう」（第一学年4月）

この指導案では、新しい学級集団の好ましい人間関係の在り方について、学級での友人関係という視点から話し合いを深め、その問題点や友達の必要性、友情を育んでいくための友達との接し方などを身に付けられるようにすることを目指しています。

こうした授業を行う際のポイントは、教師の適切な指導・援助の下に、学級活動委員会などを組織して、授業が生徒の自発的・自治的な実践活動に結びつくように指導計画を作成することが大切です。また、道徳の時間に友情を題材とした資料を用いたり、友人関係についての作文をあらかじめ書かせておくなど、他領域との積極的な連携をはかっていくことも有効な手だてとして考えます。

段階	活動の内容やねらい	教師の指導・援助	留意点・資料
導入	<ul style="list-style-type: none"> 友人についてのイメージの発表 アンケート結果を利用した問題点の意識化 	<ul style="list-style-type: none"> できるだけ、多くの生徒に発表させる。 アンケートの結果を説明し、数人から感想や意見を発表させ、問題点を意識させる。 	<ul style="list-style-type: none"> アンケートは学級活動委員会に作成してもらい、普段感じている問題点が浮き彫りになりやすいようにする。
展開	<ul style="list-style-type: none"> グループによる話し合い 友人関係の悩みについての事例を聞く 事例をもとにしたグループでの話し合い 自分自身の考えの発表 	<ul style="list-style-type: none"> 班による話し合いを通じて、自分だけの問題ではなく、他の人にも同じ悩みがあることに気づき、問題を共有化していく。 道徳の時間にかいてもらった作文の中から、友人関係についての悩みの事例を紹介する。 紹介された事例や先ほど話し合った問題について、その改善策を話し合う。 班での話し合いをもとに、友人関係の悩みについての改善策を、自らの考えとしてまとめ発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 個人のプライバシーや「誰」といったことに興味に移らないように十分配慮したい。 紹介された事例に対して、「自分なら」という視点からまとめさせ、自らの考えをしっかりと意識させる。
整理	<ul style="list-style-type: none"> それぞれの考えをまとめ、友人関係を育んでいくための望ましい接し方を整理する。 	<ul style="list-style-type: none"> 発表された改善策や提案をもとに、クラスとしての約束事や、個人として守ること、心がけることに整理していく。 	<ul style="list-style-type: none"> 本時の話し合いで得られた、クラスの取り組みや課題を、機会をみて再び学級活動の中で取り上げ、振り返る。

※学級活動委員が、アンケートの結果をグラフなどにまとめ、あらかじめこの授業の前に教室に掲示しておくなどの活動ができれば、自主的・自治的な意識の醸成の面からより望ましい。

Ⅲ. 生徒指導

1. 生徒指導の意義

生徒指導の意義は、児童生徒の非行対策といった消極的な面だけあるのではなく、積極的にすべての児童生徒のそれぞれの人格のよりよき発達を目指すとともに、学校生活が児童生徒の一人一人にとっても、有意義かつ興味深く、充実したものになるようにすることを目指すところにある。

(1) 生徒指導とは

- ① 生徒指導とは、個別のかつ発達的な教育を基礎とするものである。
- ② 生徒指導とは、一人一人の生徒の人格の価値を尊重し、個性の伸張を図りながら、同時に社会的な資質や行動を高めようとするものである。
- ③ 生徒指導は、生徒の現在の生活に即しながら、具体的、実地的な活動として進められるべきである。
- ④ 生徒指導は、すべての児童生徒を対象とするものである。
- ⑤ 生徒指導は、総合的な活動である。

生徒指導とは、一人一人の児童生徒の個性の伸張をはかりながら、同時に社会的な資質や能力・態度を育成し、さらに将来において社会的に自己実現ができるよう資質・能力を形成していくための指導・援助であり、個々の生徒の自己指導能力の育成を目指すものである。

(文部省生徒指導資料 第20集)

(2) 自己指導力の育成のために

自己指導力

自己のありのままの姿を見つめ、自分自身への理解を深めることを通して、自己の生きる目標を求め、確立し、その目標達成のために自ら考え、主体的に判断し、責任をもって行動し、積極的に自己を生かしていくことのできる能力をいう。

すべての教育活動を通して

教科の学習、道徳、特別活動、総合学習、休み時間、給食時間、部活動、その他

- ① 児童生徒に「自己決定」の場を与えること。
 - ・自己決定の場と機会を与え、児童生徒が自ら考え、判断し、責任を持って行動できるよう援助すること。
- ② 児童生徒に「自己存在感」を与えること。
 - ・児童生徒一人一人に有用感や誰もがかけがえのない存在であるという思いを持たせること。
- ③ 教師と児童生徒の間に、人間的な触れ合いを通して共感的な理解を図ること。
 - ・共感的理解～児童生徒を同じ人格を持つ人間として尊重し、あるがままに受け入れようとする態度。
児童生徒が感じている感情を児童生徒が感じているままに正しく伝わろうとし、教師が理解したと思うことを具体的に分かりやすい言葉で児童生徒に伝えていくこと。

(3) 教師と児童生徒の人間関係

一人の人間として児童生徒に接する教師の態度が、好ましい人間関係を築いていく時の基本となる。

児童生徒に広い心で接するためには、教師が人間関係を結ぶ技術、人間についての深い知識が必要である。

— (好きな先生) —

- ① 気軽に相談ができ、親身になってくれる先生
- ② ユーモアがあり、また要所で引き締めてくれる先生
- ③ 勉強や運動などで、できる・できないで差別しない先生
- ④ 勉強を分かりやすく、熱心に教えてくれる先生
- ⑤ 部活動や各種行事の時、生徒と一緒に活動してくれる先生

— (嫌いな先生) —

- ① 暴力をふるって叱る先生
- ② 差別（ひいき）する先生
- ③ 怒りっぽい先生
- ④ 人前で恥をかかせる先生
- ⑤ 生徒の意見を無視する先生
- ⑥ 約束を守らない先生
- ⑦ 厳しさがなく、優しすぎる先生
- ⑧ ユーモアのない先生
- ⑨ くだらないことを長談義する先生
- ⑩ 不潔で、だらしない格好をする先生

積極的な生徒指導のための教師の心構え

- ・子供とかかわる機会をできるだけ多くもつこと。
- ・子供の目の高さに合わせ、共感的態度で接すること。
- ・子供の意欲や希望がわいてくるような言葉がけをすること。
- ・子供のよさや持ち味に目を向け、伸ばそうとすること。
- ・子供の考えや意見を引き出し、それを生かしていくこと。
- ・子供の社会性を育てるような機会をつくること。
- ・子供の変容について家庭との連携を密にすること。

(函館市教育委員会発行「生徒指導資料」より)

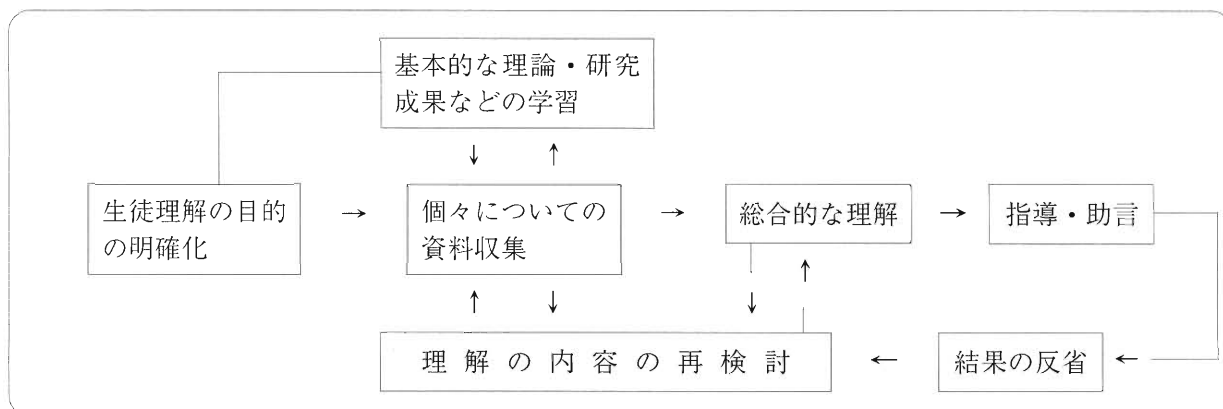
2. 生徒理解の方法

(1) 生徒指導における児童生徒理解の必要性

生徒指導において、それぞれの児童生徒の人格を望ましい方向に形成させようとする時にも、それぞれの個性を生かし、個人のもつそれぞれの特徴に従って進められなければならない。そのためには、児童生徒のもつそれぞれの特徴や傾向をよく理解し、把握すること、言い換えれば児童生徒理解ということがどうしても必要になってくる。

よりよい児童生徒理解を図るためには、ねらいを明確にし、研修や資料収集を通して統合的な理解をすること。さらに、指導・援助の結果を基に理解したことについて再検討しながら、次の指導・援助に生かすことが大切である。

<生徒理解の流れ>



(2) 児童生徒理解の対象

特に重要と思われるものとして、以下のようなことがある。

- ・能力の問題～身体的な能力、知的能力（知能）、学習能力（学力） など
- ・性格の特徴傾向
- ・生徒の興味、欲求、悩みなど
- ・交遊関係
- ・環境の問題～家庭環境、地域環境、校外で所属するグループなど

(3) 児童生徒理解のための基本的な資料

児童生徒理解を深めていくためには日常的、継続的に情報を集めておく努力が必要である。また、教師は、できるだけ主観や偏見などを入れずに、その情報を整理することが大切である。右記のような資料をできるだけ客観的に集めることが大切である。

- ①一般的な事項（氏名、住所等）についての資料
- ②生育歴についての資料
- ③家庭環境についての資料
- ④情緒的な問題についての資料
- ⑤習癖についての資料
- ⑥友人関係についての資料
- ⑦身体の健康状態についての資料
- ⑧学校生活についての資料
- ⑨調査や検査の結果についての資料
- ⑩当面している困難点についての資料

（文部省「生徒指導の手引き」より）

(4) 1日の生活の中での児童生徒理解（例）

観 察 事 項	観 察 の 観 点
<登校時> <input type="checkbox"/> 遅刻しないで登校しているか <input type="checkbox"/> 前を向いて歩いているか	<ul style="list-style-type: none"> ・健康状態、家庭生活の状態の把握 ・ “ ” 心理状況の把握
<朝の会> <input type="checkbox"/> 元気良くあいさつできているか <input type="checkbox"/> 表情は生き生きしているか <input type="checkbox"/> 提出物の忘れ物はないか	<ul style="list-style-type: none"> ・心理状況の把握 ・ “ ” ・家庭生活の状況の把握
<授業中> <input type="checkbox"/> 元気よく発表しているか <input type="checkbox"/> 道具などの準備は万全か	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭学習状況の把握、学級適応状況の把握 ・家庭生活、家庭学習状況の把握
<休み時間> <input type="checkbox"/> 友達と仲良く遊んでいるか <input type="checkbox"/> 誰と遊んでいるか	<ul style="list-style-type: none"> ・交遊関係状況の把握 ・ “ ”
<給食時間> <input type="checkbox"/> 好き嫌いなく食べているか <input type="checkbox"/> 食欲はあるか	<ul style="list-style-type: none"> ・健康状況の把握 ・ “ ” 、心理状態の把握
<帰りの会> <input type="checkbox"/> 清掃活動に積極的に参加しているか <input type="checkbox"/> 表情は朝とどう変化しているか <input type="checkbox"/> 帰りたがらない様子などないか	<ul style="list-style-type: none"> ・学級適応状況の把握 ・健康状態、心理状況の把握 ・家庭環境、家庭生活状況の把握
<部活動など> <input type="checkbox"/> 休まず積極的に参加しているか <input type="checkbox"/> 人間関係は良好か	<ul style="list-style-type: none"> ・健康状態、生活適用状況の把握 ・交遊関係状況の把握

3. 教育実習生として生徒指導上注意すべき内容

生徒指導の目標は「よりよく自立させる」というところにあり、教育実習生においても、子供たちの前に立ち、授業を行う教師として、また、範を示す大人としてこのことを意識した指導に当たることが大切である。

(1) 児童生徒の人権を守る観点から

① 子供一人一人を大切にされた指導を進めること。

・どの子供にもわかる授業づくりに努めること。

② 体罰のない教育を進めること。（体罰の禁止）

③ 敬称の使用、正しい言葉遣いで子供に接すること。

・教育実習生同士の会話においても、普段に正しい言葉遣いをし、いつでも、どこでも正しい言葉遣いができるようにすること。

※子供と仲良くなつたつもりで、ついついあだ名で呼んだり、他の子供と比較するような言動を見せることがある。厳に慎むべきことである。

④ 子供のプライバシーを守ること。（公務員の守秘義務）

(2) 知り得た子供についての情報の処理について（事例から）

・子供は「先生にだけ話すけど」という形で他の子供のプライベートな問題など教育実習生に話していることがある。そのような場合、決して他の子供や教育実習生に話したりすることなく、指導教官に相談すること。

・子供の問題行動を発見した時、自分勝手な判断をしないこと。

そのような場面に直面した場合、悪い事は悪い、正しい事は正しいとはっきりと説明し、指導教官に伝えることが大切である。間違えても「先生には言わないから」などと、その場を繕うような発言をしないこと。

毅然とした対応によって、子供たちからの信頼を勝ち得ていくものである。

・自分の携帯電話番号や住所、メールアドレス等を子供に教える必要は一切ない。自宅に呼んで遊ぶなどは論外である。

※教育実習生の中には、自分は担任教師よりも信頼されていると勘違いし、間違った判断をして考えもしなかった問題に発展することがよくある。

(3) 普段の生活において

子供たちとの関わりを積極的に作ること。

・給食当番や清掃活動は、指導するという立場でただ見ているようなことなく、一緒に活動することを通して人間関係を築くようにしていくことが大切である。

・朝や帰りの会では早目に教室に入り、子供たちと雑談をするなどしながら時間を守らせたりレポートを作ることが大切である。

・自分の狭い価値基準や浅薄な経験だけで子供を導くことなく、教育的に価値の高い事柄について学習し、生活の中で伝えていく姿勢が大切である。

(4) 教育実習後の子供たちへの対応について

教育実習が終わったからと言って茶髪に戻し、ピアスをして学校に来て自分の立場を忘れ、指導教官に挨拶することもなく子供たちと同じレベルで話しをしている、などといった場面を見ることがある。例え現場から離れたとしても、子供たちの範となる大人であることを忘れてはならない。

Ⅳ. 学校における経営

1. 学校のしくみ

「教師とは教えるのが仕事だから授業だけやっていたらいい」と考えている人はいませんか。学校に勤務するようになった時、実際には教師はどのような仕事をしているのでしょうか。

日本国憲法、教育基本法、学校教育法、学校教育法施行規則等によって、児童生徒は学問の自由と等しく教育を受ける権利が保障され、小学校・中学校はその教育の目的と目標、基本的な組織が定められています。さらに、全国のどこの地域にいても一定水準の学習が受けられるように、学習指導要領で学習内容の基準が示されています。

このように、学校の教育内容や学校の組織はきちんと法律で定められてるものなのです。

これらを踏まえ、各学校では地域や児童生徒の実態、保護者の願い等を加味し、どのような子供を育てるかを決めます。これが、各学校の教育目標です。各学校では、この教育目標を実現させるために、教科・道徳・特別活動や総合の時間でどのようなことをするのか、学年・学級をどのように経営するのか、学校の分掌でどのようなことに気をつけるのかを検討します。次頁の表はF小学校の「学校教育目標具現化の構想」で、上記のことを構造的に示しています。この学校がどのように考え、どのように具体化しようとしているのかなぞってみましょう。

学校の中を覗いてみましょう。学校は、児童生徒が教室で学習するだけの場ではありません。年間通していろいろな行事が計画されています。委員会が組織され児童生徒が活動しています。学習に必要な用具もそろえなければなりません。さらには転出入があり、時には指導する場面も出て来ます。このような、学校が組織体として動くために、児童生徒を望ましい方向に育てるために、先生方に役割分担をしたものを校務分掌といいます。次の頁はF小学校の校務分掌を図式化したものです。どのような仕事があるのか見て下さい。

では、A先生は3年の学級担任をし、教務部と生活部に所属し、情報のプロジェクトに入り、バレーボール少年団を指導し、不登校の児童を抱えていたらどのような仕事をするようになるのでしょうか。表にしてみると

学 級 担 任	各教科の指導・教材研究、学級経営事務（詳細は後述）と伴う指導、道徳・特別活動の指導、総合の時間の計画と実践	等
教 務 部	補欠割り当て、転出入事務、授業実施記録の蓄積	等
生 活 部	校舎内外の安全点検、生活だよりの発行、生活委員会の指導	等
情 報 活 用	ホームページの作成及び更新、コンピュータソフトの管理	等
学校不適切	不登校支援委員会での調査・検討・家庭訪問・働きかけ	等
少 年 団	バレーボール指導	

さらに、F小学校に所属していることから、学校教育目標具現化に対して日常的に意識し、研修を積むこととなります。このように、先生はたくさんの仕事をこなしながら毎日を過ごしていることを知っておいてください。

平成 年度 学校教育目標具現化の構想

平成 年 月 日



校務運営組織の例（F小学校）



2. 学級経営

教師の仕事は、単に教科の授業をするだけにとどまりません。子供たちが登校してから下校するまで、様々な教育活動を通して子供の人間性を育てていくことこそ大切な職務といえます。ここでは、学級経営という視点から、毎日の学校生活の中で教師はどのような仕事をするのかを述べます。特にどのような点から子供を観察し、何に留意して指導すればよいのかを具体的に記述しました。あなたも学級担任になつたつもりで、実践してみてください。

【子供たちの登校前】

○教室内の安全確認・環境整備（良い子供はよい教室環境の中でこそ育ちます。）

子供たちが一日の生活を安全・快適に送ることができるように次のことを点検しておきましょう。

- ① 教室内に危険な箇所や物はないか。
- ② 清掃は行き届いているか。
- ③ 掲示物ははずれていないか。
- ④ 教室内の物品はきれいに整理整頓されているか。

【子供たちの登校時】

○子供の心身の状況把握と声掛け（子供の状況を把握し温かい言葉を掛けましょう）

- ① 子供たちと朝の挨拶をしながら、子供の心身の状況を把握する。
- ② 気軽に声を掛け、子供とのふれあいを深める。

【朝の会】

朝の会は、子供の心身の状況観察とその日の予定の確認、一日の生活への意欲化を図るために行われるものです。様々な形がありますが、その一例を紹介します。

朝の会の流れ（通常は日直の子供が司会をします。）

- 1 朝のあいさつ
- 2 はじめの言葉
- 3 係からの連絡
- 4 健康観察
- 5 今日のめあて
- 6 先生のお話
- 7 終りの言葉

・教師は次の点に気をつけましょう。

- ① 顔色が悪い子や元気がない子はいないか。
- ② 子供同士の人間関係は良好か。
- ③ 今日の予定が子供たちに確実に伝わったか。
- ④ 生活上気をつけることが子供たちに理解されたか。
- ⑤ 今日のめあてが子供たちの総意で決められたか。
- ⑥ 欠席者とその理由を確認できたか。

【休み時間】

休み時間は子供の多面的な理解のために絶好の機会です。子供と遊んだり、話をしてふれあいを深めるとともに、子供の人間関係の理解に努めましょう。

- ① 子供とともに遊び、ふれあいを深めるとともに人間関係の理解に努める。
- ② 必要に応じて安全な遊び方や仲良く遊ぶルールについて指導する。
- ③ 日常話をするのが少ない子供と積極的にかわりコミュニケーションを深める。
- ④ 遊びの後始末、汗の始末、手洗いの指導をする。

【給食指導】（準備は給食当番がおこないます。）

給食は子供たちにとっては楽しい時間であるとともに、食事のマナーを指導する大切な場でもあります。子供たちとともに準備や後始末をしましょう。

次の点に特に留意してください。

- ① 手洗いの指導をし、机の上がきれいに片付いているか確かめる。
- ② 給食当番の分担を確認し、運搬や盛り付けの準備を促す。
- ③ 当番以外の子供が席についているか確認する。
- ④ 配食、盛り付けの様子を観察する。子供の安全を考え必要に応じて教師が盛り付けを行う。
- ⑤ 食事中はマナーを守り楽しく給食を食べるように指導する。
- ⑥ 後始末のしかたに目を配り、教室内が汚れないよう配慮する。

【帰りの会】

帰りの会は、今日一日の生活を反省し、自分の学習の手ごたえを振り返る時間です。また明日の予定や持ち物の連絡をする時間でもあります。一例を紹介します。

帰りの会の流れ

- 1 はじめの言葉
- 2 今日の反省
- 3 係りからの連絡
- 4 先生から
- 5 おわりの言葉
- 6 帰りのあいさつ

・次の点に気をつけましょう。

- ① めあてが守られたかどうか振り返る場であったか。
- ② 子供の一日のがんばりを認めることができたか。
- ③ 明日の予定や持ち物の連絡が徹底されたか。

【清掃指導】（必ず教師が立ち会って子供たちとともに教室をきれいにしましょう。）

一日学習した教室をきれいにすることは教育上大きな意義があります。子供といっしょに清掃活動に汗を流しましょう。

次の点に気をつけてください。

- ① 清掃時の服装を確認する。（清掃にふさわしい服装か。）
- ② 清掃の手順を確かめ、分担しながら清掃を行うよう指導する。
- ③ 清掃していない場所や忘れていた仕事がないか確かめる。
- ④ 窓のかぎや電気の消灯を確認する。
- ⑤ 掃除の反省を行う。

【学級の係活動・当番活動について】

各学級では、子供たちが分担して様々な係を担当しています。それぞれの係の仕事が確実に行われているかどうか確認しましょう。

また当番活動は輪番で行われています。毎日、どのグループが担当なのか確かめておきましょう。

【その他の学級事務】

出席簿の記入、集計、学級通信の発行、集金事務、お便りの配布や提出物の回収などいろいろな仕事があります。担任の先生のお手伝いをしてください。

【事故や怪我への対応】

すぐに担任の先生へ連絡し、必要に応じて保健室へ子供を運びましょう。

V. 教育実習録の記入の仕方

教育実習ノートは、教育実習の提出物の1つとして、詳細にしかも丁寧に書かなければならない。毎日、実習（観察・参加を含む）した事項や指導教官からの指導助言等を克明に記録する。その場合、事実の記録だけでなく、必ず考察や感想を書くこと。将来、教師に就いたときの指針となるように書くこと。

(1) 記録の意義・必要性

- ① 教育実習の改善や教育研究に役立てることができる。
- ② 指導教官とのコミュニケーションの絶好の機会である。
- ③ 将来、教職に就いた時の指針や基盤となり、創造的教育実践への糧となる。
- ④ 教育実習の成果の判定資料となる。

(2) 記録内容の例

- ① 教育実習校に関する内容
 - ・学校名、所在地、校長名
 - ・学校の沿革概要
 - ・学校教育目標、教育方針
 - ・教育組織、校務分掌
 - ・児童生徒数、学級数
 - ・学校環境
- ② 教育実習に関する内容
 - ・実習指導計画
 - ・日課表、時間割（配属学級用と実習用）
 - ・配属学級の座席表
 - ・配属学級の児童生徒一覧表（身体上の特徴、性格、行動……）
 - ・毎日の実習記録（観察、参加、実習）
 - ・指導教諭からの指導
- ③ 実習研究課題に関する内容
(注) 最終ページに実習全体を通しての感想、反省、今後の抱負等をまとめて書くこと。

(3) 記述するうえでの観点

その日に観察したこと、指導したこと、指導助言されたこと、感じたこと、疑問に思ったこと、反省事項など、指導教官や児童生徒、他の実習生との交流をとおして学んだことを具体的に書くこと。

(4) 記入上の留意点

- ① 事実の記録だけでなく、考察、感想、見解を必ず加えること。現象面だけを見て批判・非難したり評論家のような書き方をしないこと。記載内容が少なく、粗末な記録にならないように注意することが大切である。
- ② 印象に残ったものに焦点を絞り、小見出しを付けて書くこと。
一日の広範な内容を満遍なく記録するより、焦点を絞って書く方が、実習録のマンネリ化を防ぐことにもつながる。具体的なポイントとしては、
 - ・学習指導
 - ・学級経営
 - ・学校経営
 - ・特別活動
 - ・道徳
 - ・生活（生徒）指導
 - ・学校保健安全
 - ・学校環境、施設設備
 - ・家庭、地域社会
 - ・個人観察 等が考えられる。

③ その日のことは、その日のうちに書くこと。

たまってくると、印象も薄れて味気ない単なる記録に終わってしまうことが多く、生きた実践記録ではなくなる。

④ 槽書で丁寧に書くこと。

実習録は、実習校の諸先生に読んでもらい、指導を受ける性質のものであることを忘れずに書くこと。誤字、脱字、当て字、マンガ字には特に注意すること。できれば、鉛筆やシャープペンでは書かないこと。

(5) 実習記録の記入形式・様式

実習記録は所定の、ノートに記入すること。

実習校から配布されたプリント等は別にファイルすること。

第 4 部

養 護 学 校 実 習

第4部 養護学校実習

1. 教育実習Ⅳ C	257
● はじめに	257
● 障害児教育実習の目的	257
2. 障害児教育実習の日程	259
3. 障害のある子どもの理解	260
● 障害のある子どもの教育がめざすものは	260
● 障害のある子どもの教育の教育課程	262
4. 附属養護学校の教育	265
5. 実習の心得	270
6. 指導案の書き方	273
7. 学習指導案の具体的例	276

1. 教育実習ⅣC

● はじめに

教育職員免許法によって特殊教育諸学校の免許状は小学校、中学校、高等学校または幼稚園の教諭の普通免許状を有することが基礎資格となっている。従って、この教育実習においても基礎免の教育実習のうえに積み上げられており、その分専門性が高いといえる。教育実習生にとって、既に基礎免の教育実習を経験しているとはいえ、障害児教育実習では戸惑うことが多いであろう。基礎免の教育実習においては、諸君がかつて児童・生徒として在籍した経験が少なからず役だったであろう。だが、養護学校を中心とした実習校に在籍する児童生徒の大部分は知的障害を主とした発達障害のある子どもである。従って諸君にとって体験的には全く未知の分野といってよいであろう。

しかしながら、小・中学校の教育も養護学校の教育も目標としているところは基本的には変わりはない。養護学校での教育は、障害に対する教育方法上の配慮をするもので、特殊な子どもに対する特殊な教育ではない。諸君は養護学校における教育実習を通して障害のある子どもの心の中に飛び込み、このようなより広い教育観、人間観をぜひ養ってほしい。

周知のように、養護学校における教育が学校教育の中に位置づけられてから歴史が浅く、未知の事柄が多い。しかも、近年障害は重度化・重複化し、他方、ノーマリゼーション思想のもとに、教育の分野でも健常児との交流教育、統合教育の理念を一部では実現しようと試みられている。これらの二律背反をどう調和させるかはこれからの研究課題である。従って、諸君は教育現場で障害のある子どもと接し、実務を学ぶ中でさまざまな課題意識を育て、研究的な目を養ってほしい。教育実習は、講義で得た知識と実習の中で得た体験を照合させる絶好の機会である。その中で芽生えた生の課題意識を実習録に記載し、大学に戻ってから更に課題意識を煮詰め研究を深めてほしいものである。

● 障害児教育実習の目的

上述のように、養護学校教員免許は付加免許である。この免許を取得希望する者は、幼稚園、小学校、中学校あるいは高等学校の免許状をあらかじめ取得しておく必要がある。つまり、諸君はすでに小学校、中学校あるいは幼稚園での教育実習を終えているはずである。教育実習ではその目的の達成が求められる。ここで今一度これまでに終了した教育実習の目的を思い出してほしい。教育実習の目的を簡潔にまとめると、以下ようになる。

- (1) 大人及び教育専門職者としての行動規範の修得（身だしなみ、行動、言葉遣い、態度、時間励行、挨拶、守秘義務等）
- (2) 園児、児童、生徒の理解の方法の修得（子どもの名前を覚える、子どもの観察、子どもの特徴、長所の把握、子どもの行動様式の理解、子どもの認識方法の理解）
- (3) 指導技術の修得（大学で学習した指導法の現場での応用）
- (4) 教材、教具研究の方法の修得（ノートのとり方、教科書の理解、視聴覚教材の作成、利用、コンピュータ、フラッシュカード、黒板等の利用）
- (5) 学級経営の方法の修得（教育事務を適切に処理できる能力や技術）
- (6) 学習指導案の作成の方法の修得
- (7) 守秘義務の励行

これらの目的は、一度あるいは二度の教育実習経験をしている諸君はある程度達成しているものと

思われる。

障害児教育実習では上記の目標に加えさらなる目標が要求される。

- (1) 障害のある子どもの理解力の修得（障害のある子どもといっても様々な種類があり、その障害の種類も異なっている。そのため障害が異なると発達パターン、行動パターン、接し方、教育方法等が全く異なる。副読本を事前に読んで、養護学校にはどのような障害のある子どもがいるのか、その子はどのような特徴をもっているのか、その子にはどのような指導上の注意が必要なのか等を学習し、記憶しておいてほしい）
- (2) 障害のある子どもの教育の方法の修得（大学で学習したように、養護学校では普通小学校等と異なった指導方法が行われていることが多い。その方法を事前に頭にいれておいてほしい）
- (3) 障害のある子どもの安全管理力の修得（障害のある子どもは医学的問題を抱えている子どもが少なくない、そうした子どもが安全に生活できるよう細心の注意が必要である、実習中は自分勝手な解釈をしないで、必ず担任の指示をあおいで行動してほしい）
- (4) 家庭との連携方法の修得（障害のある子どもの教育は学校だけで行うのは難しく、家庭と連携しながら行っている。学級担任の指導のもとに家庭との連携の仕方を学習してほしい）

2. 障害児教育実習の日程

	日		実 習 内 容	
5 月	1日目	導 入 期	・実習開始 ・着任式 ・観察・参観開始	
	2日目		・日常生活の指導	
	3日目		・指導案作成	
	4日目		・授業実習開始	
	5日目		・退任式	
8 月	1日目	基 本 実 習 期	・着任式 ・日常生活の指導	
	2日目		・授業実習開始	
	3日目		・指導案作成	
	4日目		・課題授業研究	
	5日目			
	6日目	応 用 実 習 期		
	7日目			
	8日目			
	9日目			
	10日目			
			▼	▼
			・退任式	

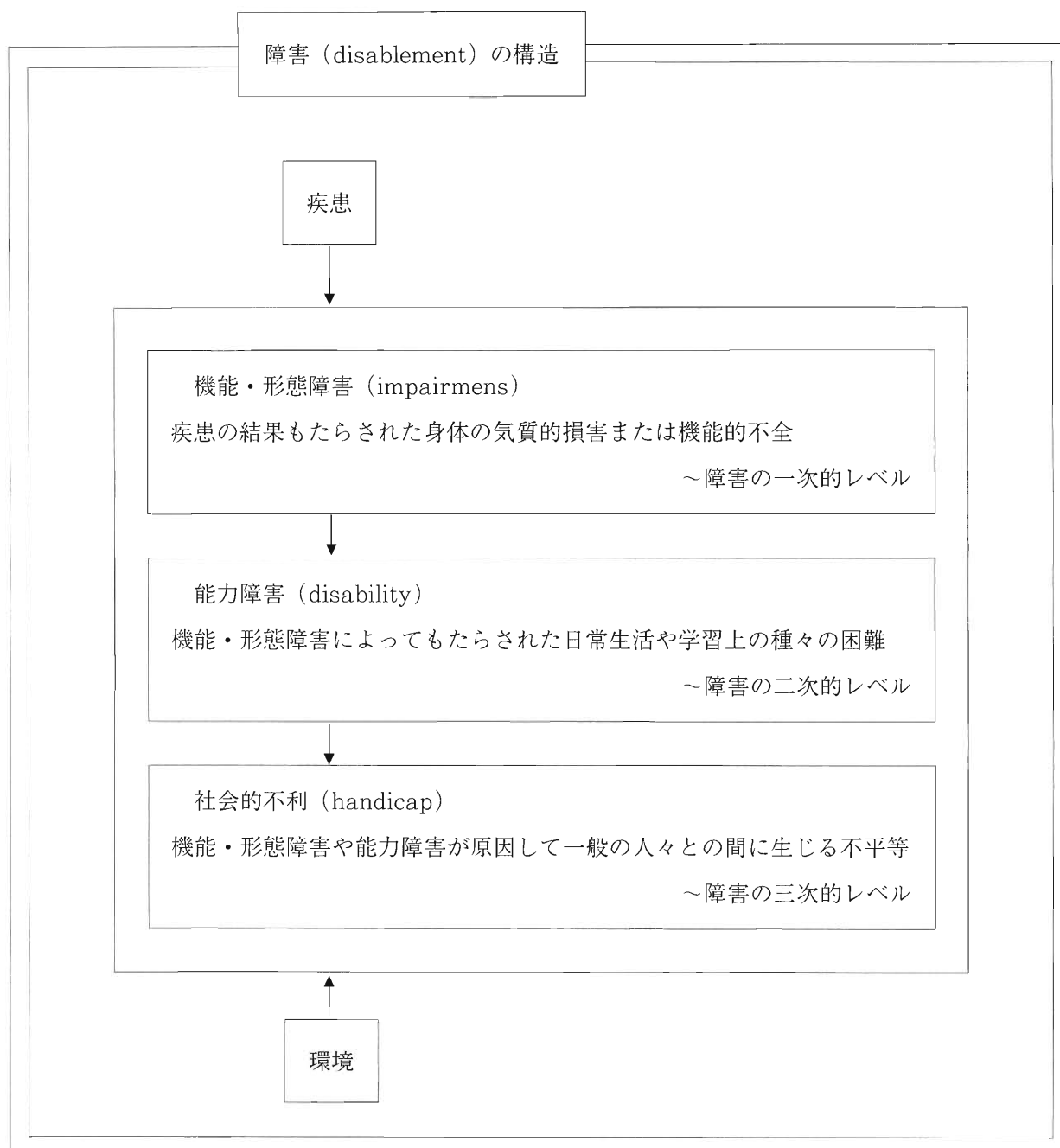
3. 障害のある子どもの理解

障害のある子ども教育の概要と教育過程

- 障害のある子どもの教育がめざすものは

(1) 障害って何

まず、障害の概念を整理してみよう。



この教育の対象となる子どもたちの教育に携わる者の仕事は、二次的レベルの障害をできるだけつけないことです。できないことをできるように、また、できることを伸ばしてできないことを補えるようにしてあげることです。

(2) 障害のある子どもの教育は「特別な支援を必要とする教育」である!

障害のある子どもの教育は特殊教育とも呼ばれていました。何が「特殊」なのでしょう。 「特殊」な子どもの教育という意味ではありませんね。「特殊」な人間などいません。みな同じ人間です。ただ、この教育の対象となる子どもたちは、発達の遅れなどから生活上さまざまな不便や困難に遭遇します。それを解決する力を育てるためには、いわゆる平均的、画一的な教育では効果が上がりません。その子どもの自分らしく生きたいという願いを受け止め、その願いを実現するように支えることが必要です。そして、子ども一人一人に応じた教育をしていくのです。障害によっては、努力してもできない部分が当然出てきます。不得意な部分への努力を強いるより、その子どもの個性を認め、できることや得意なことに注目して可能性を引き出すことも大切です。つまり、子ども一人一人に合った「特別」な方法を用いれば効果を上げることができる教育だということです。「特殊」というのは、特別な支援を必要とするという意味なのです。

(3) 障害のある子どもの教育の目的は

健常児の教育も障害のある子どもの教育も根本の目的は同じです。教育基本法第1条には、教育の目的として次のようなことが書かれています。

教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し個人の価値をたっぴ、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない。

さらに、学校教育法（第6章特殊教育—第71条旨、聾、養護学校の目的）には、次のような条文があります。

盲学校、聾学校又は養護学校は、それぞれ盲者（強度の弱視者を含む。以下同じ。）聾者（強度の難聴者を含む。以下同じ。）又は知的障害者、肢体不自由者若しくは病弱者（身体虚弱者を含む。以下同じ。）に対して、幼稚園、小学校、中学校又は高等学校に準じる教育を施し、あわせてその欠陥を補うために、必要な知識技術を授けることを目的とする。

そのほか障害のある子どもの教育では、「社会参加・自立」「自己実現」「心身の調和的発達」といったキーワードで教育の目的を示すことがあります。

① 社会参加・自立

障害のある子どもの教育では、従来、障害のある子どもを社会自立させることが目的がしかりとして掲げられてきました。

しかし、障害の重度化、多様化により、最近では、自立の概念を人間としての尊厳の問題という視点から考えるようになってきています。つまり、「生涯を通して社会生活の中にどうかかわっていきけるか」という考えです。

② 自己実現

本来的に自分の持つ能力や機能、さらにそれらを含むその人らしさを実現しようとする傾向のことです。障害のある子どもの場合、伸び悩んでいる能力や可能性を最大限に伸ばすことと考えるもいいでしょう。

③ 心身の調和的発達

精神的及び身体的に調和のとれた発達、つまり人間として全体的につりあいのとれた発達ということです。一般的に、知・徳・体の調和のとれた発達を意味します。

● 障害のある子どもの教育の教育課程

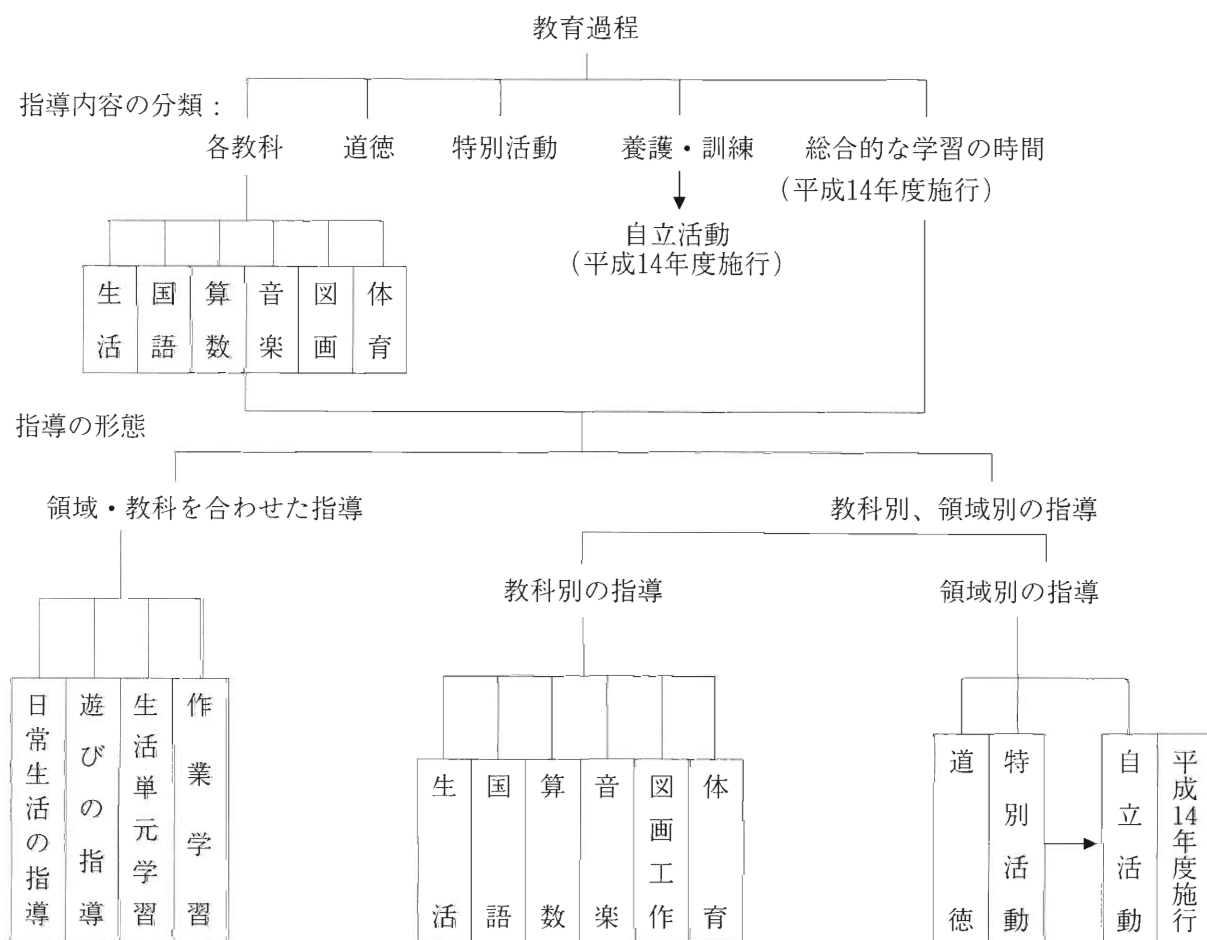
(1) どんな学校があるの？

- ① 特殊教育諸学校～盲学校、聾学校、養護学校（知的障害、肢体不自由、病弱）
- ② 小中学校特殊学級～知的障害、肢体不自由、病弱、身体虚弱、弱視、難聴、言語障害、情緒障害
- ③ 通級学級～通常の学級に所属したまま、必要に応じて特殊学級で指導を受けるもの
 ※盲学校、聾学校、養護学校に在籍する学齢児（小、中学部）～全学齢児の0.4%弱、特殊学級に在籍する学齢児～全学齢児の0.5%強→合わせても、学齢児童生徒全体の1%未満

(2) 教育課程の基本は

教育課程とは、学校教育目標を達成するために、各学校が児童生徒の心身の障害の状態及び発達段階ならびに地域や学校の実情を考慮して、授業時数との関連から教育内容を選択し組織化した教育計画のことです。

ここでは、特殊教育諸学習指導要領解説－養護学校（知的障害教育）編－をベースに、知的障害養護学校の基本的な教育課程について話をしていきます。まずは、全体構造図です。



- ① 領域・教科を合わせた指導（「合わせた」というよりも「分けない」と考えてみたら）
- 日常生活の指導
 - ・日常生活をする上で繰り返される諸動作を学校生活の流れに沿って指導するもの。児童生徒の日常生活を充足し、高めることを意図しています。衣服の着脱、洗面、手洗い、排せつ、食事、清潔などの基本的な生活習慣の内容や、あいさつ、言葉遣い、礼儀作法、時間を守ること、きまりを守ること、集団生活をする上で必要な内容等、多様な内容が取り上げられます。
 - 遊びの指導
 - ・遊びを学習活動の中心にすえて、身体活動を活発にし、仲間とのかかわりを促し、意欲的な活動を育てていくものです。遊びの活動には、各教科の内容をはじめ、道徳、特別活動及び自立活動の内容が総合された形で含まれています。
 - 生活単元学習
 - ・生活上の課題処理や問題解決のための一連の目的活動を組織的に経験させることによって、自立的な生活に必要な事柄を実践的・総合的に学習させようとするものです。生活単元学習は、領域・教科を合わせた指導の代表的な形態とよく言われますが、児童生徒の興味や関心に基づいていること、心身の発達段階を考慮していること、見通しが持ちやすいこと、集団全体が共同して取り組む場があること、多種多様な経験ができること、終わった後に満足感・成就感が味わえることといった条件を備えていることが必要です。
 - ・また、各単元ごとの系統性や発展性を持たせるとともに、児童生徒の自発的・主体的な活動を大切にすることが必要です。その場合、児童生徒の動きに合わせて計画を修正し、発展させる柔軟な姿勢が求められます。
 - 作業学習
 - ・作業学習を学習活動の中心にすえ、児童生徒の働く力ないしは生活する力を高めることが意図されるものです。単に職業・家庭の内容だけでなく、各教科、道徳、特別活動及び自立活動の内容を統合した形で扱います。作業種目としては、農耕、園芸、養鶏、紙工、木工、縫製、織物、金工、窯業、セメント加工、印刷、調理等多種多様で、生徒の実態や地域の特性などを考慮して作業種が決められます。作業学習の発展として現場実習があり、会社等の事業所や施設の協力により実施されます。
- ② 教科別の指導
- ・教科別の指導では、各教科の時間を設定して各教科の内容を指導します。一人一人の児童生徒の実態に合わせて、学習内容を個別に選択、組織しなければならないことも多く、特に国語や算数・数学においては、それぞれの教科に関する学習能力が同程度の児童生徒で小集団を編成するなどして、個別指導を徹底する必要があります。また、学習活動に生活的なねらいを持たせたり、学習活動を遊戯化したり、生活化したりする一方で、児童生徒の実態によっては、段階的・系統的指導をより徹底する努力をはらうことも必要です。
- ③ 領域別の指導
- 道徳の指導
 - ・知的障害養護学校においては、児童生徒の実態からみて、道徳の内容を日常生活の指導、遊びの指導、生活単元学習、作業学習などの領域・教科を合わせた指導で適切に取り扱うことが望ましいと言えるでしょう。

- 特別活動（学級活動、児童生徒会活動、クラブ活動、学校行事）
 - ・特別活動の内容の多くは、日常生活の指導及び生活単元学習の中で指導できますが、クラブ活動や児童生徒会活動等については、それぞれの時間を設け指導することが一般的です。
- 自立活動
 - ・個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害に基づく種々の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の和的発達の基盤を培うことを目標にしています。
 - ・自立活動の指導は、教育活動全体を通じて適切に行うものです。特に自立活動の時間における指導は、各教科、道徳、特別活動及び総合的な学習の時間と密接な関連を持ち、個々の児童又は生徒の障害の状態や発達段階等を的確に把握して、指導の目標及び指導内容を明確にし、個別の指導計画を作成します。その際、下記に示す内容の中からそれぞれに必要とする項目を選定し、それらを関連付け、具体的に指導内容を設定します。
- 自立活動の内容は五つの観点から整理されています。

1 健康の保持

- ・生活のリズムや生活習慣の形成に関すること。
- (2) 病気の状態の理解と生活管理に関すること。
 - ・損傷の状態の理解と養護に関すること。
- (4) 健康状態の維持・改善に関すること。

2 心理的な安定

- (1) 情緒の安定に関すること。
 - ☆ 対人関係の形成の基礎に関すること。
- (3) 状況の変化への適切な対応に関すること。
 - ☆ 障害に基づく種々の困難を改善・克服する意欲の向上に関すること。

3 環境の把握

- (1) 保有する感覚の活用に関すること。
- (2) 感覚の補助及び代行手段の活用に関すること。
- (3) 感覚を総合的に活用した周囲の状況の把握に関すること。
 - ☆ 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること。

4 身体の動き

- (1) 姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること。
- (2) 姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用に関すること。
- (3) 日常生活に必要な基本動作に関すること。
- (4) 身体の移動能力に関すること。
 - ☆ 作業の円滑な遂行に関すること。

5 コミュニケーション

- (1) コミュニケーションの基礎的能力に関すること。
- (2) 言語の受容と表出に関すること。
- (3) 言語の形成と活用に関すること。
- (4) コミュニケーション手段の選択と活用に関すること。
- (5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること。

4. 附属養護学校の教育

校訓

つよく あかるく すなおに

本校の任務

- 4 本校は、北海道における唯一の国立養護学校として、知的障害のある児童生徒に対して、小学校、中学校、高等学校の教育課程に準じ、特別に編成された教育課程による教育を行い、可能な限り社会参加・自立ができるように、心身の障害の状態及び能力・適正等に応じた教育を推進する。
- 5 大学の附属学校として、障害のある子どもの教育の理論及び指導の実際は関する研究実証を行う。
◎本学生の教育実習を行う。

教育目標

心身ともに健康で生き生きと活動し、社会の一員としてよりよく参加し、豊かで、たくましく生きる力を身につけた児童生徒を育成する。

- 具体目標
- 明るい心と丈夫なからだ
 - 生きる喜びと意欲
 - 触れ合いと心豊かな生活

経営方針

学校の教育目標具現化のため、学部の独自性を尊重し、小学部、中学部、高等部の連携を各組織間の連携を図り、教育の一貫性を重視した効果的な運営に努める。

◇本校の任務を遂行するため、将来構想をもってその推進に努める。

- 4 一人ひとりの児童生徒の能力・特性に応じた教育を推進するため、適正な教育課程の編成・実施に努める。
- 5 生徒指導の充実を図り、児童生徒への深い理解と指導に当たっては、多様な場面における行動がとれるように努める。
- 6 実践的な教育研究を推進するとともに、教育実習生の指導のため、教育職の個性を生かし、主体性を基盤に資質の向上を図るように努める。
- 7 家庭や地域とのより良い連携を図り、開かれた学校づくりに努める。
- 8 小・中学部、高等部の連携をより密にし、進路指導の充実に努める。

重点教育目標

『小・中学部、高等部の連携をより密にし、一貫性と独自性の調和のある教育の充実に努める』
キャッチフレーズ

「子どもの目の輝きを目指した、『感動する教育』を！」

学部の教育目標及び指導の重点

〔小学部〕

- 教育目標
元気に活動する児童

○ 指導の重点

《低学年》

- ・スケジュールボードを見たり、教師の話を聞いたりして、その日の予定を知り落ち着いて学習に取り組む。
- ・着替え、排せつ、食事など、身辺処理の基本的な仕方を身に付けることに努める。
- ・遊びやいろいろな活動を通して友達や教師と一緒に遊ぶ楽しさを十分に経験する。

《高学年》

- ・一日の流れにそってより自立的に活動することを基本に友達と一緒に活動したり自分の意思を表現したりするなど、仲間とかかわり合うこともめざす。
- ・基本的な身辺処理能力をめざす中で、清潔習慣の定着を図る。
- ・遊びやいろいろな活動を通し、体力の向上を図るとともに、成就感や達成感を得ることで情緒の安定を図る。

[中学部]

○ 教育目標

生き生きと、仲間と共に活動する生徒

○ 指導の重点

- ・楽しい経験をすることで、地域（函館市）を知り、いろいろな活動に自ら参加する。
- ・仲間づくりをめあてにしたパーティーに取り組む。（校内で、土曜日の活動）
- ・ランチルームで友だちや先生とお話しをしながら会食する。

（水曜日）

- ・各教科、生活単元学習、作業学習などで、活動に見通しがもてるように、グループでの活動を一定期間継続して行う。
- ・進んで自分のことや学級のことを処理できるように、一日の活動の流れを明確にする。
- ・安全に気を付け、友だちとの豊かなかかわりがもてるようにする。
- ・トイレの後、給食の前の手洗いや、うがい、歯磨きの習慣化を図る。
- ・年間を通じた朝のランニング、冬季間のスキー歩行を継続し、体力の向上や精神力の育成を図る。
- ・どの生徒も係活動をもち、できる力を育てる。
- ・交流教育の充実を図る。

[高等部]

○ 教育目標

共に喜び、たくましく生きぬく生徒

○ 指導の重点

- ・ライフステージに応じ、社会参加・自立の視点から自分を生かして働く力を求め、作業学習（現場学習を含め）の内容の工夫と充実を図る。
- ・日常生活に基づいた基礎的な知識の獲得と興味の拡大を図る体験的な楽しい学習活動を展開することによって、社会生活への適応をねらうと共に、余暇の活動へも広げられるよう努める。
- ・一人一人の生徒の父母との連携を重視し、生徒の特性に応じた進路指導に努める。

日課表

月～金

8 : 45	1 教時 (55分)
9 : 40	2 教時 (45分)
10 : 25	中休み (15分)
10 : 40	3 教時 (45分)
11 : 25	4 教時 (45分)
12 : 10	5 教時 (45分)
12 : 55	昼休み (20分)
13 : 15	6 教時 (40分)
13 : 55	7 教時 (40分)
14 : 35	8 教時 (40分)
14 : 55	

土

8 : 45	1 教時 (55分)
9 : 40	2 教時 (45分)
10 : 25	3 教時 (45分)
11 : 10	4 教時 (20分)
11 : 30	

- 点鈴 (チャイム) 8時45分の1回

・週基本時間割

[小学部] 1年～4年

	月	火	水	木	金	土
1	日常生活の指導・課題学習					
2	体育・音楽				単	単
	中 休 み					
3	単	単	単	図	単	
4		単		単	単	日
5	日常生活の指導					
	昼 休 み					
6	日常生活の指導					

5、6年

	月	火	水	木	金	土
1	日常生活の指導・課題学習					
2	体育・音楽				単	単
	中 休 み					
3	単	単	単	図	単	
4		単		単	単	日
5	日常生活の指導					
	昼 休 み					
6	日	単	日	日	日	
7		日	図：図画工作 日：日常生活の指導 単：生活単元学習 ※児童生徒各委員会は特設して行う			
8		日				

[中学部]

	月	火	水	木	金	土
1	日常生活の指導					
2	音	課	単	課	音	単
	中 休 み					
3	体	作		作	体	
4	単	業	単	業	単	日
5	日常生活の指導					
	昼 休 み					
6	日	美	日	美	日	
7		日				
8		日				

[高等部]

	月	火	水	木	金	土
1	日常生活の指導					
2	作	作	受	作	作	余
中	業	業	注	業	業	暇
3						
4	実		実	実		日
5	日常生活の指導					
	昼 休 み					
6	音	作	日	音	日	
7	美	業		美		
	体			体		
8	日	日		日		

[中学部]

課：課題学習

音：音楽

美：美術

体：体育

作業：作業学習

単：生活単元学習

日：日常生活の指導

※児童生徒各委員会は特設して行う

[高等部]

作業：作業学習（縫工作業・陶芸作業・木工作業）

受注：受注作業（家庭生活も含む）

実：生活実践学習

音美体：音楽、美術、体育のグループに分かれる

日：日常生活の指導

余暇：余暇学習

※児童生徒各委員会は特設して行う

※生活単元学習は特設して行う

〈日常生活の指導〉

（1教時目）

[朝の活動] 小学部：係の活動、朝の会、課題学習など

中学部：朝の運動タイム、学部期の集い、学級朝の会など

高等部：学部期の集い、朝の運動タイム、清掃、学級朝の会など

（5教時目）給食に関する活動（準備、配膳、食事、後始末、菌みがきなど）

（6又は7、8教時目）

[帰りの活動] 小学部：清掃、衣服の着脱、帰りの会など

中学部：清掃、衣服の着脱、帰りの会など

高等部：衣服の着脱、帰りの会など

5. 実習の心得

● お兄さん、お姉さんではなく先生です！

(1) あなたはこの学校の貴重なスタッフの一員なのです

① 児童生徒への対応は共通理解の基に

○「いいことはいい。よくないことはよくない」…譲らないで

○今までの指導の経緯が分からないのは当たり前。場当たりの一貫性のないいいかげんな指導は子どもを混乱させるだけ…その場で尋ねるなどして、先生方を質問攻めに。

○チームティーチングは「みんなが授業者」という意識を持ってはじめて機能するもの…T1（CT）とT2（ST）は単なる役割分担、「いいT2でしたね」は最高のほめ言葉

② 試行錯誤から光は見えてくるもの

○「こんなことを試してみたい」そう思ったらすぐに先生方に提案してみましょう。…新しいことをするのだから失敗するのは当たり前。恐れることはありません。もしかしたら、あなたのその提案がその子の可能性を開くかもしれません。

(2) 児童生徒の「良さ」をたくさん見つけられる先生に

① 「できない」ばかりを見ていても前には進みません。「できる」ことが何なのか、「できそうな」ことが何なのか、好きなことが何なのか、どう支援すれば「できる」ようになるのか、それを見ていきましょう。

○好きなことを利用すれば、活動に乗ってくるかも…。

○問題行動と呼ばれるものも見方ややり方を変えると…。

○障害の理解よりも、まずはその子の理解を優先して…。

○コミュニケーションは言葉だけじゃない…。

② 「この子はちょっと苦手だなあ」「この子はあたしのことを好きじゃないのかな」そんなふうに悩んでしまったらどうします？

…ちょっとざっくばらんに話し合ってみましょうか

● 実習にかかわる諸事項について

(1) 勤務について（8：15～16：45が勤務時間）

① 出勤したら、教官室にある出勤簿に押印します。さらに、教室の出勤・退勤の表に印を付けます。（退勤の時も印を付けます）

② 通勤は公共の交通機関を利用することが原則です。自転車の利用は認められています。その場合はボイラー室横に駐輪することになります。

③ 欠席、早退、遅刻については、それがわかった段階ですぐに配属学級の担任の先生に連絡してください。実習担当の方から届出用紙をお渡しします。補充を必要としない欠席日数は一日です。

④ 通勤や退勤の際には、常識的な範囲の服装をしましょう。着替えは、男性の方は各教室で、女性の方は生徒用更衣室を使用してください。

⑤ 控え室は教室室を使用します。

⑥ 玄関は正面玄関もしくは裏玄関を使用してください。靴箱が教室室横にあるため、外靴を脱

いであら上靴に履きかえるまでの距離があり、不便をお掛けします。スリッパをうまく使うなりして臨機応変に対応してください。

(2) 授業（指導案を含む）及び実習録について

- ① A 4判ルーズリーフ式のノートを使用してください（ペン使用、児童生徒の実名は可）に終わらないでください。何か一つでいいですから、自分なりの研究テーマを持ってそれを追求する過程を残してください。
- ② 毎朝、配属学級の担任に提出することが原則です。そして、その日までの分の実習録もその担任に提出は3枚となっています。そのうち2枚がT1（CT）としてのものです。もちろん、終末授業も含まれます。提出日に、実習録と一緒に提出してください。
- ③ 終末授業以外の指導案は、その日の朝に学部教官全員に配布する（コピー）。終末授業の指導案は、授業の前日までに作成し、全教官に配布し実習担当へ5部渡す。（70部印刷）
- ④ 終末授業の後には、授業反省会が行われます。大切なことは、授業を見せてもらったなら何らかの反応を示すのが礼儀だということです。これだけは忘れないでください。

ア 授業者から（授業説明と反省）

T1～T2も発言する。

イ 質疑応答

（司会者、記録者、教官も）

ウ 意見、感想の交流

（司会者、記録者、教官も）

エ 大学教官から（コメントを紹介）

オ 指導教官から

カ 授業者から（まとめ）

・30分程度をめぐに。

・司会と記録は論番で行います。

（授業に入っていない方が望ましい）

・規定の記録用紙に記入する

（ワープロで打ち直しても可）

☆提出物について

① 実習録

ア 実習初日から順にそろえる。

イ 表紙には、実習校名、課程、専攻、学生番号、氏名、配属学級を明記する。

② 指導案綴り

ア 指導案の提出は3枚となっています。そのうち2枚がT1としてのものです。もちろん、終末授業も含まれます。その他の指導案（T2～T7）を綴ってもよい。

イ 提出指導案には、指導教官、自分、T2～T7の押印が必要です。

ウ 終末授業の話し合い記録を綴ってもよい。

③ 終末授業の指導案は、指導案綴りに綴る以外に実習担当まで2部提出する。

（押印）

○1部は、大学教務にまとめて提出する。もう1部は、学校として保管する。指定日までに、実習録と指導案と一緒に提出する。

④ その他

ア 実習録と指導案綴りの表紙には、下記のを張り付けて提出する。

学 校 長	副 校 長	実 習 主 任	学 部 主 事	学 級 担 任
-------	-------	---------	---------	---------

(4) みなさんの係分担について

- ① 連絡係（全体1名、各学部3名の計4名）
- ② 日直（1名。連絡係の人は除く。）
 - 朝…お湯をポットに入れて控え室へ
 - 帰り…簡単な清掃（ゴミ箱をきれいに）、お茶の捨て葉を教官室へ
- ③ 着任式、退任式のあいさつについて
 - 着任式…対教官5月8月各1名、対児童生徒5月1名
 - 退任式…対教官5月9月各1名、対児童生徒9月1名

(5) そ の 他

- ① 終末授業の希望について
- ② 各学部ごとの迎える会での自己紹介について
- ③ 校内テレビ放送用実習生紹介VTRの撮影について
 - ア 実習初日に行います。場所は当日連絡します。
 - イ 各学部5分程度のパフォーマンスをするのが恒例です。
- ④ 集金について
 - ア 小学部（給食費）～1食250円、9回＝2,250円程度。
 - イ 中学部（給食費）～1食300円、8回＝2,400円程度。
 - ウ 高等部（給食費）～1食300円、8回＝2,400円程度。
 - エ お茶とコーヒー代は、一人100円です。
 - ・学部ごとに集金して（給食とお茶代を分けて）実習担当まで。できれば、初日に。
 - オ その他校外学習などの集金は学部単位の集金となります。
- ⑤ 名札について
 - 白い布に名前等を書き、Tシャツやジャージに縫い付けてください。
- ⑥ ほかのものを忘れてもあいさつだけはお忘れなく。

6. 学習指導案の書き方

● 指導案はどうして必要

ある意味で、指導案を書くことは実習中最も大変なことかもしれません。その大変なことをなぜするのでしょうか？ それは大変であっても必要なことだからです。具体的に説明しましょう。

(1) 自分のために：

指導案は授業の設計図です。授業はその設計図を基に建てられた家です。設計図がなければ家を建てるのは難しいですね。どんな家を建てたいのか、つまり、どんな授業にしたいのかをはっきりさせるために指導案を書くのです。設計図ができれば、どんな材料や道具すなわち教材・教具を準備すればいいのかも整理できます。指導案を書くのは自分のためなのです。

(2) 子どもたちのために：

授業が家だとすると、その家に住むのは子どもたちです。快適な家を用意してあげたいですね。倒れそうな家では子どもたちはかわいそうです。いい家（授業）をつくるために指導案を書きます。指導案は子どもたちのために書くのです。

(3) 見てくれる人のために：

どんな意図で家を建てたのか、その家のすばらしさはどこだったのか、その家をどう直せばいいのかなどを話し合うときに設計図があると、より突っ込んだ話ができます。その話こそが授業研究です。設計図がなければ、いい話し合いはできません。「ここにこう書いてあるが実際の授業ではどうだったのか？」「この考え方でいくと、こうの方がよかったのではないか？」と言った意見を多くもらうことが次への参考になるのです。指導案は見てくれる人のために書くのです。とすると、授業を見せてもらったなら、授業研究の場においては何かコメントしたり、コメントできないまでもうなずくなどの反応を示したりするのがエチケットということになりますね。だって、見てくれる人のために苦勞して指導案を書いてくれたのですから。

● 指導案をどう書けばいい？

指導案の項立てにはいろいろなものがあります。本校で考えている基本的な様式について説明します。

I. 単元（題材）名 「○○○○○○○○」

☆魅力的で、活動がイメージしやすいタイトルであれば最高ですね。

II. 単元（題材）設定に当たって

☆なぜ、この単元（題材）が必要なのかを書くのです。具体的には、

◇児童生徒の実態から、目標や内容の取り上げ方をはっきりさせること（児童生徒観）

◇単元の持つ意義や価値について述べること（価値観）

9 ねらいとするところや、学習へ取り組ませる際に大切にしたい手だて、例えば、集団構成や教材・教具等の活用などの工夫を記述すること（指導観）

10 年間計画や他の指導領域との関連や今後の生活への発展などを書くこと（展望）といったことを書くこととなります。

III. 単元（題材）の目標

☆全体目標について述べます。児童生徒の立場から「～する」という表現をします。

IV. 指導計画

☆表、図、文章など、学習活動や内容がどのような順序で展開されていくのかが分かるように工夫します。

V. 児童生徒の実態と個別目標

☆実態については、児童生徒を肯定的にとらえることを基本に（「できない」のではなく「こう支援すればできる」というように）なるべく簡潔に記述するようにします。そのために、実態をとらえる際の観点や項目を決めておくことも必要です。場合によってはその観点や項目に沿って、◎（一人で行える）○（多少の支援があれば一人で行える）△（教師と一緒にであればできる）などと表形式で表すこともあります。

☆その実態や指導観を受けて個別目標を書きます。個別目標は、児童生徒の立場から「～する」といった表現をします。スペースの関係から、実態同様、観点や項目に沿って表形式で示すこともあります。

VI. 本時案

1 題材名「○○○○○○○○」

2 目標

(1) 全体目標

☆本時の内容に即してできるだけ具体的に。児童生徒の立場からの表現になります。

(2) 個別目標

☆これもできるだけ具体的な表現で。具体的であればあるほど、手だてもはっきりし、評価もしやすいです。児童生徒の立場からの表現になります。

3 指導に当たって

☆単元（題材）全体における本時の位置付けと、Ⅱで書いた内容や本時の目標とするところを踏まえて、本時の指導に当たって具体的に配慮することについて述べます。教材・教具の教師の働き掛け、学習展開上の工夫などに触れることになります。

指導過程

段階	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	資 料
導入	○児童生徒からの表現で 「～する」	・発問、板書、教材・教具の工夫や活用の仕方、児童生徒の反応の予想とその対処などを記入します。さらに、個別の配慮やかかわり方などを記入したいですね。その際には、児童生徒名はイニシャルで記入します。 例) きむらたくや: T・K	教材・教具など
展開			
整理			

以上が本校で考えている指導案の基本的な様式です。B4、2枚で作成します。

終末授業以外の指導案については、Ⅵ本時案の内容だけの作成になります。次の様式を使っていただくことになります。

学習指導案			
	日時 平成 年 月 日 () 第		教時
	児童生徒	学部・等部	組・年
	男子 名	女子 名	計 名
	指導教官	教諭	
	指導者、教育実習生	T 1	
		T 2	
<ul style="list-style-type: none"> • 題材名 _____ • 本時の目標 _____ • 準備 _____ • 指導過程 _____ 			

段 階	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	資 料

● 学習指導案の作成

さて、これからみなさんに実際に学習指導案を作成していただきますが、各学部がグループに分かれて、該当学部の指導案（前ページの略案様式で）を作成してもらいます。

最低限の情報は提示しますが、さらに詳しい情報を知りたいというグループは積極的に質問をしてください。答えられる範囲で答えます。みなさんなりの発想で指導案づくりを自由に楽しんでみてください。

13:00から各グループの指導案を発表し合いましょう。印刷をしますので、指定された時刻で締め切りとします。それまでにできるところまででけっこうです。頑張ってみてください。

7. 学習指導案の具体例

実習校名 北海道教育大学教育学部附属養護学校
学生番号 ○○○○
課程・専攻 養護学校教育養成課程・障害児教育専攻
担当教官 ○○○○教官

生活単元学習指導案（小学部）

日時 平成○年○月○日（○）第○教時
児童 小学部1、2、3組 男子○名 女子○名 計○名
指導教官 ○○○○ 教諭
指導者 教育実習生 T1 ○○○○○○
T2 ○○○○○○ T3 ○○○○○○
T4 ○○○○○○ T5 ○○○○○○
T6 ○○○○○○ T7 ○○○○○○

I 単元名 「だんばーるであそぼう」

II 単元設定に当たって

小学部の児童は、生活単元学習の中で、ファミコンやエアポリン、ブロック、乗り物、水鉄砲、そり、スキーなど、いろいろな遊具を使っての遊びを経験してきている。児童は、その中で、自分の興味のある遊びに積極的に取り組んで、一人、または集団での遊びを楽しめるようになってきている。

本単元では、素材の感触を楽しめる段ボールを教材として取り上げ、段ボールで作ったいろいろな遊具での遊びに、児童が自由にのびのびと楽しく取り組んだり、友達と一緒に約束を守って仲良く遊んだりすることをねらいとしている。

いくつかのコーナーに分かれた段ボールの遊び広場を作り、児童が段ボールを使って自由に遊べるコーナーでは、児童が楽しく遊びを考えることができるような状況をつくっていく。そして、段ボールで作った遊具で遊べるコーナー（そりコーナー、的当てコーナー、ロボットコーナー）では、順番を守って遊ぶなどの集団で遊ぶ上での約束を教え、楽しく遊びに参加できるようにする。

このように、段ボールを使ったいろいろな遊びを経験することで、児童の遊びに対する興味や関心を広げ、遊ぶことの楽しさを味わえるようにしていきたい。

III 単元の目標

- 段ボールで作ったいろいろな遊具で遊ぶ。
- 友達と一緒に同じ遊具を使って遊ぶ。
- 順番を守ったり、交替したりして遊ぶ。
- 教師や友達と一緒に遊具の後片付けをする。

IV 指導計画（5時間）

- ・段ボールで自由に遊ぼう…………… 1時間
- ・段ボール広場で遊ぼう…………… 4時間 [本時2 / 4]

V 児童の実態と個別目標

1. 児童の実態 ◎～よくできる ○～できる △～ややできる 空欄～難しい

項目	児童名																	
	M	N	M	M	H	K	K	K	A	Y	Y	R	K	Y	G	T	N	H
	T	M	Y	O	Y	S	M	H	K	I	N	M	K	S	M	Y	I	S
設定された道具で遊ぶ。	△	◎	△		△	△	△	△	△	○	◎	○	△	◎	◎	△		○
興味のある遊びに自分から取り組む。		◎	△	△	○	○	◎	○	○	◎	◎	○	◎	◎	◎	○	○	◎
友達と一緒に同じ道具を使って遊ぶ。		○	△	△			△	△	○	○	○	△		△	△		△	△
遊ぶときの約束を守って遊ぶ。		△							◎	△	◎	△	◎	△	△		△	○
すすんで後片付けをする。		△	△					△	△		○	○	○	△	△	△	○	△

2. 個別目標 ○～目標

項目	児童名																	
	M	N	M	M	H	K	K	K	A	Y	Y	R	K	Y	G	T	N	H
	T	M	Y	O	Y	S	M	H	K	I	N	M	K	S	M	Y	I	S
興味のある遊びに自分から取り組む。		○		○	○	○	○	○								○	○	
設定されたいろいろな遊具で遊ぶ。	○		○						○	○	○	○	○	○	○			○
教師や友達と一緒に遊ぶ。	○		○	○	○	○	○	○								○	○	
遊ぶときの約束を守って仲良く遊ぶ。		○							○	○	○	○	○	○	○			○
教師や友達と一緒に後片付けをする。	○		○	○	○	○	○	○								○	○	
自分からすすんで後片付けをする。		○							○	○	○	○	○	○	○			○

第 5 部

養 護 実 習

第5部 養護実習

1. 意義と目的	281
2. 実習内容	281
3. 実習心得	282
4. 実習方法	282
5. 実習計画例	283
6. 学級活動における保健・安全に関する指導案	284
7. 終日実習計画（案）	285
8. 養護実習成績評価票	286

1. 意義と目的

養護実習とは養護教諭を志望する学生が、養成大学で学んだ知識や技術を、学校教育現場において実践・応用することにより、養護教諭としての自覚を高め、保健室のあり方や養護教諭の果たすべき役割を理解する場である。

具体的な目標として

- (1) 学校教育を理解するとともに、学校保健の重要性と養護教諭の役割を認識する。
- (2) 具体的な体験や実践を通して、養護教諭の職務の理解を深め、基礎的技術の習熟を図る。
- (3) 児童生徒の理解をもとに、養護教諭としての資質を養い自信を得る。

2. 実習内容

- (1) 学校経営一般と学校教育の概要
学校教育目標、教育計画、教育課程等
- (2) 学校保健安全計画及び養護教諭執務計画
学校保健安全計画、保健組織活動、養護教諭執務計画案とその運営、評価
- (3) 保健室経営
保健室の運営と管理、評価
- (4) 学級経営・学級における保健活動
学級経営の方針、学級の実態、児童生徒理解、保健管理・指導、学習・生活指導
給食指導、学級事務の処理等
- (5) 健康診断の計画立案・運営
定期健康診断の計画立案、事前準備、実施、事後措置、健康診断票作成の実際
- (6) 健康観察及び欠席調査と分析
実施方法、準備、観察・調査結果の処理、学級担任・家庭との連携
- (7) 健康相談活動（ヘルスカウンセリング）
養護教諭の職務の特質や保健室の機能を生かした健康相談活動の実際
校内の関係職員及び校外専門家や専門機関との連携
- (8) 救急処置及び救急体制
日常及び緊急時の救急処置
学校における救急体制
- (9) 保健指導及び保健教育
個人を対象とした保健指導（心身の健康に問題を有する児童生徒の個別指導、健康生活の実践に
関して問題を有する児童生徒の個別指導）
集団を対象とした保健指導（学級活動で行う保健指導、学校行事に伴う保健指導）
- (10) 学校安全
学校内外の安全管理・指導の実際、日本体育・学校健康センターへの事務手続き
- (11) 学校環境衛生
校舎内外の環境整備、清掃の実際、環境衛生の検査の実際
- (12) 学校給食
給食指導、学校栄養職員との連携

- (13) 学校保健組織活動
学校保健委員会、職員や児童生徒保健委員会の運営方法、保健組織活動における養護教諭の役割
- (14) 学校伝染病の予防
学校伝染病による出席停止、予防対策
- (15) その他
自己研修、研究活動

3. 実習心得

(1) 全般的心得

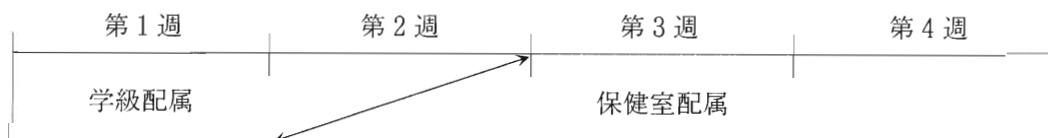
- ① 実習生の実習中の一挙手一投足は、すべて児童生徒の心情行動に影響するところが大きく、実習態度、言葉づかい、礼儀作法、服装（装身具を含む）などには特別の注意を払い、養護教諭にふさわしい行動をとること。
- ② 実習生は、各実習校の経営方針に従い、指導教諭の指導のもとに、養護活動、研究、保健室経営、保健指導などすべての面にわたり実習し、養護教諭にふさわしい教養を積むこと。
- ③ 実習生は、いかなる理由があっても、児童生徒に体罰を加えてはならない。

(2) 実習上の心得

- ① 実習生の実習時間は、実習校教諭に準じ、始業前20分までに登校し、出勤簿に捺印すること。（拇印は認めない）やむなく欠席する場合は、その理由を登校時まで必ず届けること。
- ② 実習記録は、原則として毎日提出し指導を受け、実習終了後提出すること。
- ③ 実習生は早退・遅刻は、指導教諭にその理由を届け出て許可を得る。また実習時間中は許可なく外出しない。
- ④ 学校内での喫煙は控え、やむなく喫煙する場合も、指定された場所で行い、教室、廊下、準備室などでは、休憩時間、放課後といえども絶対に喫煙しない。
- ⑤ 自分の上靴を用意し、外靴と区別する。スリッパやサンダルを使用しない。
- ⑥ 実習校の備品を使用する場合は、指導教諭の許可を得ること。
- ⑦ 指導中、児童生徒に事故が起こった場合は、適切な応急処置を行うとともに、速やかに指導教諭等に連絡し、指示を受けること。
- ⑧ 特別の許可なく、児童生徒を自己の宿舎（寮・アパート・下宿・自宅）に招いたり、校外、映画、遠足などに連れ出さないこと。
- ⑨ 実習生は、児童生徒の家庭訪問を行わない。
- ⑩ 児童生徒、父母に対する調査や印刷物の配付については、すべて指導教諭の許可と指導を必要とし、無断で行わない。

4. 実習方法

保健室配属と学級配属を組み合わせた実習を行う。



5. 実習計画例

附属函館小・中学校

週	曜日	主な行事その他	実			習			内			備考	
			始業前	1 教時	2 教時	3 教時	4 教時	給食時間	5 教時	6 教時	放課後		
第 一 週	月	着任式・クラブ活動	対教官児童挨拶	学級授業参観	学級経営	学級授業参観	実習心得	給食指導参観	実習心得	クラブ参観	清掃指導参観	学級配属	
	火	教官会議	健康観察	学級授業参観		教育課程	給食指導	給食指導	実習心得	学級経営	清掃指導		
	水	示範授業参観・身長体重測定		学級授業参観									
	木	示範授業参観・身長体重測定		学級授業参観					救急処置				
	金	示範授業参観・身長体重測定		学級授業参観									
第 二 週	土	第四土曜休業日										学級配属・保健室配属	
	月	クラブ活動・示範養護活動参観		保健室経営			学級授業参観						
	火			学校保健安全計画・養護教諭職務計画			学級授業参観						
	水	避難訓練		保健指導及び保健教育			学級授業参観						
	木			健康観察			学級授業参観						
第 三 週	金			健康相談活動			学級授業参観					保健室配属	
	土						学級授業参観						
	月	クラブ活動・養護活動実習開始		健康診断		学校保健組織活動							
	火	朝会・教官会議		学校安全		学校伝染病の予防			他校訪問				
	水	保健指導・各種委員会		学校環境衛生									
第 四 週	木	視力再検査		学校給食								保健室配属	
	金	視力再検査											
	土	第二土曜休業日											
	月	終日実習・クラブ活動・視力再検査											
	火	終日実習・クラブ活動・視力再検査											
第 五 週	水	祭日										保健室配属	
	木												
	金												
	土	退任式											

6. 学級活動における保健・安全に関する指導案

日時 平成〇〇年9月〇日（ ）第〇教時
 児童 北海道教育大学教育学部附属函館小学校
 指導教官 〇〇〇〇教官 〇〇〇〇教官
 指導者 養護実習生 〇〇〇〇

1. 主題 目を大切にしよう
2. 主題設定の理由 学校保健統計調査によると、年々裸眼視力1.0未満の児童が増加傾向にある。本学級の児童も40%が視力1.0未満であるため、今後児童自らが近視の予防や悪化防止に関心をもち、学校生活や家庭生活において自己管理できるように支援する必要があると考えた。今回その導入として、児童が目に関心をもち、目を大切にしていこう態度を養うためにこの主題を設定した。
3. 本時のねらい 目と、目を保護しているしくみについて理解するとともに、目を大切にしようとする態度を育てる。
4. 本時の展開

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	資 料
導 入	○両目をつぶって、片足だけで立ってみる。	○片足だけではうまく立てないことを実感させたい。	
展 開	○目を保護している部分の名称や役割について考える。 ・眉毛 ・睫毛 ・まぶた	○児童が、目や眉毛、睫毛等の位置やつくりを理解しやすいように顔の絵を用意する。	顔の絵
	○目の様子について考える。 ・眼球の形状 ・目の働き ○目の病気にはどのようなものがあるか考える。 ・ものもらい ・アレルギー ・近視 など ○目を大切にするために自分が気をつけていることを発表する。 ・テレビゲームを長時間しない。 ・姿勢をよくして勉強や読書をする。 ・テレビを近くで見ない。 ・汚れた手で目をこすらない。 ○目の疲れをとるために、眼球体操をする。	○ピンポン玉やボールを用いて、目の大きさや柔らかさを実感させたい。 ○自分の経験をもとに考えるように促す。 ○自分の毎日の生活を振り返って気付くことができるように支援する。 ○目の疲れをとる工夫の一つとして児童全員で行う。	ピンポン玉
整 理	○人間にとって目が大切であることを再確認し、自ら目を大切にしようという意識を持つ。	○動物の目の働きも参考にして、人間の生活にとって目が重要な役割をもつことを理解させたい。	

5. 評価
 - ・目に興味・関心をもち、生活の中で大切にしていこうという意欲を持つことができたか。
 - ・目と目を保護しているしくみについて理解することができたか。

終日実習計画（案）

日 時 平成 年 月 日
 実習校 函館市立 学校
 指導教諭 教諭
 実習生 ⑩

今日の重点目標：来室生徒の実態把握と健康観察ならびに相談活動		
時 間	活 動 内 容	活 動 上 の 留 意 点
8時00分～	・保健室の準備・環境整備	<ul style="list-style-type: none"> ・窓の開放、換気、室内の整理整頓 ・器具・準備物の点検 ・児童（生徒）用玄関付近にて実施 ・昨日の欠席者、早退者に特に注意する ・欠席者の有無とその理由に注意する ・トイレ、手洗い場の衛生状態 ・階段および手すり、廊下の危険物の除去 ・清掃状態の観察 ・衛生材料、その他必要物品の整理 ・健康診断表記入および集計 ・配属学級にて実施 ・手洗い状況、給食当番の衛生状態 ・配属学級にて実施
8時10分～	・児童（生徒）の登校時の健康観察	
8時20分～	・職員打ち合わせ	
8時35分～	・欠席調査の集計	
8時50分～	・校内の環境整備・安全点検	
9時30分～	・保健室での執務	
12時35分～	<ul style="list-style-type: none"> ・給食準備時の観察・指導 ・給食摂取状況の観察 	
13時05分～	・昼休み中の児童（生徒）の過ごし方の観察	
13時35分～	・宿泊研修結団式	
14時35分～	・清掃指導	
15時00分～	<ul style="list-style-type: none"> ・来室状況のまとめ ・保健日誌の記載 <p>※救急処置に関しては随時行う</p>	
今日の反省点：		
指導教諭所見：		

養護実習成績評価票

平成 年度

北海道教育大学函館校

実習校名		校長氏名	印	指導教諭氏名	印		印
学生番号	実習生氏名	課程	養護教諭特別別科	配属学級	年組		

1. 勤務状況や勤務態度	5	4	3	2	1	
	----- ----- ----- -----		普通である			時には実習を怠り、指導上、支障を生じた。職務への意欲、積極性がみられない。無断欠勤、遅刻が多い。
2. 研究態度	5	4	3	2	1	
	----- ----- ----- -----		普通である			問題意識をもたず研究の態度がみられない。
3. 児童・生徒の理解	5	4	3	2	1	
	----- ----- ----- -----		普通である			児童・生徒の心理を理解しようとする努力がみられず、無関心な態度である。
4. 救急処置	5	4	3	2	1	
	----- ----- ----- -----		普通である			処置方法に正確さや機敏さがみられず、適切な判断、処置に欠ける。
5. 学校環境衛生への配慮	5	4	3	2	1	
	----- ----- ----- -----		普通である			学校環境衛生の維持改善に対してほとんど関心を示さない。
6. 諸資料の作成整備	5	4	3	2	1	
	----- ----- ----- -----		普通である			諸資料を収集、作成、整理することはほとんどない。また、実習録の内容、形式も粗雑で実習の効果がみられない。
7. 保健指導	5	4	3	2	1	
	----- ----- ----- -----		普通である			児童・生徒の実態をよく把握し動機づけ、内容、方法など適切で効果的な指導ができる。

教育実習期間	出席すべき日数	出席した日数	欠席日数	遅刻	回
自 平成 年 月 日 ()	日	日	病欠 日	早退	回
至 平成 年 月 日 ()			その他の欠席 日		
			計 日		

総合所見欄		総合評価 (10点法)

記載上の注意

1. 各項目の評価は、5段階で評価し、該当欄に○印をつけてください。
2. 総合所見欄には、分析評価では表現しえない面を含めて、全体的観点からなるべく具体的に記入してください。
3. 総合評価は10点法で評定して下さい。5点以上を合格とします。
参考までに、本校の10点評価は、優(10, 9, 8), 良(7, 6), 可(5), 不可(4以下)です。

諸 届 け 見 本 例

本書に対する御意見、御要望につきましては、教務係まで御連絡願います。

北海道教育大学教育学部函館校

—— 教育実習の手引 ——

発行日 2001年3月 初版発行
2002年3月 改訂版

教育実習委員会